

# ハツ場ダム発掘調査集成(1)

ハツ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

2002

国 土 交 通 省  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 八ッ場ダム発掘調査集成(1)

東宮・石畑・川原湯勝沼・横壁勝沼・西久保Ⅰ・山根Ⅱ・下田  
花畑・楡木Ⅱ・尾坂・三平Ⅰ・二社平・林の御塚・上原Ⅰ遺跡

八ッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

2002

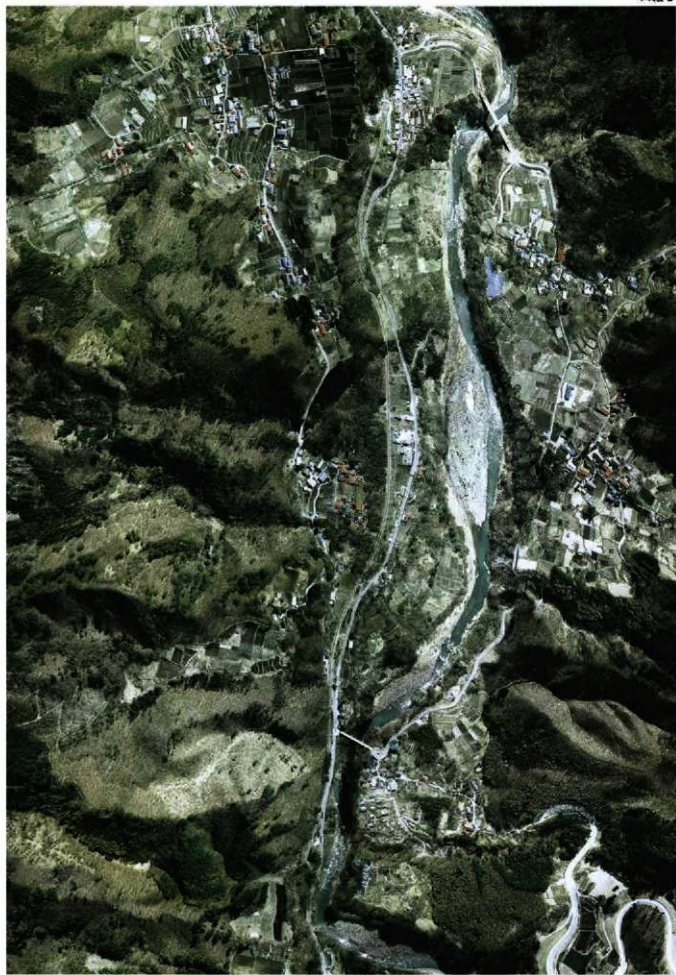
国 土 交 通 省  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





川原畑・川原湯・林地区





林・横壁地区





## 序

群馬県の北西部に位置する長野原町は、吾妻峡をはじめとする多くの景勝地を抱えた豊かな自然環境を持つことで知られております。また、火山帯である群馬県を象徴する浅間山と草津白根山の二つの火山があることでも知られたところです。

県内に大きな被害をもたらした噴火として、最も新しいものが天明三年（1783年）の浅間山の噴火です。この噴火の際、長野原町は噴火に伴って発生した泥流などにより大きな被害を受けております。この噴火の様子は多くの絵図や古文書などに残され、当時の様子を今に伝えています。

当事業団では八ッ場ダム建設工事に伴って、長野原町の川原畑・川原湯・横壁・林・長野原の5地区での発掘調査を平成6年度から実施しております。この発掘調査は現在も行われております。本書は、平成6年から12年度までに発掘調査された小規模な発掘調査による遺跡を集めた発掘調査報告書の第1集となります。

これらの遺跡は吾妻川の兩岸に存在する河岸段丘上に点在しております。多くの遺跡から縄文時代の遺構や遺物が発見されました。発掘された縄文土器には様々な時期のものが見られるため、長野原町内における縄文時代の集落の変遷を示す資料になると考えております。

また、この地域では遺構の検出率が極めて少ない弥生土器も出土しています。量的にわずかではあります。こちらも多くの遺跡で散発的に発見されています。小規模ながら人々の生活が連続と続いていた可能性を示しているのでしょうか。

さらに、吾妻川の河床に近い河岸段丘の下位面からは、天明三年（1783年）の浅間山の噴火に伴って発生した泥流に覆われた近世の畑跡が見つっております。畑跡からは、狭隘な平坦面を利用して被災する直前まで耕作していた形跡も見ついております。当時の人々が力強く生活している姿を想像させてくれる遺跡でした。

発掘調査から報告書刊行にいたるまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会及び地元関係機関の皆様から各種のご指導、ご協力を賜りました。衷心から感謝申し上げますとともに、本報告書が地域の歴史を解明するための資料として末永く活用されることを願ひまして序といたします。

平成14年12月25日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 小野 宇 三 郎



## 例 言

- 1 本書は、ハツ場ダム建設工事に伴い事前調査されている東宮遺跡（旧：川原畑東宮遺跡）、石畑遺跡（旧：川原畑石畑遺跡）、川原湯勝沼遺跡（旧：川原湯上湯原遺跡）、横壁勝沼遺跡（旧：横壁東遺跡）、西久保Ⅰ遺跡（旧：横壁西久保Ⅰ遺跡）、山根Ⅲ遺跡（旧：横壁深沢遺跡）、下田遺跡（旧：林中原遺跡）、花畑遺跡（旧：林花畑遺跡）、榎木Ⅲ遺跡（旧：林榎木沢遺跡）、尾坂遺跡（旧：長野原尾坂遺跡）及び試掘調査された、三平Ⅰ遺跡（旧：川原畑三平遺跡）、二社平遺跡（旧：川原畑二社平遺跡）、下田遺跡（旧：林下田遺跡）、林の御塚（旧：林東原遺跡）、上原Ⅰ遺跡（旧：林東原・上原遺跡）の発掘調査報告書である。花畑遺跡を除き発掘調査は現在も継続中である。各遺跡の後に旧名としてあげた遺跡名は、平成14年3月まで発掘調査・整理調査の際、使用していた遺跡名である。本書は平成6年度～平成12年度までの上記遺跡の発掘調査成果について報告するものであり、ハツ場ダム建設工事に伴う発掘調査報告書としては「第2集」となる。なお、第3集以降の報告書刊行は後年の実施となる。
- 2 東宮遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字東宮396、397-1、397-2他に所在する。  
石畑遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字石畑1028、甲1029、乙1029、乙1030他に所在する。  
川原湯勝沼遺跡は群馬県長野原町大字川原湯字勝沼26、27-2、28-2、29、30に所在する。  
横壁勝沼遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字勝沼935、950、960、964、965、970、971他に所在する。  
西久保Ⅰ遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字西久保120、121、122-1、122-3、123-1、128-2、130、乙133-1、甲133-2、133-3、134-2、135-2他に所在する。  
山根Ⅲ遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂513-1、甲514-1、518-1、521-1他に所在する。  
下田遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字林字下原701-1、703-1、704-1（本調査）、736、737-2、738-2、745、753、770他（試掘調査）に所在する。  
花畑遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字林字花畑1392、1393、1394、1395、甲1396、乙1396、1397、1398、1399、1400、1401、1403、1404、1405、1407、1408-3他に所在する。  
榎木Ⅲ遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字林字榎木138-1、139-1、140、142-10に所在する。  
尾坂遺跡は群馬県長野原町大字長野原字尾坂1174、1179他に所在する。  
三平Ⅰ遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字三平575に所在する。  
二社平遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字二社平858、866、868、甲870に所在する。  
林の御塚は群馬県吾妻郡長野原町大字林字東原1421、1457、1460、1463に所在する。  
上原Ⅰ遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字林字上原1033、字東原乙1414、1416に所在する。
- 3 各遺跡の発掘調査については、平成6年度～平成10年度までは建設省の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県縄文文化財調査事業団に委託して実施された。平成11年度以降の発掘調査及び整理事業については建設省（平成13年1月より国土交通省）から委託を受けた財団法人群馬県縄文文化財調査事業団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理期間  
(1) 発掘期間  
東宮遺跡 平成7年12月4日～12月22日、平成8年2月22日～3月7日、平成9年8月18日～8月29日  
石畑遺跡 平成8年5月16日～5月23日、平成9年5月23日～5月28日、平成10年9月1日～10月9日

川原湯勝沼遺跡	平成9年12月1日～12月26日
横曽勝沼遺跡	平成6年11月1日～平成7年3月31日、平成7年5月24日～7月31日
西久保Ⅰ遺跡	平成6年5月16日～5月20日、平成10年4月1日～6月19日、平成12年6月1日～10月17日
山根Ⅲ遺跡	平成10年4月13日～8月6日
下田遺跡	平成7年11月20日～12月22日
花畑遺跡	平成9年9月4日、平成10年5月13日～5月19日、平成10年9月28日～11月2日、平成11年6月10日～12月24日、平成12年4月1日～6月30日
榎木Ⅲ遺跡	平成10年6月11日～7月31日
尾坂遺跡	平成6年6月1日、平成7年10月25日～10月26日、平成11年5月6日～5月31日
三平Ⅰ遺跡	平成10年6月4日～6月5日
二社平遺跡	平成8年12月24日、平成10年6月23日～7月14日
下田遺跡	平成6年10月3日～10月14日、平成9年11月19日～12月19日
林の御塚	平成7年12月18日、平成10年12月8日～12月11日
上原Ⅰ遺跡	平成10年2月6日～2月19日
(2) 整理期間	平成13年4月1日～12月31日

## 5 発掘調査及び整理事業体制

### (1) 事務担当者

小寺弘之、菅野 清、小野宇三郎、中村英一、赤山容造、吉田 実、近藤 功、原田常弘、蜂巣 実、渡辺 健、住谷 進、神保侑史、水田 稔、能登 健、大島信夫、岸田治男、飯島義雄、西田健彦、園定 均、井上 剛、小山建夫、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司、岡嶋伸昌、森下弘美、片岡徳雄、田中賢一、大澤友治

吉田恵子、並木綾子、今井もと子、佐藤美佐子、内山佳子、本間久美子、星野美智子、本地友美、北原かおり、狩野真子、若田 誠、松下次男、吉田 茂、藤原正義

### (2) 発掘調査担当者

東宮遺跡	綿貫邦男、山口逸弘、榑澤健二、金井 武、関 俊明、諸田康成、石田 真
石畑遺跡	山口逸弘、石田 真、田中 雄
川原湯勝沼遺跡	山口逸弘、関 俊明、石田 真
横曽勝沼遺跡	綿貫邦男、榑澤健二、金井 武、山本光明
西久保Ⅰ遺跡	綿貫邦男、藤巻幸男、山口逸弘、榑澤健二、田村公夫、関 俊明、松原孝志、石田 真、田中 雄、小林大悟
山根Ⅲ遺跡	山口逸弘、児島良昌、松原孝志、石田 真、田中 雄
下田遺跡	綿貫邦男、榑澤健二、金井 武
花畑遺跡	小野和之、山口逸弘、池田政志、久保 学、石田 真、田村 博、田中 雄
榎木Ⅲ遺跡	山口逸弘、児島良昌、石田 真、田中 雄
尾坂遺跡	綿貫邦男、小野和之、榑澤健二、金井 武、石田 真、田村 博
三平遺跡	山口逸弘
二社平遺跡	綿貫邦男、山口逸弘、石田 真

下田遺跡	綿貫邦男、小野和之、関 俊明
林の御塚	綿貫邦男、棟澤健二、金井 武
上原Ⅰ遺跡	山口逸弘、関 俊明

(3) 整理担当者 松原孝志

整理補助 鈴木幹子、山崎由紀枝、木暮芳枝、本多琴恵、白井和子、根井美智子

6 本書作成担当

編 集 松原孝志

執 筆 第10章 第5節(3)(4)石田真、第12章 第1節～第4節(1)、第6節(株)古環境研究所、第12章 第4節(2)・第5節(株)パレオ・ラボ、第13章 関俊明  
上記以外 松原孝志

遺物観察表 縄文土器 藤巻幸男

上記以外の遺物に関しては、岩崎泰一、大江正行、大木紳一郎、大西雅広、神谷佳明、山口逸弘らをはじめとする当事業団諸氏に多大なご教授いただき、松原が観察を行った。

遺構写真撮影 発掘調査担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

保存処理 関邦一、土橋まり子、横倉知子、藤井文江、小村浩一、高橋初美

機械実測 佐藤美代子、矢高三枝子、田中富子、富沢スミエ、田中精子、千代谷和子

7 発掘調査及び整理事業での委託関係は次の通りである。

石材鑑定(黒曜石以外) 群馬県地質研究会 飯島静男

遺構図等測量・空中写真 (株) 測研、技研測量設計(株)

自然科学分析 (株) 古環境研究所、(株) パレオ・ラボ

遺構全体図デジタル編集 (株) 測研

石器実測・トレース(一部) 大成エンジニアリング(株)

8 骨鑑定 柄崎修一郎

9 出土遺物・図面・写真・記録等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管している。

10 二社平遺跡、第194図-9 弥生後期樽式土器の破片については、野口茂男氏(当時長野原町文化財調査員)が採集された資料を掲載させていただいた。資料は、その他のものと同様に群馬県埋蔵文化財センターに保管している。

11 発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめとして、遠方からも多数の方々に参加いただいた。調査に尽力して下さった作業員の方々に感謝の意を表す次第である。


12 発掘調査及び報告書作成にあたっては、下記の諸氏・諸機関に御教示・御協力等をいただいた。記して感謝の意を表す次第である(順不同・敬称略)。

石川日出志、白石光男、富田孝彦、坂寄富士男、野口茂男、当事業団職員諸氏、長野原町教育委員会、群馬県教育委員会文化財保護課、国土交通省関東地方建設局八ッ場ダム工事事務所、群馬県土木部特定ダム対策課、群馬県八ッ場ダム水源地域対策事務所

## 凡 例

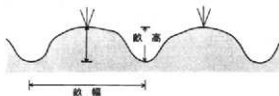
- ・遺構の長軸・短軸については遺構平面図の上場線を計測した。
- ・遺構図の縮尺については、住居1/60、住居内の炉・竈1/30、土坑1/40を基本とした。これ以外の遺構については各々のスケールを参照していただきたい。
- ・遺構の位置については、複数のグリッドにまたがって位置している場合には原則として、遺構の主体となる部分が属している南東隅のグリッドにより位置を示した。ただし、畑遺構は規模が大きいため、区のみで位置を示すものとした。
- ・遺物図の縮尺については、復元土器1/4、土器片・礫石器1/3、金属器・打斧・剥片石器類1/2、石鏃・古銭1/1を原則とした。これ以外の縮尺を用いる場合は各遺物実測図に明記したので参照していただきたい。
- ・写真図版中の遺物の縮尺については、概ね遺物実測図と同縮尺とした。例外については、各写真に縮尺を明記したので参照していただきたい。
- ・石器の計測については、「長さ」は天地方向の最大の長さ、幅は長さに直行する最大の幅、厚さは断面の最大の厚さを計測した。
- ・土坑（陥し穴を含む）の分類において、断面形状は短軸を基本とした。また、計測値は付編4遺構一覧表に記載しているので参照していただきたい。
- ・各遺跡の最後に掲載した工事計画と位置図では、次のように各範囲を示している。全体図の赤実線は調査区範囲を示す。赤破線は、町台帳に記載された遺跡範囲を示す。黒実線は工事範囲を示す。
- ・掲載した測量図の座標については2002.4改正以前の日本測地系を基準とした。
- ・遺構図及び遺物図で使用されているスクリーントーンは以下の通りである。例外については、各図に凡例を記載した。

 焼土範囲

 炭化物集中範囲（下田遺跡では貼り床範囲）

 繊維土器

As-A直下の畑跡の、畝幅と畝高の計測位置については以下の模式図の通りである。



# 目 次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

挿表目次

写真図版目次

## 序 章

- 第1節 調査に至る経緯…………… 1
- 第2節 発掘調査の経過…………… 2
- 第3節 調査の方法…………… 3
- 第4節 地理的環境と歴史的環境…………… 6

## 第1章 東宮遺跡

- 第1節 遺跡の立地…………… 13
- 第2節 基本層序…………… 13
- 第3節 検出された遺構と遺物
  - (1) As-A直下の畑跡…………… 13
  - (2) 遺構外出土遺物…………… 17
- 第4節 小結…………… 17

## 第2章 石畑遺跡

- 第1節 遺跡の立地…………… 19
- 第2節 基本層序…………… 19
- 第3節 遺跡の概要…………… 19
- 第4節 検出された遺構と遺物
  - (1) As-A直下の畑跡…………… 20
  - (2) 土坑…………… 24
  - (3) 岩陰…………… 26
  - (4) 遺構外出土遺物
    - ① 84区1号掘没谷…………… 27
    - ② 94区2号掘没谷…………… 29
    - ③ その他…………… 29
- 第5節 小結…………… 31

## 第3章 川原湯勝沼遺跡

- 第1節 遺跡の立地…………… 33
- 第2節 基本層序…………… 33
- 第3節 遺跡の概要…………… 33
- 第4節 検出された遺構と遺物
  - (1) As-A直下の畑跡…………… 36
  - (2) 土坑…………… 37
  - (3) 遺構外出土遺物…………… 38
- 第5節 小結…………… 39

## 第4章 横壁勝沼遺跡

- 第1節 遺跡の立地…………… 40
- 第2節 基本層序…………… 40
- 第3節 遺跡の概要…………… 40
- 第4節 検出された遺構と遺物
  - (1) 住居…………… 45
  - (2) 土坑…………… 47
    - ① 陥し穴…………… 47
    - ② 土坑墓…………… 49
    - ③ その他…………… 50
  - (3) 溝…………… 51
  - (4) 遺構外出土遺物…………… 52
- 第5節 小結…………… 53

## 第5章 西久保I遺跡

- 第1節 遺跡の立地…………… 55
- 第2節 基本層序…………… 55
- 第3節 遺跡の概要…………… 56
- 第4節 検出された遺構と遺物
  - (1) 住居…………… 63
  - (2) 礎石建物…………… 77
  - (3) 土坑・ピット
    - ① 土坑…………… 78
    - ② 土坑形状の類型について…………… 78
    - ③ ピット…………… 94

(4) 溝	94
(5) 水場遺構	97
(6) 遺構外出土遺物	
① 剥片廃棄場	99
② その他	102
第5節 小結	114

## 第6章 山根Ⅲ遺跡

第1節 遺跡の立地	117
第2節 基本層序	117
第3節 遺跡の概要	117
第4節 検出された遺構と遺物	
(1) 住居	119
(2) 土坑	120
(3) 遺構外出土遺物	124
第5節 小結	130

## 第7章 下田遺跡

第1節 遺跡の立地	131
第2節 基本層序	131
第3節 遺跡の概要	131
第4節 検出された遺構と遺物	
(1) 住居	132
(2) 畑	139
(3) 遺構外出土遺物	142
第5節 小結	144

## 第8章 花畑遺跡

第1節 遺跡の立地	146
第2節 基本層序	146
第3節 遺跡の概要	146
第4節 検出された遺構と遺物	
(1) 住居	147
(2) 土坑	
① はじめに	153
② 土坑形状の類型について	153
③ 陥し穴	154
④ 土坑	179

(3) 溝	188
(4) 岩陰	190
(5) 遺構外出土遺物	191
第5節 まとめ	
(1) はじめに	193
(2) 陥し穴の分布について	193
(3) 形状と分布の関連について	194
(4) 陥し穴の掘削工具痕について	196
(5) 陥し穴の構築時期について	196

## 第9章 楡木Ⅲ遺跡

第1節 遺跡の立地	201
第2節 基本層序	201
第3節 検出された遺構と遺物	201
第4節 小結	212

## 第10章 尾坂遺跡

第1節 遺跡の立地	214
第2節 基本層序	214
第3節 検出された遺構と遺物	
(1) As-A直下の畑跡	214
(2) 遺構外出土遺物	220
第4節 小結	221

## 第11章 試掘調査

第1節 三平Ⅰ遺跡	
(1) 立地と環境	223
(2) 調査の概要	223
(3) 成果	223
第2節 二社平遺跡	
(1) 立地と環境	224
(2) 基本層序	224
(3) 調査の概要	224
(4) 成果	226
第3節 下田遺跡	
(1) 立地と環境	227
(2) 基本層序	227
(3) 調査の概要	227



(4) 成果	228
第4節 林の御塚・上原I遺跡	
(1) 立地と環境	229
(2) 基本層序	229
(3) 調査の概要	229
(4) 成果	229

## 第12章 自然科学分析

第1節 テフラ(火山灰)分析	
(1) はじめに	230
(2) 東宮遺跡	230
(3) 二社平遺跡	233
(4) 川原湯勝沼遺跡	235
第2節 植物珪酸体・プラントオパール分析	
(1) はじめに	237
(2) 分析方法	237
(3) 東宮遺跡・下田遺跡	237
(4) 東宮遺跡	242
(5) 川原湯勝沼遺跡	244
(6) 石畑遺跡	247
(7) 尾坂遺跡	249
(8) 二社平遺跡	250
第3節 花粉分析	
(1) はじめに	262
(2) 試料	262
(3) 分析方法	262
(4) 東宮遺跡①	262
(5) 東宮遺跡②	264
(6) 川原湯勝沼遺跡	267
(7) 尾坂遺跡	267
第4節 種実同定	
(1) 東宮遺跡	278
(2) 西久保I遺跡・横壁勝沼遺跡	280
第5節 樹種同定	
(1) 尾坂遺跡	283
第6節 放射性炭素年代測定	
(1) 東宮遺跡	284
(2) 花畑遺跡	285

## 第13章 考察

農事「サカイレ」と降灰による 川原湯勝沼遺跡の畝断面解釈 —天明三年浅間災害に関する地域史的研究②—	288
付編1 石器組成表	292
付編2 西久保I遺跡地点別剥片集計表	296
付編3 石器一覧表	299
付編4 遺構一覧表	307
写真図版 抄録	
付図 花畑遺跡 全体図 (1/400)	

## 挿図目次

第 1 国	グリッド設定模式図	4	第 58 国	西久保 1 道路46-5号住居 No1土器 展開図	73
第 2 国	長野原町段丘面の分布	10	第 59 国	西久保 1 道路46-5号住居 (3)	74
第 3 国	周辺道路位置図	11	第 60 国	西久保 1 道路46-6号住居 (1)	75
第 4 国	東宮遺跡基本土層	13	第 61 国	西久保 1 道路46-6号住居 (2)	76
第 5 国	東宮遺跡全体図	14	第 62 国	西久保 1 道路46-6号住居 (3)	77
第 6 国	東宮遺跡41-1号堀	15	第 63 国	西久保 1 道路46-1号礎石建物	77
第 7 国	東宮遺跡51-1号堀	16	第 64 国	土坑断面形状模式図	78
第 8 国	東宮遺跡遺構外出土遺物	17	第 65 国	西久保 1 道路36-1号土坑	78
第 9 国	東宮遺跡工事計画と位置図	18	第 66 国	西久保 1 道路36-2・3・4・6・8号土坑	79
第 10 国	石畑遺跡基本土層図	19	第 67 国	西久保 1 道路46-1・2・4・5号土坑	80
第 11 国	石畑遺跡94-1号堀	20	第 68 国	西久保 1 道路46-8号土坑	81
第 12 国	石畑遺跡全体図	21	第 69 国	西久保 1 道路46-9・10-11-12-15-17- 18号土坑	82
第 13 国	石畑遺跡94-2号堀	23	第 70 国	西久保 1 道路46-14-17-8-36号土坑	83
第 14 国	石畑遺跡84-1・2・5号土坑	24	第 71 国	西久保 1 道路47-39-40-41号土坑	84
第 15 国	石畑遺跡84-3・4・6・7・94-1号土坑	25	第 72 国	西久保 1 道路47-42-44-48号土坑	85
第 16 国	石畑遺跡岩盤	26	第 73 国	西久保 1 道路47-51-57-58-59号土坑	86
第 17 国	石畑遺跡岩盤94-1号谷出土遺物 (1)	27	第 74 国	西久保 1 道路47-1・2・3・4・5・6・ 7・83号土坑	87
第 18 国	石畑遺跡84-1号谷出土遺物 (2)	28	第 75 国	西久保 1 道路47-9・10-11-12-13-14- 15-16-17-18-19号土坑	88
第 19 国	石畑遺跡84-1 (3)・94-2号谷・遺構外出土遺物	29	第 76 国	西久保 1 道路47-20-21-22-23-24-25- 26-27-28-29-31号土坑	89
第 20 国	石畑遺跡工事計画と位置図	32	第 77 国	西久保 1 道路47-30-32-33-34-35-37- 38-43-45号土坑	90
第 21 国	川原湯跡遺跡基本土層	33	第 78 国	西久保 1 道路47-48-47-49-50-52- 53号土坑	91
第 22 国	川原湯跡遺跡全体図	34	第 79 国	西久保 1 道路47-60-61-62-63-64-65- 66-67-69-70号土坑	92
第 23 国	川原湯跡遺跡63-1・2・64-1号堀	35	第 80 国	西久保 1 道路47-68-71-72-73-74-75- 76-77-78-79-80-81-82号土坑	93
第 24 国	川原湯跡遺跡63-2号堀林床配置図	36	第 81 国	西久保 1 道路36-4・8・46-2・3・ 5号ピット	94
第 25 国	川原湯跡遺跡63-2号堀門形遺構	37	第 82 国	西久保 1 道路46-1・2号溝	95
第 26 国	川原湯跡遺跡63-1号土坑	37	第 83 国	西久保 1 道路46-3・4号溝	96
第 27 国	川原湯跡遺跡63-2号土坑	38	第 84 国	西久保 1 道路47区水場遺構 (1)	97
第 28 国	川原湯跡遺跡63区第2面全体図・遺構外出土遺物図	38	第 85 国	西久保 1 道路47区水場遺構 (2)	98
第 29 国	川原湯跡遺跡工事計画と位置図	39	第 86 国	西久保 1 道路47区水場遺構 (3)	99
第 30 国	横壁跡遺跡基本土層	40	第 87 国	西久保 1 道路46区洞片宛樂場 (1)	99
第 31 国	横壁跡遺跡6区全体図	41	第 88 国	西久保 1 道路46区洞片宛樂場 (2)	100
第 32 国	横壁跡遺跡17区全体図	42	第 89 国	西久保 1 道路46区洞片宛樂場 (3)	101
第 33 国	横壁跡遺跡16区全体図	43	第 90 国	西久保 1 道路46区洞片宛樂場 (4)	102
第 34 国	横壁跡遺跡16-1号住居	45	第 91 国	西久保 1 道路遺構外出土遺物 (1)	102
第 35 国	横壁跡遺跡16-1号住居	46	第 92 国	西久保 1 道路遺構外出土遺物 (2)	103
第 36 国	横壁跡遺跡6-1号土坑	47	第 93 国	西久保 1 道路遺構外出土遺物 (3)	104
第 37 国	横壁跡遺跡6-5・16-1号土坑	48	第 94 国	西久保 1 道路遺構外出土遺物 (4)	105
第 38 国	横壁跡遺跡6-2・16-2号土坑	49	第 95 国	西久保 1 道路遺構外出土遺物 (5)	106
第 39 国	横壁跡遺跡6-3・4・16-3・4号土坑	50	第 96 国	西久保 1 道路工事計画と位置図	115
第 40 国	横壁跡遺跡17-1号溝	51	第 97 国	山根遺跡基本土層	117
第 41 国	横壁跡遺跡遺構外出土遺物	52	第 98 国	山根遺跡23-24区全体図	118
第 42 国	横壁跡遺跡工事計画と位置図	54	第 99 国	山根遺跡24-1号住居 (1)	119
第 43 国	西久保 1 道路46-47区基本土層	55	第100国	山根遺跡24-1号住居 (2)	120
第 44 国	西久保 1 道路全体図	57	第101国	山根遺跡23-1・24-1・2・3・ 4号土坑	120
第 45 国	西久保 1 道路36-46区全体図	59	第102国	山根遺跡24-5・7号土坑	121
第 46 国	西久保 1 道路47-57区全体図	61	第103国	山根遺跡24-6・8・10-15号土坑	122
第 47 国	西久保 1 道路36-1号住居	63	第104国	山根遺跡24-9・11-12-13-14-16号土坑	123
第 48 国	西久保 1 道路46-1号住居 (1)	64	第105国	山根遺跡遺構外出土遺物 (1)	124
第 49 国	西久保 1 道路46-1号住居 (2)	65			
第 50 国	西久保 1 道路46-2号住居 (1)	66			
第 51 国	西久保 1 道路46-2号住居 (2)	67			
第 52 国	西久保 1 道路46-2号住居 (3)	68			
第 53 国	西久保 1 道路46-2号住居 (4)	69			
第 54 国	西久保 1 道路46-3号住居 (1)	70			
第 55 国	西久保 1 道路46-3号住居 (2)	71			
第 56 国	西久保 1 道路46-5号住居 (1)	71			
第 57 国	西久保 1 道路46-5号住居 (2)	72			

第106図	山根Ⅱ遺跡遺構外出土遺物 (2)	125	第160図	花畑遺跡10-30-33-37-42-43-46-47号土坑	184
第107図	山根Ⅱ遺跡遺構外出土遺物 (3)	126	第161図	花畑遺跡11-4-20-1・2号土坑	185
第108図	山根Ⅱ遺跡遺構外出土遺物 (4)	127	第162図	花畑遺跡100-3-8-21号土坑	186
第109図	山根Ⅱ遺跡工事計画と位置図	130	第163図	花畑遺跡100-6-22-24-31-32号土坑	187
第110図	下田遺跡基本土層	131	第164図	花畑遺跡100-7-9-25-26号土坑	188
第111図	下田遺跡全体図	133	第165図	花畑遺跡1-1-2号溝	189
第112図	下田遺跡44-1号住居 (1)	135	第166図	花畑遺跡100-1号溝	190
第113図	下田遺跡44-1号住居 (2)	136	第167図	岩陰出土遺物	190
第114図	下田遺跡44-1号住居 (3)	137	第168図	花畑遺跡遺構外出土遺物	191
第115図	下田遺跡44-1号住居 (4)	138	第169図	花畑遺跡陥し穴分布状況	195
第116図	下田遺跡44-1号住居 (5)	139	第170図	花畑遺跡道具什配置と進入角	197
第117図	下田遺跡45-1・2号畑 (1)	140	第171図	花畑遺跡工事計画と位置図	199
第118図	下田遺跡45-1・2号畑 (2)	141	第172図	榑木Ⅲ遺跡基本土層	201
第119図	下田遺跡45-1・2号畑 (3)	142	第173図	榑木Ⅲ遺跡全体図	202
第120図	下田遺跡遺構外出土遺物	142	第174図	榑木Ⅲ遺跡縄文・弥生土層出土状況	203
第121図	下田遺跡工事計画と位置図	145	第175図	榑木Ⅲ遺跡出土遺物縄文土器 (1)	204
第122図	花畑遺跡基本土層	146	第176図	榑木Ⅲ遺跡出土遺物縄文土器 (2)	205
第123図	花畑遺跡91-1号住居 (1)	148	第177図	榑木Ⅲ遺跡出土遺物縄文土器 (3)	206
第124図	花畑遺跡91-1号住居 (2)	149	第178図	榑木Ⅲ遺跡出土遺物縄文土器 (4)	207
第125図	花畑遺跡91-2号住居	150	第179図	榑木Ⅲ遺跡出土遺物弥生土器 (1)	207
第126図	花畑遺跡100-1号住居 (1)	151	第180図	榑木Ⅲ遺跡出土遺物弥生土器 (2)	208
第127図	花畑遺跡100-1号住居 (2)	152	第181図	榑木Ⅲ遺跡出土遺物須恵器・陶器・石器 (1)	208
第128図	陥し穴断面形状模式図	153	第182図	榑木Ⅲ遺跡出土遺物石器 (2)	209
第129図	土坑断面形状模式図	153	第183図	榑木Ⅲ遺跡出土遺物石器 (3)	210
第130図	花畑遺跡1-2-6号土坑	154	第184図	榑木Ⅲ遺跡工事計画と位置図	213
第131図	花畑遺跡10-4-5号土坑	155	第185図	尾坂遺跡基本土層	214
第132図	花畑遺跡10-5-14号土坑	156	第186図	尾坂遺跡全体図	215
第133図	花畑遺跡10-25-28号土坑	157	第187図	尾坂遺跡63-1号畑	217
第134図	花畑遺跡10-25-36号土坑	158	第188図	尾坂遺跡出土遺物	219
第135図	花畑遺跡10-38-39-40号土坑	159	第189図	尾坂遺跡遺構外出土遺物	220
第136図	花畑遺跡10-3-7-8号土坑	160	第190図	尾坂遺跡工事計画と位置図	221
第137図	花畑遺跡10-11-12-17号土坑	161	第191図	三平Ⅰ遺跡試掘位置と出土遺物	223
第138図	花畑遺跡10-20-22-23号土坑	162	第192図	二社平遺跡試掘位置と基本土層	224
第139図	花畑遺跡10-29-38-41-44号土坑	163	第193図	二社平遺跡試掘トレンチ	225
第140図	花畑遺跡10-45-11-1号土坑	164	第194図	二社平遺跡遺構外出土遺物	226
第141図	花畑遺跡11-1-2・3号土坑	165	第195図	下田遺跡試掘位置と基本土層	227
第142図	花畑遺跡91-1-2号土坑	166	第196図	下田遺跡試掘トレンチ	228
第143図	花畑遺跡100-4号土坑	167	第197図	林の御塚・上原Ⅰ遺跡試掘位置と基本土層	229
第144図	花畑遺跡100-5・13号土坑	168	第198図	東宮遺跡深堀トレンチ土層柱状図	232
第145図	花畑遺跡100-13-14号土坑	169	第199図	二社平遺跡標準土層断面の土層柱状図	234
第146図	花畑遺跡100-15-20号土坑	170	第200図	川原湯御沼遺跡64-1号畑の土層柱状図	235
第147図	花畑遺跡100-23号土坑	171	第201図	川原湯御沼遺跡63-2号畑の土層柱状図	236
第148図	花畑遺跡100-27号土坑 (1)	172	第202図	東宮遺跡As-A直下層の植物硅酸体分析結果	240
第149図	花畑遺跡100-27号土坑 (2)	173	第203図	下田遺跡植物硅酸体分析結果	240
第150図	花畑遺跡100-29号土坑	174	第204図	東宮遺跡深堀トレンチのプラント・ オパール分析結果	243
第151図	花畑遺跡100-33号土坑	175	第205図	川原湯御沼遺跡植物硅酸体分析結果	245
第152図	花畑遺跡100-1・2・10号土坑	176	第206図	石畑遺跡94-1号畑の植物硅酸体分析結果	248
第153図	花畑遺跡100-11-16-18号土坑	177	第207図	花畑遺跡プラント・オパール分析結果	251
第154図	花畑遺跡100-12-17-30号土坑	178	第208図	二社平遺跡標準土層断面の植物 硅酸体分析結果	254
第155図	花畑遺跡1-1・3・100-19-28号土坑	179	第209図	東宮遺跡花粉組成図	263
第156図	花畑遺跡1-4・5・7・10-15号土坑	180	第210図	東宮遺跡深堀トレンチ花粉組成図	266
第157図	花畑遺跡10-31-32-34号土坑	181	第211図	尾坂遺跡深堀組成図	273
第158図	花畑遺跡10-1・2・9・10号土坑	182			
第159図	花畑遺跡10-13-16-18-24-26-27号土坑	183			

## 挿表目次

第1表	各遺跡発掘調査の経過	2	第22表	二社平遺跡のテフラ屈折率測定結果	234
第2表	ハツケム人間学歴史文化財発掘調査方法	3	第23表	東京遺跡・下田遺跡の植物 柱状体分析結果	241
第3表	周辺遺跡一覧	8	第24表	東京遺跡のプラント・オパール 分析結果	243
第4表	東京遺跡植物観察表	17	第25表	川原湯勝沼遺跡の植物柱状体 分析結果	246
第5表	石畑遺跡植物観察表	30	第26表	石畑遺跡の植物柱状体分析結果	249
第6表	川原湯勝沼遺跡植物観察表	39	第27表	尾坂遺跡のプラント・オパール 分析結果	251
第7表	横塚勝沼遺跡植物観察表	52	第28表	二社平遺跡の植物柱状体分析結果	253
第8表	西久保1遺跡植物観察表	107	第29表	東京遺跡の花粉分析結果	263
第9表	山根草遺跡植物観察表	127	第30表	東京遺跡深堀トレンチ花粉分析結果	265
第10表	下田遺跡植物観察表	143	第31表	川原湯勝沼遺跡の花粉分析結果	268
第11表	花畑遺跡植物観察表	192	第32表	尾坂遺跡の花粉分析結果(1)	271
第12表	花畑遺跡陥し穴・土坎開削一覧	194	第33表	尾坂遺跡の花粉分析結果(2)	272
第13表	花畑遺跡工具東向き測定表	195	第34表	東京遺跡の検定同定結果	279
第14表	輪木草遺跡土器出土状況一覧	204	第35表	西久保1遺跡・横塚勝沼遺跡炭化種実一覧表	281
第15表	輪木草遺跡植物観察表	210	第36表	尾坂遺跡同定対象試料と結果	283
第16表	尾坂遺跡植物観察表	220	第37表	「えびの市の三毛作」	289
第17表	三平1遺跡植物観察表	223	第38表	「長野原地区を中心とした地域の農事史」	289
第18表	二社平遺跡植物観察表	226			
第19表	東京遺跡屈折率測定結果	231			
第20表	東京遺跡深堀トレンチの テフラ検出分析結果	232			
第21表	二社平遺跡のテフラ検出・分析結果	234			

## 写真図版目次

口絵1	長野原町空撮1 (川原湯・川原湯・林地区)		P L 9	川原湯勝沼遺跡 63-1・2・64-1号畑・63-1号土坑
口絵2	長野原町空撮2 (林・横塚地区)		P L 10	横塚勝沼遺跡 遺跡周辺・6区全景
写真1	西久保1遺跡 調査風景	56	P L 11	横塚勝沼遺跡 16区・17区全景
写真2	東京遺跡植物柱状体(1)	255	P L 12	横塚勝沼遺跡 16-1号住居
写真3	東京遺跡植物柱状体(2)	256	P L 13	横塚勝沼遺跡 6-1・2・3・4号土坑
写真4	東京遺跡植物柱状体(3)・ 川原湯勝沼遺跡植物柱状体(1)	257	P L 14	横塚勝沼遺跡 6-5・16-1・2・3号土坑・17-1号溝
写真5	川原湯勝沼遺跡植物柱状体(2)・ 尾坂遺跡プラント・オパール(1)	258	P L 15	西久保1遺跡 36・46区1次調査全景・46区2次調査全景
写真6	尾坂遺跡プラント・オパール(2)	259	P L 16	西久保1遺跡 47区全景・46-47区基本土層
写真7	二社平遺跡植物柱状体	260	P L 17	西久保1遺跡 36-1号住居・36-1号住居P2・P3・P4・P5
写真8	石畑遺跡植物柱状体	261	P L 18	西久保1遺跡 46-1号住居
写真9	東京遺跡花粉・孢子遺体	274	P L 19	西久保1遺跡 46-2号住居
写真10	東京遺跡花粉・寄生虫卵・孢子遺体	275	P L 20	西久保1遺跡 46-3号住居
写真11	川原湯勝沼遺跡花粉・孢子遺体	276	P L 21	西久保1遺跡 46-5号住居
写真12	尾坂遺跡花粉・孢子・寄生虫卵	277	P L 22	西久保1遺跡 46-6号住居・46-1号礎石建物
写真13	東京遺跡出土種実(1)	279	P L 23	西久保1遺跡 36-1・2・3・4・6・8号土坑・36-4・8号ピット
写真14	東京遺跡出土種実(2)	280	P L 24	西久保1遺跡 46-1・2・4・5・8・9・10号土坑
写真15	横塚勝沼遺跡・西久保1遺跡出土種実	282	P L 25	西久保1遺跡 46-11・12・14・15・17・18号土坑・46-2・3号ピット
写真16	尾坂遺跡木村組織顕微鏡写真	283	P L 26	西久保1遺跡 46-5号ピット・47-1・2・3・4・5・7・8号土坑
P L 1	東京遺跡 遺跡周辺・51区周辺		P L 27	西久保1遺跡 47-9・10・11・12・13・14・15・16・17・18号土坑
P L 2	東京遺跡 51-1・41-1号畑		P L 28	西久保1遺跡 47-19・20・21・22・23・24・25・26・27号土坑
P L 3	東京遺跡 41-1号畑		P L 29	西久保1遺跡 47-28・29・30・31・32・33・34・35号土坑
P L 4	石畑遺跡 全状・桑畑調査前全景		P L 30	西久保1遺跡 47-36・37・39・40・41・42・43・44
P L 5	石畑遺跡 94-1号畑・84-1・2・3・4号土坑			
P L 6	石畑遺跡 84-5・6・7号土坑・84-1号谷 ・94-1号土坑			
P L 7	川原湯勝沼遺跡 全景			
P L 8	川原湯勝沼遺跡 63-1・2号畑			

- 号土坑
- P.L.31 西久保I遺跡 47-45・46・47・48・49・50・51・52号土坑
- P.L.32 西久保I遺跡 47-53・57・58・59・60・61・62・64・65号土坑
- P.L.33 西久保I遺跡 47-67・68・69・70・71・72・73・74号土坑
- P.L.34 西久保I遺跡 47-75・76・77・78・79・80・83号土坑
- P.L.35 西久保I遺跡 46-1・2・3・4号溝
- P.L.36 西久保I遺跡 47区水場遺構全景
- P.L.37 西久保I遺跡 47区水場遺構・47区水場遺構1・2号土坑
- P.L.38 西久保I遺跡 46区別片築壘場全景・36・46区調査前状況
- P.L.39 山根I遺跡 遺跡全景
- P.L.40 山根I遺跡 23区全景・23区基本土層・24-1号住居・23-1号土坑・24-1号土坑
- P.L.41 山根I遺跡 24-2・3・4・5・6・7・8・9号土坑
- P.L.42 山根I遺跡 24-10・11・12・13・14・15・16号土坑・24区調査風景
- P.L.43 下田遺跡 調査区周辺・44-1号住居・44-2号堀全景
- P.L.44 下田遺跡 44-1号住居
- P.L.45 下田遺跡 45-2号堀
- P.L.46 下田遺跡 45-1号堀
- P.L.47 花畑遺跡 1・10区全景
- P.L.48 花畑遺跡 10・100区全景
- P.L.49 花畑遺跡 10・100区基本土層・91-1号住居
- P.L.50 花畑遺跡 91-1・2号住居
- P.L.51 花畑遺跡 100-1号住居
- P.L.52 花畑遺跡 1-2・6・10-3・4・5号土坑(陥し穴)
- P.L.53 花畑遺跡 10-7・8・11・12・14号土坑(陥し穴)
- P.L.54 花畑遺跡 10-17・20・22・23・25号土坑(陥し穴)
- P.L.55 花畑遺跡 10-28・29・35・36号土坑(陥し穴)
- P.L.56 花畑遺跡 10-38・39・40・41号土坑(陥し穴)
- P.L.57 花畑遺跡 10-44・45・11-1・3・91-1号土坑(陥し穴)
- P.L.58 花畑遺跡 91-2・100-1・2・4号土坑(陥し穴)
- P.L.59 花畑遺跡 100-5・10・11・12号土坑(陥し穴)
- P.L.60 花畑遺跡 100-13・14・15・16号土坑(陥し穴)
- P.L.61 花畑遺跡 100-17・18・19・20号土坑(陥し穴)
- P.L.62 花畑遺跡 100-23・27号土坑(陥し穴)
- P.L.63 花畑遺跡 100-26・27・28号土坑(陥し穴)
- P.L.64 花畑遺跡 100-29・30号土坑(陥し穴)
- P.L.65 花畑遺跡 100-33号土坑(陥し穴)・1-1・3・4・5号土坑
- P.L.66 花畑遺跡 1-7・10-1・2・9・10・13・15号土坑
- P.L.67 花畑遺跡 10-16・18・24・26・27・30・31号土坑
- P.L.68 花畑遺跡 10-32・33・34・37・42・43号土坑
- P.L.69 花畑遺跡 10-46・47・11-4・20-1・2・100-3号土坑
- P.L.70 花畑遺跡 100-5・7・8・9号土坑
- P.L.71 花畑遺跡 100-21・22・24・25・26・27号土坑
- P.L.72 花畑遺跡 100-31・32号土坑・1-1・2号溝・100-1号溝
- P.L.73 花畑遺跡 岩除遺構・全景
- P.L.74 花畑遺跡 1・2・3号岩除
- P.L.75 榎木I遺跡 遺跡全景・遺物出土状況
- P.L.76 尾坂遺跡 調査区周辺・遺跡全景
- P.L.77 尾坂遺跡 63-1号堀・1号円形遺構・1号溝全景・石垣・基本土層
- P.L.78 三平I遺跡・二社平遺跡・林の御塚・上原I遺跡
- P.L.79 下田遺跡
- P.L.80 東宮遺跡・石畑遺跡出土遺物(1)
- P.L.81 石畑遺跡出土遺物(2)
- P.L.82 川原湯沼遺跡・横壁沼遺跡出土遺物(1)
- P.L.83 横壁沼遺跡(2)・西久保I遺跡出土遺物(1)
- P.L.84 西久保I遺跡出土遺物(2)
- P.L.85 西久保I遺跡出土遺物(3)
- P.L.86 西久保I遺跡出土遺物(4)
- P.L.87 西久保I遺跡出土遺物(5)
- P.L.88 西久保I遺跡出土遺物(6)
- P.L.89 西久保I遺跡出土遺物(7)
- P.L.90 西久保I遺跡(8)・山根I遺跡出土遺物(1)
- P.L.91 山根I遺跡出土遺物(2)
- P.L.92 下田遺跡出土遺物(1)
- P.L.93 下田遺跡(2)・花畑遺跡出土遺物(1)
- P.L.94 花畑遺跡(2)・榎木I遺跡出土遺物(1)
- P.L.95 榎木I遺跡出土遺物(2)
- P.L.96 榎木I遺跡出土遺物(3)
- P.L.97 尾坂遺跡・二社平遺跡・三平I遺跡出土遺物



## 序章

### 第1節 調査に至る経緯

平成4年7月、「八ッ場ダム建設に関わる基本協定」及び「用地補償調査に関する協定」の締結により、八ッ場ダム建設は本格的に着工されることとなった。洪水調節や上水道・工業用水・首都圏への都市用水の供給などを目的としている。

八ッ場ダム建設に至る経緯については、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第287集「長野原一本松遺跡（1）」八ッ場ダム建設地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集（2002年刊行）の第1章に詳しく記載されているのでそちらを参照していただきたい。

本格的な着工に先立ち、群馬県知事と長野原町長との間では、昭和60年11月に「八ッ場ダムに関わる生活再建に関する覚書」、昭和62年12月に「八ッ場ダム建設に関わる現地調査に関する協定」が締結された。この経緯において、昭和61年7月にダム湖関連地域の文化財総合調査計画の策定があり、これに基づいて長野原町教育委員会による「民俗」・「石造文化財」「自然」などの調査が行われ、さらに埋蔵文化財の詳細分布調査が平行して実施されていた。

この結果は、「長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査報告書—」（平成2年・長野原町教育委員会）にまとめられており、確認された埋蔵文化財包蔵地は183、これに石造物などの指定文化財や名勝・天然記念物などを含めた文化財総数は199を数える<sup>9)</sup>。このうち、ダム建設に係る5地区（川原畑・川原湯・横壁・林・長野原）の埋蔵文化財包蔵地は79であり、その調査対象面積は約575,000㎡とされている。

また、この他に町域外である吾妻町の松谷、三島などの各地区でも、ダム建設に関連した工事が予定されている。これらの地区については、群馬県教育委員会の、「群馬県遺跡地図」（昭和48年）で、遺跡

の存在が確認されている。

以上のような状況を踏まえ、建設省関東地方建設局、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会及び吾妻町教育委員会の4者により、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協議が行われた。その協議を基に、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長は、平成6年3月18日に「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を締結し、八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画を決定した。実施計画に示された調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

この協定を踏まえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、八ッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とする八ッ場ダム埋蔵文化財発掘調査がスタートした。

なお、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成11年4月1日に「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年4月以降は調査実施機関を財団法人埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

## 第2節 発掘調査の経過

工事工程との調整により、同一遺跡であっても本調査は数年間に亘り行われている。さらに、地上権設定の状況により、調査範囲は必ずしも下記の工事範囲に限定されず、一部では工事範囲を越えて調査を実施している。

また、平成10年以前については、群馬県教育委員会文化財保護課の指導により、(財)群馬県埋蔵文

化財調査事業団において試掘調査も行っている。経過については、第1表のとおりである。

本調査を行った遺跡のうち、完結しているものは花畑遺跡のみである。また、試掘の結果、遺跡として調査必要と判断したものは下記に挙げた3遺跡となっている。下田遺跡については、調査工程を考慮して本書では試掘部分と本調査部分を分けて記載した。花畑遺跡以外の遺跡については、今後も継続して調査が行われる予定である。

第1表 各遺跡発掘調査の経過

遺 跡 名	調 査 原 因	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12
東宮遺跡	工事前進入路建設(川原畑進入路)・町道付け替え		■		■			
石畑遺跡	工事前進入路建設(八ッ場沢①進入路)	■		■	■		■	
川原湯勝沼遺跡	仮設道路建設・上湯原橋橋台建設						■	
横壁勝沼遺跡	工事前進入路建設(東・中村進入路)	■	■					
西久保Ⅰ遺跡	工事前進入路建設(小倉進入路)・代替地擁壁建設	■				■		■
山根Ⅲ遺跡	町道拡幅・深沢橋橋台建設					■		
下田遺跡	工事前進入路建設(下田進入路)・工事前進入路建設(中原進入路)・コア倉庫建設	■	■		■			
花畑遺跡	工事前仮設道路建設・学校用地造成				■	■	■	■
榎木Ⅲ遺跡	工事前進入路建設(榎木沢進入路)					■		
尾坂遺跡	工事前進入路建設(尾坂進入路)・尾坂橋橋台工事	■	■				■	
三平Ⅰ遺跡	工事前進入路建設(川原畑進入路)					■		
二社平遺跡	工事前進入路建設(穴山沢進入路)			■		■		
林の御塚(H6・10) ・上原Ⅰ遺跡(H9)	工事前進入路建設(林進入路)・現有道拡幅		■		■	■		

試掘調査

本調査



## 第3節 調査の方法

平成6年度から本格的に行われることになった発掘調査において、その実施にあたり、全体に係わる

遺跡名称やグリッド設定などについて長野原町教育委員会、群馬県教育委員会文化財保護課、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の3者で協議が行われ以下の事項が定められた。

## ハツ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法

① ハツ場ダム略称：YD(Yanba-Damu)

② 遺跡番号

ダム建設に関わる長野原町5地区に1～5の番号を付し、各地区内に所在する遺跡に対して調査順の通番を用いる。新発見の遺跡に対しては、順次番号を追加する。

1：川原畑地区 2：川原湯地区 3：横壁地区 4：林地区 5：長野原地区

(例) YD4-05(ハツ場ダム・林地区-調査順)

③ 遺跡名

長野原町教育委員会で作成した、分布調査報告書に記載された遺跡名を使用する。遺跡範囲の外側や、新たな場所で遺跡が見つかった場合には、その都度協議し遺跡名を決定する。

④ 座標軸

国家座標(2002.4改正以前の日本測地系を使用)にもとづく。長野原町域を含め、ハツ場ダム関連の建設事業が及ぶ吾妻町大戸付近に至る範囲に方眼を設定する。

(1) 1km方眼：地区(大グリッド)

(2) 100m方眼：区(中グリッド)・1～100区

1km方眼の大グリッド内を100m方眼で100区画に分割し、中グリッドにあたる区を設定する。区の番号は南東隅を1として始まり、東から西に連続する10単位を南から北に並列し、北西隅を100として完結するように付番する。

(3) 4m方眼：グリッド(小グリッド) A-1～Y-25

100m方眼の中グリッド内を4m方眼で625区画に分割し、小グリッドにあたるグリッドを設定する。グリッドの番号はX軸にアルファベット、Y軸に算用数字を用いる。X軸は東から西へA～Yまで、Y軸は南から北へ1～25までの番号を付す。区の番号を冠し、南東隅を基準として個々のグリッド名とする。

(例)ハツ場ダム・花畑遺跡100区A(X軸)1(Y軸)グリッド：YD4-05・100A-1

⑤ 遺構略称

県内の現状はS J(堅穴住居跡)・SK(土坑)などの遺構略称を遙かに凌駕する遺構種が調査されている。その為、直接的な名称が現実的と判断し、略称は使用しない。

⑥ 遺構名

各遺跡の区名(100m方眼)を冠し、遺構の種類ごとに通番で表す。

(例)花畑遺跡100区1号住居跡：YD4-05・100-1号住居跡



座標は2002.4改正以前の日本測地系を使用している。

グリッドの設定にあたっては、日本平面直角座標第IX系を使用しており、ダム建設に関係する区域全体を覆う1km方眼の原点は、南東隅にあたる吾妻町大柏木付近の座標値 $X = +58000.0$ ・ $Y = -97000.0$ の地点である。大グリッドはこの地点から北西に向い60区画が設定されている。

今回報告の遺跡範囲を、上記の区画によって示すと以下の通りとなる。尚、試掘調査のみの遺跡については大グリッドの位置のみを示す。

#### 本調査遺跡

- ・東宮遺跡 No.35地区の41区・51区
- ・石畑遺跡 No.34地区の84区・94区
- ・川原湯勝沼遺跡 No.26地区の63区・64区
- ・横壁勝沼遺跡 No.27地区の6区・16区・17区
- ・西久保I遺跡 No.28地区の36区・46区・47区
- ・山根III遺跡 No.28地区の12区・13区・23区・24区
- ・下田遺跡 No.27地区の35区・44区・45区  
No.28地区(試掘)
- ・花畑遺跡 No.26地区の100区、No.27地区の91区  
No.36地区の10区・20区、No.37地区  
の1区・11区
- ・楡木III遺跡 No.28地区の63区・64区
- ・尾坂遺跡 No.29地区の53区・54区・63区・64区

#### 試掘調査遺跡

- ・三平I遺跡 No.35地区
- ・二社平遺跡 No.34地区
- ・林の御塚・上原I遺跡 No.27地区

このようにグリッドを設定し、測量基準や調査区名称などが確定した後に発掘調査が開始された。

各遺跡の調査とも、初めバックフォーや作業員の手による表土掘削を行い、順次、作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。遺跡地は急斜面上や、狹隘な道の奥にあることが多く、重機の進入が不可能な場合が少なくない。その為、作業員の手による表土掘削が多く行われた。

出土遺物は遺構から出土したものは、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したものについては番号も付し、標高を測り取り上げた。遺構外から出土した遺物については前述のグリッド単位で取り上げた。さらに出土位置を記録したものは遺構出土のものと同様に番号を付し取り上げた。

遺構測量は作業員及び委託した測量会社により行った。縮尺については、住居跡・土坑は1/20、炉・竈・埋甕は1/10、畑跡は1/40、その他の遺構については1/20を原則とした。全体図については、1/40、1/100、1/200を原則として作成した。

遺構写真の撮影は、地上写真については、現場担当者が行い、空中写真については委託した測量会社により行った。

冬季の長野原地区は降雪や降霜及び地面の凍結により現場の調査を行うことが極めて困難である。その為、試行段階であった平成6年度を除き、発掘調査は原則として4月～12月の間に行った。

出土した遺物や記録した図、写真の基礎的な整理については、発掘調査と並行して現場で実施した。平成8年、11年、12年度については、発掘調査終了後の冬季にも集中的に実施している。

遺物は洗浄・注記を行った。記録図の整理は完成には至らなかったが、原因のポイント確認、検索用の台紙の作成を行った。写真は、こちらも完成にはいたらなかったが、検索台紙の作成を行った。

整理作業は、平成13年度、写真整理及び検索台紙の作成、全体図作成、遺構カード作成、遺物接合、遺物復元、遺物写真撮影、遺物実測、遺物図トレース(一部委託)、遺構図修正、遺構図トレース、版下作成、印刷の手順で実施した。

## 第4節 地理的環境と歴史的環境

### (1) 地理的環境

長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置する。北部は概ね吾妻川の流域地帯に属して東西に延び、縦長に南へ開け浅間高原を経て長野県に接している。地質構造上ではフォッサマグナ地帯に含まれ、那須火山帯と富士火山帯が接する付近にあたる。吾妻川は、支流に強酸性水質の河川を持っている。そのため吾妻川本流も酸性を帯びた水質となり魚類の生息に適さない状況であった。現在は、石灰投入による中和処理が行われ水質改善が行われている。

ダム湖予定地域やその周辺は、ほとんどが山地である。その中に「丸岩」と呼ばれる奇峰がある。横巻地区にある丸岩は、南側を除いた3方が100mにも達する垂直な壁に囲まれている。吾妻川方面から見ると崖にできた柱状節理と円柱状に突き出した景観が独特であり、ランドマークとしての景観を十分に備えている。

長野原町の地形・地質の形成に大きな影響を与えた火山が浅間山である。町域の北西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。約21,000年前に黒斑火山の噴火では、岩屑流と「応桑泥流」と呼ばれる泥流が発生している。この泥流堆積物は、当時の河床を数十mの厚さで埋めている。この堆積物によって吾妻川の浸食が進み、その両岸に最上位と上位の段丘面が形成されている。浅間山は、この後も多くの火山噴出物を堆積させているが、特に町域では浅間一草津黄色軽石（以下As-YPk・10,500-11,500?）の堆積が顕著である。また、天明3（1783）年の前掛山噴火により発生した泥流は下位段丘や中位段丘を数m～数十cmの厚さで覆っている。

平地は吾妻川に沿ってわずかに分布しており、階段状の河岸段丘にある。段丘上のわずかな平地は、この地区の主な居住地であり、農業生産の中心にも

なっている。この段丘は、吾妻川からの比高差を基準に下位段丘・中位段丘・上位段丘・最上位段丘の4つに分類される。各段丘面の現在の吾妻川からの平均的な比高差は、下位段丘で約10～15m、中位段丘で約30m、上位段丘で約60～65m、最上位段丘で約80～90mとなっている。このうち、上位・最上位の段丘面は約21,000年前に噴出した応桑泥流堆積物を基盤とし、その上に重なる関東ローム層中には、約11,000年前に噴出したと考えられる浅間一草津黄色軽石層が最上位面で約2m堆積している。

### (2) 歴史的環境

長野原町教育委員会が昭和62年から3カ年にわたり実施した遺跡分布調査において、183の埋蔵文化財包蔵地が確認された。これに石造物などの指定文化財や名勝・天然記念物などを含めると文化財総数は199を数える。平成6年以降ハツ場ダム建設に係わる調査の進展に伴い包蔵地はさらに増え、平成12年度末現在で、その数は214にのぼっている<sup>1)</sup>。

これらの埋蔵文化財包蔵地及びその他文化財の個別の内容、近隣町村に分布する遺跡や当地域の自然環境の詳細については、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第287集「長野原一本松遺跡(1)」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集(2002年刊行)第3章、第1節・第2節に詳しいのでそちらを参照していただきたい。ここでは、長野原町における最新の調査事例を中心に概観したい。

#### ①旧石器時代

現在までに該期の遺跡は確認されていない。ただし、遺構外ながら柳沢城跡で細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが1点出土している。

#### ②縄文時代

縄文時代になると遺跡数は膨大になる。該期の遺跡の主なものとして石畑遺跡、楡木Ⅱ遺跡、坪井遺跡、長畝Ⅱ遺跡、暮坪遺跡、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡、西久保Ⅰ遺跡、幸神遺跡、勘場木遺跡、柳Ⅱ遺跡、向原遺跡、滝原Ⅲ遺跡が挙げられる。

草創期・早期の遺跡数は少なく、中期が圧倒的に多い状況となっている。草創期の遺跡として石畑岩陰遺跡が著名であるが、横壁勝沼遺跡からも表採ながら草創期の槍先形尖頭器が検出されている。また、平成12年度に1次調査が行われた榎木Ⅱ遺跡からは、長野原町では初めてとなる早期摺糸文期の堅穴住居が14軒検出されている。また、同地区で検出例の少ない前期後半（黒浜式・有尾式・踏磯式）の住居5軒も併せて検出されている。また同年調査された暮坪遺跡からは、前期前葉二ツ木式期の住居2軒が検出されている。長野原町域での集落の変遷を知る上で今後の調査とともに注目されるものであろう。

#### ③弥生時代

該期の遺跡はきわめて希薄であり、石畑遺跡、横壁中村遺跡において僅かに土坑が検出されているのみである。このうち横壁中村遺跡では平成12年度調査において弥生の再葬墓の可能性の高い土坑が1基検出されている。遺物は土器片を中心にごく少量ではあるが多くの遺跡で確認されている。その中で榎木Ⅲ遺跡からは弥生時代前期の遺物がまとまって出土している。また、二社平遺跡では表採ながら、弥生時代後期樽式土器の破片も見つかっており、今後の調査の進展が注目されることである。

#### ④古墳時代

該期の遺跡は明確なものは見つかっていない。遺構の検出例はなく、遺物が僅かながら見つかっている状況である。

#### ⑤奈良・平安時代

奈良時代の遺跡はきわめて希薄で、分布調査で僅かに確認されているのみである。

平安時代になると遺跡数は増加する。主な遺跡としては長野原一本松遺跡、横壁勝沼遺跡、向原遺跡、坪井遺跡、花畑遺跡、榎木Ⅱ遺跡等が挙げられる。各遺跡での住居跡の検出数は1～3軒と少ないものであった。しかし、前述の榎木Ⅱ遺跡において9世紀後半から10世紀前半にかけての住居17軒がまとまって検出された。該期の集落構造を知る上で今後の

調査の進展が注目されることであろう。

#### ⑥中世

該期の資料は城館跡や石造物が中心であったが、ここ数年の発掘調査により遺跡が増えつつある。主な遺跡としては、柳沢城跡、横壁中村遺跡、二反沢遺跡、下原遺跡等が挙げられる。このうち平成12年度に調査された下原遺跡からは中世の畑跡や建物跡が検出されている。また、同年に調査された二反沢遺跡からは中世の区画跡の他、羽口、鉄舟、碗状舟等の製鉄関連遺構が検出されている。今後の調査の進展により、遺跡の広がりとともに集落の構造等が解明されていくことになるであろう。

#### ⑦近世

近世の遺跡のほとんどが、天明三年（1783年）の浅間山の噴火に伴い噴出した浅間A軽石（以下As-A）と泥流堆積物で埋没したものである。遺構種では、畑跡の検出が非常に多い。主な遺跡としては東宮遺跡、石畑遺跡、川原湯勝沼遺跡、横壁中村遺跡、下田遺跡、中棚Ⅱ遺跡、下原遺跡、久々戸遺跡、尾坂遺跡等が挙げられる。平成12年度に調査された下原遺跡からは、畑跡の中に残る円形遺構が6カ所で見つかり、畑の区画内に等間隔で配置されている事が判明している。この遺構の性格は、今後も続く同遺跡の調査で解明に近付くものと思われる。また、同年度に調査された中棚Ⅱ遺跡からはAs-A直下より検出した畑の他に、寛保二年（1742年）の洪水の際に埋没したと考えられる畑跡も検出されており、今後、畑跡の時期の広がりが注目されることである。

畑跡以外の遺構も調査が進むにつれ徐々に増えつつある。平成11年度に6次調査が行われた久々戸遺跡からは、江戸時代の街道である「草津道」が確認されている。

第3表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名称	所在地	種別	時代	概要	備考
1	東宮遺跡	川原畑	畑跡	近世	平成7、9年度調査。近世の畑跡を検出。	新発見の遺跡
2	石畑遺跡	川原畑	包蔵地 畑跡	縄文・弥生・古墳・平安・近世	平成6年の試掘調査を受けて、平成8、9、10年度調査。縄文前期の包蔵層、弥生中期の土坑、近世の畑跡を検出。	新発見の遺跡。周知の遺跡地である。No10石畑Ⅱ岩除の範囲の一部を含む。
3	川原湯湧沼遺跡	川原湯	包蔵地 畑跡	縄文・近世	平成9年度調査。縄文前期末と後期の土坑を各1基検出。近世の畑跡を検出。	新発見の遺跡
4	横壁湧沼遺跡	横壁	集落跡 包蔵地	縄文・弥生?・平安・中近世	平成6、7年度調査。陥し穴3基、9世紀の板穴住居跡1軒、中近世土坑墓3基などを検出。	町No23「湧沼遺跡(東平遺跡)」
5	西久保1遺跡	横壁	集落跡 包蔵地	縄文・弥生・平安・中近世	平成6、10、12年度調査。縄文中期の竪穴住居跡7軒や水場跡などを検出。石器加工の際の小割片が廃棄されたと考えられる場所を検出。	町No31「西久保1遺跡」
6	山根目遺跡	横壁	集落跡? 包蔵地	縄文・弥生・近世	平成10年度調査。縄文中期住居1軒などを検出。平成13年度調査実施中。	町No29「山根目遺跡」
7	下田遺跡	林	集落跡 畑跡	縄文?・近世	平成7年度調査。近世の住居跡と、これに伴う畑跡を検出。平成6、9年度の試掘調査では陥し穴、近世畑跡などを確認。	町No47「下原遺跡(下田遺跡)」
8	花畑遺跡	林	集落跡 包蔵地	縄文・平安	平成9～12年度調査。平安住居3軒、陥し穴4基などを検出。陥し穴の底部より工具類検出。	新発見の遺跡
9	榎木目遺跡	林	包蔵地	縄文・弥生・平安・中世	平成10年度調査。縄文前・後期、弥生中期の包蔵層を検出。	新発見の遺跡
10	尾塚遺跡	長野原	畑跡	近世	平成6、7、11年度調査。近世の畑跡を検出。試掘調査では建物跡らしき遺構を確認。	新発見の遺跡
11	三平1遺跡	川原畑	散布地	縄文	平成10年度試掘調査。縄文前・中期土器片出土。	町No3「三平1遺跡」中島政氏蔵
12	二社平遺跡	川原畑	岩除	縄文・弥生	平成8、10年度試掘調査。	新発見の遺跡
13	林の御塚	林	包蔵地	縄文?	平成6、10年度試掘調査(立会含む)。平成6年度に陥し穴を確認。平成10年度は遺構無し。	町No59「林の御塚」
14	上原1遺跡	林	包蔵地	縄文?	平成9年度試掘調査。陥し穴を確認。	町No41「上原1遺跡」
15	石畑岩除遺跡	川原畑	岩除	縄文	昭和53年度調査。草創期～晩期の土器片、軟骨・人骨など出土。草創期・早期の土器は、表裏縄文・弥生文・禪型文や夾土器など。	町No9「石畑1岩除」。『石畑遺跡略報』、『群馬県史』頁1
16	榎木目遺跡	林	集落跡 散布地	縄文・平安・中世・近世	平成12年度調査。縄文早期弥生期住居跡14軒検出。縄文前期住居跡5軒検出。平安住居跡17軒検出。平成13年度調査継続中。	町No51「榎木目遺跡」
17	坪井遺跡	大津	集落跡 古墳?	縄文・弥生・古墳・平安	平成3(1次)、10(2次)年度、町教委調査。縄文前期・中期の住居跡や土坑、弥生中期の土器片、古墳の土器片、平安の掘立柱建物跡などを検出。分布調査では、縄文草創期～後期まで確認。「古墳結集」記載の「鉄塚」があるが、古墳であるか判断しない。	町No86、「長谷川遺跡・坪井遺跡」、「坪井遺跡Ⅱ」、「上毛古墳結集」
18	長谷川遺跡	与喜屋	集落跡	縄文	平成2年度、町教委調査。縄文前期と中期の住居跡計4軒と、土坑跡などを検出。	町No127、「長谷川遺跡・坪井遺跡」
19	碓井遺跡	大津	散布地	縄文・平安	平成12年度、町教委調査。縄文中期。磨製石斧・四石出土。縄文前期の住居跡2軒、土坑2基検出。2基の土坑のうち1基は土坑墓。	町No117、山口正太郎氏蔵、「坪井遺跡Ⅱ」
20	横壁中村遺跡	横壁	集落跡 畑跡 包蔵地	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成8～12年度調査。遺構は縄文時代6G中心。縄文中期～後期にかけての住居跡、配石墓、河石、環状穴列などを検出。遺物は縄文前期から、晩期までのものが見られる。中世の畑跡も検出され、関連する遺構も確認されている。該期の土坑墓も約20基が検出されている。その他、平安の住居1軒、近世の畑跡1枚と他の時期の遺構も僅かながら検出。平成13年度調査継続中。	町No.25「上野IV遺跡」、No.27「観音堂遺跡」を改訂。石斧・有蓋石蓋表原久也氏蔵

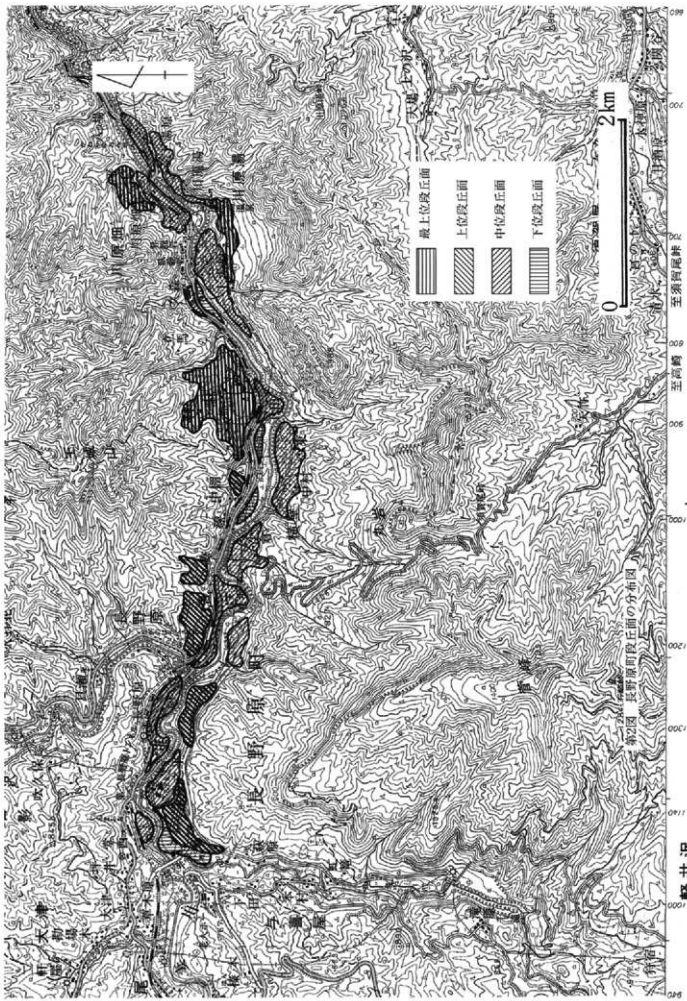
## 第4節 地理的環境と歴史的環境

No	遺跡名称	所在地	種類	時代	概要	備考
21	長野原一本松遺跡	長野原	集落跡	縄文・平安・近世	平成6～12年度調査。本遺跡。縄文中期後半～後期の住居跡約66軒・列石などの配石遺構・陥し穴・土坑群、弥生の土器片、古墳の土師器片、平安の住居跡1軒、中世の輸入陶磁片、近世の遺構・遺物を検出。平成13年度調査継続中。	町No.63「一本松遺跡」、「町誌」、宮崎常治氏蔵、事業団報告書第1集にて平成6～8年までを報告。
22	幸持遺跡	長野原	集落跡	縄文・平安・近世	平成8、9年度調査。縄文中期～後半の住居跡2軒、土坑群、埋没谷、古代の可能性のある遺跡などを検出。	町No.62「幸持遺跡」
23	勘場木石器時代住居跡	大津	集落跡	縄文	昭和29年調査。中期後半の竪穴住居跡1軒、後期の土器片などを検出。中期の遺物には、長野県の豊利式の影響を持つものあり。	町No.91、県史誌、「勘場木遺跡」、「長野県町誌」、「群馬県史」第1
24	瀬日遺跡	大津	集落跡	縄文	昭和63年度、町教委調査。縄文中期～後期。住居跡4軒・中期～後期の埴土器などを検出。	町No.97、「瀬日遺跡」、浅見善義氏蔵
25	向原遺跡	長野原	集落跡	縄文・弥生・平安	平成5年度、町教委調査。縄文中期後半～後期の住居跡5軒、土坑群、埴土器、弥生中期の土坑、平安の竪穴住居跡10軒などを検出。	町No.75「向原遺跡」
26	滝原遺跡	応桑	散布地	縄文・平安・近世	平成8年度、町教委調査。縄文中期～後期の住居跡計2軒と陥し穴などを検出。	町No.152、「滝原遺跡」
27	柳沢城跡	横壁	城跡	中世	平成5年度、町教委調査。吾妻川右岸に立地。別城・郭付城と呼ばれる特殊構造。郭跡・堀切・土居などを検出。常滑・古瀬戸・美濃・珠洲の埴、景徳鎮窯の輸入陶磁なども出土。細石器文化に伴うと考えられる縄文質器製のスクレイパー1点出土。	町No.35、「町誌」、「吾妻郡城址史」、「柳沢城跡」、「群馬県遺跡大辞典」
28	二反沢遺跡	林	畑跡	中世・近世	平成12年度調査。近世の畑跡2筆及び中世の区画検出。この区画が検出された面及び覆土中より14C終わり～16C初めの遺物が検出されている。	町No.52「大乗院堂跡」を改訂。
29	下原遺跡	林	集落地畑跡	中世・近世	平成12年度調査。近世の畑跡4筆などを検出。下位面から、中世の掘立柱建物5軒と畑1筆などを検出。平成13年度調査継続中。	新発見の遺跡
30	中瀬日遺跡	林	畑跡	近世	平成11、12年度調査。近世の畑跡20筆、石垣6列、道5本などを検出。近世の畑の内1筆については寛保2(1742)年の発生と思われる洪水層下より検出。	新発見の遺跡
31	久々戸遺跡	長野原	包蔵地畑跡	縄文・近世	平成9、10年度調査。天明3年の畑跡と、付随する遺構を検出。As-A降下後に耕作が継続する状況が確認される。「一分金」出土。縄文中期土器片出土。	新発見の遺跡 平成7年度に県道建設に伴う調査。「長野原久々戸遺跡」、「研究紀要」16

※1～14までが今回報告遺跡

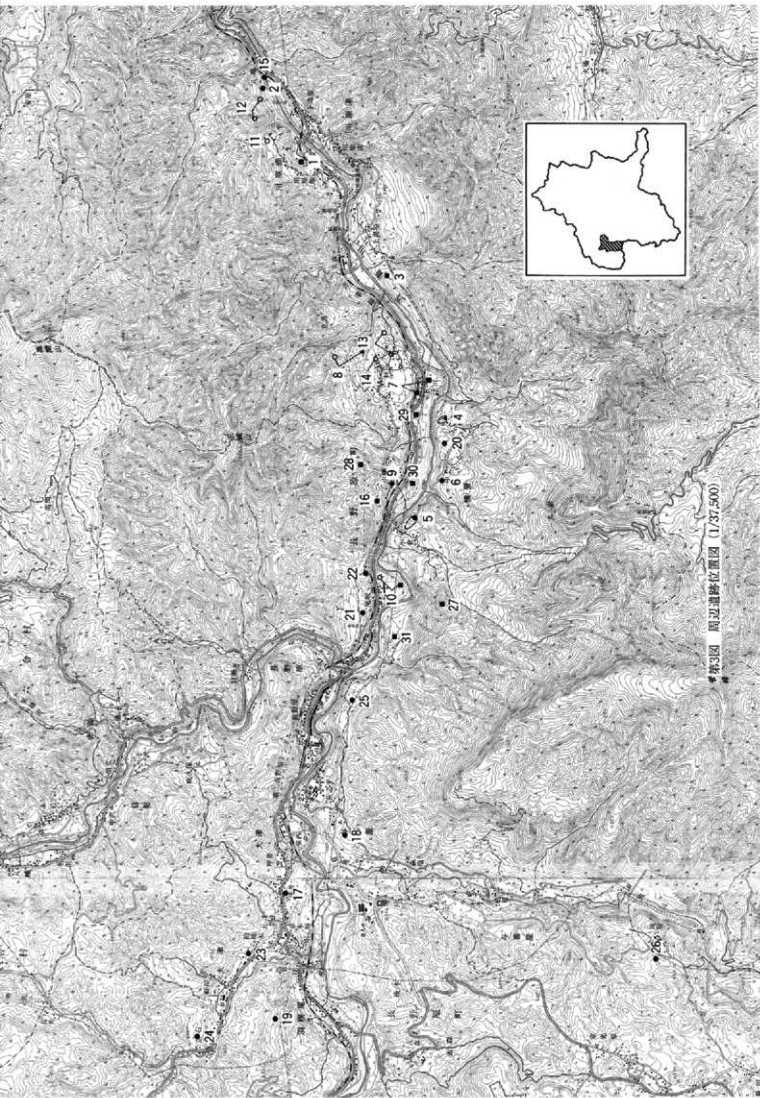
凡例

- ・位置の点は、縄文が●、平安を▲、中世・近世を■で表記し、複合する場合には遺跡の代表的な遺跡の時期を示した。
- ・備考にある「町No.」及び「」付の遺跡名は、「長野県町内遺跡詳細分布調査報告書」にある遺跡番号及び遺跡名である。<sup>※1</sup>
- また、「町誌」は「長野県町誌」の略である。



第2図 長野平野段丘面の分布図





● 31個 周辺遺跡位置図 (1:37,500)

## 序章

- ※1 「長野原町の遺跡一町内遺跡詳細分布調査報告書」については、平成13年度までの発掘調査において、遺跡数の増加及び遺跡範囲の拡大が著しいことが確認された。そこで平成14年3月に長野原町教育委員会、群馬県教育委員会文化財保護課、(財)群馬県歴史文化財調査事業団の三者により、遺跡名、遺跡範囲、遺跡番号等が協議され再編されることとなった。本報告書では、それらの協議の結果を踏まえ、遺跡名については再編後のものを用いている。しかし、遺跡範囲及び遺跡番号については、再編前のものを用いているので御注意いただきたい。

## 引用・参考文献

- 小池富次郎編 1936 『群馬県吾妻郡誌』 吾妻教育会  
塩野新一 1972 『龍場木遺跡・群馬県吾妻郡長野原町龍場木遺跡調査(概報)』  
長野原町 1976 『長野原町誌』上・下巻  
八ッ場ダム地域自然調査会編 1993 『長野原町の自然』 長野原町  
長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局 1979 『石畑遺跡略報』  
長野原町教育委員会 1989 『長野原町の文化財』  
長野原町教育委員会 1990 『長野原町の遺跡一町内遺跡詳細分布調査報告書一』 長野原町埋蔵文化財報告書第1集  
長野原町教育委員会 1990 『堀Ⅱ遺跡』 長野原町埋蔵文化財報告書第2集  
長野原町教育委員会 1992 『長沢Ⅱ遺跡・坪井遺跡』 長野原町埋蔵文化財報告書第3集  
長野原町教育委員会 1995 『柳沢城跡』 長野原町埋蔵文化財報告書第4集  
長野原町教育委員会 1996 『向原遺跡』 長野原町埋蔵文化財報告書第5集  
長野原町教育委員会 1997 『滝原Ⅱ遺跡』 長野原町埋蔵文化財報告書第6集  
長野原町教育委員会 1998 『坪井遺跡Ⅱ発掘調査概報』  
長野原町教育委員会 2000 『坪井遺跡Ⅱ』 長野原町埋蔵文化財報告書第7集  
長野原町教育委員会 2001 『葛原遺跡』 長野原町埋蔵文化財報告書第8集  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 『長野原一本松遺跡(1)八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995～1998 『年報』 14号～17号  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997～2000 『遺跡は今』 第1号～第10号  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1999 『群馬県遺跡大辞典』 上毛新聞社  
群馬県教育委員会 1973 『群馬県遺跡地図』  
群馬県教育委員会 1983 『歴史の道調査報告書・吾妻の諸街道』 群馬県歴史の道調査報告書第15集  
群馬県史編さん委員会 1988 『群馬県史』 資料編1 原始古代1  
群馬県史編さん委員会 1990 『群馬県史』 通史編1 原始古代1  
群馬県史編さん委員会 1991 『群馬県史』 通史編2 原始古代2  
群馬県史編さん委員会 1992 『群馬県史』 通史編6 近世3  
山崎一・山口武夫 1972 『吾妻郡城歴史』 西毛新聞社  
群馬県立歴史博物館 1995 『第五十二回企画展 天明の復興機け』

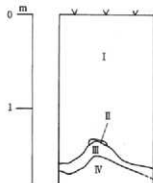
## 第1章 東宮遺跡

### 第1節 遺跡の立地

遺跡は、吾妻川左岸の中段段丘上、標高525mの場所に位置する。中段段丘には吾妻川に沿って南北に幅が狭く、東西に細長い平坦地形がいくつか存在する。本遺跡もそのような平坦地形の1つに存在する。この地区の平坦地形は他と較べて南北の幅が広い。北の山地から南の吾妻川に向かっていくつかの沢が流れている。沢筋以外の場所でも、山地からの湧き水が伏流水となって流れている。このような場所にあたるためか、調査区内には少量であるが絶え間なく湧水がある。遺跡は、この平坦面を東西に見た場合のほぼ中央に存在する。本遺跡は、長野原町の遺跡分布調査報告書に遺跡地として掲載されていない新発見の遺跡となる。遺跡の周辺は、集落地や耕作地等に広く利用されている。

### 第2節 基本層序

遺構面は、第I層の天明3（1783）年の浅間山噴火に伴い発生泥流の堆積物で覆われている。同時期に降下した第II層、浅間A軽石（以下As-A）は地点的な堆積状況を見せている。これらの第I・II層の直下より畑の耕作面が検出されている。平成9年度の調査では、トレンチを設定し土層と土層内に含まれるテフラについて自然科学分析を行っている。そちらについては、第12章第1節（2）を参照していただきたい。



第4図 東宮遺跡基本土層

第I層 暗灰褐色土。天明3（1783年）の浅間山噴火に伴い発生した泥流堆積物。この層の上面が表土となる。

第II層 As-A層。

第III層 暗褐色土層。やや粘性のある土。As-A直下の畑の耕作土層。

第IV層 暗灰褐色土層。粘性のある土。

### 第3節 検出された遺構と遺物

#### (1) As-A直下の畑跡

位置 41・51区 PL 2・3

地形と環境 41区で2地点、51区で1地点を調査し、そのすべてより畝が検出されている。このうち、41区の2地点で検出された畑については、畝の走向、畝間の距離等から同一の畑跡の一部と考えられる。51-1号畑については畝の走向が他の2地点と異なる。これらのことから、検出された畑跡は、合計2枚と考えられる。

2地点にまたがって検出された41-1号畑は東下りの傾斜を持ち、確認できる範囲の最高所は526.45m、最低所は524.46mであり比高差が1.99mとなっている。同様に51-1号畑については最高所528.40m、最低所527.60m、比高差0.8mとなっている。

調査区からは少量の湧水が確認されている。自然科学分析（第12章第2節（3・4）、第3節（3・4））の結果からみる周辺環境は、人為的な環境が広がっており一部には湿地的な場所もあり、畑や水田が営まれていたということであり、現在の環境と類似している様子がうかがえる。また、今回の調査では畑跡しか確認されなかったが、この結果から畑に隣接する水田の存在、もしくは畑地と水田の転換などが指摘されている。

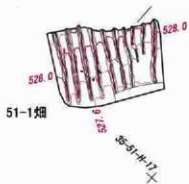
埋没状況 51-1号畑を見ても、耕作面は厚さ1～2mの泥流堆積物に覆われている。この泥流堆積物の存在により、後世の攪乱を受けにくく、良好な状態で当時の状況が残存している。泥流直下の一部にAs-Aが確認できる。その中で畝の頭頂部に堆

第1章 東宮遺跡

Y=101000



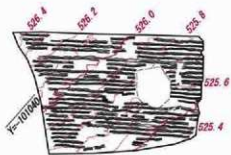
SS-51-P-10



51-1畑

SS-51-P-17

E=61500



Y=101000

SS-41-P-24

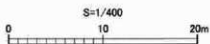
41-1畑



E=61500

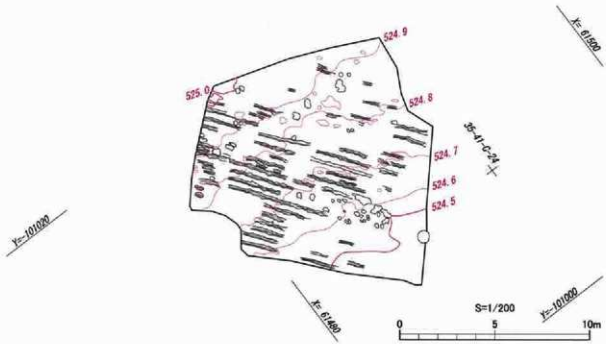
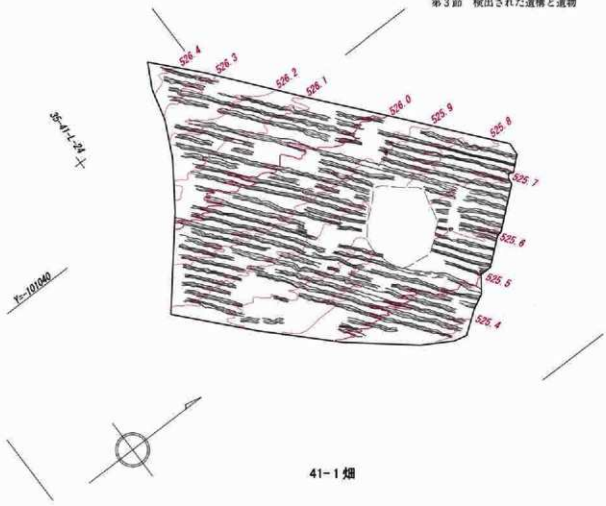
SS-41-P-24

Y=101000



第5圖 Y D1-02東宮遺跡41・51区

第3節 検出された遺構と遺物

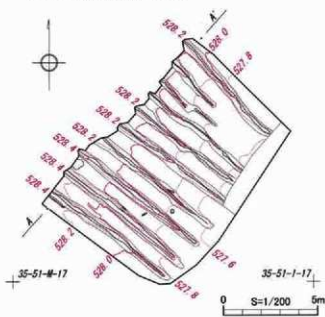


第6図 YD1-02東宮遺跡41区1号畑

積しているAs-Aの状況は、As-A降下後の耕作の状況を表しているものと考えられる。

41-1号畑については泥流が原因と考えられる耕作面の破壊により畝が所々で途切れる状況となっている。

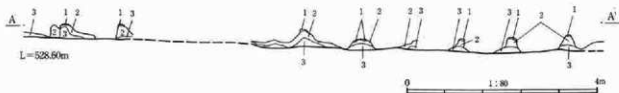
**形態** 今回検出されたのは2枚の畑のそれぞれ1部分のみである。また、それぞれの畑を区画するような遺構も検出されておらず、3地点から畑の形状をはっきりと捉えられることはできない。41-1畑の畝は等高線に沿うように北東から南西に走向している。畝幅は50cm程となっており、確認された範囲内ではほぼ一定の間隔を保っている。51-1畑の畝は等高線に直交するように北西から南東に向かって走向している。畝幅は120cm程となっており、こちらも確認された範囲内ではほぼ一定の間隔となっている。畝高は24cm程である。



**出土遺物** 明確に、遺構と関連づけられる遺物はない。  
**その他** 平成9年度に51-1畑の東限を確認するための調査を行っている。調査の結果、東側へ伸びる畑は見られず、51-1畑については東側へ伸びないことが判明した。この際、As-A直下より出土遺物は検出されていない。

作物 As-A直下の耕作土の表層の土を採取し前出の通り、植物珪酸体分析、花粉分析を行っている。また、同様の層位より検出した試料を基に、樹種同定(第12章第4節(1))をおこなった。それらによると、植物珪酸体分析からは、イネ・ムギ類・ヒエ属(ヒエ)の栽培が推定されている。しかし、イネやムギの藁は肥料として使用されている可能性も考えられる。花粉分析では、植生・作物のデータが畑と水田の両方を示すものとなっている。畑から考えられる作物は集約性の高いソバ、水田から考えられるのはイネである。また、これらの2つのデータが重なることから、この畑の近くに水田があった可能性や畑と水田の転換が行われた可能性などが考えられている。

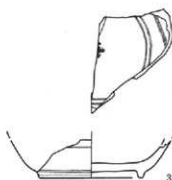
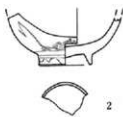
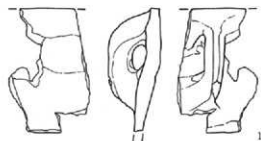
- 51-1畑  
 1 As-A  
 2 暗褐色土 やや粘性有り。  
 3 暗灰褐色土 粘性有り。



第7図 東宮遺跡51-1号畑

## (2) 遺構外出土遺物

泥流堆積物中及び直下から42点の陶磁器が検出されている。その内、泥流発生以前に使用されていた可能性があるものとして、3点を取り上げた。1は中世の内耳鍋。2と3は18c.中～後の波佐見系の磁器である。(遺物観察表17頁)



第8図 東宮遺跡遺構外出土遺物

0 1:3 10cm

第4表 東宮遺跡遺物観察表

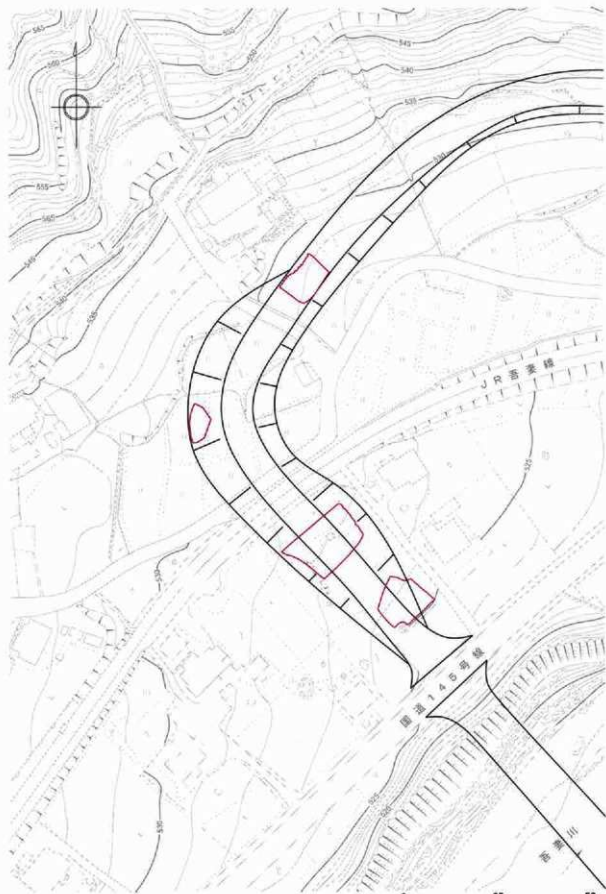
遺構外出土遺物		陶磁器		(単位: cm)		
番号	種類	部位	計測値	①焼成②軸色③胎土	その他の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	口縁部片	口一 底一 高—	①良好、酸化燻②にぶい 黄褐色③普通、砂粒を含む	内耳貼り付け。外面に指頭圧痕あり。	表土。中世
2	磁器	体～底部片 1/4	口一 底(4.4) 高(4.1)	①紫平、灰白～灰白③緻密	高台の一部に軸が施されていない。高台内に不明露が認められる。	泥流直下。波佐見系。 18C.中～後
3	磁器	底部破片 染付皿	口一 底(8.2) 高(3.0)	①紫平、灰白～灰白③緻密	底部内面、コンニャク版による五弁花。高台内に不明露が認められる。	表層。波佐見系。18C.中～後

## 第4節 小結

本書では、平成7・9年度に行われた本調査について報告を行った。新発見となる本遺跡で検出された遺構は、隣接地へ拡大していく様相を見せている。本遺跡は八ッ場ダム建設の進展に際し、今後も調査面積が拡大していく事が確実である。本遺跡の性格などを位置づけた考察及びまとめについては、すべ

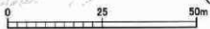
ての調査が終了した時点で行われるべきであろう。

今回は小結として、本報告書に掲載された調査区及び、今後調査が行われるであろう、工事予定範囲を示す。調査の過程を表す資料として活用していただきたい。



第9図 YD1-02東宮遺跡

S=1/1000





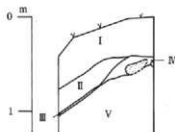
## 第2章 石畑遺跡

### 第1節 遺跡の立地

遺跡は、吾妻川左岸、中位段丘に相当する場所に位置する。遺跡は断崖の途中に僅かに形成された緩斜面に存在する。遺跡の南の断崖下を吾妻川が東流している。この緩斜面は吾妻川に沿って南北の幅は非常に狭く、東西に細長く形成されている。この緩斜面のさらに東側には数基の岩陰が存在する。遺跡は、緩斜面の東端、岩陰の西部までの場所に存在する。調査区の北側部分には旧道が存在し、それを利用して近年まで畑作が行われていた様子がうかがえる。調査区の東部から東方向に広がる岩陰群の中に、長野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている石畑Ⅱ岩陰が存在する。遺跡としては、長野原町の遺跡分布調査報告書に遺跡地として掲載されていない新発見の遺跡となる。遺跡の東部やや離れた位置には、群馬県教育委員会が昭和53年に発掘調査をおこなった石畑Ⅰ岩陰がある。また、調査区西側の沢の西側には、当事業団で試掘調査を行った二社平遺跡がある。

### 第2節 基本層序

傾斜地であるため、土層が安定しておらず、部分的な堆積を見せる層が多く存在する。第1面の近世畑跡は第Ⅱ層下より検出されている。第2面の土坑群は第Ⅳ層の上層に部分的に見られる黒色土層下より検出されている。



第10図 石畑遺跡基本土層

- 第Ⅰ層 暗褐色土。表土。大部分は天明3(1783)年、浅間山の噴火に伴い発生した泥流を起源とする。礫を非常に多く含み、やや砂質の土。
- 第Ⅱ層 暗灰褐色土。上記の泥流堆積物層。砂質強く、礫を多く含む。
- 第Ⅲ層 浅間A軽石。(以下As-A)層。
- 第Ⅳ層 暗褐色土。φ2~5cmの角礫多く含む。
- 第Ⅴ層 黒褐色土。φ2~5cmの角礫多く含む。

### 第3節 遺跡の概要

検出された遺構は、畑跡2枚と土坑8基である。畑跡はいずれも、天明3(1783)年、浅間山の噴火に伴い発生した泥流の堆積物直下より検出されている。畑跡は急斜面に形成されており、等高線に沿って、ほぼ東西方向に敷立てされている。

土坑は、84区の埋没谷周辺から検出されている。84-1号埋没谷の西側では弥生時代の土器片を伴う土坑が1基検出され、周辺でも同時期の土器片が若干出土している。

遺跡の範囲内には、4つの小規模な埋没谷が存在する。いずれの谷も、調査区を北から南へ縦貫している。このうち、最も西にある84-1号埋没谷は、埋没土が良好な遺物包含層となっている。上層付近からは縄文時代中期の土器片を中心とした遺物が出土している。下層付近からは、関山式期、黒浜式期、諸磯式期の縄文時代前期の遺物を主体とした土器片や石器が検出されている。同様に、94区1・2号埋没谷でも遺物は少量ながらも、包含層が確認されている。こちらの遺物の時期は、縄文時代中期のものが中心である。

本調査地区の東側には、3基の岩陰が存在する。この内の1基は長野原町の遺跡台帳に記載されている、石畑Ⅱ岩陰である。これらの岩陰については、試掘調査でテラス部分が比較的広いことが確認されており、岩陰遺跡の存在が期待されていた。しかし、本調査では岩陰に伴うと思われる遺構や遺物は検出されなかった。

## 第4節 検出された遺構と遺物

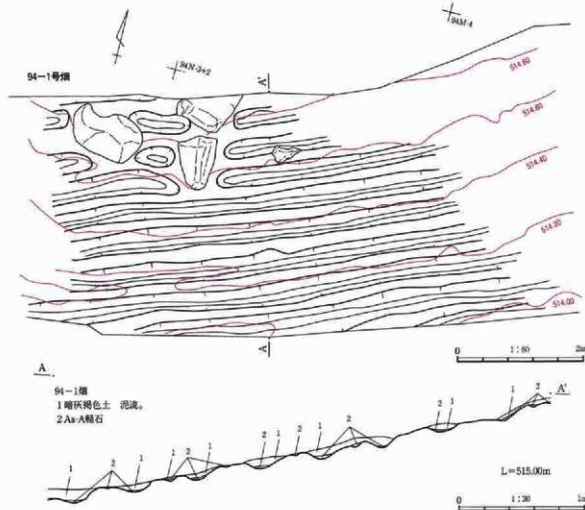
## (1) As-A直下の畑跡

位置 94区 PL 5

地形と環境 東西に細長く延びる調査区の東端及び中央付近の2地点から畝が検出された。畑の境は検出されていないが畝の状況から、別区画の畑跡であると判断した。94-1号畑は調査区のはば中央にあり、畝の残存状況はよい。94-2号畑は調査区の東端にあり、畝の残存状況は悪い。2つの畑跡の両側には攪乱が入っているため、東西方向への広がりには確認することはできなかったが、おそらく地形に沿ってのびていたであろうと推定される。旧地形は現在よりもさらに傾斜が急である。

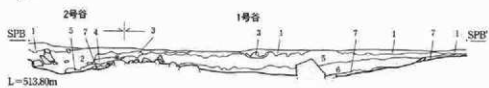
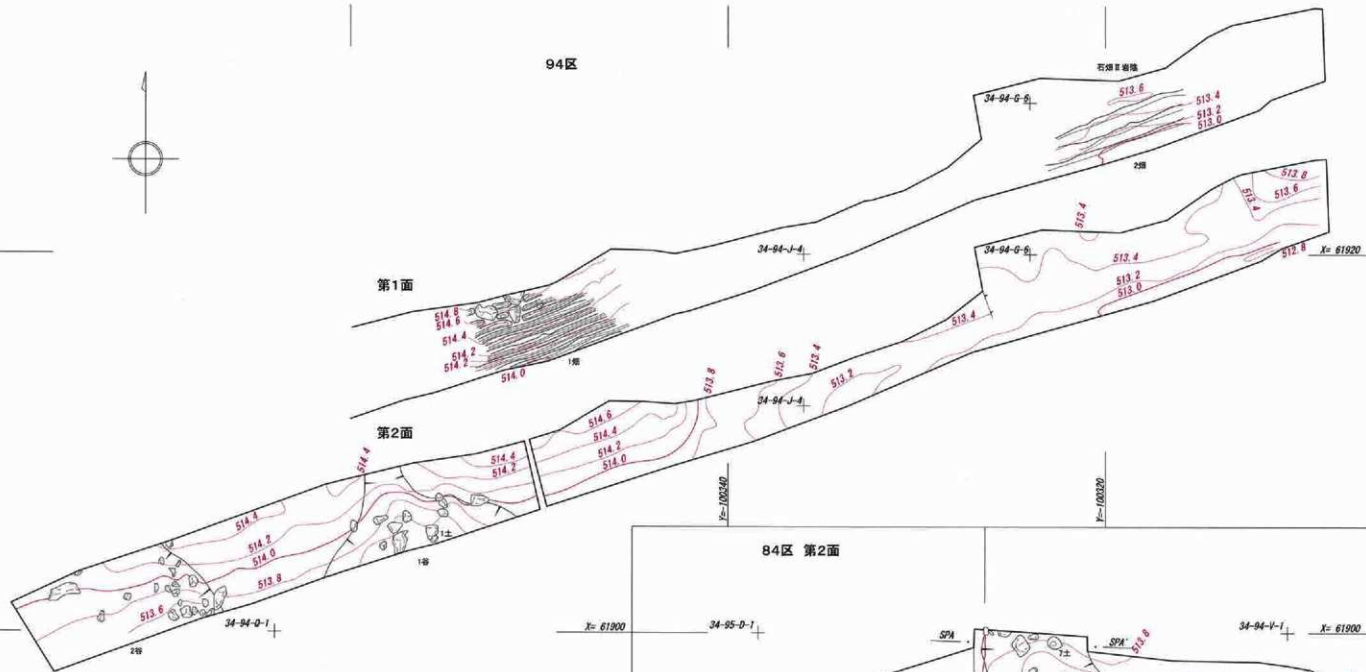
埋没状況 畑跡の耕作面は、厚さ10cm程の表土下より検出された。泥流堆積物は殆どが削られ非常に薄い表土となっている。表土と耕作土の間にはAs-Aが全面に堆積しており、復旧の跡は見られない。それぞれの畑の東西側は後世の耕作及び攪乱により残存していない。

形態 確認できたのは畑跡の一部のみであり、全体の形状は不明である。畝は等高線に沿うように東西に走向している。94-1畑の北西部には巨石が存在するが、耕作当時から存在していたらしく、畝はそれらをよけて作られている。畝幅46cm、畝高16cmである。1つの畝から次の畝までの高低差はおおよそ20cm程で階段状に南へ下っている。94-2畑は攪乱が激しく畝は殆ど残存していない。サクにはAs-Aが確認できる。傾斜はほぼ1畑と同じで階段状に



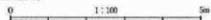
第11図 石畑遺跡94-1号畑

94区



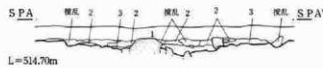
SPB-SPB'

- 1 黄褐色土 表土。黄褐色砂壤土塊を主体とする。河川用積層小。
- 2 褐色土 大型礫を含む。やや砂質。
- 3 黒褐色土 粘質土。小型礫を少量含む。
- 4 褐色土 腐植土。小型礫を多く含む。
- 5 黒褐色土 砂質粘土。縄文前期の遺物を含む。大型礫As-Y7a粒を多く含む。
- 6 黒褐色土 砂質粘土。縄文前期の遺物を含む。大型礫As-Y7a粒を多く含む。
- 7 黒褐色土 谷崩浸上。石器片等出土。黄褐色土小塊を多く含む。大型礫含む。



第12図 YD1-03石畑遺跡全体図

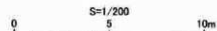
84区 第2面



84-1 谷

SPA-SPA'

- 1 黒褐色土 白色、黄褐色粒子を多く含む。
- 2 黒褐色土 白色、黄褐色粒子を多く含む。また礫石の風化したものも多く見られる。
- 3 黄褐色土 白色、黄褐色粒子、風化した礫石を非常に多く含む。



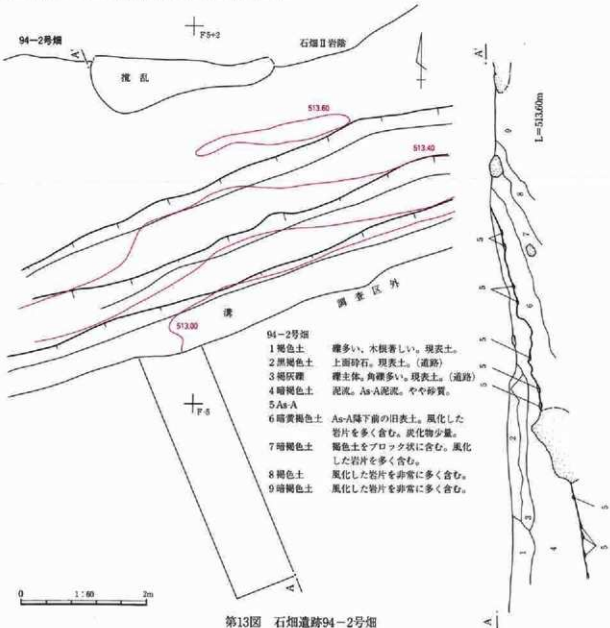


畝立てがされていたと思われる。畝幅24cm、畝高4cmである。畝幅は1畑と比べて狭い。やや間をあけて畝立てされている。この畑の南側に存在する旧道下の確認調査を行った際、この畑がさらに南側に続いていることが確認された。

作物 94-1号畑において、As-A直下の耕作土表層から試料を採取し、植物珪酸体分析(第12章、第2節(6)参照)を行った。分析からは、イネ、ムギ類(コムギやオオムギ)、ヒエ属(ヒエが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)等の穀物が栽培されていた可能性が示されている。しかし、

すべての試料から検出されたデータはない。また、泥流下という閉ざされた環境から、少量の検出量を過大に評価している。これらのものが有機肥料として使われていた可能性も否定できないため、作物の特定については今後の調査結果を待って再び検討せねばならないであろう。

出土遺物 94-1号畑より3点の遺物が検出されている。そのうちの2点は江戸期に比定される陶器片である。いずれも小破片であり、実測には至らなかった。



(2) 土坑

84区から7基、94区から1基の土坑が検出された。いずれの土坑も小規模で掘り込みも浅く、時期が確認できる状態にないものが多い。以下に遺物が出土したものを中心に主な土坑について概略を記載する。また、各土坑の計測値については、付録の遺構一覧表307頁を参照していただきたい。

84-1号土坑

位置 84Y-24 PL 5

ほぼ円形のプランを呈する土坑である。輪状の断面形状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。埋没土は、黒褐色土と黄褐色土でほぼレンズ状に堆積している。

出土遺物は土器の小破片が3点である。1、2は弥生期に比定されるものである。(遺物観察表30頁)



84-1土

1 黒褐色土 谷の埋土と同じものか。白色、黄褐色粒子を疎らに含む。また小礫を全体に含む。黄灰色ブロックを底部に少量含む。

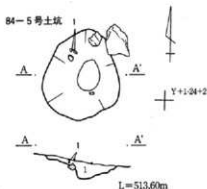
2 暗褐色土 地山混入。黄褐色粒子を少量含む。小礫を全体に含む。



84-5号土坑

位置 84Y-24 PL 6

ほぼ円形のプランを呈する土坑である。底面は小さく、底部中央のみ深く掘り込まれた逆凸型の断面形状を呈する。埋没土は、暗褐色土の単層である。出土遺物は土器片が4点である。いずれも縄文期に比定されるものである。1は縄文時代前期の諸磯b式土器である。(遺物観察表30頁)

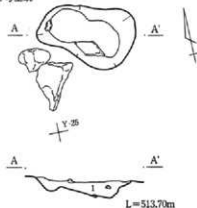


84-5土

1 暗褐色土 白色、黄褐色粒子を少量含む。

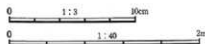


84-2号土坑



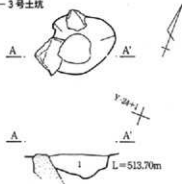
84-2土

1 黒褐色土 黄褐色、白色粒子を少量含む。微量に黄色バミスも見られる。



第14図 石畑遺跡84-1・2・5号土坑

84-3号土坑



84-3土

1 黒褐色土 白色、黄褐色粒子を疎らに含む。炭化物も微量に含む。

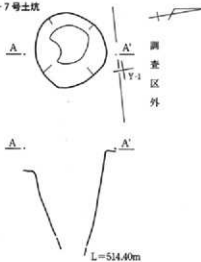
84-4号土坑



84-4土

- 1 黒褐色土 白色、黄褐色粒子を少量含む。黄色バミスを微量に含む。
- 2 暗褐色土 白色、黄褐色粒子を少量含む。
- 3 暗褐色土 多量の白色、黄色バミスを含む。

84-7号土坑



84-6号土坑



84-6土

- 1 黄褐色土 黄褐色、白色、灰色の砂粒を多く含む。上の部分には小礫が含まれる。下の方には黒褐色土ブロックがみられる。
- 2 暗褐色土 黒褐色土ブロックを全体に含む。小礫を多く含む。

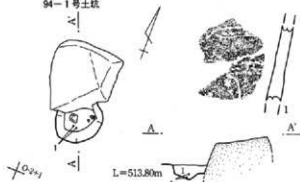
94-1号土坑

位置 94N-2 PL 6

北半が礫にかかっているため、詳しい形状を知ることはできないが、ほぼ円形のプランを呈すると思われる。底面中央には、やや浅い掘り込みが見られる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

出土土器は2点でいずれも縄文期に比定されるものである。(遺物観察表30頁)

94-1号土坑



94-1土

1 暗褐色土 黄色バミスをやや多く含む。非常に多く炭化物を含む。

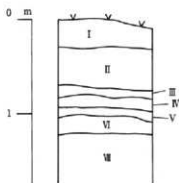
0 1:3 10cm

0 1:40 2m

第15図 石畑遺跡84-3・4・6・7・94-1号土坑

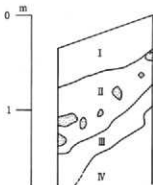
(3) 岩陰 PL 5

平成8年、9年度の試掘調査の結果、3基の岩陰の本体及び周辺に包含層が存在する可能性が明らかした。その結果を受け、平成10年度、岩陰前の本調査を実施した。しかし、工事側と調査区が接していたため安全の確保が難しく、調査を実施したのは3基の岩陰の内、1基のみである。他の2基については、水没時に再び調査を行う可能性があるものとして現時点での調査を断念した。調査を行った1基は、長



岩陰-No1トレンチ

- I ぶい土 黒色土を塊状に混入。
- II ぶい土 褐色砂塊土を基調に角礫を多量に混入。
- III 暗褐色土 やや砂質。小円礫を多量に混入。
- IV ぶい褐色土 黄褐色砂塊土主体。小型の角礫を混入。
- V 暗褐色土 やや砂質。小円礫、角礫を混入。
- VI 褐色土 小円礫、角礫を含む。
- VII 黄褐色土 砂壤土。大型の角礫を含む。

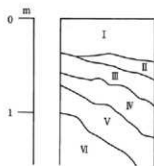


岩陰-No2トレンチ

- I 黒色土 表土。腐植土、木根著しい。
- II 黒褐色土 大型の円礫混入。角礫も含む。
- III 暗褐色土 角礫を含む。ローム粒混入。
- IV 黄褐色土 ローム、砂礫混入、角礫を含む。

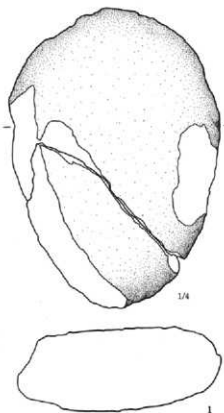
野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている石畑II岩陰である。

掘削の結果、表土が非常に浅く、砂礫層にすぐに到達してしまい、遺構及び包含層は検出されなかった。出土遺物は、平成8年度に表土中から検出された石器4点と礫1点である。(遺物観察表30頁)



岩陰-No3トレンチ

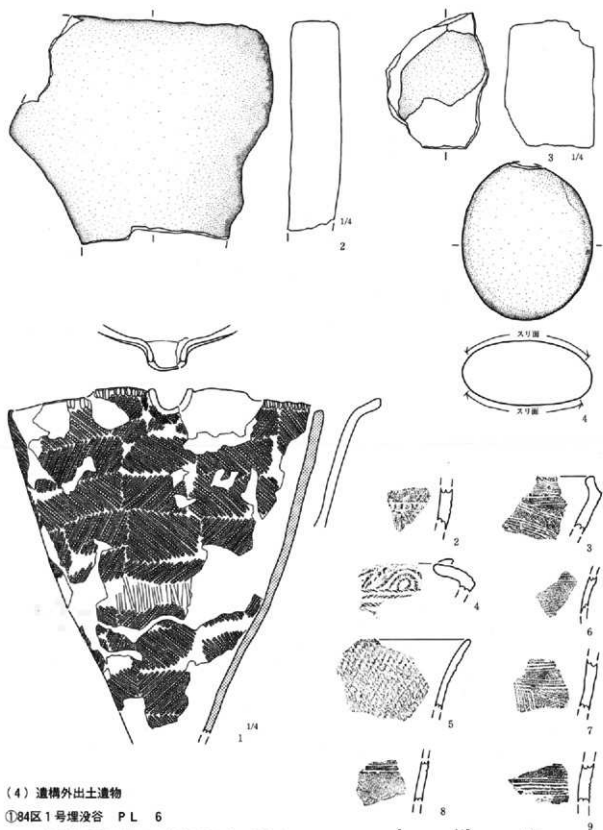
- I 黒色土 表土。木根著しい。
- II 褐色土 やや砂質。
- III 暗褐色土 砂粒、黄褐色土塊混入。
- IV 暗褐色土 角礫少量混入。砂礫混入。
- V 黒褐色土 白色粘土化したローム塊を多量に混入。
- VI 黄褐色土 粘土化したローム。白色粒子を含む。



第16図 石畑遺跡岩陰



第4節 検出された遺構と遺物



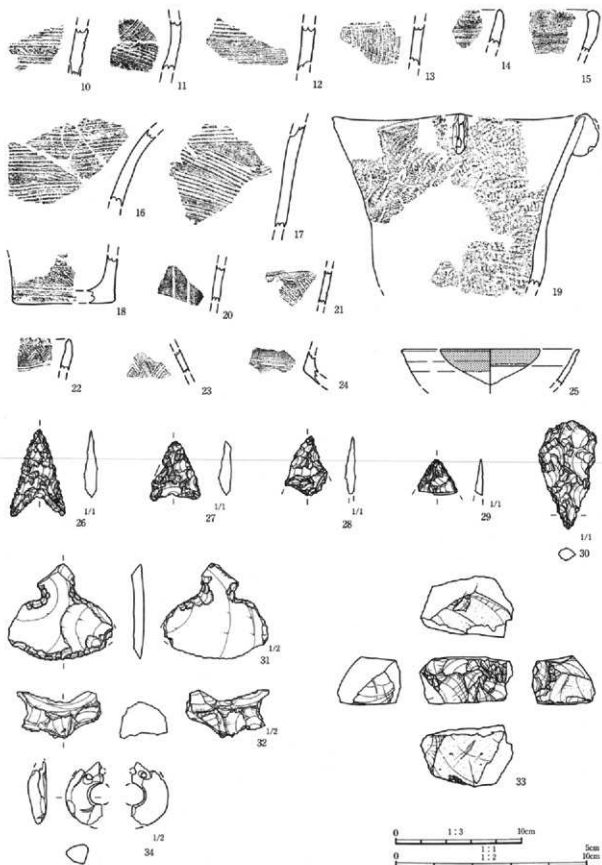
(4) 遺構外出土遺物

①84区1号埋没谷 P L 6

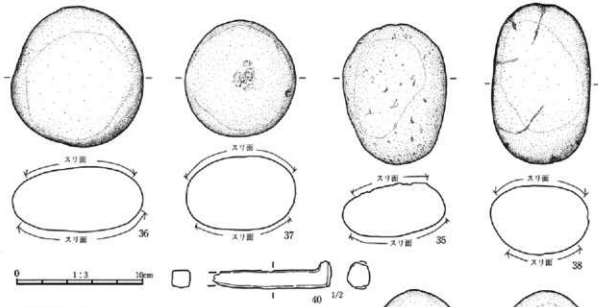
この埋没谷の覆土中からは縄文土器74点、弥生土器5点、土師器1点、陶磁器6点、石器29点が検出されている。(遺物観察表30・31頁)

第17図 石畑遺跡84-1号谷出土遺物(1)

第2章 石畑遺跡

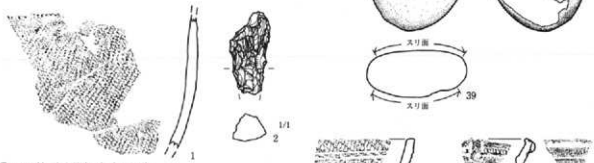


第18図 石畑遺跡84-1号谷出土遺物(2)

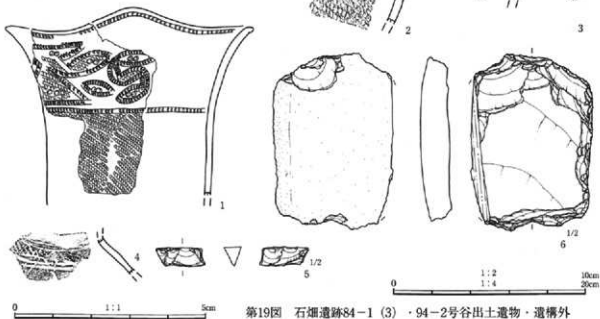


②94区2号埋没谷

この埋没谷の覆土中からは縄文土器4点、石器2点が検出されている。(遺物観察表31頁)



③その他 (遺物観察表31頁)



第19図 石畑遺跡84-1 (3)・94-2号谷出土遺物・遺構外出土遺物

## 第2章 石垣遺跡

第5表 石垣遺跡遺物観察表

94-1号土坑		土器			
番号	種類	部位	①焼成土器③粘土	器形・文様の特徴	備考
1	破片		①良好②にぶい③細砂粒を含む	外面は磨擦波状文。内面ナデ。	弥生後期
2		口縁片	①良好②明赤③細砂粒	外面は磨擦波状文。内面ナデ。	弥生後期

94-5号土坑		土器			
番号	種類	部位	①焼成土器③粘土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁部片	①良好②③砂粒を含む	口縁部が「く」の字状に内折する深鉢。口縁部と胴部に平行沈線による横位の集合沈線を施す。地文は単筋縄文RL。	縄文 諸磯b式

94-1号土坑		土器			
番号	種類	部位	①焼成土器③粘土	器形・文様の特徴	備考
1	鉢	胴部片	①良好②にぶい③片岩を含む	並行沈線と連続する斜交文を横位等に施す。	

94-1号土坑		土器			
番号	種類	部位	①焼成土器③粘土	器形・文様の特徴	備考
1	白石		長31.6幅22.1厚8.7重8820	一部欠損。扁平な円盤。	
2	白石		長24.2幅28.0厚5.2重5800	ほぼ完形。上面に残るのは磨擦か?	
3	白石		長14.4幅10.8厚3.2重2180	破片。扁平な円盤。	
4	磨石		長12.5幅10.2厚5.1重966	完形。両面に磨面が見受けられる。二次的に磨熟。	

94-1号土坑		土器			
番号	種類	部位	①焼成土器③粘土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	ほぼ完形	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	片口が1つ付く深鉢。片口の両側には曲線状突起から変化した高まりが付く。体部は2種類の正反の合熱り縄文による変形構成の羽状縄文で構成され、胴部中央の縦位施文平行沈線帯で2分される。また口唇部外端には刷目がつく。	X-23, 24, 25, Y-24, 25 縄文 岡山式
2		胴部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	円形突起を伴う並行沈線で文様単位を示す垂線を施し、その間に糸織で木の葉の文を構成。	X-24 縄文 諸磯b式
3	深鉢	口縁部片	①良好②にぶい③細砂粒を含む	波状口縁の深鉢。集合沈線で変形文様を構成。地文はRL縄文。	Y-25 縄文 諸磯b式
4	深鉢	口縁部片	①良好②にぶい③中細④砂粒を含む	口縁部が「く」の字状に内折する深鉢。刷目を施した浮線文で変形文様を構成。	縄文 諸磯b式
5	深鉢	口縁部片	①良好②明赤③砂粒を含む	二次的に磨熟。口縁部が外反する深鉢。胴部にLR縄文を施す。	縄文 諸磯b式
6	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③細砂粒を含む	平行沈線。	Y-23 縄文 諸磯b式
7	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	集合沈線。	X-25 縄文 諸磯b式
8	深鉢	破片	①良好②にぶい③細砂粒を含む	平行沈線。	Y-23 縄文 諸磯b式
9	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	集合沈線。	Y-25 縄文 諸磯b式
10	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③細砂粒を含む	集合沈線で横位帯状に施す。地文はRL縄文。	X-24 縄文 諸磯b式
11	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	集合沈線で変形文様を構成。	X-25 縄文 諸磯b式
12	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	集合沈線。	Y-11 縄文 諸磯b式
13	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	平行沈線。	縄文 諸磯b式
14	深鉢	口縁部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	集合沈線。	X-24 縄文 諸磯b式
15	深鉢	口縁部片	①良好②にぶい③細砂粒を含む	口縁部無文。二次的に磨熟。	縄文 諸磯b式
16	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	集合沈線で変形文様を構成。地文はRL縄文。	X-25 縄文 諸磯b式
17	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	集合沈線で変形文様を構成。	縄文 諸磯b式
18	深鉢	胴-底部片	①やや不良②にぶい③細砂粒を少量含む	集合沈線で横位帯縄文を施す。地文はRL縄文。	Y-25 縄文 諸磯b式
19	深鉢	口-胴部片	①良好②にぶい③赤腐④砂粒を少量含む	波状口縁の深鉢。波頂部に耳状の突起が付く。胴部の縄文はRL+R熱りの不可条縄文。	Y-23, 24 縄文 諸磯b式
20	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	支線縄文帯で文様構成。	L-3 縄文 堀之内2式
21		胴部片	①良好②にぶい③赤腐④砂粒を含む	口縁部内面に2条の沈線がめぐめる。外面に斜交縄文を施す。	X-23 縄文 加曾利B2式
22		口縁部片	①良好②にぶい③貴腐④砂粒を含む	外面は磨擦波状文。口唇部顕著。内面に爪の痕跡が見える。	X-24 弥生後期か?
23			①良好②にぶい③細砂粒を含む	外面は磨擦波状文。内面ナデ。	Y-23 弥生後期か?

古式土器		土器			
番号	種類	部位	計測値	①焼成土器③粘土	その他の特徴
34	甕	胴部片	口-底-高-一	①良好②赤腐③砂粒を含む	甕。体部にハケ目を残す。

反軸陶器

番号	種類	部位	計測値	①焼成②色調③動土	その他の特徴	備考
25	反軸陶器	口縁部片	口14.0底一高 (2.9)	①還元焼、硬質②灰白③ 縞砂粒	ロクロ整形。内外面に施軸方法は付けがけか?	X-23 大原2号直式

石鈿

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
26	石鈿	長2.3幅1.45厚0.35重0.61	定形。無蓋で基部は三角形状を呈する。	覆土
27	石鈿	長1.6幅1.3厚1.35重0.51	定形。無蓋で基部は浅い弧状を呈する。未製品か?	X-25
28	石鈿	長1.6幅1.1厚0.25重0.34	右返しのみ残存。無蓋で、基部は深い弧状を呈す。	Y-24
29	石鈿	長0.95幅1.05厚0.2重0.14	先端部のみ残存。	覆土
30	石鈿?	長2.9幅1.5厚0.3重2.52	上部欠損。縦長割片を素材とする。	Y-25
31	石鈿	長5.0幅5.5厚0.6重17.97	定形。横長割片を素材とする。下面に刃部を形成する。	Y-24
32	石鈿	長2.5幅4.4厚2.5重18.18	上面に小形割片を距離した直線が集中する。	覆土
33	石鈿	長3.7幅3.7厚4.8重153.0	全面に小形割片を距離した直線が見受けられる。	Y-25
34	決伏耳鈿	長3.3幅1.3厚1.0重6.27	半分欠損。穿孔が2ヶ所認められる。	Y-23 縄文前期後半
35	磨石	長11.1幅8.2厚4.2重408	定形。3面に磨面が見受けられる。縁部に敲打痕がある。	X-23
36	磨石	長11.1幅10.4厚5.3重881	定形。両面に磨面が見受けられる。二次的に成熟。	X-24
37	磨石	長9.1幅8.7厚5.9重630	定形。両面に磨面が見受けられる。磨面中央及び縁部に敲打痕が見受けられる。	X-24
38	磨石	長12.7幅7.7厚5.5重862	定形。表面に磨面が見受けられる。上面及び下面に敲打痕が集中する。	X-25
39	磨石	長9.7幅7.9厚3.7重388	定形。両面に磨面が見受けられる。	X-24
40	海釘	長6.3幅1.5厚1.0重26	先端部欠損。	表土

94-2号器 土鈿

番号	種類	部位	①焼成②色調③動土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴上部片	①良好②白③赤褐色を含む	口縁部が深く凹鉢。胴部上半に爪形文で文様帯を構成。縄文は半距RL。二次的に成熟。	O-2 縄文 深鉢式

石鈿

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
2	石鈿	長2.15幅1.1厚0.75重1.57	上部・先端部欠損。縦長割片を素材とする。	O-2.2種

遺構外出土遺物 土鈿

番号	種類	部位	①焼成②色調③動土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口-胴部片	①良好②黒褐色③白色小形石を含む	口縁部が外反する。波状口縁深鉢。口縁部に爪形文で遺物の素文を構成。縄文は半距RL。	81Y-24 縄文 深鉢式
2	深鉢	口縁部片	①良好②黒褐色③砂粒を含む	深鉢。口縁部に平行波線を2状。縄文は半距RL。	84区表土 縄文 深鉢式
3	深鉢	口縁部片	①良好②白③黄褐色④砂粒を含む	朝顔形深鉢。口縁部外面に筋目が付く隆線。外面に縄文LRを施した隆帯がめぐる。口縁は文様単位を示す8文字が付く。	84J-4 縄文 堀之内2式
4	皿	胴部片	①良好②黒③中砂粒を含む	縁部直。外面は沈堀によって横位区画された内部をL状横位縄文光沢。一部磨り直し。内面ナメか?	94L-3 弥生中期中葉?

石鈿

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
5	石鈿	長1.0幅2.6厚0.9重2.34	小形割片を距離した直線が残る。	84区表土
6	打製石斧	長9.4幅6.4厚1.65重135	左部分欠損。磨面形か?	84区表土

## 第5節 小結

本書では、平成10年度に行われた本調査を中心に、平成8・9年度に行われた試掘調査も踏まえ報告を行った。当初は、縄文時代の岩陰遺跡を中心に該期に当たる遺構を主として調査を行った。その結果、調査区内からは新たに近世の畑跡も検出され、この場所に展開する遺構面は少なくとも2面存在することが判明した。本遺跡は、八ヶ場ダム建設の進展に

際し、今後も調査面積が拡大していく事が確実である。本遺跡の性格などを位置づけた考察及びまとめについては、すべての調査が終了した時点で行われるべきであろう。

今回は小結として、本報告書に掲載された調査区及び長野原町の遺跡分布調査票に示されている石畑岩陰Ⅱの位置、及び今後調査が行われるであろう、工事予定範囲の位置を示す。調査の過程を表す資料として活用していただきたい。



第20図 YD1-03石煙道跡

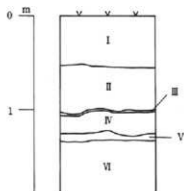
## 第3章 川原湯勝沼遺跡

### 第1節 遺跡の立地

遺跡は、吾妻川右岸の中位段丘に位置する。この地域は断崖状の崖線が連続する台地であり、南側には急峻な山地地形が迫り、急崖が吾妻川に沿って連続している。その中で本遺跡より東側は、ある程度の平坦面が保証されている。遺跡は、この平坦面の西端にあたり、やや南北の幅が狭くなる。遺跡地周辺は、南側の急傾斜地から平坦面へ移行する変換点にあたるため、湧水が沢や伏流水となって吾妻川へ注いでいる場所がいくつか存在する。調査地点の東西も、そのような場所となっており、浅い谷地形を呈している。本遺跡は、長野原町の遺跡分布調査報告書に遺跡地として掲載されていない新発見の遺跡となる。やや離れるが、調査区から東に進んだ不動沢のさらに東側には、前述の遺跡分布報告書に掲載されている、北入遺跡が存在する。なお、本遺跡も含め平坦面の西側は、南側の山地地形のため冬季の日照時間が極めて短い地域である。この平坦面は、現在も集落・耕作地に利用されている。

### 第2節 基本層序

遺構は、2つの面より検出されている。第1面は、第Ⅱ・Ⅲ層の泥流堆積物及びAs-Aの直下で確認された。この泥流堆積物は、自然科学分析（第12章第1節（4））や周辺地域の状況から天明3（1783）年、浅間山の噴火に伴い発生した泥流を起源とするものであると判明している。このことから、第1面は、天明3（1783）年以前の面であることが分かる。As-Aの堆積は、地点的なものである。第2面は第Ⅴ層の下層～第Ⅵ層の上層で確認されている。第Ⅴ層が縄文時代の遺物包含層になっていることや、検出された遺構から、縄文時代以前の面にあたるであろうと思われる。



第21図 川原湯勝沼遺跡基本土層

- 第Ⅰ層 暗褐色土。表土。やや砂質で小礫を含む。
- 第Ⅱ層 褐色土。天明3（1783）年、浅間山の噴火に伴い発生した泥流層。
- 第Ⅲ層 浅間A軽石（以下As-A）層。
- 第Ⅳ層 暗褐色土。As-A直下より検出した畑耕作土。炭化物が点在する。
- 第Ⅴ層 黒褐色土。白色粒子を含み、粘性の強い土。縄文包含層。
- 第Ⅵ層 As-YPkを含むローム土。地山。

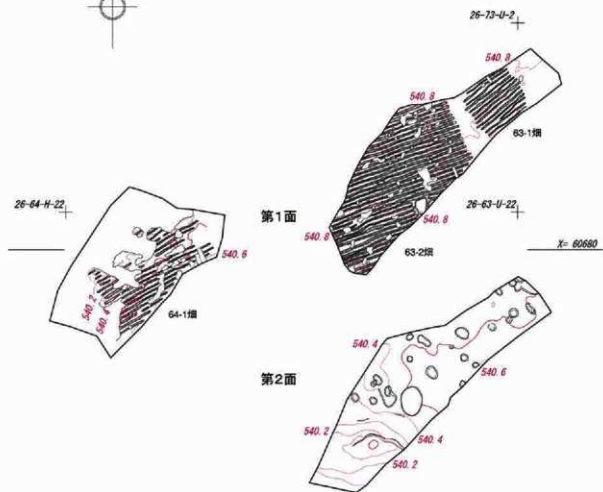
### 第3節 遺跡の概要

検出された遺構は、近世の畑跡3枚、円形遺構1基、縄文の土坑2基である。

As-A直下より検出された近世の畑跡は、表土の約1mの深さより、調査区のはほぼ全面で検出された。畝の方向はほぼ東西を向き、台地中央にかけて遺存度が高くなる。台地縁辺にある64-1号畑跡は、やや走行が不安定で遺存度も悪い。63-1号畑の東側には、畝立てされていない平坦な空間が存在する。

畑の耕作土の下面からは、比較的安定したローム層が確認された。包含層内の遺物出土量は少ない。遺構は、縄文時代前期末葉と後期の土坑を各1基確認した。いずれの土坑も平面形は不明瞭で掘り込みも浅いが、覆土中からは土器片がまとまって出土している。

X= 60720

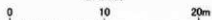


X= 60680

Y= 102320

X= 60640

S=1/400



第22図 Y D2-01川原湯勝沼遺跡63・64区

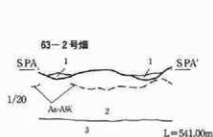


第3節 遺跡の概要



YD2-01 川原湯勝沼遺跡 63区1面

S=1/200 0 5m

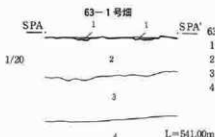


63-2号堀

1/20

L=541.00m

- 63-2号堀  
1 As-A  
2 耕作土。  
3 ローム。



63-1号堀

1/20

L=541.00m

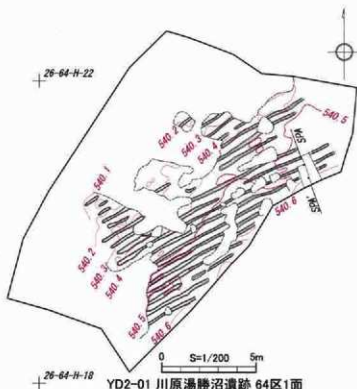
63-1号堀

- 1 As-A  
2 灰黄褐色土 耕作土。  
3 暗褐色土  
4 暗褐色土 ローム。



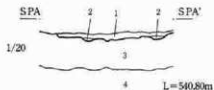
1/20

L=541.00m



YD2-01 川原湯勝沼遺跡 64区1面

第23図 川原湯勝沼遺跡63-1・2・64-1号堀



64-1号堀

- 1 耕作土 As-Aをブロック状に含む。  
2 As-A  
3 灰暗褐色土 耕作土。少量の小礫を含む。  
4 暗褐色土 ローム。

0 1:20 5m

## 第4節 検出された遺構と遺物

## (1) As-A直下の畑跡

位置 63・64区 PL 8・9

**地形と環境** 63区の工事用進入路と64区の橋台部の2ヶ所に調査区を設定し調査をおこなった。畝は2つの調査区内のほぼ全面から検出されている。検出された畑跡は3枚で、それぞれで畝の走向は異なっている。畑跡は、ほぼ平坦な地形に広がっており、63-1号畑は確認最高所540.90m、確認最低所540.80m、高低差0.10mとなっている。同様に63-2号畑では確認最高所540.95m、確認最低所540.70m、高低差0.25m。64区1号畑では確認最高所540.60m、確認最低所540.20m、高低差0.40mとなっている。

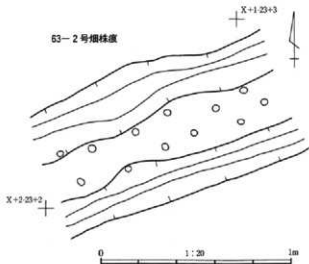
自然科学分析からは、当時の調査区周辺は陽当たりがよく、比較的湿潤な堆積環境であったと推定されている。

**埋没状況** 畑跡の耕作面は、厚さ75cm程の泥流堆積物に覆われている。泥流堆積物の直下に耕作土は存在する。この泥流堆積物の存在により、後世の攪乱を受けにくく当時の状況がしっかりと残る状態となっている。As-Aは泥流堆積物と耕作土の間で確認することができる。ほとんどの部分でサクの部分堆積している様子が見られる。しかし、64-1号畑ではサクの部分に堆積したと考えられるAs-Aの上に、As-Aのブロックが混入した耕作土を確認することができる。この状況はAs-A降下後、畝をならして畑を平らにする作業がおこなわれたことを示しているものと思われる。軽石降下後の復旧作業の一例として捉えることができるのではないだろうか。このような埋没状況が示すものとして、第13章考察に、関連する事項が記載されているのでご参照いただきたい。

**形態** 確認できたのは、それぞれの畑の一部分のみである。63-1号畑は南北に細長く区画された畑の中に、東西に短かく畝立てがおこなわれている様子が見取れる。他の2枚の畑については、はっきりと

形状を捉えることはできない。畑と畑の境界は、63-1号畑と2号畑の間に見られるように、畝とサクのない平面的な空間により区切られているものが確認されている。畝とサクはそれぞれの畑で若干の違いがあるものの、ほぼ東西方向に走向している。63-1号畑は畝幅35cm、畝高2cmである。畝の間隔は、ほぼ一定であるが、若干畝の数の合わないところが見られる。同じく2号畑は畝幅47cm、畝高4.5cmである。畝の間隔はほぼ一定で整然と並んでいるが、南西の一部でやや間隔が広くなり乱雑な様相が見られる。64-1号畑は畝幅35cm、畝高3cmとなっている。他の畑より下位に存在するこの畑には、攪乱が多く入り、至るところで畝とサクが分断されている。しかし、残った部分から畝の間隔は一定で整然と並んでいたであろうことが看取できる。

**作物** 泥流直下の耕作土及びAs-A直下の耕作土の表面から試料を採取し植物珪酸体分析（第12章第2節(5)）・花粉分析（第12章第3節(6)）をおこなった。植物珪酸体分析からはすべての畑でイネの栽培の可能性が示されている。また、63-1号畑と2号畑ではイネの他にムギが栽培されていた可能性も指摘されている。花粉分析からは、ソバ栽培の可能性が示されている。



第24図 川原湯勝沼遺跡63-2号畑株痕配置図

**円形遺構** 63-2号畑の中央南側に1基存在する。長野原地区で検出される、ほぼ円形で畝が確認されない平坦面をこのように称しているため、この名称を使用した。今回検出されたものは、長軸1.75m、短軸1.30mの不整形でやや隅丸方形に近い形である。周縁には溝状の窪みが見られる。

**出土遺物** 合計9点の遺物が出土している。灰軸と須恵器が1点ずつ、その他の7点については江戸期の陶などである。いずれの遺物も小破片であり、実測には至らなかった。

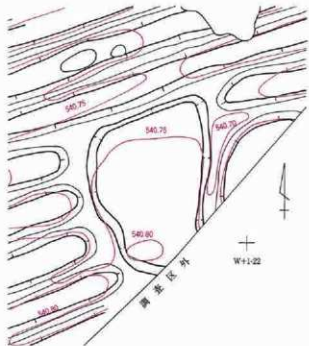
(2) 土坑

63-1号土坑

位置 63X-23 PL 9

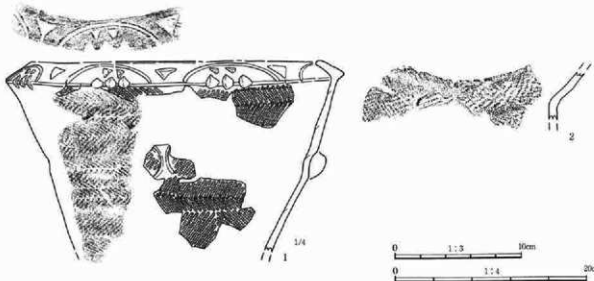
不定型な平面形を呈する土坑である。掘り込みはほとんど確認できない。出土遺物は土器片20点程で、土坑底面にあたると思われる場所に平面的に広がった状態で検出された。ほとんどが接合し、2個体が存在していることが判明した。土器の時期は、縄文前期末葉に比定されるものである。

(遺物観察表38頁)



第25図 川原湯勝沼遺跡63-2号畑円形遺構

63-1号土坑



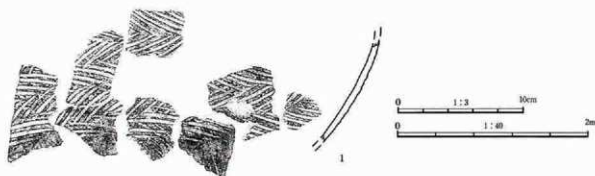
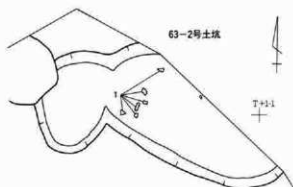
第26図 川原湯勝沼遺跡63-1号土坑

63-2号土坑

位置 73T-1 PL -

不定型な平面形を呈する土坑である。掘り込みはほとんど確認できない。出土遺物は土器片9点で、すべて同一個体と考えられる。こちらの土坑でも、土器片は土坑の底面で検出されている。土器の時期は、縄文時代後期加曾利B式期に比定される。

(遺物観察表39頁)



第27図 川原湯勝沼遺跡63-2号土坑



YD2-01 川原湯勝沼遺跡 63区2面

(3) 遺構外出土遺物 (遺物観察表39頁)



第28図 川原湯勝沼遺跡63-2面全体図・遺構外出土遺物図

第6表 川原湯勝沼遺跡遺物観察表

63-1号土坑		土器			
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁-胴部	①良好②(外)にふい黄緑(内)灰黄緑 ③砂粒を含み、小礫を僅かに含む。	口縁が内折する。口縁部に印刻文と弧状波線を8単位施す。口縁部無文地帯はナシ。胴部には、縄文施文。LR、RL結節縄文による横位波状構成。胴部中央には、内面に屈曲する部分が存在し、耳状の突起が彫付される。	縄文前期末葉。口縁部付近及び内面胴部下手に屈が付着する。
2	深鉢	胴部片	①良好②にふい黄③砂粒を含む	赤色塗料の痕跡が僅かに残る。	縄文前期末葉

63-2号土坑 土器		①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢 胴部片	①良好②ぶい黄緑③中砂粒を含む	内湾しながら大きく開く鉢か、体部上半に沈線で縦柵状の文様帯を構成。内外とも丁寧なミダキ。	縄文 加曾利B2式

遺構外出土遺物 土器		①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢 口縁部片	①良好②ぶい黄緑③礫を少量含む	思案する口縁部に三角形の印刷を施し、その下に集合沈線で縹帯文を施す。	63X-22.23 縄文前期末～中期初頭
2	深鉢 胴部片	①良好②黄緑③礫を少量含む	縹帯区画内に集合沈線で縹帯文を構成し、三角形の印刷を交互に施す。	1と同個体
3	深鉢 胴部片	①良好②黄緑③礫を少量含む	縹帯区画内に集合沈線で縹帯文を構成し、三角形の印刷を交互に施す。	1と同個体
4	深鉢 胴部片	①良好②ぶい黄緑③礫を少量含む	縹帯区画内に集合沈線で縹帯文を構成し、三角形の印刷を交互に施す。	1と同個体
5	深鉢 胴部片	①良好②黄緑③礫を少量含む	縹帯区画内に集合沈線で縹帯文を構成し、三角形の印刷を交互に施す。	63X-22.23 縄文前期末～中期初頭

## 第5節 小結

本書では、平成9年度に行われた本調査を中心に、報告を行った。新発見となる本遺跡で検出された遺構は、隣接地へ拡大していく様相を見せている。本遺跡は、八ッ場ダム建設の進展に際し、今後も調査面積が拡大していく事が確実である。本遺跡の性格

などを位置づけた考察及びまとめについては、すべての調査が終了した時点で行われるべきであろう。

今回は小結として、本報告書に掲載された調査区及び、今後調査が行われるであろう、工事予定範囲を示す。調査の過程を表す資料として活用していただきたい。



第29図 YD2-01 川原湯勝沼遺跡 S=1/1000

## 第4章 横壁勝沼遺跡

### 第1節 遺跡の立地

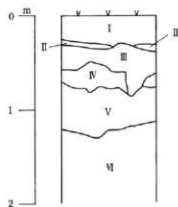
遺跡は吾妻川右岸の中段段丘上に位置する。標高は約568～580mで、左岸の下田遺跡と照応するように吾妻川にせり出す北向きで、緩い傾斜を持つ平坦面である。横壁地区には南に連なる山から流れ出る沢が数本存在する。それらの沢は中段段丘の平坦面にぶつかり扇状地形を形成している。本遺跡もその扇状地形の中に位置している。扇状地内には南側の山から崩落したと思われる礫が数多く存在する。調査区北側は、吾妻川によって削られて比高差のある断崖を呈する。

本遺跡は長野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている勝沼遺跡（東平遺跡）の範囲内に位置している。また、段丘の同一面には、沢を挟んで西側に横壁中村遺跡が隣接する。また、同一面の西端には山根Ⅲ遺跡が存在する。

本遺跡が存在する平坦面は横壁地区の中で最も広いものであり、横壁地区の集落及び農耕の中心地となっている。

### 第2節 基本層序

南側の山地からの転石と思われる礫が、調査区内に多く見られる。特に、沢に面した17区では、調査区のはほぼ全面が礫で覆われている状況であった。遺物包含層は第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層となっている。遺構は、近世・中世・平安時代・弥生時代・縄文時代のものが見つかっている。扇状地であるため、土層は地点的な堆積の状況を示す場合が多い。また、各土層で色調や混入物の変化が少なく、遺構の検出は非常に困難な状況である。基本的には、遺構は第Ⅳ層中で確認されはじめ、第Ⅴ層上面が最終確認面となる。どの時代の遺構もほぼ同じ面より検出されるが、覆土から考えると、近世・中世・平安時代の遺構については、本来、この層より上から掘り込まれてきているものと思われる。



第30図 横壁勝沼遺跡基本土層

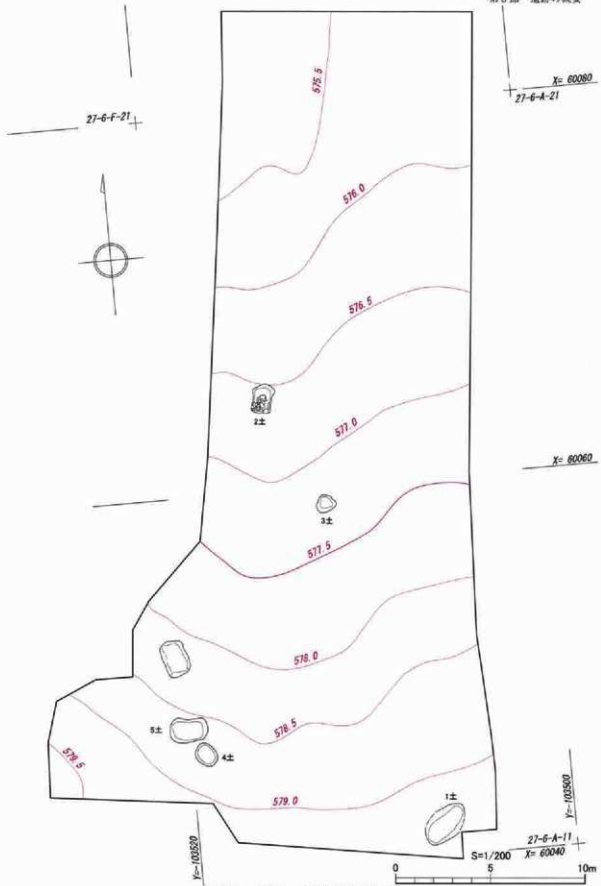
- 第Ⅰ層 褐色土。現況の耕作土。表土。
- 第Ⅱ層 黒色土。遺物包含層。
- 第Ⅲ層 黒褐色土。遺物包含層。
- 第Ⅳ層 暗褐色土。遺物包含層。
- 第Ⅴ層 黄褐色土。礫層。
- 第Ⅵ層 黄褐色土。砂礫層。

### 第3節 遺跡の概要

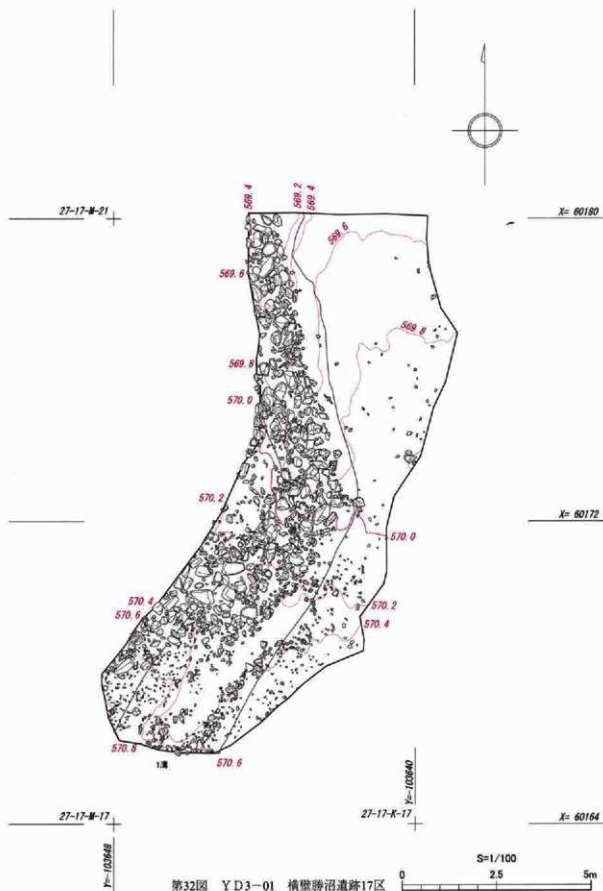
調査区は、6区、16区、17区に大きく分かれる。それぞれの調査区は、隣接しておらず、それぞれの調査区間で検出された遺構同士の間接については、今後の調査を待たねばならない。

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑9基、溝1条である。16区より検出された平安時代に比定される竪穴住居跡は、4つの柱穴が2辺の壁に接して穿たれる特異な構造である。床面には小振りな炭化材や薄い炭化層が残っているため、焼失家屋と考えられる。竈の破損状態や出土遺物が須恵器1点のみなどの状況から、意図的な住居放棄と考えられる。土坑の内、用途が判明しているものは6基で、陥し穴3基、土坑墓3基となっている。これらの土坑は6区と16区から検出されている。陥し穴は縄文～弥生期に、土坑墓は中世～近世に比定されると考えられる。溝は、17区の沢沿い地点より検出されている。

第3節 遺跡の概要

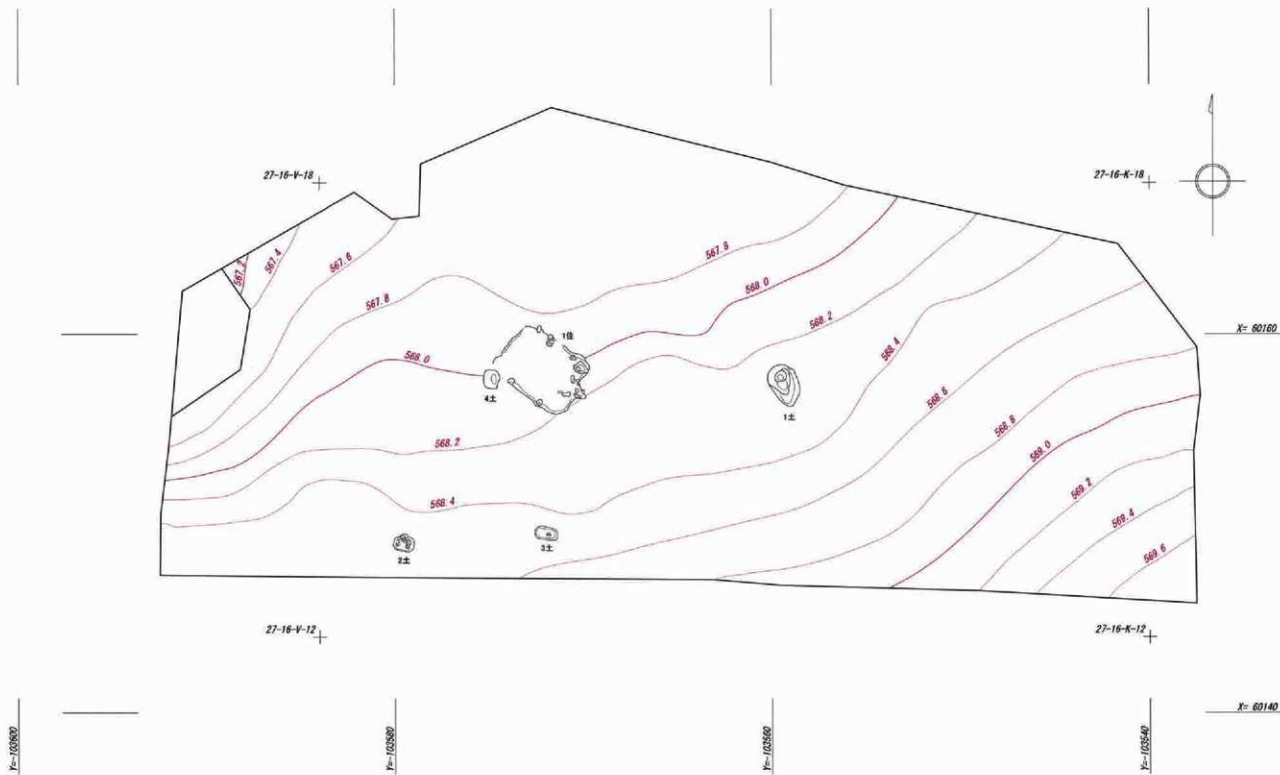


第31図 YD3-01横壁勝沼遺跡6区

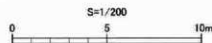


第32図 YD3-01 横壁勝沼遺跡17区





第33图 YD3-01横壁桥沼迹跡16区





## 第4節 検出された遺構と遺物

## (1) 住居

## 16-1号住居

位置 16R-15 PL 12

形態 東西に長い隅丸長方形の平面形を呈すると思われる。竈、北東隅及び南西隅は試掘トレンチに削平されて確認できない。他の2隅はやや丸みを持って屈曲する。

規模 長辺4.44m 短辺3.78m 面積14.1㎡

主軸方位 N-12°9'-E

内部施設 内部からは、ピットと考えられる土坑が、6基検出されている。そのうち、深さや規則性などから4本を住居の柱とした。P2は残存状況がもともとよく、壁面の一部を削って作られている様子が見受けられる。柱と壁の位置から考えると、他の3本の柱も同様の作りであったと考えられる。また、P2は底部中央に一段深い掘り込みを持っている。すべての柱穴に柱痕は残っていない。

周溝は南壁際の一部で確認できるが、掘り込みは非常に浅い。

貯蔵穴と思われる土坑は北東隅に存在する。直径60cmの不整形の平面形状を呈し、底面の南西隅には一段深い掘り込みを持つ。深さは最大で29cmである。

確認最大壁高及び壁の状況 約25cm。わずかに上方に開く。

床面の状況及び床下施設等 わずかに凹凸があるが、ほぼ平らに仕上げられている。床の直上には全面に炭化物が広がっている。貼り床は確認できない。

竈 東壁のほぼ中央に位置する。逆U字状に南東に向かって掘り込んでいると思われるが、壁外の施設は試掘トレンチにより大部分が削平され確認できない。袖石と考えられる石が、住居の壁より20cm程内側よりの位置から検出されている。確認長1.16m、燃焼部幅0.56mである。

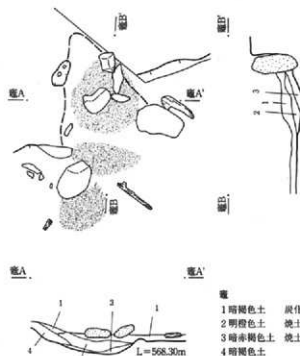
重複 なし

埋没状態 炭化物を多く含む黒色土、黒褐色土で埋没している。炭化物は特に床面に集中し、平面的に広がっている様子が見られる。

出土遺物 出土遺物は、ほぼ完形の須恵器坏が1点、金属器1点、縄文土器片2点の計4点である。縄文土器片は、包含層から混入したものと考えられる。(遺物観察表52頁)

その他 床面の直上から、部材と考えられる炭化物や焼土が多数検出されている。これらは、床のほぼ全面から検出されている。状況から、焼失住居であると考えられる。また、住居内の遺物が極端に少ないことを考えると、失火などではなく意図的に火をかけた可能性が高いものと思われる。

遺構の時期は、遺物から9世紀第4四半期と考えられる。

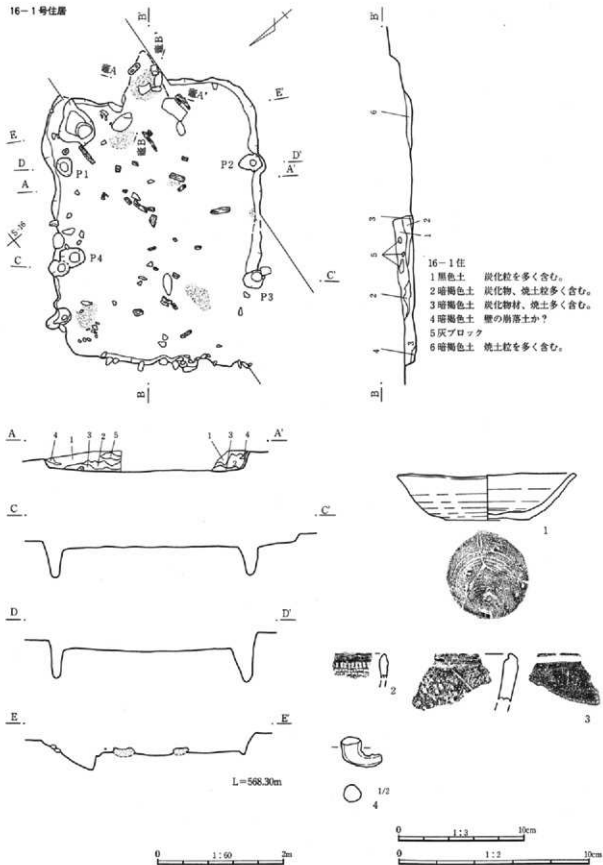


第34図 横壁跡沼遺跡16-1号住居竈

0 1:30 1m

第4章 横櫛粉沼遺跡

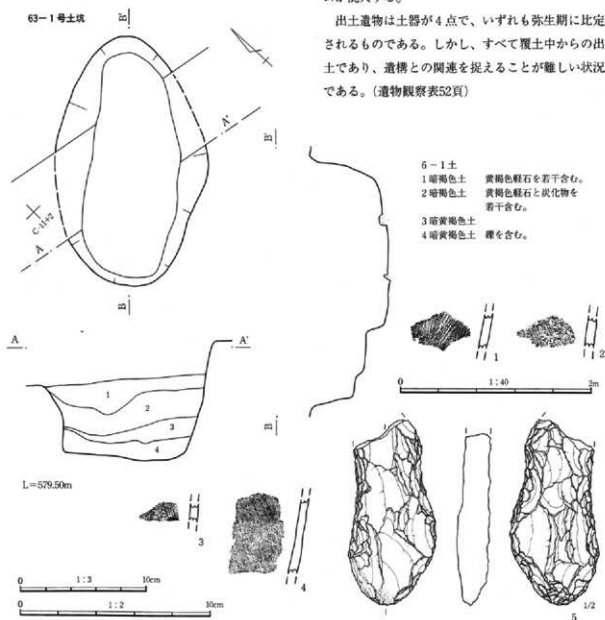
16-1号住居



第35図 横櫛粉沼遺跡16-1号住居

## (2) 土坑

6区から5基、16区から4基、合計9基の土坑が検出されている。そのうち、3基が陥し穴、3基が土坑墓である。陥し穴は6区から2基、16区から1基が検出されている。土坑墓は、6区から1基、16区から2基が検出されている。以下に、用途が判明している土坑を中心に概略を記載する。各土坑の計測値については、付録3遺構一覧表を参照していただきたい。



## ① 陥し穴

## 6-1号土坑

位置 6B-11 PL 13

楕円形の平面形状を呈する。底面形状は隅丸長方形で、上面より底面の規模の方が小さい。掘り込みの深さや形状から考え、陥し穴であると思われる。

底部は中央から北側が1段深く掘り込まれ2段になっている。断面形状は、逆台形に近い形状を呈する。埋没土は暗褐色土主体で、レンズ状に堆積している。上層には黄褐色軽石が、下層には地山のロームが混入する。

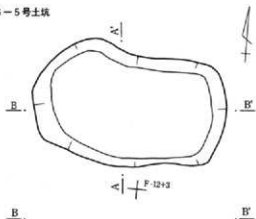
出土遺物は土器が4点で、いずれも弥生期に比定されるものである。しかし、すべて覆土中からの出土であり、遺構との関連を捉えることが難しい状況である。(遺物観察表52頁)

6-5号土坑

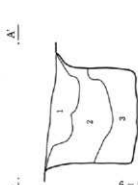
位置 6F-13 PL 14

隅丸方形の平面形状を呈する。底面も隅丸方形の形状を呈する。底面と上面は、ほぼ同じ大きさである。掘り込みの深さや形状から考え、陥し穴ではないかと思われる。

6-5号土坑



底面は、ほぼ平坦である。断面は幅の広いU字状となっている。埋没土は地山のロームが混入する暗褐色土で、レンズ状に堆積している。遺物は検出されていない。



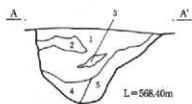
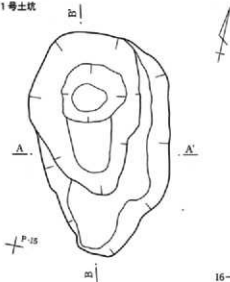
- 6-5土  
 1暗褐色土 黄褐色土が若干混入する。  
 2暗褐色土  
 3暗褐色土 小礫を含む。

16-1号土坑

位置 16P-14 PL 14

不定形の平面形状を呈する。底面は上面と較べ小さく、同様の不定形の形状を呈する。掘り込みの深さや形状から考え、陥し穴ではないかと思われる。底部は南から北に向かって階段状に低くなっている。埋没土は地山の混入する暗褐色土である。底部は、ほぼレンズ状の堆積を見せるが、上部はやや乱れた体積状況である。出土遺物はない。

16-1号土坑



- 16-1土  
 1暗褐色土 炭化物を多量に含む。  
 2明褐色土 炭化物を含む。  
 3赤褐色土 焼土粒層、炭化物を含む。  
 4明褐色土 炭化物を少量含む。  
 5褐色土 炭化物を少量含む。



第37図 横壁勝沼遺跡6-5・16-1号土坑

## ②土坑墓

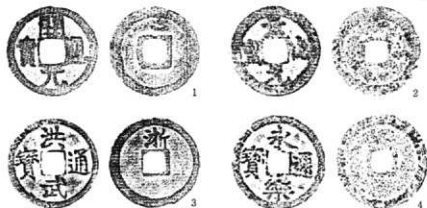
## 6-2号土坑

位置 6D-17 PL 13

隅丸長方形の平面形状を呈する。断面形状は、U字形を呈する。土坑内からは骨片が出土している。この骨片は鑑定の結果、人間の上腕骨骨頭であることが判明し墓であることを確定した。埋没土は、黒色土主体で地山の混入する乱れた土である。中央から、南半に大きめの礫が集中しており、骨片はこの礫の下から検出されており、礫は遺体の埋葬後に意図的にのせられたと考えられる。

出土遺物は古銭が4点である。1が開元通宝、2が洪武通宝、3が永楽通宝、4が景徳元宝となっている。遺構の時期は中世～近世と思われる。

(遺物観察表53頁)



## 16-2号土坑

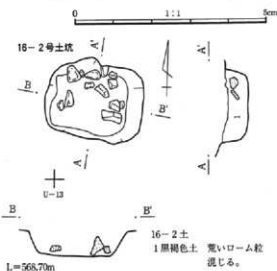
位置 16T-13 PL 14

隅丸長方形の平面形状を呈する。断面形状はU字形を呈する。北半に礫が集中しており、形状とともに6-2号土坑と共通している。骨の出土は見られなかったものの、これらの状況から6-2号土坑と同様の土坑墓であると思われる。埋没土は黒褐色土主体で地山の混入する締まりのない土である。多数の礫は土層中に含まれている。

出土遺物はない。遺構の時期は、6-2号土坑と同じく、中～近世と考えられる。



- 6-2土  
 1 黒色土 黒色土と黒褐色土との混土。  
 2 黒色土 黄褐色土と礫がブロック状に含まれる。



- 16-2土  
 1 黒褐色土 荒いローム粒混じる。

第38図 横壁勝沼遺跡6-2・16-2号土坑

16-3号土坑

位置 16S-13 PL 14

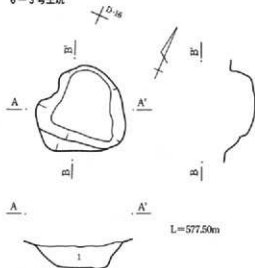
隅丸長方形の平面形状を呈する。他の2基の土坑墓よりやや長軸が長い。断面形状はU字形を呈する。覆土中より小骨片が検出されている。この状況と断面形状と併せて考え、土坑墓であると判断した。隙は数個が認められ、土坑中央やや東側に集中している。これらの隙は、いずれも底面直上に位置する。埋没土は、暗褐色土で、締まりがない。

出土遺物はない。遺構の時期は、他の2基の土坑墓と同じく中～近世と思われる。

16-3号土坑



6-3号土坑



③ その他の土坑

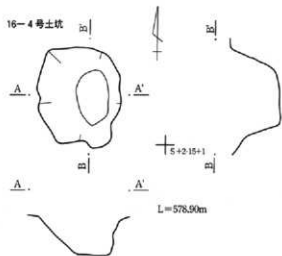
16-4号土坑

位置 16S-15 PL -

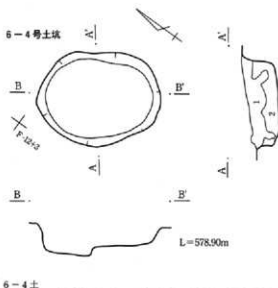
不定形の平面形状を呈する。断面形状は逆台形の形状を示す。西壁の立ち上がりのみ他の壁と較べ緩やかである。16-1号住居のすぐ脇より検出されており、住居と関連する可能性も考えられる。埋没土は不明である。

出土遺物はない。

16-4号土坑



6-4号土坑



第39図 横断勝沼遺跡6-3・4・16-3・4号土坑



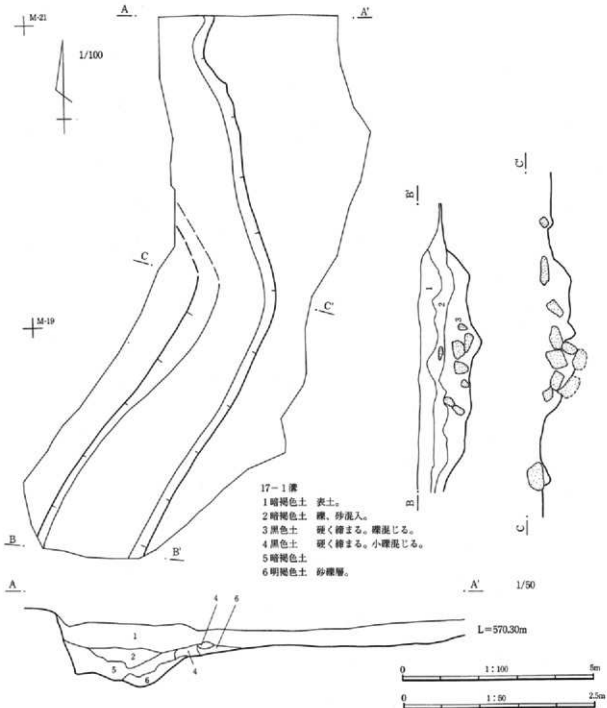
(3) 溝

17-1号溝 P L 14

17L-17-17L-21グリッドに位置する。南西から北東方向に走向した後、調査区中央付近で屈曲し、南東から北西方向に走向する。規模は確認長14.75m、幅2.12~2.76m、深度1.02m程である。

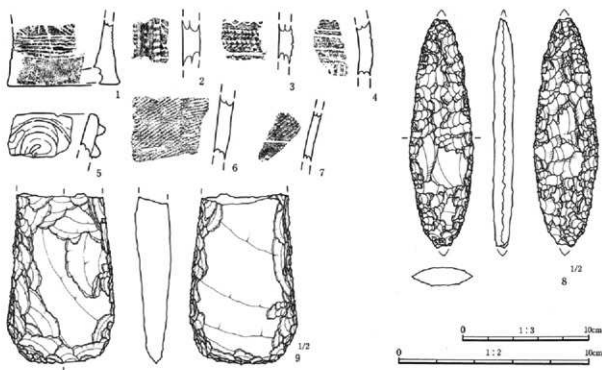
他遺構との重複関係はない。底面の凹凸が大きく、壁は上方に向かって僅かに開く断面形状を呈する。埋没土は暗褐色土主体で、砂や小礫が混入する。また、底部に堆積する黒色土層中には、大型礫が多数混入している。

出土遺物はない。遺構の時期は不明である。



第40図 横塚勝沼遺跡17-1号溝

## (4) 遺構外出土遺物 (遺物観察表53頁)



第41図 横盤勝沼遺跡遺構外出土遺物

第7表 横盤勝沼遺跡遺物観察表

16-1号住居 遺物				(単位: cm)		
番号	種類	部位	計測値	①焼成②色調③胎土	その他の特徴	備考
1	須恵器	1212完形	口14.1底6.6高 3.6	①還元焼、軟質②灰白③ 粗砂粒	ロケロ整形。回転右回り、底部は回転糸切り。	全体に歪む。

## 土器

番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
2	深鉢	口縁部片	①真好②にぶい赤褐色③砂粒を含む	口縁部に内押文で文様を施す。	覆土 縄文 跡取1式
3	深鉢	口縁部片	①真好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	口縁部が内傾し、内面に波状がめぐる。外面に縄	覆土 縄文 堀之内2式 文LRを施す。

## 金属器

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	(単位: cm, g)	備考
1	キセル	長2.1幅1.0厚0.9重2.0	中空となる。		鉄製

## 6-1号土坑 土器

番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1		破片	①やや不良②にぶい赤褐色③中砂粒と 細礫を少量含む	外面は斜位のハケ目。内面ナデ。	覆土 弥生
2		破片	①やや不良②明赤褐色③粗砂粒と片岩 細礫を極僅かに含む	外面は磨耗が激しいが、わずかに斜位の条痕が残 る。内面ナデ。	覆土 弥生 3と同一個体
3		破片	①真好②にぶい赤褐色③粗砂粒を含む	外面はわずかに斜位の条痕が残る。内面ナデ。	覆土 弥生 2と同一個体
4		体部片	①やや不良②にぶい暗③粗砂粒と細 礫を少量含む	外面は斜位のハケ目。内面ナデ。	覆土 弥生

## 石器

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	(単位: cm, g)	備考
5	打製石斧	長9.8幅4.7厚1.75重90	上部僅かに欠損。股形に近い形状。刃部先端が磨耗する。		

6-2号土坑 銭貨		(単位: cm, g)					
番号	種類	現存	外径	内径	厚さ	重さ	備考
1	開元通宝	完形	24.20-24.30	19.60-20.25	1.05-1.10	2.99	覆土
2	景徳元宝	完形	24.05-24.10	18.10-18.45	1.10-1.20	2.55	覆土
3	洪武通宝	完形	24.30-24.45	19.60-20.00	1.20-1.40	2.22	裏面「折」、覆土
4	永楽通宝	完形	25.05-25.10	21.05-21.50	1.45	2.4	覆土

遺構外出土遺物 土器		(単位: cm, g)			
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	彫形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底部分	①良好②明色③砂粒を含む	子線竹管線刻文具による集合沈線で文様を構成。	6区表土 縄文 跡織式
2	深鉢	胴部分	①やや不良②にふい塵③砂粒を含む	爪形状の押引文や蛇行沈線を縦位に施文。	16区表土 縄文 跡織式
3	深鉢	胴部分	①やや不良②にふい塵③砂粒を含む	新面三角形の隆帯で区画内に角蓮文を施す。	16区表土 縄文 跡織式
4	深鉢	胴部分	①やや不良②にふい塵③砂粒を含む	数本の並行沈線で文様を施す。	16区表土 縄文 跡織式
5		口縁部分	①良好②にふい塵③常母片を含む	口縁部に隆帯で波帯門を施す。	16区表土 縄文 加曾利E3式
6	深鉢	胴部分	①良好②明色③砂粒を含む	縄文LRを縦位に施文。	6区表土 縄文中期
7	深鉢	胴部分	①良好②にふい塵③砂粒を含む	縄文LRによる区画内に、縄文LRを充填する。	16区表土 縄文 堀之内2式

石鏡		(単位: cm, g)		
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
8	輪先形天鏡	長12.35幅3.4厚1.15重48.32	ほぼ円形。先端部を僅かに欠損する。	表採
9	打製石斧	長9.0幅5.7厚1.9重127	上部欠損。短筒形。先端部僅かに摩耗する。	

## 第5節 小結

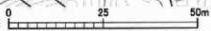
本書では、平成6・7年度に行われた本調査を中心に報告を行った。本遺跡は、八ッ場ダム建設の進展に際し、今後も調査面積が拡大していく事が確実である。本遺跡の性格などを位置づけた考察及びまとめについては、すべての調査が終了した時点で行

われるべきであろう。

今回は小結として、本報告書に掲載された調査区及び、長野原町の遺跡分布調査票に示されている遺跡範囲、及び今後調査が行われるであろう、工事予定範囲を示す。調査の過程を表す資料として活用していただきたい。



第42圖 YD3-01橫壁勝沼道跡 S=1/1000



## 第5章 西久保I遺跡

### 第1節 遺跡の立地

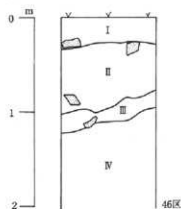
遺跡は吾妻川右岸、中位段丘上に位置する。標高は約580mほどである。横断地区には中位段丘上に2つの傾斜の緩やかな平坦面が存在する。本遺跡は、西側の平坦面の東端に存在する。南側の山から流れ出る沢は、この平坦面にぶつかり扇状地形を形成している。このような扇状地が、この段丘上にはいくつか存在する。本遺跡は、そのような扇状地の北端に位置している。南側は急峻な山地で急勾配の沢が入り、北側は吾妻川に面し急崖となっている。本遺跡は、長野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている西久保I遺跡の遺跡範囲内に含まれている。遺跡地は、現況では階段状に造成された水田となっていた。周辺は同様に造成され、耕作地や集落として利用されている。

### 第2節 基本層序

本調査を行った地点は、扇状地に位置するため、地点的な堆積状況を示す土層が多く見られる。

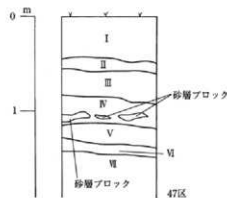
46区は、調査区の南側を中心に洪水層の堆積が見られる。この洪水層は縄文中期末の遺構面の上を覆っている。そのため、洪水層下からは縄文中期末以降の時代の遺構・遺物の混入は見られない。遺物包含層は第Ⅲ層となっている。遺構もこの面から確認されはじめ、第Ⅳ層上面が最終確認面となる。傾斜の上面に向かっていくほど地山までの土層は厚くなっている。

47区では、上記の洪水層が見られない。そのため、すべての遺構が同一面で確認されることとなった。遺物は中近世のものが第Ⅱ層中より、縄文時代のものが第Ⅳ層下部～第Ⅴ層にかけて多く検出される。遺構確認面は第Ⅴ層上面となっている。



46区 基本土層

- 第Ⅰ層 暗褐色土。現況の耕作土。
- 第Ⅱ層 黄褐色土。砂礫層。付近の沢の氾濫による洪水堆積物。
- 第Ⅲ層 暗褐色土。黄色軽石を含む。縄文包含層。
- 第Ⅳ層 黄褐色土。2次堆積と思われるローム層。黄色軽石を少量含む。



47区 基本土層

- 第Ⅰ層 黒褐色土。現況の耕作土。
- 第Ⅱ層 明赤褐色土。黄色軽石を含む。
- 第Ⅲ層 暗褐色土。黄色軽石を多く含む。
- 第Ⅳ層 暗褐色土。黄色軽石を多く含む。砂質土ブロックを多く含む。
- 第Ⅴ層 黒色土層。黄色軽石を少量含む。
- 第Ⅵ層 暗褐色土。ローム漸移層。小礫を多く含む。場所により大きい礫を含む。

第43図 西久保I遺跡46・47区基本土層

### 第3節 遺跡の概要

検出された遺構は、住居跡6軒、礎石建物跡1軒、土坑101基、ピット7基、溝4条、水場遺構1基である。東西約160mにわたる遺跡の性格は、東側部分にあたる36区、中央部分にあたる46区、西側部分にあたる47区で大きく様相が異なる。

36区から検出された遺構は住居跡1軒、土坑6基、ピット2基である。この調査区は擾乱が激しく、包含層の調査が中心となった。

46区からは縄文時代の住居跡5軒、礎石建物1軒、土坑14基、溝4条、ピット5基、を確認した。住居跡5軒のうち4軒が縄文中期末(加曾利E4式期)の敷石住居である。住居の床面直上には洪水層が厚く堆積しており、この時期の直後に洪水層の堆積で居住が断絶していることが判明した。また、46V-4、W-4グリッドの埋没谷には黒曜石を主体とする多量の剥片・チップなどが投棄されていた。この遺跡で石器が盛んに作られていたことを示しているものといえる。この投棄場所の上に位置する46-6号住

居では焨が確認できないことなどから石を敷いた石器加工場的な施設であった可能性も考えられる。なお、調査区西隅より加曾利E3式期の住居1軒と勝坂1式期(猪沢平行)の土坑1基を確認している。

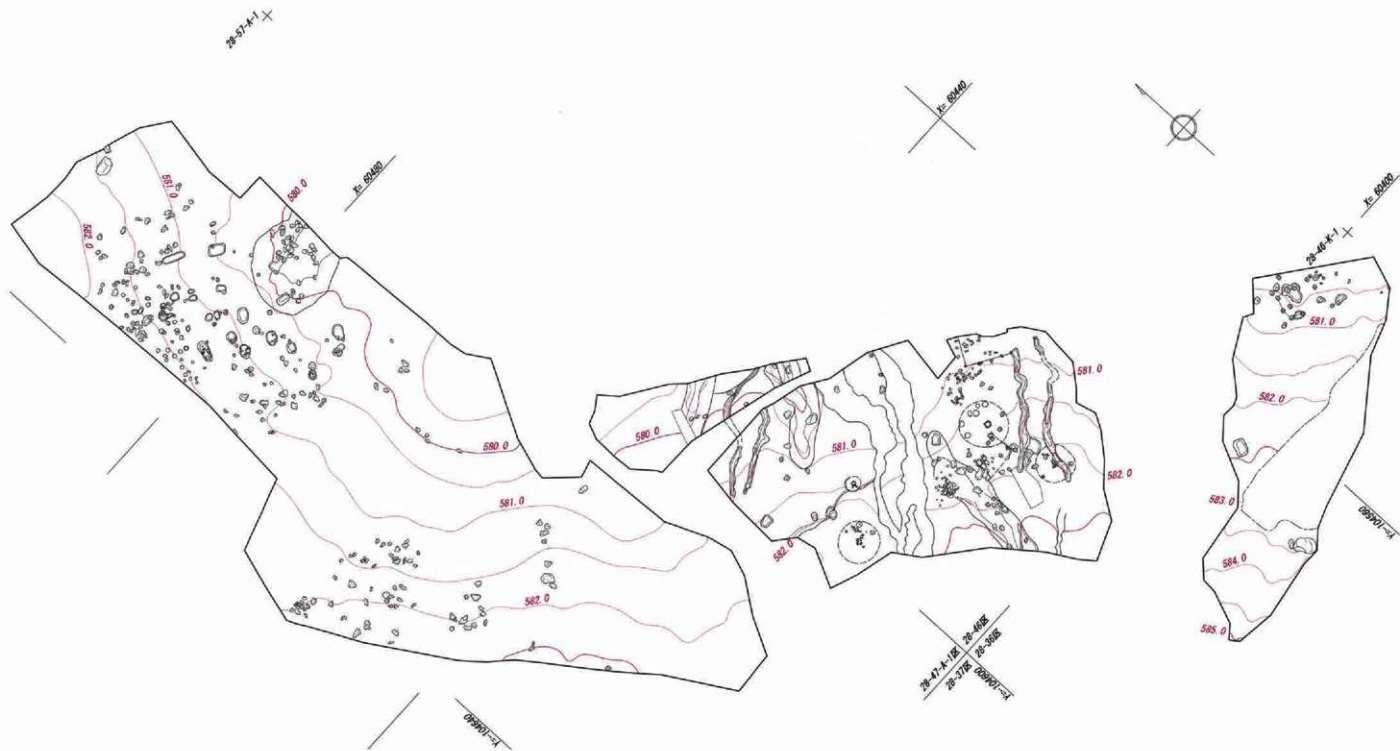
47区から検出された遺構は、縄文時代の土坑80基、水場遺構1基である。調査区内には小規模な埋没谷が数条あり、その埋没土が遺物包含層となっている。最も北側の谷では、縄文時代前期から中期にかけての土器や石器を包含し、土坑79基がここで検出されている。これらの土坑は、小規模で遺物を伴わないものがほとんどであり、その時期・性格ともに判然としないが、縄文時代前期から中期に属するものが多く見られる。

この埋没谷の下流にあたる部分から、縄文時代の水場と考えられる遺構が検出されている。

写真1



西久保I遺跡 調査風景



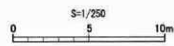
第44图 Y D3-02西久保 I 遺跡全体图



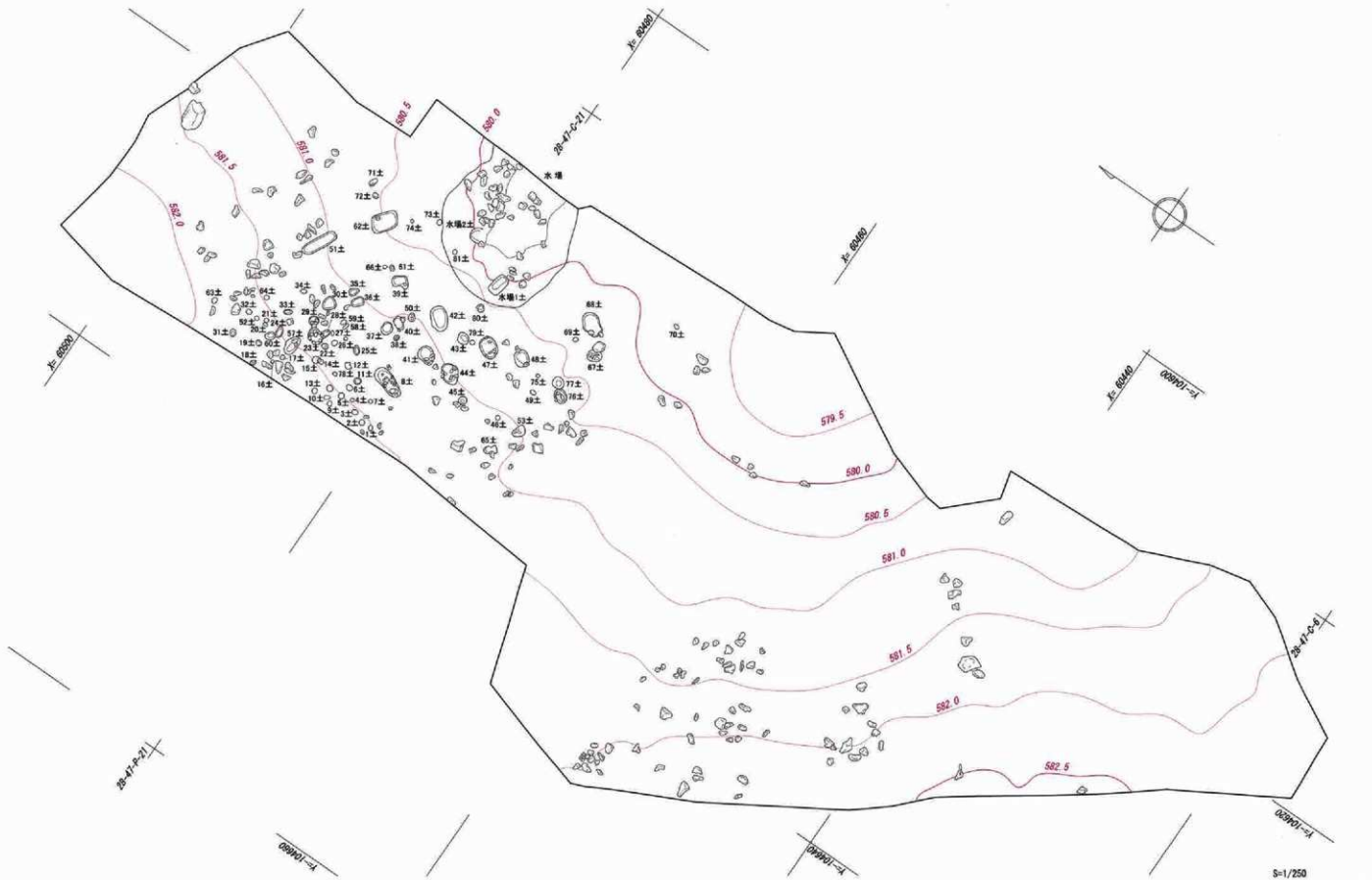




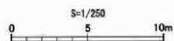
第45図 YD3-02西久保I遺跡36・46区







第46図 YD3-02西久保I遺跡47・57区





## 第4節 検出された遺構と遺物

## (1) 住居

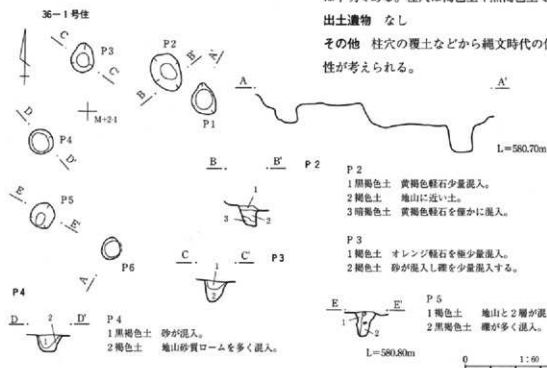
## 36-1号住居

位置 36L-25 PL 17

形態 掘り方での、柱穴のみの確認となったため、形態は不明である。

規模 不明

主軸方位 不明



第47図 西久保I遺跡36-1号住居

## 46-1号住居

位置 46T-2 PL 18

形態 炉と埋壺、柱穴の配置などから円形に近い平面形を呈すると思われる。

規模 不明

主軸方位 N-6°-W

内部施設 住居内からいくつかの土坑が検出されたが、埋没土などから2基を住居の柱穴と認定した。柱痕は確認できなかった。

確認最大壁高及び壁の状況 確認できず。

床面の状況 炉及び埋壺の周囲に数枚の敷石が確認

内部施設 配置から6基のピットを住居柱穴と認定した。住居の周囲を半分ほど回ると考えられる。住居の東側は旧河道により破壊されており確認できなかった。なお、ピットから柱痕は確認できなかった。

確認最大壁高及び壁の状況 不明

床面の状況及び床下施設等 不明

炉 不明

重複 36-4号土坑。時期差不明。

埋没状態 掘り方での確認のため、住居の埋没状況は不明である。柱穴は褐色土や黒褐色土で埋没する。

出土遺物 なし

その他 柱穴の覆土などから縄文時代の住居の可能性が考えられる。

できる。残存状況が悪く、床面の範囲は不明である。炉 住居範囲内から、石囲炉が検出された。東辺は2号溝によって破壊されており確認できない。その他の3辺も所々石が抜かれていると思われる。残存状況からは、15cmほどの角礫を数個並べて石囲いとしている様子が看取できる。炉の中央と思われる部分には1個体の土器が斜位で埋設されている。土器は天地が見られず、環状の胴部のみが検出された。

埋壺 炉から1m程北側の位置に深鉢が埋設されていた。据え方は正位で、ほぼ完形である。

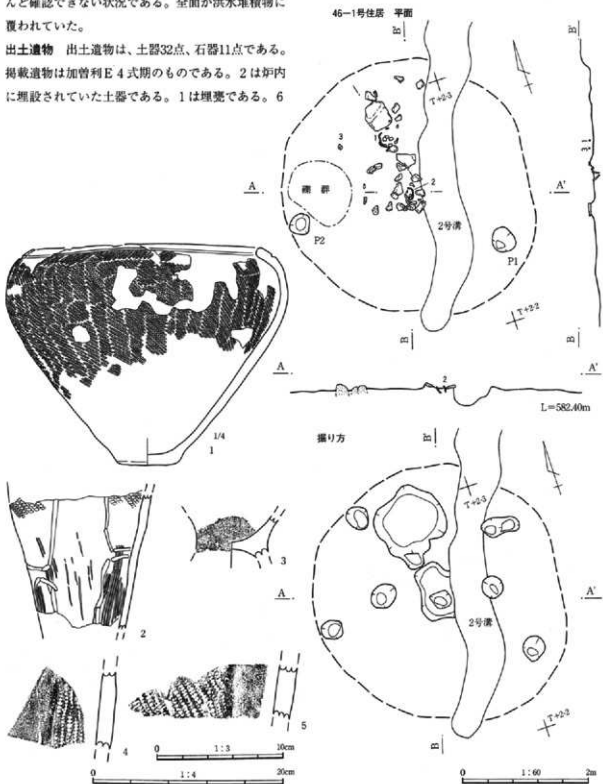
**重複** 2号溝より古い。

**埋没状態** 沢の氾濫原に近いことや、46-2号溝に切られていることなどから、住居壁及び床面はほとんど確認できない状況である。全面が洪水堆積物に覆われていた。

**出土遺物** 出土遺物は、土器32点、石器11点である。掲載遺物は加曾利E4式期のものである。2は炉内に埋設されていた土器である。1は埋寛である。6

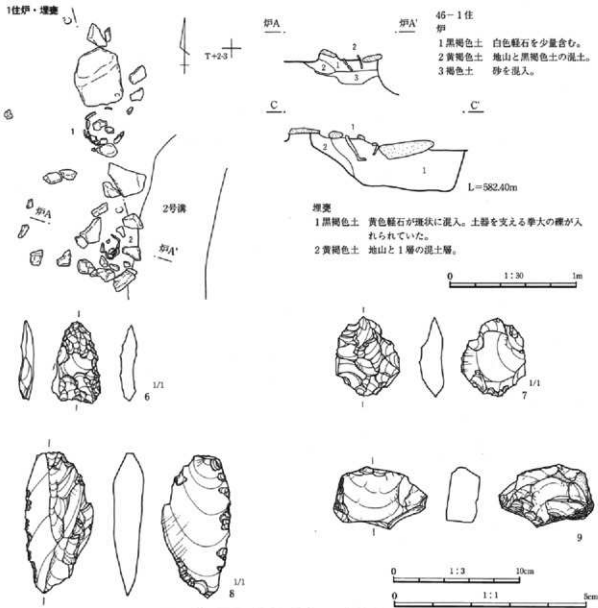
～9は石器である。遺物は、炉及び埋寛の周囲に集中する。(遺物観察表107頁)

その他 縄文時代中期後半、加曾利E4式期



第48図 西久保I遺跡46-1号住居 (1)

第4節 検出された遺構と遺跡



第49図 西久保I遺跡46-1号住居 (2)

46-2号住居

位置 46U-4 PL 19

形態 東に流れる沢の氾濫原に位置するため、壁及び床面は、ほとんど破壊されていた。残存する床面及び炉、柱穴の状況から考えると、円形もしくは隅九方形の平面形状を呈すると思われる。

規模 不明

主軸方位 N-15°-E

内部施設 住居内より土坑を10基検出した。そのうち8基を位置などから考えて柱穴と認定した。P9

のみ、他の柱穴と間隔が異なる。炉の中心から最も近いもので1.3m、遠いもので2.1mの位置にある。柱痕は確認できない。

確認最大壁高及び壁の状況 25cm。南壁の一部のみ残存する。

床面の状況 炉周辺及び、南壁付近に部分的に敷石が確認できる。場所によって、規則的に並んだ小円礫が確認できる。この事は、いくつかの敷石が人為的に抜き取られ、敷石間に詰められていた小円礫のみが残された状況を示していると思われる。敷石の

直上には炭化物が多く付着し、焼失住居の可能性も考えられる。

**炉** 住居想定範囲のほぼ中央から石囲炉が検出された。厚さ6～12cmの板状の礫を用いて構築されている。掘り方や焼土の状況から南辺にも本来は同様の石が設置されていたと思われる。炉内からは炭化物の小破片や骨片が多く出土している。炭化物は種実同定の結果（第12章、第4節）、オニグルミ核とミズキ核と同定された。また、同定には至らなかったがトチノキの炭化種子と思われるものが確認されている。これらの種実の炭化物は、炉の使用面の直上より検出されている。

**埋藏** なし。ただし、住居内で見つかった土坑のうちP9は位置などから考えて埋蔵の役割を果たしていた土坑である可能性も考えられる。

**重複** 3号住居より新しい。

**埋没状況** 埋没土は、褐色土と黒褐色土主体でレンズ状に堆積する。この上を厚さ21cm程の洪水層が覆っている。樹木の根がこの層を突き破って一部で床面まで到達している。黒褐色土層下部にあたる床の直上には炭化物が多く含まれている。炭化物は炉より南側に多く広がる。

**出土遺物** 検出されたのは土器52点、石器17点である。ほとんどの土器が、加曾利E4式期のものである。3の須恵器は、樹木の根の擾乱による混入物と考えられる。出土状態は、敷石が残存している部分と炉の周囲から集中した出土が見られる。

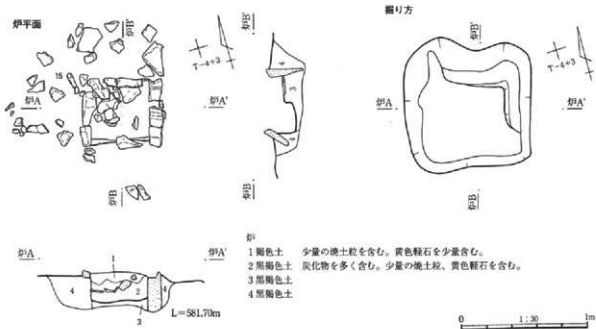
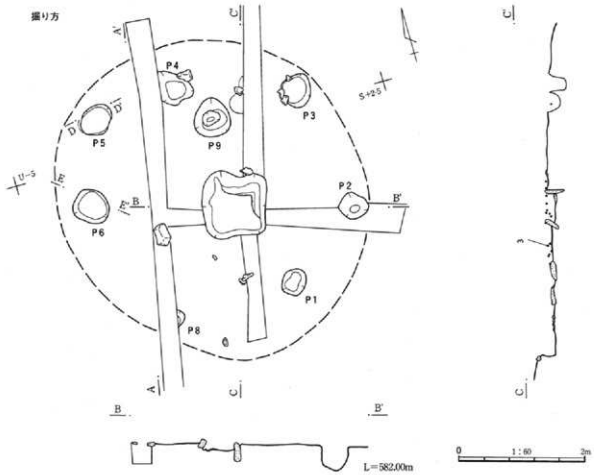
（遺物観察表107頁）

**その他** 縄文時代中期後半、加曾利E4式期

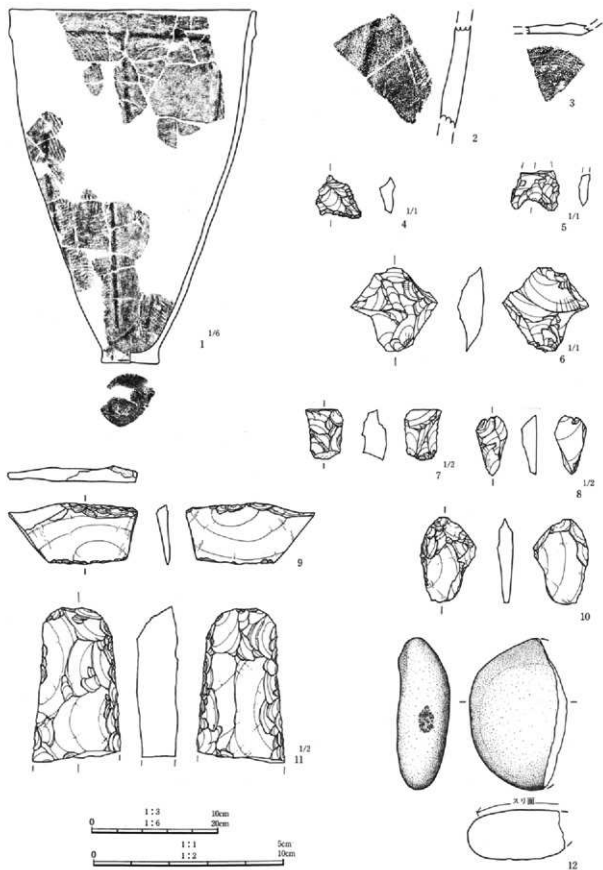


第50図 西久保I遺跡46-2号住居(1)

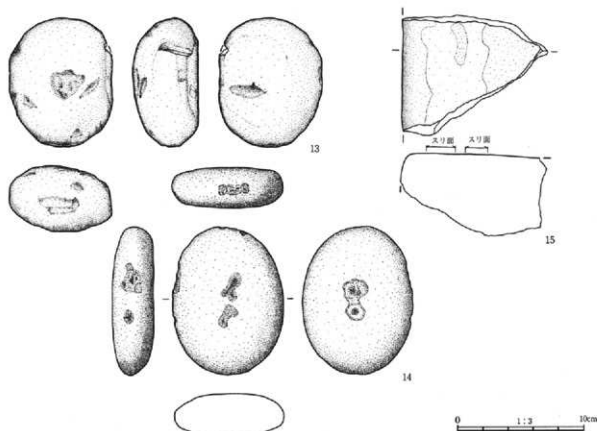




第51図 西久保 I 遺跡46-2号住居 (2)



第52図 西久保I遺跡46-2号住居(3)



第53図 西久保I遺跡46-2号住居(4)

## 46-3号住居

位置 46V-4 PL 20

**形態** 確認できるのは、南東壁隅の部分のみである。形状の確認できる南東隅が丸みを持ってほぼ直角に屈曲するため、隅九方形に近い平面形状ではないかと考えられる。

**規模** 不明**主軸方位** 不明

**内部施設** 内部から検出した3基の土坑を柱穴と認定した。柱痕は確認できない。

**確認最大壁高及び壁の状況** 31cm。南東隅部分のみ残存する。

**床面の状況** 床面の範囲は不明であるが、南東及び南西隅と思われる部分に敷石が確認できる。場所によって、規則的に並んだ小円礫が確認できる。これは、いくつかの敷石が人為的に抜き取られ、敷石間に詰められた小円礫のみが残された状況を示していると思われる。南東部と比較すると、南西部の敷石

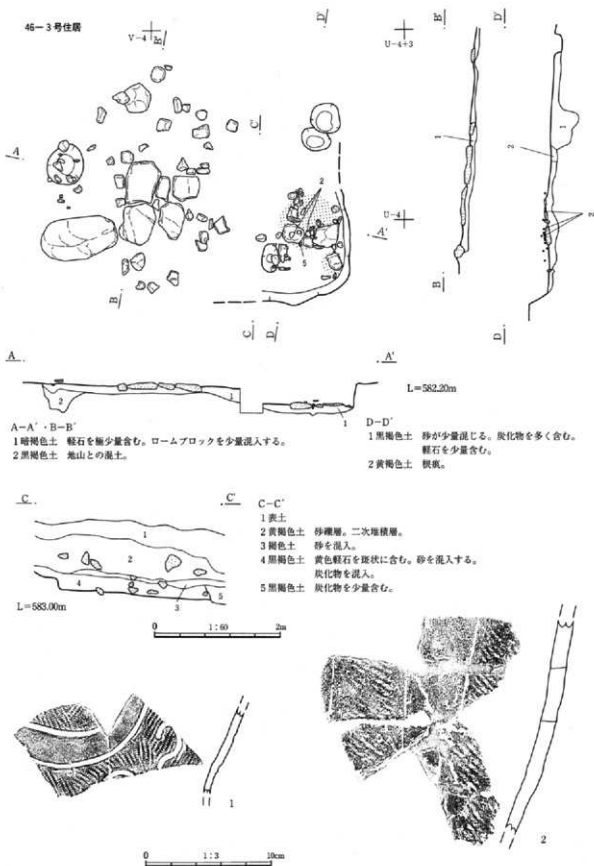
は1点ずつが大きく、上面が平坦な山石や川原石が素材となっている。南東部の敷石周辺の床直上からは炭化物の小片が集中して検出された。これらの炭化物は分析の結果(第12章、第4節)、同定には至らなかったがトチノキの炭化種子と思われるものが確認されている。

**炉** 確認できない**埋壘** 確認できない**重複** 2号住居より古い。

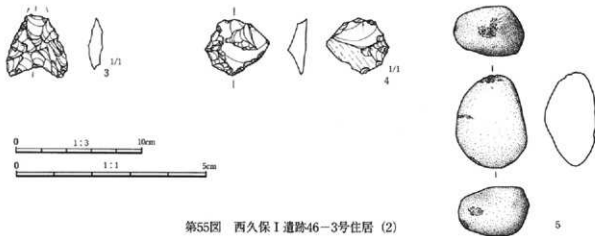
**埋没状況** 埋没土は、褐色土と黒褐色土主体である。この上を厚さ55cm程の洪水層が覆っている。南東部の床直上には炭化物が非常に多く含まれる。

**出土遺物** 検出されたのは土器91点、石器3点である。ほとんどの土器が、加曾利E4式期のものである。出土状態は、住居南東部の敷石周辺から集中した出土が見られる。

**その他** 縄文時代中期後半、加曾利E4式期(遺物観察表107頁)



第54図 西久保I遺跡46-3号住居(1)



第55図 西久保 I 遺跡46-3号住居 (2)

## 46-5号住居

位置 46Y-5 PL 21

形態 確認できる床の一部などから円形の平面形状を呈すると思われる。

規模 不明

主軸方位 N-30°-E

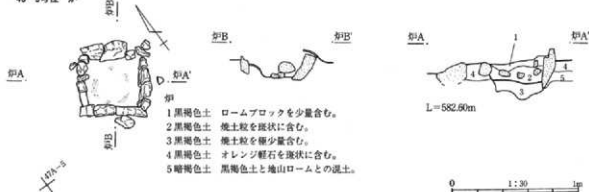
内部施設 住居内より6基の土坑が検出され、そのうち、2本を柱穴と認定した。P1は炉の中心から1.9m、P2は1.7m程離れた位置に存在する。柱痕は確認できなかった。

確認最大壁高及び壁の状況 不明

床面の状況 調査時の削平及び洪水による土石の流入により、壁面及び床面のほとんどが破壊され確認することができない。炉の周辺部のみ確認ができる状態である。炉の北東部周辺には平らに敷かれた敷石らしきものが数枚見られる。

炉 住居推定範囲のほぼ中央から石圍炉が検出され

46-5号住居 炉



第56図 西久保 I 遺跡46-5号住居 (1)

た。炉の周囲のみ残存状態がよい。炉壁に使用された石の頭頂部は破損しており、破片は炉内より検出されている。また、凹石が炉の使用面の直上より検出されている。これらのことから、炉の破壊及び炉内への遺物の投げ込みが人為的に行われたものではないかと考えられる。

埋藏 なし

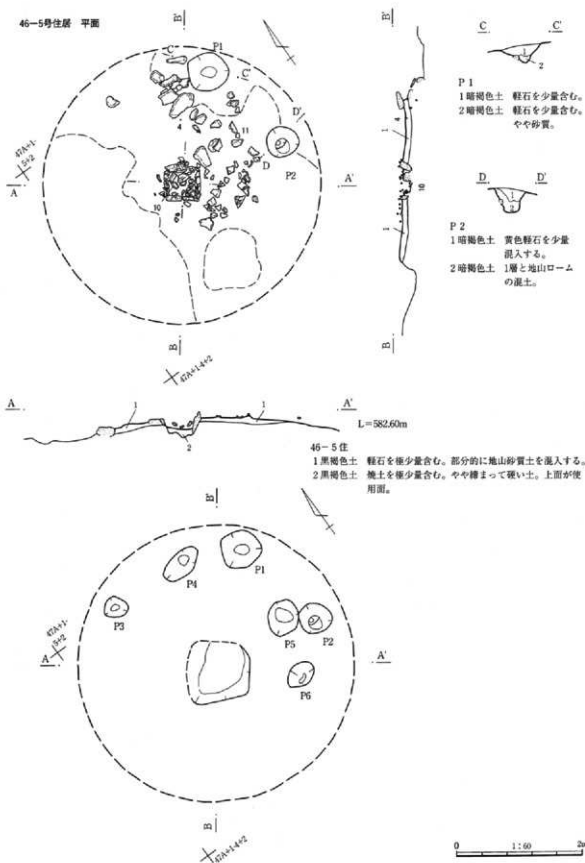
重複 なし

埋没状況 洪水に伴うと思われる堆積物で埋没している。

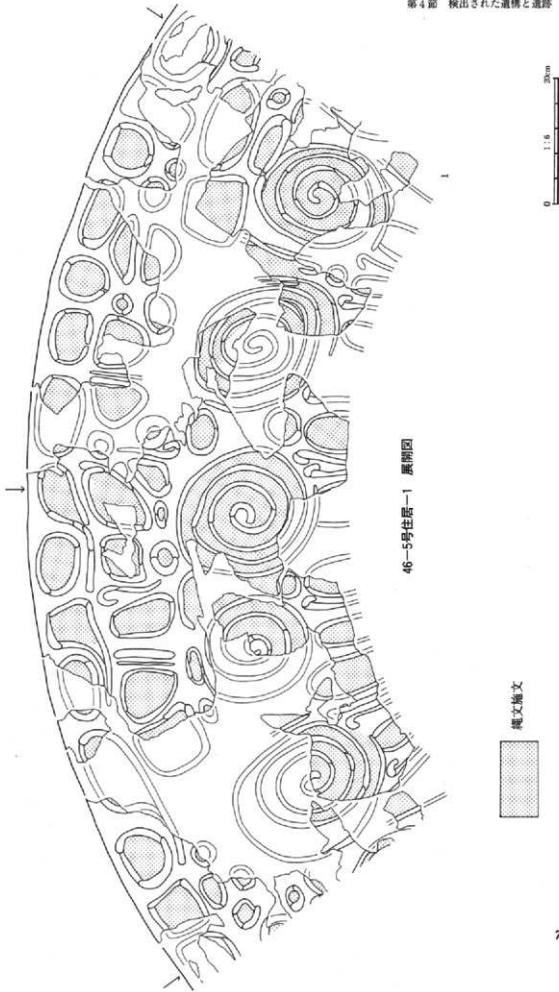
出土遺物 検出されたのは土器1点、石器17点である。土器は加曾利E3式期のものである。出土状態は、炉の周囲から集中した出土が見られる。土器片は1個体のものが炉の周囲に飛び散っており、意図的に土器を廃棄、もしくは設置した可能性が考えられる。(遺物観察表108頁)

その他 縄文時代中期後半、加曾利E3式期

46-5号住居 平面



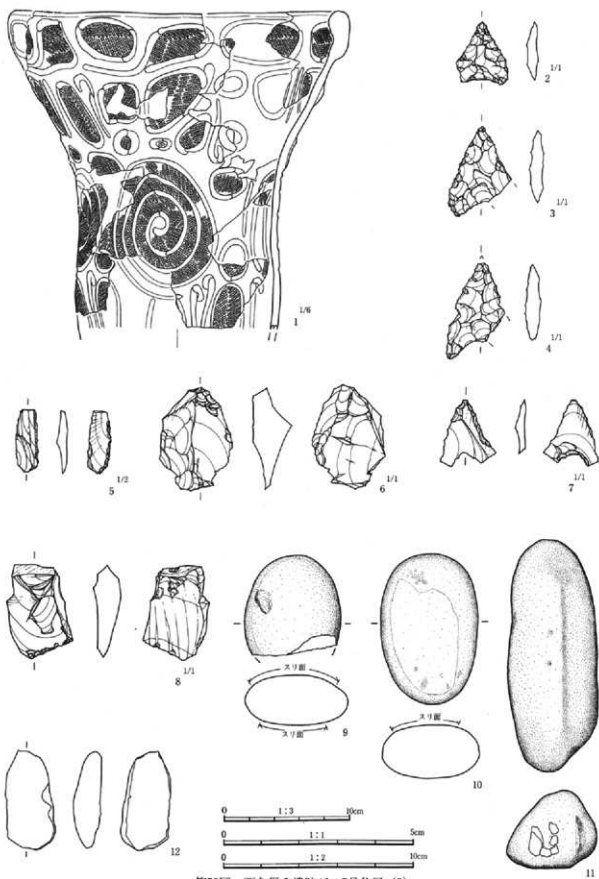
第57図 西久保I遺跡46-5号住居(2)



46-5号住居-1 展開図

第58図 西久保I遺跡46-5号住居 No.1土器展開図

縄文施文



第59図 西久保I遺跡46-5号住居(3)



## 46-6号住居

位置 46W-4 PL 22

形態 不明

規模 不明

主軸方位 不明

内部施設 不明

確認最大壁高及び壁の状況 不明

床面の状況 住居壁は全く確認できず、敷石と思われる床面が一部で確認されたのみであり、範囲は不明である。敷石には厚さ約4cmほどの板状の礫（鉄平石）が主に使われており、他に平らな山石や川原石なども使用されている。

炉 不明

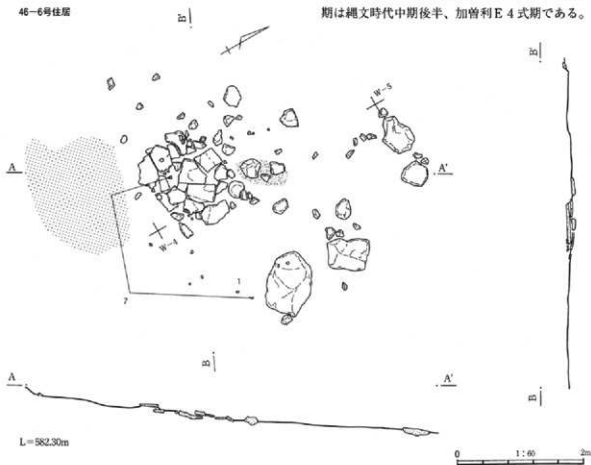
埋塞 不明

重複 なし

埋没状況 洪水層により埋没する。また、遺構は埋没谷の埋没土上部に構築されている。

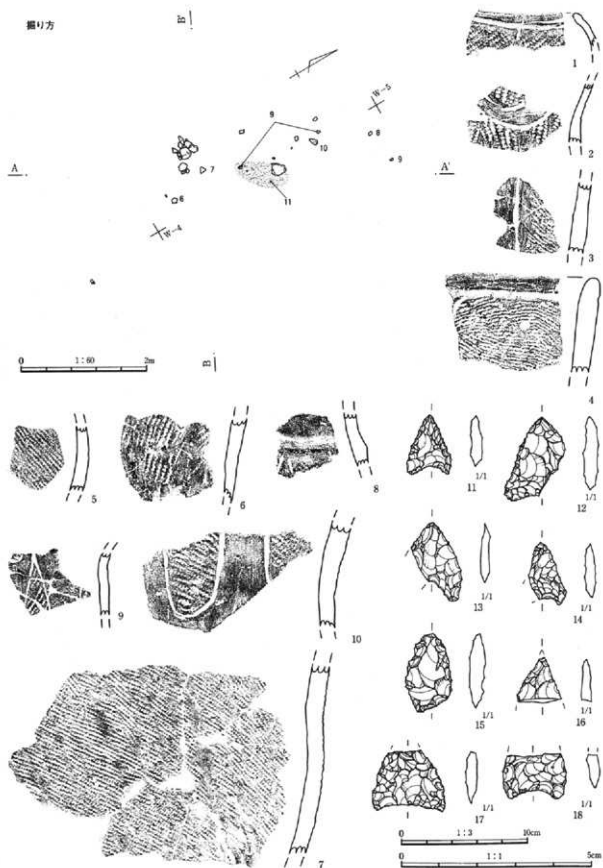
出土遺物 検出されたのは土器131点、石器22点である。ほとんどの土器が小破片で、加曾利E4式期のものである。石器は石鏃が多く、周囲には黒曜石のものを中心に小剥片が非常に多く飛び散っている。出土状態は、敷石周辺から集中した出土が見られる（遺物観察表108頁）。

その他 住居壁が全く検出できないことや、炉、埋塞、柱穴が検出されないことなどから住居とは別の目的で作られた遺構である可能性も考えられる。また、石器及び剥片の検出状況から、石器の加工をこの場所で行っていた可能性が考えられる。また、敷石上面よりも、敷石下部の埋没谷覆土中からの小石器製品や小剥片の出土の方が非常に多い。そのため、敷石が敷かれる以前から、この付近で継続的に石器の加工を行っていた可能性も考えられる。遺構の時期は縄文時代中期後半、加曾利E4式期である。

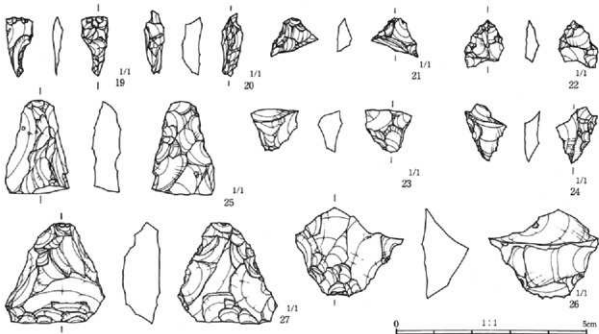


第60図 西久保 I 遺跡46-6号住居 (1)

掘り方



第61図 西久保I遺跡46-6号住居(2)



第62図 西久保 I 遺跡46-6号住居 (3)

(2) 礎石建物

46-1号礎石建物

位置 46S-5 PL 22

形態 直線的に伸びる5つの礎石が確認できる。現水路及び現道に切れられ、南側の一部のみ残存していると思われる。

規模 梁行4間(礎石1~礎石5)5.0m、桁行不明。  
礎石間1.40~0.98m。

標軸方位 N-58°-W

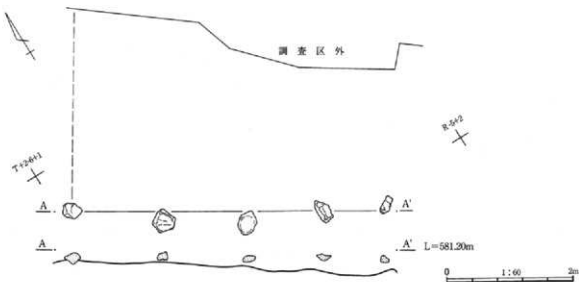
床面の状況 検出できず。

重複 1号溝より古い。

埋没状況 洪水層下より検出されたが、縄文の包含層を覆う洪水層に相当するかは不明である。

出土遺物 なし

その他 時期不明



第63図 西久保 I 遺跡46-1号礎石建物

## (3) 土坑・ピット

## ①土坑

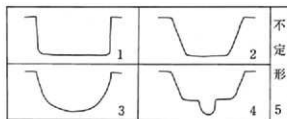
本遺跡では合計101基の土坑が検出されている。これらの土坑は、遺跡の北部と南部に集中して検出されている。これらの土坑の構築時期の確認については、遺物が検出されているものが12基のみであること、基準となる土層が見られないことなどから、非常に困難なものとなっている。土坑の用途についても確認が難しい状況である。そこで、それぞれの土坑の形状を分類することで、用途を考察する為の資料とすることとした。これらの各土坑の形状類型・時期・計測値・グリッド・重複については、付録4遺構一覧表に示した。参照していただきたい。

## ②土坑形状の類型について

平面形状はA～Eの5類型に分類した。

- A 円形（長軸 $\leq$ 短軸 $\times 1.2$ ）を呈するもの。
- B 楕円形（長軸 $>$ 短軸 $\times 1.2$ ）を呈するもの。
- C 隅丸方形を呈するもの。
- D 隅丸長方形を呈するもの。
- E 上記の分類に属さないもの。

断面形状は、1～5の5類型の分類をおこなった。第64図に模式図を示したので参照していただきたい。



第64図 土坑断面形状模式図

上記の平面形状と断面形状を組み合わせると、25通りの類型が存在することになる。しかし、実際にはすべての類型が確認されているわけではない。確認できたのは、19類型で、B4、C1、C3、C4、D4、E4類型は確認されていない。確認されたもののうち、A類型の平面形状が円形を呈するものが最も多く、全体の49%を占める。次に多いものがB

類型の楕円形とE類型の不定形で共に23%を占めている。それ以外の類型の割合は、10%以下となっている。47区に多くの土坑が集中するが、平面形の小さい、ピット状の土坑が大半を占める。これらについては、柱状に並ぶものがないため、用途は不明となっている。

以下に、遺物が検出されたもの、それぞれの分類の代表的なものや特徴的なもの等を中心に、内容を記載する。

## 36-1号土坑

位置 36Q-24 PL 23

隅丸長方形の平面形状を呈し、D2類系に分類される。底面には拳大の礫が集中しているが、中央や南寄りには円形状に礫のない場所が存在する。礫を除くと底面はほぼ平坦である。壁面は、やや開きながら上方に立ち上がる。埋没土は暗褐色土の単一層で、砂や礫が多く混入している。

覆土から遺構の時期は近現代であろうと思われる。

36-1号土坑



A A'

36-1土

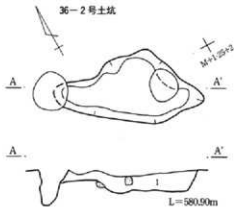
1暗褐色土 砂質土、礫を混入する。

L=582.70m



第65図 西久保I遺跡36-1号土坑

第4節 検出された遺構と遺跡

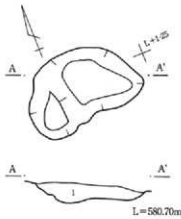


36-2土  
1 暗褐色土 黄褐色軽石僅かに混入。小礫少量混入。



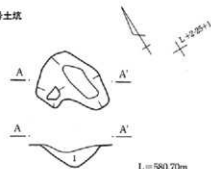
36-4土  
1 黒褐色土 黄褐色軽石少量混入。礫僅かに混入。  
2 褐色土 黒褐色土を混入。

36-3号土坑



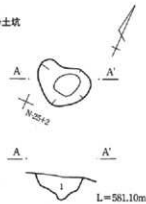
36-3土  
1 黒褐色土 黄褐色軽石少量混入。小礫僅かに混入。

36-8号土坑



36-8土  
1 黒褐色土 黄褐色軽石僅かに混入。礫層下部に少し混入。

36-6号土坑



36-6土  
1 黒褐色土 砂が混入。軽石少量含む。



第66図 西久保I遺跡36-2・3・4・6・8号土坑

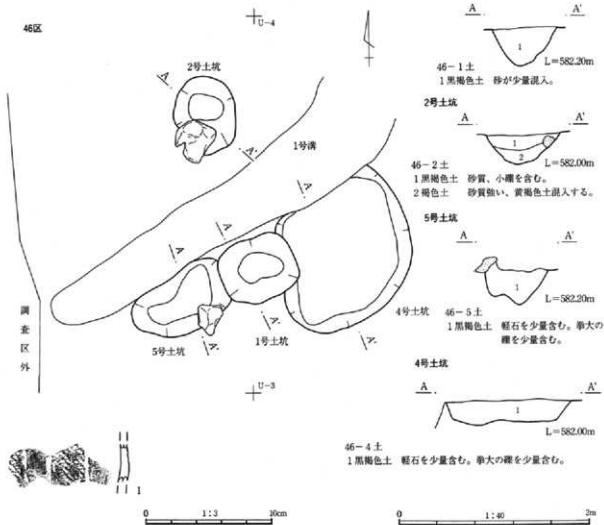
46-4号土坑

位置 46T-3 PL 24

隅丸長方形の平面形状を呈し、C2類型に分類される。底面はほぼ平坦である。壁面は、やや開きながら上方に立ち上がる。埋没土は黒褐色土の単一層で、軽石と拳大の礫を少量含む。やや締まって粘性のある土である。

遺物は覆土中より2点の縄文土器が出土しており、2点は接合する。遺構は遺物や覆土から縄文期に比定されると考えられる。

46-1溝、46-1土と重複し、こちらの方が古い。(遺物観察表109頁)



第67図 西久保I遺跡46-1・2・4・5号土坑

46-8号土坑

位置 46X-6 PL 24

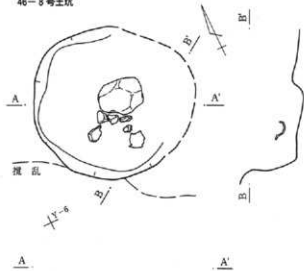
トレンチにより東側1/3程が削平されているが、ほぼ円形の平面形状を呈すると思われる。A2類型に分類される。底面はほぼ平坦である。底面中央には、長さ48cm、幅35cm程の礫が存在する。この礫は、底面の直上にある事や埋没土の状況から考え、

構築時に据えられた可能性が高い。壁面は、近年の土地造成により、傾斜下部にあたる東側部分が大きく削られてしまっている。南壁は、やや開きながら上方に立ち上がっている。埋没土は、褐色土主体である。地山である砂質土との混土で、人為埋土の可能性が高い。

出土遺物は、縄文土器1点である。縄文時代中期中葉、勝坂式期（猪沢期平行）の土器で、1/2程残存した1個体である。横位の状態で検出されており、左半分が残存している。右半分は、前出の造成の際に破壊されたものと考えられる。覆土中から土器は検出されていない。この1個体の残存状態がよいことと併せて考えると、この土器は構築時に埋められた可能性が高いと思われる。

遺構の時期は、縄文時代中期中葉、勝坂式期（猪沢期平行）。（遺物観察表109頁）

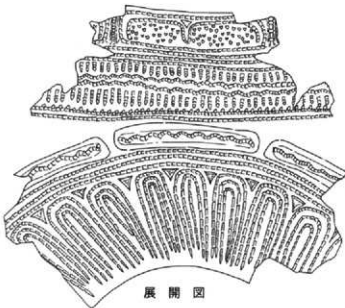
46-8号土坑



46-8土

- 1 褐色土 地山ロームを少量含む。
- 2 黄褐色土 地山を多く含む。砂質も強い。

0 1:40 2m



展開図

0 1:3 10cm

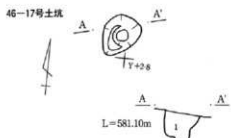
第68図 西久保I遺跡46-8号土坑

46-17号土坑

位置 46 Y-8 P L 25

不定形の平面形状を呈し、E5類型に分類される。底面は2段で、中央は円形に5cm程深く掘り込まれている。壁面西壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁は、中央位置からV字形に広がりながら上方に立ち上がる。形状から、ピットの可能性も考えられる。埋没土は褐色土の単一層である。

遺構の時期は、埋没土から縄文期のものと考えられる。



46-15号土坑

46-17土  
1 褐色土 黄白色軽石多く混入、黒褐色土混入。



46-15土  
1 暗褐色土 小礫混入。  
L=581.40m

46-18号土坑

位置 46 M-1 P L 25

ほぼ円形の平面形状を呈し、A4類型に分類される。底面には礫が集中し、礫のない部分はほぼ平坦である。壁は中位にテラスを持って上方に垂直に立ち上がる。埋没土は、暗褐色土の単一層である。遺構の時期は不明である。

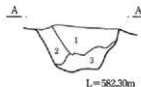
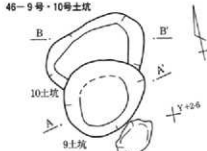
46-18号土坑

46-18土  
1 暗褐色土 砂が少量混入する。



L=580.40m

46-9号・10号土坑



46-9土  
1 暗褐色土 黄色軽石を斑状に含む。  
2 黒褐色土 やや砂質。  
3 暗褐色土 砂質強い、軽石を含まない。

L=582.30m



L=582.00m



46-11号・12号土坑

12土坑  
46-12土  
1 暗褐色土 黒褐色土混入、黄白色軽石混入。



46-11土  
1 暗褐色土 黒褐色土、黄白色軽石混入。  
L=581.00m

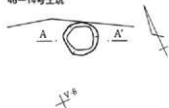


L=581.00m

第69図 西久保I遺跡46-9・10・11・12・15・17・18号土坑



46-14号土坑



46-14土  
1 暗褐色土 黒褐色土混入、黄白色軽石混入。  
2 黒褐色土 黄白色軽石少量混入。

47-8号土坑

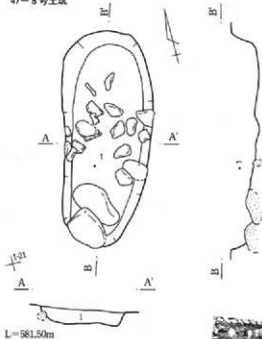
位置 47H-21 PL 26

楕円形の平面形状を呈し、B2類型に分類される。底部には多くの礫が混入する。この礫を取り除くと、底面となる。底面の南半には、地山に食い込んだ礫が多数見られる。底面は礫による凹凸はあるが、概ね平坦である。壁面は、逆台形状に開きながら上方に立ち上がる。埋没土は、黒褐色土主体の単一層である。

出土遺物は、縄文時代中期勝坂式の土器1点が検出されている。遺構の時期については、遺物との関連が明確でないため、不明である。

(遺物観察表109頁)

47-8号土坑



L=581.50m

47-8土

1 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。  
黄色軽石を少量含む。

47-36号土坑

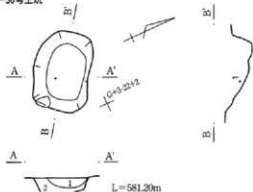
位置 47G-22 PL 30

隅丸長方形の平面形状を呈し、D5類型に分類される。底面は凹凸を持ち、長軸方向東に傾斜している。長軸方向西側には、地山に少量の礫が含まれる。壁面は不規則な凹凸を持って立ち上がる。埋没土は、黒色土と暗褐色土で、レンズ状に堆積している。

出土遺物は、縄文時代中期勝坂式の土器1点が検出されている。遺構の時期については、遺物との関連が明確でないため、不明である。

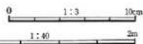
(遺物観察表109頁)

47-36号土坑



47-36土

1 黒色土  
2 暗褐色土 白色粒を多く含む。



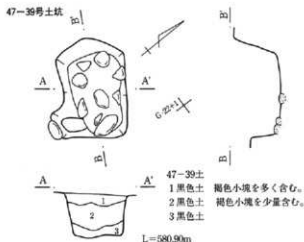
第70図 西久保I遺跡46-14・46-8・36号土坑

47-39号土坑

位置 47G-21 PL -

5角形の不定形の平面形状を呈し、E1類型に分類される。平面形状としては、47-41号土坑に類似する。底部には礫が多く混入するが、底面はほぼ平坦である。埋没土は黒色土主体で、ほぼレンズ状に堆積する。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺構の正確な時期は不明であるが、埋没土は新しいものと考えられるため、中近世以降に比定されるものと考えられる。

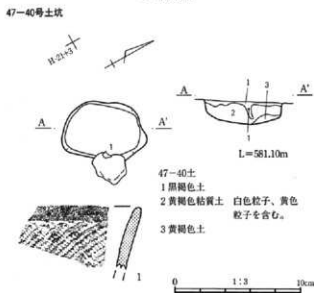


47-40号土坑

位置 47G-21 PL 30

隅丸長方形の平面形状を呈し、D1類型に分類される。底面は、緩やかな輪状に屈曲する。壁面は、ほぼ垂直に上方に立ち上がる。底面及び壁面には凹凸が少ない。埋没土は、黒褐色土と黄褐色土である。上層の黒褐色土は断面の様子から、根攪乱の可能性が考えられる。

出土遺物は、縄文時代前期黒浜式の土器1点が検出されている。遺物は覆土上層からの出土であるため、遺構の時期は特定できない。(遺物観察表109頁)

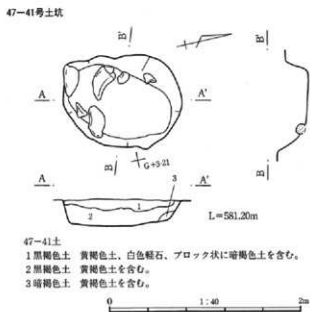


47-41号土坑

位置 47G-20 PL 30

5角形の不定形の平面形状を呈し、E1類型に分類される。平面形状としては、47-39号土坑に類似する。底部南側には地山のものと思われる礫が多く混入する。底面は東側にわずかに傾斜する。底面及び壁面には凹凸が少ない。埋没土は黒褐色土と暗褐色土で、ほぼレンズ状に堆積する。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺構の時期は不明である。



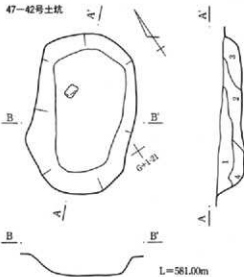
第71図 西久保I遺跡47-39・40・41号土坑

## 47-42号土坑

位置 47G-20 PL 30

隅丸長方形の平面形状を呈し、D2類型に分類される。凹凸はあるが、底面はほぼ平らである。壁面は、やや開きながら立ち上がる。埋没土は、黒色土でやや偏るがレンズ状に堆積する。

遺構の正確な時期は不明であるが、埋没土から中近世以降に比定されるものと考えられる。



## 47-42土

- 1 黒色土 黄褐色粒子を含む。
- 2 黒色土 黄褐色粒子を多く含む。
- 3 黒色土 黄褐色粒子、白色軽石含む。
- 4 黒色土 黄褐色土塊を含み黄褐色粒子を多く含む。



## 47-48号土坑

位置 47F-19 PL 31

柵円形の平面形状を呈し、B3類型に分類される。底面は南東に向かって傾斜する。壁面はやや開きながら上方に立ち上がる。埋没土は、黒褐色土と暗褐色土でほぼレンズ状に堆積している。

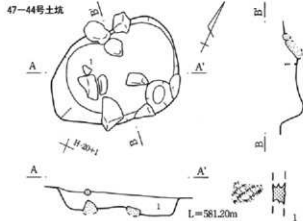
出土遺物は縄文土器1点で、縄文時代中期のものである。遺構の時期は、遺物との関連が明確でないため不明である。(遺物観察表109頁)

## 47-44号土坑

位置 47G-20 PL 30

隅丸方形の平面形状を呈し、C5類型に分類される。底面は中央が盛り上がった、W字状の形状を呈する。壁面は、やや開きながら立ち上がる。東壁際の底面には、円形のビット状の掘り込みが見られる。重複する遺構とも考えられるが、詳細は不明である。埋没土は、黒褐色土の単一層である。

出土遺物は縄文土器1点と礫石器1点である。土器は縄文時代前期花積下層式期に比定される。遺構の時期については、出土遺物との関連が明確でないため不明である。(遺物観察表109頁)



## 47-44土

- 1 黒褐色土 黄褐色粒子、白色粒子を含む。

## 47-48号土坑



## 47-48土

- 1 黒褐色土 黄褐色土を含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒子を含む。

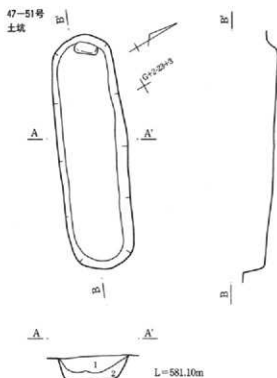
第72図 西久保I遺跡47-42・44・48号土坑

47-51号土坑

位置 47G-23 PL 31

楕円形の平面形状を呈し、B2類型に分類される。底面はほぼ平坦である。壁面は、やや開きながら上方に立ち上がる。埋没土は、黒色土と黒褐色土でほぼレンズ状に堆積する。

遺構の正確な時期は不明であるが、埋没土から中近世以降に比定されるものと考えられる。



47-51土

- 1 黒色土 白色粒子、白色軽石を含む。
- 2 黒褐色土 白色粒子、黄色粒子を含む。

47-58号土坑

位置 47H-22 PL 32

隅丸長方形の平面形状を呈し、D1類型に分類される。底面は東に傾斜している。壁面は、垂直に立ち上がる。平面規模に較べると、深さがある形状である。pitの可能性も考えられる。埋没土は、黒褐色土と暗褐色土である。

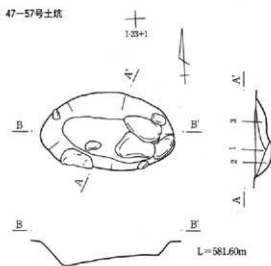
遺構の時期は不明である。

47-57号土坑

位置 47H-22 PL 32

楕円形の平面形状を呈し、B3類型に分類される。底部には西側の一部を除き、礫が多く混入する。この礫は、地山まで食い込んでおり、底面の凹凸は大きい。壁面は、やや開きながら立ち上がる。埋没土は、暗褐色土と黒褐色土である。

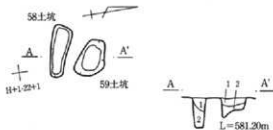
遺構の時期は不明である。



47-57土

- 1 暗褐色土 黄色軽石やや多い。
- 2 黒褐色土 黄色軽石少ない。
- 3 暗褐色土 黄褐色土ブロックをやや多く含む。

47-58・59号土坑



47-58土

- 1 黒褐色土 黄色軽石をやや多く含む。
- 2 暗褐色土 黄色軽石を少量含む。

47-59土

- 1 黒褐色土 黄色軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 黄色軽石を少量含む。



第73図 西久保I遺跡47-51・57・58・59号土坑

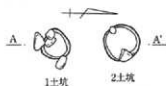
47-83号土坑

位置 47A-7 PL 34

不定形の平面形状を呈し、E 2 類型に分類される。平面形状は、隅丸方形に近い。底面は東に向かって傾斜している。壁面は、やや開きながら立ち上がるが、西壁の向きは東よりやや大きい。埋没土は、黒褐色土、灰褐色土、黄褐色土である。

遺構の正確な時期は不明であるが、埋没土から縄文期以前のものではないと考えられる。

47-1・2号土坑



1土坑

2土坑



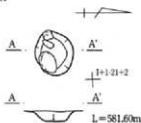
47-1土

1 黒色土 黄色軽石を少量含む。褐色土ブロックを少量含む。

47-2土

1 黒褐色土 黄色軽石を含む。褐色土ブロックを少量含む。

47-3号土坑



47-3土

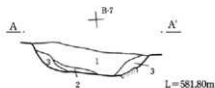
1 黒褐色土 黄色軽石をやや多く含む。

47-4号土坑



第74図 西久保 I 遺跡47-1・2・3・4・5・6・7・83号土坑

47-83号土坑



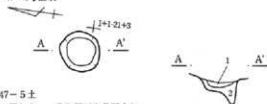
47-83土

1 黒褐色土 黄色軽石が多く混入。

2 灰褐色土

3 黄褐色土 黒褐色土混入。黄色軽石が少量混入。

47-5号土坑

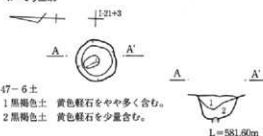


47-5土

1 黒色土 黄色軽石を若干含む。

2 黒褐色土 黄色軽石を中程度含む。

47-6号土坑

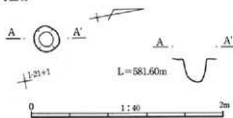


47-6土

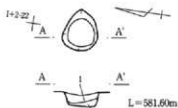
1 黒褐色土 黄色軽石をやや多く含む。

2 黒褐色土 黄色軽石を少量含む。

47-7号土坑

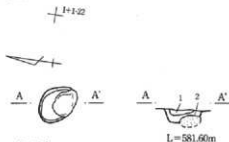


47-9号土坑



- 47-9土  
1 黒褐色土 黄色軽石を中程度含む。炭化物を極微量含む。  
2 暗褐色土 黄色軽石を少量含む。

47-10号土坑



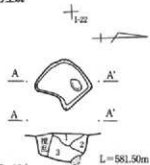
- 47-10土  
1 黒褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。黄色軽石を含む。  
2 暗褐色土 黄色軽石を少量含む。

47-11号土坑



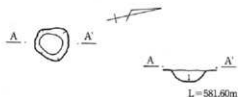
- 47-11土  
1 黒褐色土 黄色軽石を含む。  
2 黒褐色土 黄色軽石を多く含む。  
3 暗褐色土 黄色軽石を少量含む。

47-12号土坑



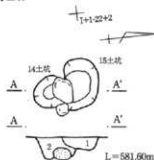
- 47-12土  
1 黒褐色土 黄色軽石を中程度含む。  
2 黒褐色土 黄色軽石を多く含む。  
3 黒褐色土 黄色軽石を少量含む。

47-13号土坑



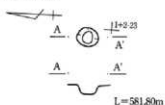
- 47-13土  
1 黒色土 砂礫を微量に含む。

47-14・15号土坑

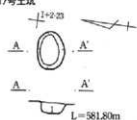


- 47-14・15土  
1 黒色土 砂礫を少量含む。  
2 黒色土

47-16号土坑

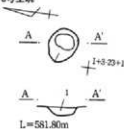


47-17号土坑



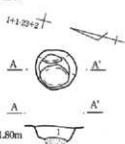
- 47-17土  
1 黒色土 白色粒子を微量に含む。

47-18号土坑



- 47-18土  
1 黒色土 砂礫を少量含む。

47-19号土坑

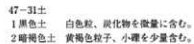
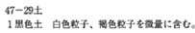
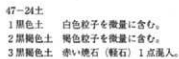
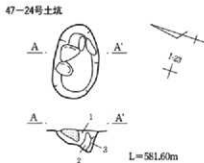
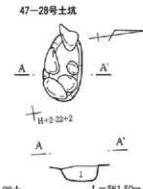
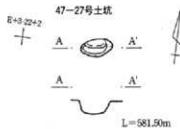
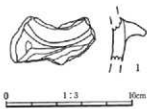
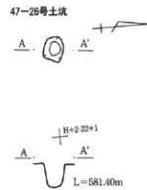
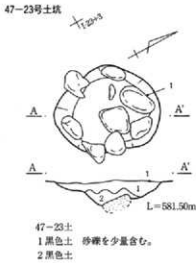
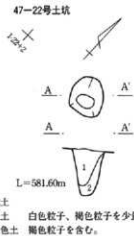
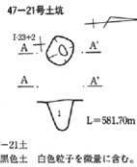


- 47-19土  
1 黒色土 砂礫少量、褐色土塊を含む。



第75図 西久保I遺跡47-9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19号土坑

第4節 検出された遺構と遺跡



第76図 西久保I遺跡47-20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31号土坑

第5章 西久保I遺跡

47-30号土坑



47-30土

- 1 黒褐色土 白色粒子、黄褐色粒子を含む。
- 2 黒色土 黄褐色粒子を少量含む。
- 3 黒褐色土 白色粒子、黄褐色粒子を少量含む。

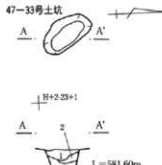
47-32号土坑



47-32土

- 1 黒色土 白色粒子を微量に含む。

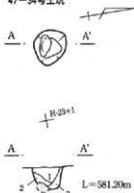
47-33号土坑



47-33土

- 1 黒色土 黄褐色粒子を微量に含む。
- 2 黒色土 白色粒子を少量含む。
- 3 黒褐色土 褐色土塊を少量含む。

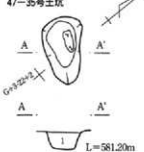
47-34号土坑



47-34土

- 1 黒色土
- 2 黒色土 白色粒を含む。
- 3 黒褐色土 黄褐色粒を多く含む。

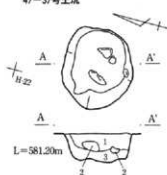
47-35号土坑



47-35土

- 1 暗褐色土 白色粒を多く含む。

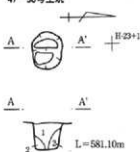
47-37号土坑



47-37土

- 1 黒褐色土 白色粒、黄褐色粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色粒を多く含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土塊を多く含む。

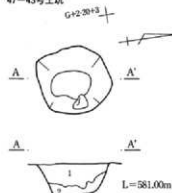
47-38号土坑



47-38土

- 1 黒色土
- 2 暗褐色土 白色粒を多く含む。

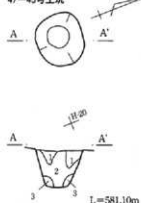
47-43号土坑



47-43土

- 1 黒褐色土 黄褐色土、白色顆石を含む。
- 2 暗褐色土 白色粒子を多く含む。

47-45号土坑



47-45土

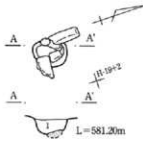
- 1 黒褐色土 黄褐色粒子を含む。
- 2 黒褐色土 黄褐色、白色粒子を含む。
- 3 黒色土



第77図 西久保I遺跡47-30・32・33・34・35・36・37・38・43・45号土坑

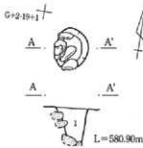


47-46号土坑

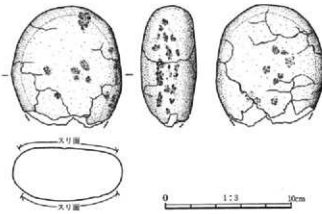


47-46土  
1 黒褐色土 黄褐色土をブロック状に含む。

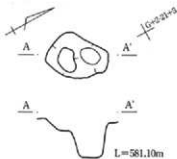
47-49号土坑



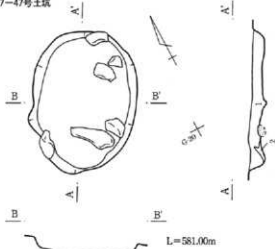
47-49土  
1 黒褐色土 黄褐色粒子を含む。



47-50号土坑

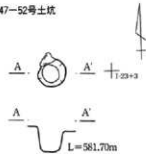


47-47号土坑



47-47土  
1 黒褐色土 黄褐色土、白色軽石を含む。  
2 暗褐色土 白色軽石を含む。

47-52号土坑



47-53号土坑

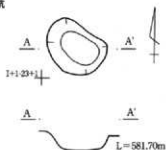


47-53土  
1 黒褐色土 黄褐色粒子を含む。  
2 黒色土  
3 黒褐色土 黄褐色粒子を含む。  
4 黄褐色土  
5 暗褐色土 白色軽石を含む。

第78図 西久保I遺跡47-46・47・49・50・52・53号土坑

第5章 西久保I遺跡

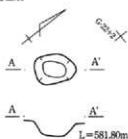
47-60号土坑



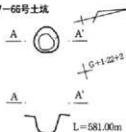
47-62号土坑



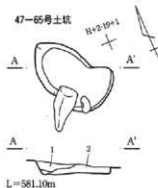
47-61号土坑



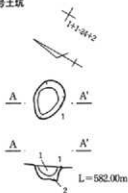
47-66号土坑



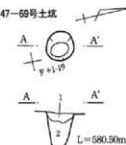
47-65号土坑



47-63号土坑



47-69号土坑



47-65土

1 黒褐色土 白色軽石を含む。  
2 地山 (掘りすき)

47-63土

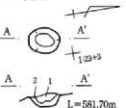
1 暗褐色土  
2 暗褐色土 黄色粒子を含む。



47-69土

1 黒褐色土 黄色粒子砂質を少量含む。  
2 黒褐色土 黄褐色土をブロック状に含む。

47-64号土坑



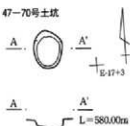
47-67号土坑



47-67土

1 黒褐色土 黄色軽石を少量含む。  
2 黒褐色土 黄色軽石を多量に含む。

47-70号土坑



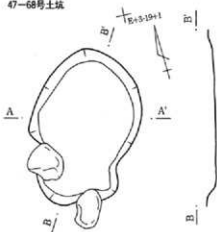
47-64土

1 黒色土  
2 黒褐色土 黄色粒子を含む。



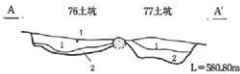
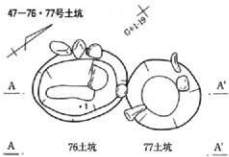
第79図 西久保I遺跡47-60・61・62・63・64・65・66・67・69・70号土坑

47-68号土坑



47-68土  
1 黒褐色土 砂壤土。

47-76・77号土坑



47-76土  
1 黒褐色土 黄色軽石をごく少量含む。暗褐色土ブロックが少量混じる。

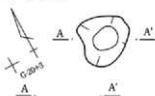
2 暗褐色土

47-77土  
1 黒褐色土 黄色軽石を少量含む。

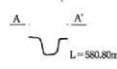
2 暗褐色土



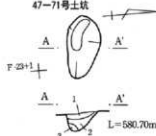
47-80号土坑



47-82号土坑

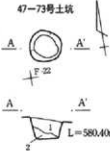


47-71号土坑



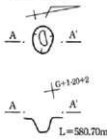
47-71土  
1 黒褐色土 黄色軽石を少量含む。  
2 黒褐色土 黄色軽石を多く含む。  
3 暗褐色土 黄色軽石を含む。

47-73号土坑

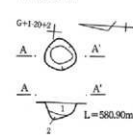


47-73土  
1 黒褐色土 黄色軽石を含む。  
2 暗褐色土

47-75号土坑

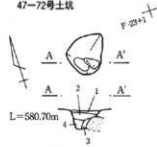


47-79号土坑



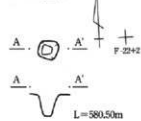
47-79土  
1 黒色土 黄色軽石を含む。  
2 黒褐色土

47-72号土坑

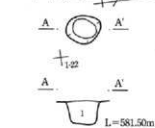


47-72土  
1 黒色土  
2 褐色土 黄色軽石を含む。  
3 褐色土 黄色軽石を含む。  
4 暗褐色土 黄色軽石を含む。

47-74号土坑

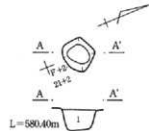


47-78号土坑

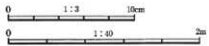


47-78土  
1 黒色土 黄色軽石を含む。

47-81号土坑



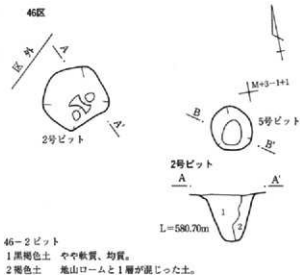
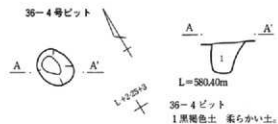
47-81土  
1 黒褐色土 軽石ロームブロックを少量含む。



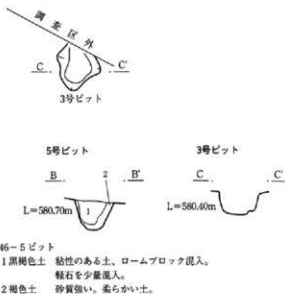
第80図 西久保I遺跡47-68・71・72・73・74・75・76・77・78・79・80・81・82号土坑

③ピット P L 23・25・26

調査区全体で、7基のピットが存在する。7基は、36区に2基、46区に5基の割合で存在し、47区には、分類上はピットが存在していない。しかし、土坑に分類されているものの中で、形状を見たときに、ピットではないかと考えられるものが2基存在する。



ピットは、それぞれ単独もしくは、それに近い形で検出されており、ピットの配置から構造物を読みとることはできない。ピットから読み取れる構造物及びピットの広がりや表すものについては、今後の調査の進展を待って検討したい。



第81図 西久保I遺跡37-4・8・46-2・3・5号ピット

(4) 溝 P L 35

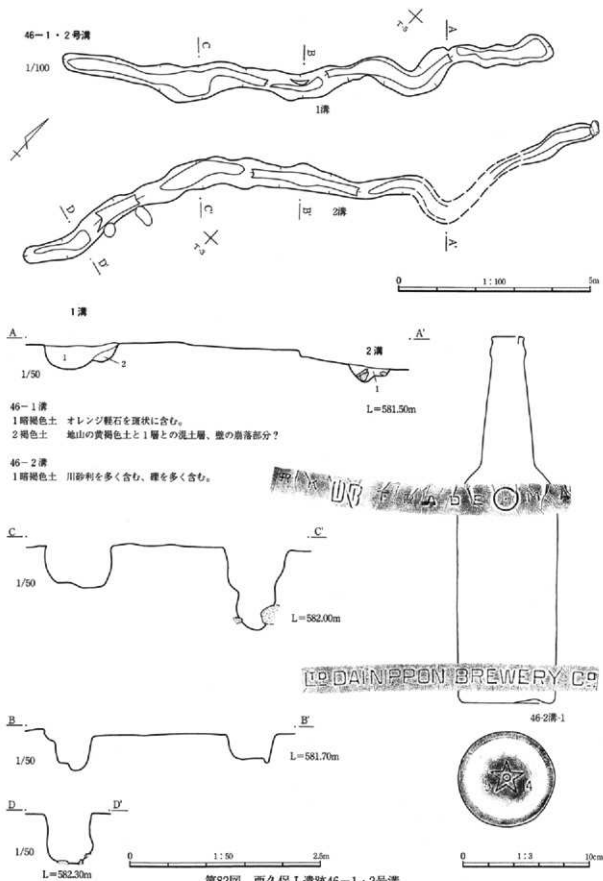
溝は、46区の東端と西端に2本ずつが並んで検出されている。両地点の溝とも2本が並行して走向している。道の側溝などの可能性も考えられたが、周辺の状況から、道の可能性はないと判断した。46-1号溝と2号溝は同様の覆土である。2号溝の層中より近代の遺物が見つかっていることから近現代の遺構であると考えられる。3号溝と4号溝については遺物が検出されていないことや、状況から時期の

特定ができない。しかし、1・2号溝とはほぼ同様の形状を呈することから、同時期の遺構と考えられる。地元の人々によると、これらの遺構の等高線の下方には近年まで水田が広がっていたということである。それに伴う、水路遺構の可能性も考えられる。

以下に、各溝について記載する。

46-1・2号溝

両溝は46S-5~46T-2グリッドに平行して位置する。南西から北西の方向に、蛇行しながら



第82図 西久保 I 遺跡46-1・2号溝

等高線に直交するように走向する。1号溝の規模は幅40～90cm、深度は30～55cm程である。2号溝は、幅40～80cm、深度は35～110cmである。

他遺構との重複関係は、1号溝が46-4土と46-1礎石建物と重複する。新旧関係は両遺構より新しい。水流によると思われる壁のえぐれが蛇行している部分で見られ、この部分の幅は広がっている。断面は、若干の凹凸はあるものの、概ね逆台形の形状を呈する。

埋没土は砂質の暗褐色土である。層中には人の頭程の大きさの礫が多数混入する。砂層に掘り込んで構築されており壁面は非常にもろくなっている。

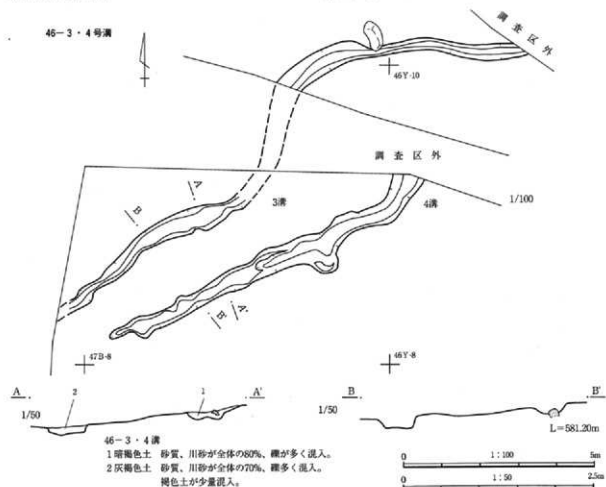
遺物は覆土中より近現代のものと考えられる陶磁器やビール瓶が出土している。これらの状況から、遺構の時期は近現代にあたるものと考えられる。(遺物観察表109頁)

#### 46-3・4号溝

両溝は46X-9～47A-8グリッドに平行して位置する。南西から北西の方向に、蛇行しながら等高線に直交するように走向する。3号溝の規模は幅30～60cm、深度は15cm程である。2号溝は、幅40～80cm、深度は35～110cmである。現況の畑を造成する際に上面の大部分を削平されている。他遺構との重複関係はない。水流によると思われる壁のえぐれが蛇行している部分で見られる。断面は、若干の凹凸はあるものの、概ね逆台形の形状を呈する。

埋没土は砂質の暗褐色土であり、直径8cm程の礫を多く混入している。この土層は1・2号溝と同様のものである。

遺物は出土していない。しかし、埋没土の状況から、1・2号溝と同時期、近現代のものであろうと思われる。



第83図 西久保I遺跡46-3・4号溝

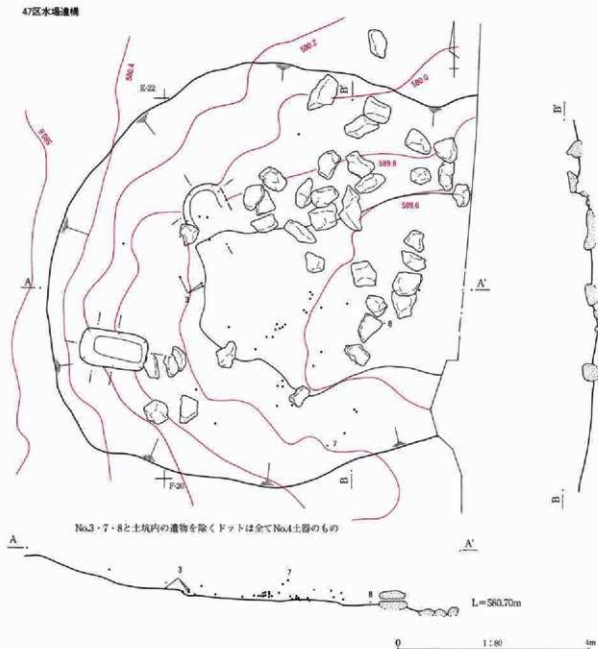
(5) 水場遺構

47区の北側は、小規模な埋没谷が数条確認され、その埋没土が遺物包含層となっている。この埋没谷の downstream にあたる部分から、縄文時代のものである水場遺構が検出された。以下に概要を記す。

位置 47E-20 PL 36・37

規模は、南北約9m、東西約9mである。馬蹄形の平面形状を呈し、等高線の下方面にあたる東に開口

し調査区外に続いている様子が見受けられる。埋没谷を50cm程掘りくぼめ、地下を流れていた伏流水を利用していただけと思われる。出土遺物は、縄文時代前期から中期の土器である。出土状態は、覆土からの出土が中心であり、遺物の中心は中期中葉のものである。遺構の時期は、周囲で見られる縄文時代前期の包含層が認められないことや、出土遺物の状況から縄文時代中期に比定されると考えられる。

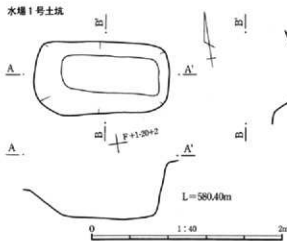


第84図 西久保I遺跡47区水場遺構(1)

土坑 水場遺構内の西隅と中央から各1基ずつ計2基の土坑が検出されている。

1号土坑は水場遺構の西側に位置する。隅丸長方形の平面形状を呈する。壁面は、傾斜の上側が高く下側は低い。上方に向かってわずかに開きながら立ち上がっている。土坑内からは湧水が多く、水が常に流れている状況である。

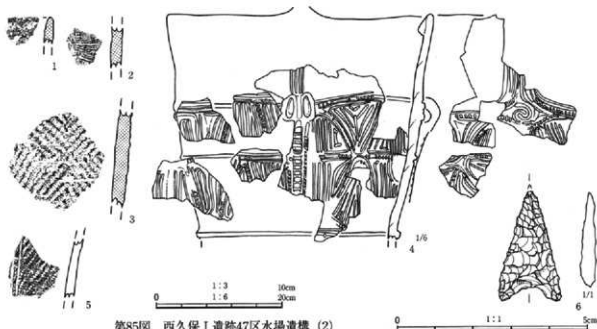
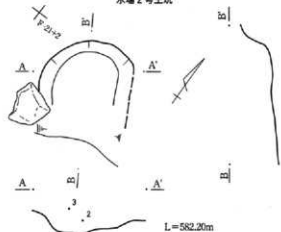
2号土坑は、水場遺構の中央やや北寄りに位置する。傾斜下側のおよそ半分が掘削されており、正確な形状は不明である。しかし、残存する部分が1号土坑と類似しているため、隅丸長方形の形状を呈していたのではないかと考えられる。土坑からは、1



号土坑と同様に湧水が見られるが、比較すると量は少ない。1・2号土坑とも、埋没土は暗褐色土主体である。湧水のため、詳細に捉えることはできなかったが、ロームブロックを混入している。これらの土坑は水場に伴う施設と考えられ、有機質の遺物等は検出されていないが、堅果類の水さらし場などに関連する施設の可能性が考えられる。

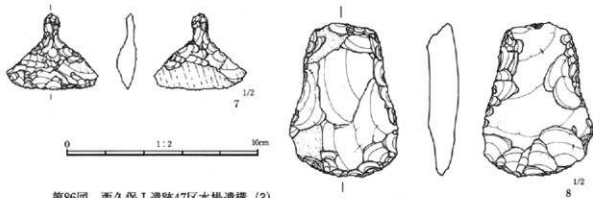
出土遺物は、縄文土器が主体である。時期は縄文時代前期花積下層式・黒浜式期、中期勝坂3式・加曾利E2式期のものである。中でも、勝坂3式期のものが最も多く、遺構の時期も該期に当たるものと考えられる。(遺物観察表110頁)

水場2号土坑



第85図 西久保I遺跡47区水場遺構(2)





第86図 西久保I遺跡47区水場遺構(3)

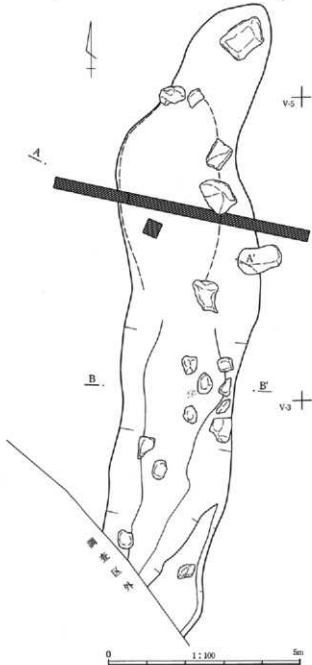
## (6) 遺構外出土遺物

## ① 剥片廃棄場 P L 38

46区の調査区内からは、5条の埋没谷が確認されている。このうち、46V-1からW-4グリッドにかけて走向する埋没谷からは、多数の石器が検出されている。総数は、42点にのぼる。剥片石器が主体で、その中でも石楯が最も多く16点検出されている。また、上記に挙げた製品の他に、小剥片の出土が非常に多く見られる。これらは、この地点で、石器の加工がなされた際、埋没谷に廃棄されたものであろうと思われる。検出された製品や小剥片の総量及び組成については付録1・2に記載した。参照していただきたい。埋没谷の覆土中からは、土器も出土している。土器は、縄文時代中期後半の加曾利E4式期のもものが中心である。これらの遺物の包含層は、洪水層によって覆われており、後世の影響を受けていない。よって、この埋没谷周辺で石器が作られた時期も、出土土器と同じ縄文時代中期後半加曾利E4式期以前に比定されると思われる。

この埋没谷の覆土上には、46-6号住居が存在する。敷石周辺からも、埋没谷の覆土内の遺物と同様の剥片石器類や小剥片が検出できることから、敷石が敷かれていた時期にも継続して石器の加工が行われていた可能性も考えられる。この住居からは、炉や壁面が検出されておらず、床面にあたると思われる敷石が数枚確認されたのみとなっている。そのため、この施設が、石器加工に関連するものである可能性も考えられる。(斜線はサンプル抽出地点)

(遺物観察表110・111頁)



第87図 西久保I遺跡46区剥片廃棄場(1)

第5章 西久保I遺跡

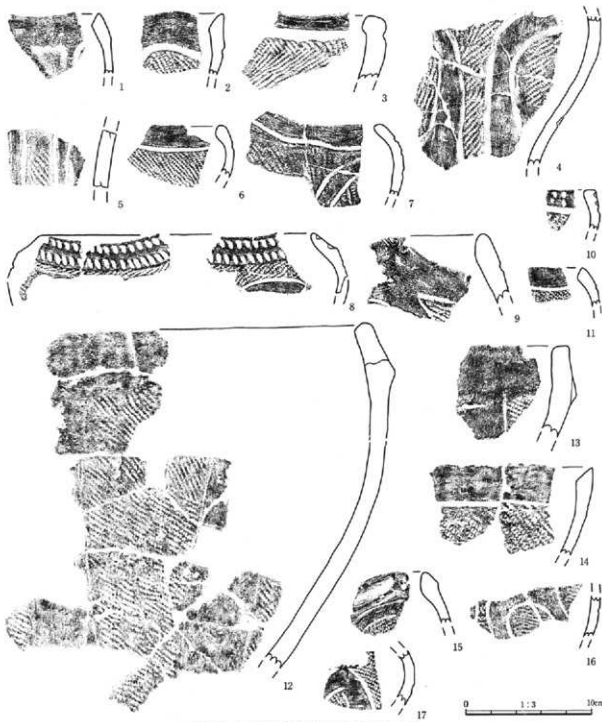


46-剥片廃棄場

1 黒褐色土 やや砂質、黄色軽石、土器、剥片、石製品、  
焼土などが混入。土器捨て場と考えられる。

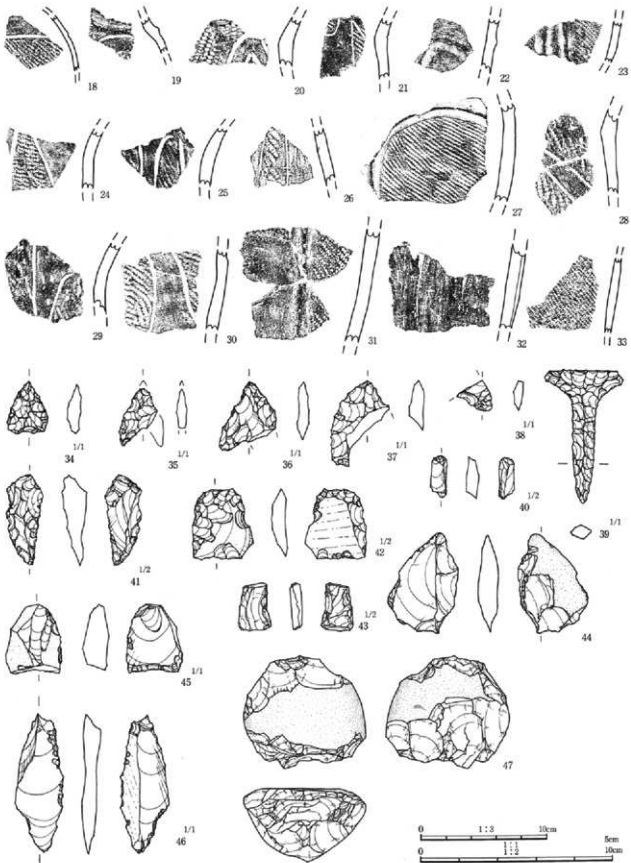
2 黒褐色土 1層より明るく砂質強い。1層と地山の混土。

3 黒褐色土 1層より明るく、2層より暗い。1層と2層  
の中間の土砂質は少なくやや締まった土。

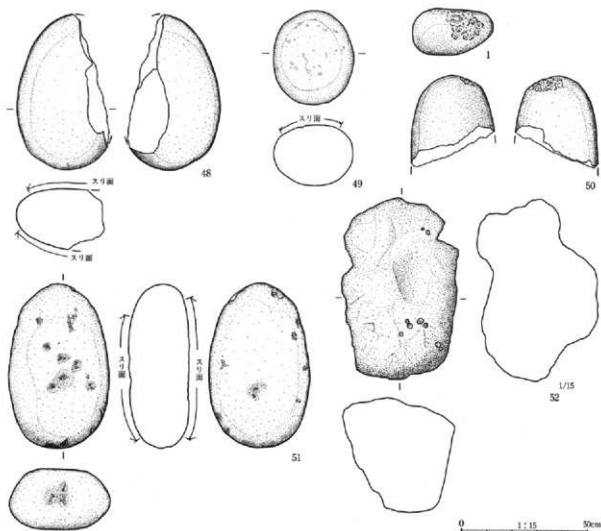


第88図 西久保I遺跡46区剥片廃棄場(2)

第4節 検出された遺構と遺跡

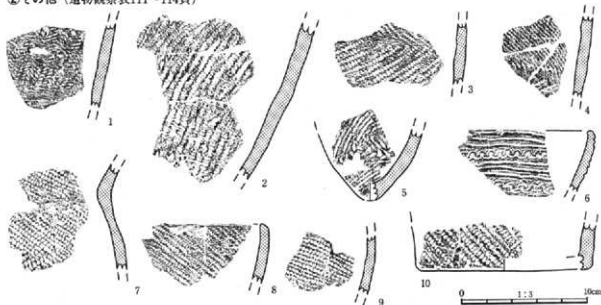


第89図 西久保I遺跡46区剥片廃棄場(3)

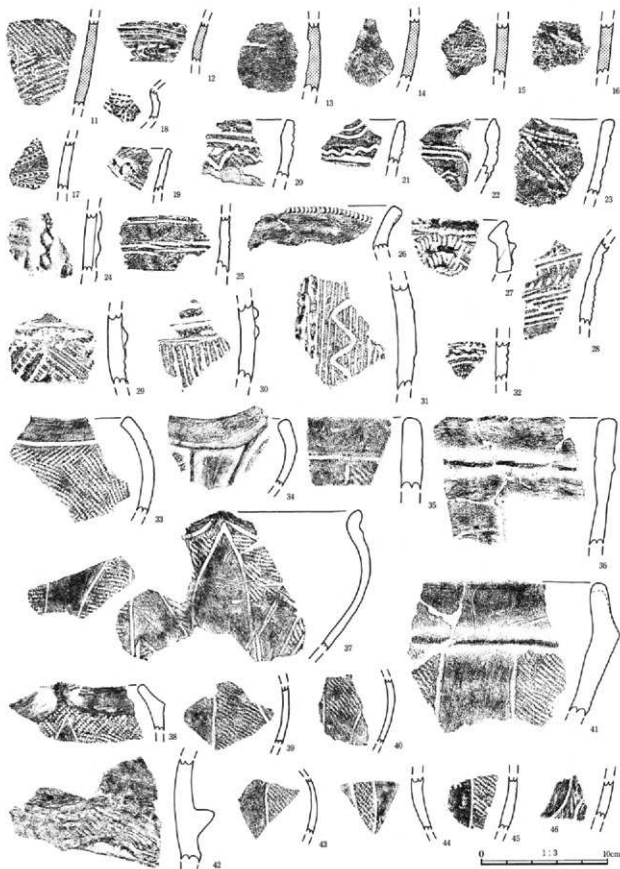


第90図 西久保 I 遺跡46区剥片廃棄場 (4)

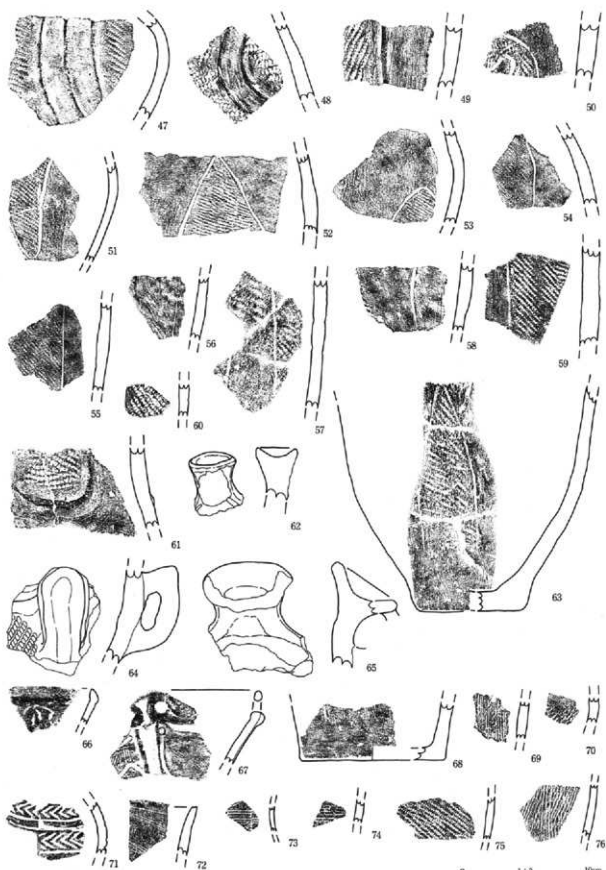
②その他 (遺物観察表111~114頁)



第91図 西久保 I 遺跡遺構外出土遺物 (1)

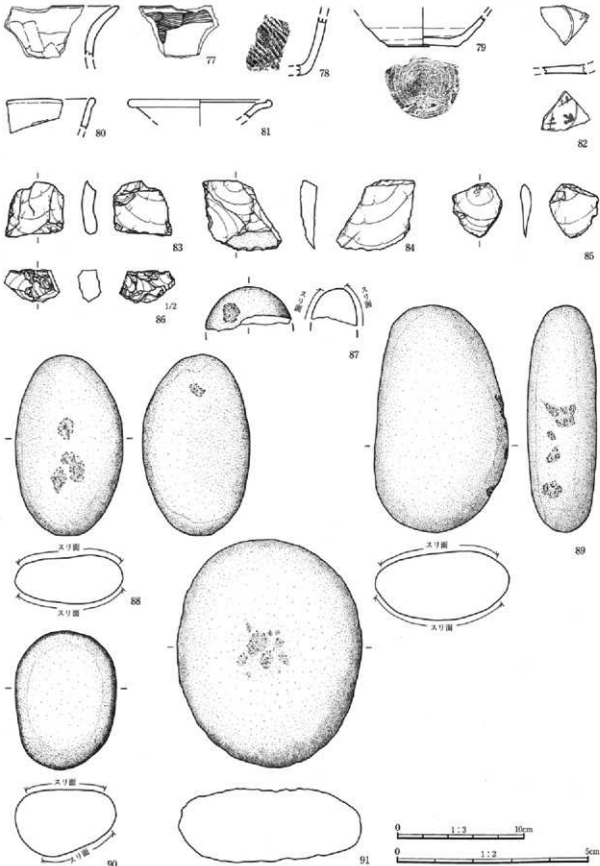


第92図 西久保 I 遺跡遺構外出土遺物 (2)

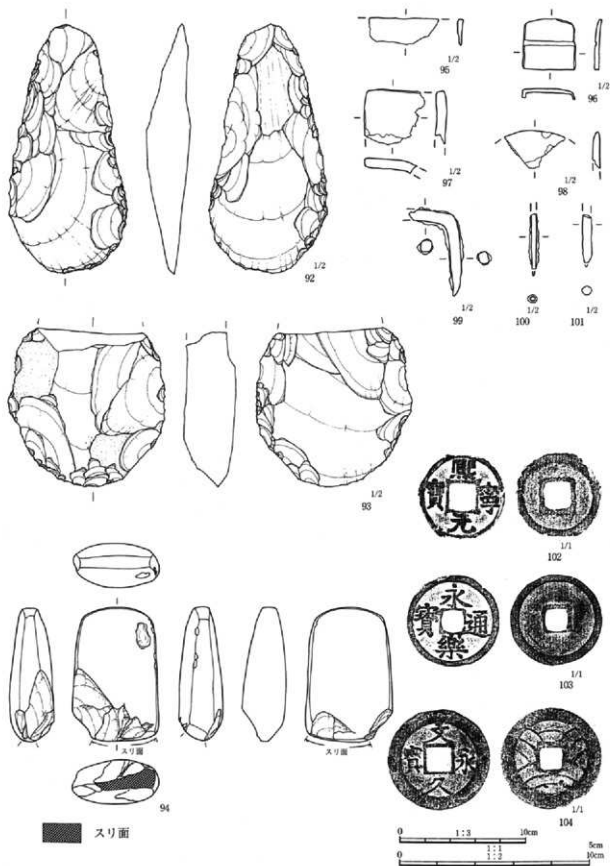


第93図 西久保I遺跡遺構外出土遺物(3)

第4節 検出された遺構と遺跡



第94図 西久保 I 遺跡遺構外出土物 (4)



第95図 西久保I遺跡遺構外出土遺物(5)



第8表 西久保1遺跡遺物観察表

46-1号住居 土器					
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	形状・文様の特徴	備考
1	深鉢	ほぼ完成形	①良好②灰黄緑③砂粒を含む	底面がよく磨かれている。口縁部が強く内湾する鉢。口縁部無文下に沈線を描し、胴部中位まで縄文を施す。縄文はLRで、沈線下の帯のみ横位施文。以下は縦位に施す。	埋土 縄文 加曾利E4式
2	深鉢	胴部片	①良好②明黄緑③砂粒を少量含む	90°内環状土器。U字状の区画文を上下対向に施し、上方には光線するが、施文は乱れている。二次的に焼成。	縄文 加曾利E4式
3	台付深鉢	底部片	①やや不良②にぶい③砂粒を含む	台付深鉢の台部片。この部分に文様は無い。	
4	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③黄緑④砂粒を含む	断面三角形の隆起型垂文間に、縄文LRを光線する。	埋土 縄文 加曾利E4式
5	深鉢	胴部片	①やや不良②浅黄緑③砂粒を含む	断面三角形の隆起型垂文間に、縄文LRを光線する。	埋土 縄文 加曾利E4式

石器 (単位: g)				
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
6	石鏃	長2.15幅1.3厚0.42重0.97	半欠損。無茎で基部は平らである。未製品。	埋土
7	楔形石斧	長2.1幅1.7厚0.65重2.06	両側に刃縁が見られる。刃縁は表面に集中する。	埋土
8	使用痕のある石斧	長3.75幅1.8厚0.8重4.55	縦長割片を素材とする。左側面に使用痕が集中する。	埋土
9	石核	長1.5幅7.4厚2.65重122	上面、下面、左側面に二次加工の痕が見られる。二次加工の部分は使用によるつぶれが見受けられる。	埋土

46-2号住居 土器					
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	形状・文様の特徴	備考
1	深鉢	口-底部	①良好②にぶい③黄緑④砂粒を含む	口縁に向かって縦や斜めに開く大形の深鉢。口縁部無文帯下に断面三角形の隆起を描し、そこから下が断面三角形の隆起型垂文間に、縄文LRを光線する。	縄文 加曾利E4式
2	深鉢	胴部片	①良好②明黄緑③砂粒を含む	口縁に向かって縦や斜めに開く大形の深鉢。口縁部無文帯下に断面三角形の隆起を描し、そこから下が断面三角形の隆起型垂文間に、縄文LRを光線する。	90°内湾方 縄文 加曾利E4式

遺構部 (単位: cm)					
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	その他の特徴	備考
3	須恵器 土器 坏	底部片	①還元焼、灰黄②黄緑③粗砂粒	ロク口形状。	

石器 (単位: cm, g)				
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
4	石鏃	長1.12幅1.2厚0.42重0.37	2/3欠損。無茎で基部は浅い弧状を呈する。未製品。	掘り方
5	石鏃	長1.07幅1.25厚0.3重0.29	先端部欠損。基部は深い弧状を呈する。返しは棒状に近い。	埋土
6	楔形石斧	長2.2幅2.3厚0.7重2.78	両側に刃縁。	掘り方
7	石核	長2.7幅2.0厚1.3重6.17	側面に小型割片を剥離した痕跡が見られる。	埋土
8	石核	長3.1幅1.15厚0.8重3.75	表面に小型割片を剥離した痕跡が見られる。	埋土
9	スクレイパー	長4.9幅10.2厚1.2重52	一部欠損。縦長割片を素材とする両面に凹み穴が見受けられる。上部右部分に使用によると思われる潰れが見られる。	掘り方
10	スクレイパー	長6.7幅4.3厚1.3重41	完成形。表面に加工痕が集中する。縦長割片を素材とする。	埋土
11	打撃石斧	長8.2幅4.65厚2.2重105	刃部欠損。短冊形か?	掘り方
12	磨石	長12.0幅17.6厚4.0重558	破片。表面に磨面が側面に凹み穴が見受けられる。二次的に焼成。	掘り方
13	磨石	長10.2幅8.2厚5.2重359	完成形。3面に凹み穴が見受けられる。表面には磨面が見受けられる。	
14	磨石	長11.6幅8.7厚3.2重460	完成形。3面に凹み穴が見受けられる。上面には縦打痕が集中する。二次的に焼成。	
15	磨石	長19.6幅(11.4)厚6.4重854	破片。表面に磨面が見受けられる。縁部に縦打痕。	

46-3号住居 土器					
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	形状・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③黄緑④砂粒を含む	口縁部が大きく開く深鉢。胴部上位に沈線区画無文帯で流状文様を描し、下位に逆U字状の無文型垂帯を施す。	縄文 加曾利E3式
2	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③黄緑④砂粒を含む	細い沈線で区画された無文型無文帯間に、縄文Lを光線する。	縄文 加曾利E4式

石器 (単位: cm, g)				
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
3	石鏃	長1.65幅1.62厚0.37重0.71	先端部欠損。無茎で基部が弧状を呈する。	掘り方
4	楔形石斧	長1.7幅1.2厚0.9重0.83	刃縁は上部に集中する。下部の一部に細部加工が見られる。	埋土
5	磨石?	長7.3幅5.5厚3.9重219	完成形。3面に縦打痕が見受けられるが上面及び下面に特に集中する。	

## 第5章 西久保I遺跡

## 46-5号住居 土器

番号	種類	部位	①焼成や色調②粘土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底部欠損	①良好②明褐色砂粒を含む	器形・文様の特徴 キャリバー形の深鉢。円形・楕円形の区画文で口縁部文様帯を構成し、胴部には円形・楕円形の区画文と幾手状文様、中位に波線渦巻文、下位に逆U字状の懸垂文と幾手状の波線懸垂文を施す。区画文を充填する縄文はLR。	縄文 加曾利E3式

## 石器

(単位: cm, g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
2	石鏃	長1.67幅1.4厚0.32重0.52	一部欠損。無蓋で基部は浅い弧状を呈する。	覆土
3	石鏃	長2.4幅1.65厚0.37重0.93	一部欠損。無蓋で基部は弧状を呈する。	掘り方
4	石鏃	長2.55幅1.55厚0.45重0.91	一部欠損。無蓋で深い弧状を呈する。飛行機形に近い形か?	
5	スクレイパー	長3.3幅1.15厚0.55重2.41	板状薄片を素材とする。左側面に刃部を形成。	7ピット
6	板状石鏃?	長2.7幅1.95厚1.05重3.69	両側潤滑。	掘り方
7	加工痕のある石器	長1.75幅1.45厚0.3重0.48	定形。右側の未製品か?右側面に細かい調整痕がある。	覆土
8	使用痕のある石器	長2.5幅1.75厚0.75重3.88	下部に使用痕が残る。	掘り方
9	磨石	長(7.9)幅7.6厚4.0重381	1/4円形。両面に磨面が見受けられる。	覆土
10	磨石	長11.9幅7.7厚4.3重538	定形。表面に磨面が、縁面に敲打痕が見受けられる。	覆土
11	原石	長18.3幅7.3厚6.0重1150	定形。下面に集中する敲打痕が見受けられる。二次的に加熱。	
12	磨片	長7.9幅3.9厚2.0重28		掘り方

## 46-6号住居 土器

番号	種類	部位	①焼成や色調②粘土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁部片	①良好②明褐色砂粒を含む	口縁部が狭く内湾する深鉢。口縁部に太い波線が走り、以下に縄文LRを施す。	縄文 加曾利E3式新
2	深鉢	胴部片	①良好②に白い赤褐色③白色軽石を含む	胴部上半に波線で区画した、無文で曲線的な文様を構成する。縄文はLR。	掘り方 縄文 加曾利E3式新
3	深鉢	胴部片	①良好②明褐色砂粒を含む	波線区画文の無文懸垂帯帯間に、縄文Lを施す。	掘り方 縄文 加曾利E3式新
4	深鉢	口縁部片	①やや不良②黒褐色砂粒を含む	楕円区画文内に縄文Lを充填する。	縄文 加曾利E3式
5		胴部片	①良好②に白い黄褐色③雲母を少量含む	LRの斜縄文を施す。	縄文 加曾利E3-4式
6	深鉢	胴部片	①やや不良②に白い明褐色砂粒を含む	縄文LRを施す。	縄文 加曾利E3-4式
7	深鉢	胴部片	①良好②に白い明褐色③白色軽石を含む	表面に縄文LRを縦位に施す。	縄文 加曾利E3-4式
8	深鉢	胴部片	①やや不良②に白い黄褐色③雲母を少量含む	頂部がすぼまる深鉢。頂部に前三角形の段縁が走り、細波線で文様を構成する。	縄文 加曾利E4式
9	深鉢	胴部片	①良好②明褐色砂粒を含む	胴部のくびれを境に、上半のU字状区画文と下半の倒伏状懸垂文が入り、組み状に分かれる。縄文LR。	縄文 加曾利E4式古
10	深鉢	胴部片	①良好②に白い黄褐色③砂粒を含む	胴部のくびれを境に、上半のU字状区画文と下半の倒伏状懸垂文が入り、組み状に分かれる。縄文LR。	縄文 加曾利E4式古

## 石器

(単位: cm, g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
11	石鏃	長1.62幅1.17厚0.32重0.47	定形。無蓋で基部は弧状を呈する。	
12	石鏃	長2.2幅1.62厚0.45重0.99	一部欠損。無蓋で基部は弧状を呈する。	掘り方
13	石鏃	長2.07幅1.35厚0.25重0.68	一部欠損。無蓋で深い弧状を呈する。	
14	石鏃	長1.65幅1.0厚0.3重0.33	両端とも欠損。無蓋で基部は深い弧状を呈する。	掘り方
15	石鏃	長2.12幅1.22厚0.42重1.01	一部欠損。無蓋で基部は平らか?返しはやや丸みを帯びる。	掘り方
16	石鏃	長1.2幅1.25厚0.3重0.21	先端部のみ残存。形状不明。	掘り方
17	石鏃	長1.6幅1.92厚0.3重0.91	先端部欠損。無蓋で基部は浅い弧状を呈する。	
18	石鏃	長1.2幅1.67厚0.35重0.59	先端部欠損。無蓋で基部は浅い弧状を呈する。	覆土
19	加工痕のある石器	長1.57幅0.7厚0.27重0.23	表面に細かい調整痕が見受けられる。	覆土
20	加工痕のある石器	長1.65幅0.55厚0.5重0.43	表面に細かい調整痕が見受けられる。	掘り方
21	加工痕のある石器	長1.05幅1.25厚1.05重0.36	両面に調整痕が見受けられる。	掘り方
22	加工痕のある石器	長1.22幅1.05厚0.35重0.28	表面に細かい調整痕が見受けられる。	掘り方
23	加工痕のある石器	長1.12幅1.2厚0.65重0.71	表面に調整痕が見受けられる。	掘り方
24	加工痕のある石器	長1.65幅1.1厚0.4重0.35	右側面に調整痕が見受けられる。	掘り方
25	加工痕のある石器	長2.45幅1.7厚0.75重3.04	表面の両面に調整痕が見受けられる。	覆土
26	加工痕のある石器	長2.35幅2.87厚1.25重4.72	表面に細かい調整痕が見受けられる。	掘り方
27	加工痕のある石器	長2.65幅2.62厚1.05重6.47	両面に細かい調整痕が見受けられる。	掘り方

## 36-3号土柱 土器

番号	種類	部位	①焼成や色調②粘土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁部片	①良好②に白い黄褐色③砂粒を含む	口縁部が大きく内湾する深鉢。胴部上半に縄文LRを充填したW字状の区画文を構成。	覆土 縄文 加曾利E4式



47-水場		土器			
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁部片	①やや不良②白③胎土を含む	縄文を施文しているが程度でない。	縄文 黒沢式
2	深鉢	胴部片	①やや不良②白③胎土を含む ④黄・黒線を含む	細線の黒赤文を施す。内面調整が粗い。I-19・I-1-20・I-1・表土-Iと同類体。	縄文前期中葉
3	深鉢	胴部片	①やや不良②白③胎土を含む	④多量条RLとLRを交互に施して菱形羽状文を構成する。	縄文 花壇下層式
4	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	胴部から口縁部にかけて直線的に内湾する深鉢。文様帯を2分する縦位隆帯の一方には耳状の把手が、他方には隆帯消色文がつく。くの字に内折した口縁部は、内面を遮る肥厚部になっている。口縁部は無文帯とし、胴部を遮る3本の隆帯間に隆帯で扇状の区画を構成し、区画内に比線で重三角文が施される。文様を区画する各隆帯には刷目が施される。	縄文 塚原3式期
5	鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	胴部に2-3本の比線重文を施す。二次的に焼熟。	縄文 加曾利B2式

石器					(単位: cm, g)
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考	備考
6	石砲	長2.9幅1.05厚0.5重1.41	定形。無蓋で基部は弧状を呈する。焼熟。		水場2号土坑出土
7	石砲	長4.05幅4.9厚1.0重1.15	定形。両片形状不明。基部が三角形形状を呈する。		
8	打製石斧	長8.2幅2.8厚1.65重96	定形。扇形を呈する。欠損したものを再加工したものか?		

48区割片遺跡		土器			
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	隆帯で口縁部文様帯を構成。	V-2 縄文 加曾利C3式
2	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	太沈線で口縁部に区画施文を施す。	V-2 縄文 加曾利C3式
3	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	口縁部に太沈線が走る。	V-2 縄文 加曾利C3式
4	深鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	口縁部が強く内湾する深鉢。太沈線区画内を縄文RLで充満する。	V-3 縄文 加曾利C3式
5	深鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	沈線区画の無文帯を施す。縄文はLR。	V-1 縄文 加曾利C3式
6	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	強く内湾する。口縁部に細沈線が走る。	V-3 縄文 加曾利C4式
7	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	口縁部が強く内湾する液状口縁の深鉢。口縁部に沈線が走り、沈線区画の無文帯でアーチ状の文様を施す。	V-3 縄文 加曾利C4式
8	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	口縁部が強く内湾する深鉢。口縁部に2列の刺突列が走り、胴部に沈線区画の縄文帯で文様が構成される。	V-4 縄文 加曾利C4式
9	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	液状口縁の深鉢。文様は沈線区画の縄文帯で構成される。	V-5 縄文 加曾利C4式
10	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	強く内湾する。口縁部に細沈線が走る。口縁部は無文帯で2列の刺突列を施す。	V-2 縄文 加曾利C4式
11	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	強く内湾する。口縁部に細沈線が走る。二次的に焼熟。	V-2 縄文 加曾利C4式
12	深鉢	口-胴部片	①良好②白③胎土を含む	口縁部が内湾する深鉢。口縁部を遮る前面三角形の隆帯から細沈線で区画した縄文を垂下させる。	V-1 縄文 加曾利C4式
13	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	口縁部が内湾する深鉢。口縁部を遮る前面三角形の隆帯から細沈線で区画した縄文を垂下させる。	V-1 縄文 加曾利C4式
14	深鉢	口縁部片	①良好②白③胎土を含む	強く内湾する。口縁部に細沈線が走る。二次的に焼熟。	V-2 縄文 加曾利C4式
15	深鉢	口縁部片	①やや不良②白③胎土を含む	口縁部が内湾する液状口縁の深鉢。口縁部を遮る前面三角形の隆帯は、液面部でつまみ上げた様な突起となる。文様は沈線区画の無文帯で構成。	V-4 縄文 加曾利C4式
16	深鉢	胴部片	①やや不良②白③胎土を含む	沈線区画で文様が構成される。	V-4 縄文 加曾利C4式
17	深鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	強く内湾する口縁部片。細沈線区画の無文帯で、刷先状の文様を構成。	V-2 縄文 加曾利C4式
18	深鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	沈線区画で文様が構成される。二次的に焼熟。	V-4 縄文 加曾利C4式
19	深鉢	胴部片	①やや不良②白③胎土を含む	口縁部が強く内湾する深鉢。口縁部に前面三角形の隆帯が走り、胴部に細沈線で区画文を構成。	V-3 縄文 加曾利C4式
20	深鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	細沈線区画の無文帯で、刷先状の文様を構成。	V-2 縄文 加曾利C4式
21	深鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	細沈線区画内を縄文LRで充満する。	V-1 縄文 加曾利C4式
22	深鉢	胴部片	①やや不良②白③胎土を含む	前面三角形の隆帯のみで文様が構成される。	V-4 縄文 加曾利C4式
23	深鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	前面三角形の隆帯で文様を区画する。	V-2 縄文 加曾利C4式
24	深鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	細沈線で区画された、刷先状の無文帯を施す。	V-2 縄文 加曾利C4式
25	深鉢	胴部片	①良好②白③胎土を含む	沈線区画内を、縄文LRを垂下する。二次的に焼熟。	V-3 縄文 加曾利C4式
26	深鉢	胴部片	①やや不良②白③胎土を含む	文様は沈線区画の縄文帯で構成される。	V-5 縄文 加曾利C4式

第4節 検出された遺構と遺跡

番号	種別	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
27	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	断面三角形の隆線区画内に、縄文LRを光輝する。	V-1 縄文 加曾野E6式
28	深鉢	胴部片	①やや不良②明褐色③白色軽石を含む	細沈線で区画する。無文帯を斜位に施す。	V-1 縄文 加曾野E6式
29	深鉢	胴部片	①良好②明褐色③砂粒を含む	細沈線で区画文を施す。区画内を光輝する縄文はまばら。二次的に焼熟。	V-2 縄文 加曾野E6式
30	深鉢	胴部片	①やや不良②にぶい赤褐色③砂粒を含む	細沈線で区画文を施す。二次的に焼熟。	V-2 縄文 加曾野E6式
31	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黒③砂粒を含む	断面三角形の隆線で区画した懸垂縄文帯を施す。縄文はLR。	V-3 縄文 加曾野E6式
32	深鉢	胴部片	①やや不良②明褐色③砂粒を含む	断面三角形の隆線で区画した、懸垂縄文帯を施す。	V-1 縄文 加曾野E6式
33	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	縄文LRを斜位に施文する。	V-2 縄文中期

石器

(単位: cm, g)

番号	種別	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
34	石鏃	長1.4幅1.1厚0.37重0.40	両方の返し欠損か? 無茎。	V-4
35	石鏃	長1.52幅1.0厚0.3重0.24	右返し欠損。無茎で基部が深い弧状を呈する。	V-4
36	石鏃	長1.85幅1.52厚0.35重0.63	一部欠損。茎の有無不明。棒状の返し。	V-4
37	石鏃	長2.38幅1.55厚0.37重0.75	右下半欠損。形状不明。	V-4
38	石鏃	長0.82幅0.96厚0.3重0.16	棒状。無茎で基部は弧状を呈するものと思われる。	V-4
39	石鏃	長8.55幅2.07厚0.4重1.60	ほぼP形。先端部とつまみ部を僅かに欠く。	V-2
40	石核	長2.28幅0.99厚0.7重1.48	側面に両側から小形副片を剥離した痕跡が見受けられる。	V-4
41	スタレイバー	長4.7幅1.96厚1.3重10.18	縦長副片を素材とする。基部を欠損する。	V-3
42	加工痕のある石器	長1.85幅1.62厚0.52重1.90	表面に細かい調整痕が見受けられる。	V-4
43	スタレイバー	長3.8幅2.6厚0.9重10.06	上下欠損。側面に加工痕が見受けられる。	V-4
44	使用痕のある石器	長7.8幅5.5厚1.6重56	方形。縦長副片を素材とする両側面に使用痕が見受けられる。	V-2
45	加工痕のある石器	長1.82幅1.5厚0.7重1.78	表面及び側面に細かい調整痕が見受けられる。石鏃の加工途中か? 焼熟。	V-4
46	使用痕のある石器	長3.65幅1.3厚0.47重1.47	縦長副片を素材とする。両側面に小調整痕が見受けられる。	V-4
47	石核	長8.7幅6.9厚5.8重351	2つもの小形副片を剥離した痕跡が見受けられる。	V-5
48	礫石	長12.3幅7.0厚5.1重566	約1/4欠損。側面に磨面が見受けられる。	V-1
49	礫石	長7.4幅6.3厚4.8重307	方形。表面に磨面が見受けられる。	V-2
50	礫石	長17.2幅(6.5)厚3.7重212	半欠損。側面に磨面。上面に敲打痕が集中する。	V-2
51	礫石	長13.1幅8.0厚4.8重786	方形。側面に磨面と上面に敲打痕が見受けられる。下面にも磨面が見られる他磨面縁辺を中心に敲打痕が見受けられる。	V-5
52	多孔石	長72幅46.5厚45重一	上面に四み穴が集中する部分が見受けられる。	V-5

遺構外出土遺物 土器

番号	種別	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③繊維を含む	L縄とR縄を2本ずつ交わった、束の縄を屈折施す。二次的に焼熟。	47I-19.5層 縄文 押ノ木式
2	実底土器	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③繊維を含む	実底土器の胴下半部片。全面に0段3条LRの斜縄文を施す。内面は丁寧なナゲ。	47I-20.5層 縄文 花積下層式
3	実底土器	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③繊維を含む	RLとLRを交互に帯状施文して、羽状縄文を構成する。縄文の施文幅が広く、内面には凹凸が認められる。	47G-21.5層 縄文 花積下層式
4	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③繊維を少量含む	0段多条RLとLRで羽状縄文を構成。縄文は施文幅がひろく、内面には凹凸が認められる。	47H-22.5層 縄文 花積下層式
5	実底土器	胴部片	①良好②明褐色③繊維を含む	実底土器の底部で、無筋縄文LとRを交互に施文して羽状縄文を構成するが、施文は乱れている。	47G-20.5層 縄文 花積下層式
6	深鉢	口縁部片	①良好②明褐色③繊維を含む	口縁部が広く内湾する深鉢。半軟竹管による2条の帯行沈線とコンパス文を交互に施す。内面に二次的に焼熟。	47I-19.1層 縄文 黒浜式
7	深鉢	胴部片	①良好②黄褐色③繊維を含む	胴部中位がくびれる深鉢。RLとLRで羽状縄文を構成する。内面磨き。二次的に焼熟。	47H-21.5層 縄文 黒浜式
8	深鉢	口縁部片	①やや不良②灰褐色③繊維を含む	口縁部が広く内湾する深鉢。縄文RLを施す。内面磨き。二次的に焼熟。	47I-19 縄文 黒浜式
9	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③繊維を含む	縄文RLを施す。二次的に焼熟。	57G-2.5層 縄文 黒浜式
10	深鉢	底部片	①やや不良②にぶい赤褐色③繊維を含む	縄文LRを施す。底面に施文はない。内面は磨き。	47H-20.5層 縄文 黒浜式
11	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③繊維を含む	縄文RLとLRで羽状縄文を構成する。	47I-21.5層 縄文 黒浜式
12	深鉢	胴部片	①良好②明褐色③砂粒を含む	半軟竹管による帯行沈線と刺突文を斜位に施す。	47区表採 縄文 黒浜式
13	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③繊維を含む	斜位の帯状穴ハメ文が施される。内面ナゲ。	47区表採 縄文中期
14	深鉢	胴部片	①やや不良②にぶい黄褐色③砂粒を含む 石英・繊維微量を含む	細線の熱突文を施す。内面の調整が粗い。1-19-1・水場2土塊-1・表土-1と同一個体。	47I-20.5層 縄文前期中葉?

## 第5章 西久保I遺跡

番号	種別	部位	①地産②色調③粘土	器形・文様の特徴	備考
15	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	縦線の熱赤文を施す。内面の調整が粗い。47I-19-1・I-20・水埴2土-1より出土。	47区表探 縄文前期中葉?
16	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③石灰片を含む ④織物痕を含む	縦線の熱赤文を施す。内面の調整が粗い。47I-20-1・水埴2土-1・表土-1と同一個体。	47I-19.5層 縄文前期中葉?
17	深鉢	胴部片	①やや不良②赤褐色③砂粒を含む	縄文LRを地文に、赤彩文で木の葉状区画文を施し、区画外の縄文を垂り出す。	46Y-10 縄文 諸磯3式
18	深鉢	口縁付近破片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	船形浮線文で渦巻文を構成。	47区表探 縄文 十三番橋
19	深鉢	口縁部片	①良好②赤褐色③少量含む	縄文LRとLRによる羽状縄文を地文に、横位に扇状の捺付隆線が施される。	47区表探 縄文 大木6式
20	深鉢	口縁部片	①やや不良②赤褐色③雲母片を含む	連続する弧状沈線と三角形の印刷文を施す。地文は縄文LR。	47I-24.1層 縄文 五箇ヶ台B式
21		口縁部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	縁状口縁の深鉢、口縁部に沿って並行沈線を施し、その下に扇状沈線を施す。	47I-23.5層 縄文 阿玉台B式
22	深鉢	口縁部片	①良好②赤褐色③砂粒・金雲母を含む	把手が付く深鉢。半截竹管の凹面を使用した沈線で槽内区画文を施し、その内に扇面文を施す。	47I-23.4層 縄文 阿玉台B式
23	深鉢	口縁部片	①やや不良②赤褐色③雲母片・砂粒を含む	縁状口縁の深鉢。平行船形沈線で文様を施す。	47I-23.4層 縄文 阿玉台B式
24	深鉢	胴部片	①やや不良②赤褐色③雲母片を含む	押圧を施した隆帯懸垂文とヒレ状の押圧文を施す。	47I-24.1層 縄文 阿玉台B式
25	深鉢	底部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	胴部に横位の平行沈線を等間隔に施す。	47I-23.5層 縄文 阿玉台B式
26	深鉢	口縁部片	①良好②赤褐色③少量含む	口唇部外縁に押し引き文を施す。	57I-1 縄文 扇塚式
27	深鉢	口縁部片	①やや不良②赤褐色③雲母片を微量含む	口縁部内溝。隆帯に沿って、幅広の押し引き文とペン先状押し引き文を施す。	47I-23.1層 縄文 扇塚1式
28	深鉢	口縁部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	半截竹管による集合沈線を横位に施す。集合沈線間の無文部には、刷文が施される。	46I-5 縄文 扇塚1式
29	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	右下がりの集合沈線の上に左下がりの隆線を等間隔に施す。	47E-19.4層 縄文 曾利B式
30	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	胴部を走る隆帯の下に、縦位の集合沈線を施す。	47E-19.4層 縄文 曾利B式
31	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	縦位の沈線を地文とし、2列の扇形刷刺文と扇状沈線を交互に懸下させる。	47F-19.4層 縄文 曾利B式
32		破片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	3枚の沈線間に交互刷刺を施す。	46区表土 縄文 曾利B式
33	深鉢	口縁部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	口縁部が強く内溝する深鉢。口縁部に沈線を高らせて、無文帯を施す。縄文はLR。	36区表土 縄文 加曾利E4式
34	深鉢	口縁部片	①良好②赤褐色③雲母片を少量含む	口縁部内溝する縁状口縁の深鉢。胴部に隆帯で大柄の扇巻文を構成。縄文はLR。	36I-25 縄文 加曾利E4式
35	深鉢	口縁部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	円筒状の深鉢。口縁部を走る沈線から、沈線で区画した無文縄文帯を施す。	46区表土 縄文 加曾利E4式
36	深鉢	口縁部片	①やや不良②赤褐色③砂粒を含む	円筒状の深鉢。口縁部に断面三角形の隆線を施す。	46X-9 縄文 加曾利E4式
37	深鉢	口-胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	口縁部が強く内溝する。千手状口縁の深鉢。胴部上半にV字状の区画文、下半に刷刺状の懸垂文を施す。文様は部位で異なっているようだ。沈線区画内を充塞する。縄文はLR。	46M-1 縄文 加曾利E4式
38		口縁部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	口縁部内溝。口縁無文部に積み上げた扇状突起が付き、その下の刷刺状の沈線区画文が施される。	47区5号トレンチ 縄文 加曾利E4式
39		胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	縦沈線による区画内を縄文LRで充塞。二次的に施す。	36区表土 縄文 加曾利E4式
40	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	刷刺状の沈線区画内に縄文LRを充塞。	36I-25 縄文 加曾利E4式
41	深鉢	口縁部片	①やや不良②赤褐色③砂粒を含む	口縁部が「く」の字に内折する深鉢。口縁を走る断面三角形の隆線から、沈線区画の懸垂無文帯を施す。縄文はLR。	46I-2 縄文 加曾利E4式
42	深鉢	口縁部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	口縁部無文帯下に隆帯を施す。隆帯は文様施文部分で突出している。	36I-25 縄文 加曾利E4式
43	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	沈線区画内を縄文LRで充塞。	26I-25 縄文 加曾利E4式
44	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	縦沈線による区画内を縄文LRで充塞。	36区表土 縄文 加曾利E4式
45	深鉢	胴部片	①やや不良②赤褐色③砂粒を含む	沈線区画の縄文帯で、扇巻文を構成。	46区表土 縄文 加曾利E4式
46	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③雲母片を含む	縦沈線で区画文を施す。縄文の施文は無い。	46X-8 縄文 加曾利E4式
47	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	3本単位の断面三角形の隆線で、大柄な文様を描く。空白部に充塞する縄文はLR。	36区表土 縄文 加曾利E4式

## 第4節 検出された遺構と遺跡

番号	種類	部位	①地成り色調③粘土	形状・文様の特徴	備考
48	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③砂粒を含む	2本半位の前面三角形の隆線で、大柄な文様を描く。空白部に充てる縄文はLR。	36区表土 縄文 加曾利E4式
49		胴部片	①良好窯にぶい焼③白色軽石を含む	前面三角形の隆線で区画された無文縄文帯が施される。	47区5号トレンチ 縄文 加曾利E4式
50	深鉢	胴部片	①やや不良窯③砂粒を含む	沈線区画の縄文帯で、渦文を構成。	46区表土 縄文 加曾利E4式
51	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	U字状の沈線区画内に縄文LRを充てる。	36R-24 縄文 加曾利E4式
52	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	胴部には倒伏状の沈線区画文。区画内を充てる縄文はLR。	36R-24 縄文 加曾利E4式
53	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	倒伏状の沈線区画内に縄文LRを充てる。	36R-25 加曾利E4式
54	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	細沈線による区画内を縄文LRで充てる。	36区表土 縄文 加曾利E4式
55	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	細沈線による区画内を縄文LRで充てる。	36区表土 縄文 加曾利E4式
56	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	細沈線区画内に縄文LRを充てる。縄文LRを地文に懸垂沈線を描す。二次的に煎熟。	36区縄文 加曾利E4式
57	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	縄文LRを地文に懸垂沈線を描す。縄文の地文は無い。	46X-9 縄文 加曾利E4式
58	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	細沈線で区画文を描す。区画内を充てる縄文はLR。	46W-9 縄文 加曾利E4式
59	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	縄文LRを縦位に施す。	46X-9 縄文 加曾利E3-4式
60	深鉢	胴部片	①やや不良窯にぶい焼③砂粒を含む	前面三角形の隆線による区画内を縄文LRで充てる。	36区表土 縄文 加曾利E4式
61	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	前面三角形の隆線による区画内を縄文LRで充てる。	36区表土 縄文 加曾利E4式
62	深鉢	把手	①良好窯にぶい焼③砂粒を含む	底頂部が歪状をなし、そこから橋状の把手が付く。	36区表土 縄文 加曾利E4式
63	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③砂粒を含む	胴部下半に倒伏状の区画文を施す。縄文はLR。	36R-25 縄文 加曾利E4式
64	深鉢	把手	①良好窯にぶい焼③砂粒を含む	いわゆる両耳型である。文様区画は前面三角形の隆線。	46区表土 縄文 加曾利E4式
65	深鉢	把手	①良好窯にぶい焼③砂粒を含む	底頂部が歪状をなし、そこから橋状の把手が付く。	36区表土 縄文 加曾利E4式
66	深鉢	口縁部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	朝顔形深鉢。口縁部が「く」の字に内折し沈線で渦巻状の文様を施す。	47R-12.4層 縄文 堀之内2式
67	深鉢	口縁部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	波状口縁の深鉢頂部に内孔と円形付付文を施し、そこから2本の横線を垂下させる。文様は縄文を充てる沈線区画で構成。	47I-11.4層 縄文 堀之内1式
68	深鉢	底部片	①やや不良窯にぶい焼③砂粒を含む	底面に倒伏帯が付く。	47I-22.4層 縄文後期
69	深鉢	胴部片	①良好窯にぶい焼③黄褐色砂粒を含む	密着条痕。縦位のハケ目を施す。	47F-8.3層 縄文時代晩期終末 赤式か?
70	碗	碗片	①やや不良窯にぶい焼③砂粒を含む	無文縄文を施す。	47G-23.4層 時期不明
71	小型甕	胴部片	①良好窯にぶい焼③中砂粒と極僅かに麻粒を含む	外面は平行沈線による区画内に横矢羽根文が施される。内面上部に荒いナデ。接合痕が残る。	46W-9 弥生中期初期頭
72	深鉢	口縁部片	①良好窯にぶい焼③中砂粒と赤色麻粒を少量含む	口唇折れ。内外面にハケ目。	47D-23.5層 弥生 岩塚山式
73	甕	胴部片	①良好窯にぶい焼③中砂粒を含む	外面は無文縞状文。内面ミガキ。	47区表探 弥生 樽式
74	甕	胴部片	①良好窯にぶい焼③中砂粒を含む	外面は倒伏の条痕。内面ミガキ。	47区表探 弥生
75	甕	胴部片	①良好窯にぶい焼③中砂粒を含む	外面は細かいRの横位縄文。内面ナデ。	47F-22.5層 弥生中期前半
76	甕	胴部片	①良好窯にぶい焼③中砂粒を含む	外面は倒伏のハケ目。内面ミガキ。	36区表土 弥生中期
77		胴部片	①良好窯にぶい焼③中砂粒を含む	口縁部ナデ。外面口唇部ヘラ削り。内面口唇部ハケ目。外面無付着。	47D-17.3層 弥生 聯合か?
78		底部片	①良好窯にぶい焼③中砂粒を含む	外面は細かいRの横位縄文。内面ナデ。内面にはヘラ状工具によるミガキ痕が残る。	47F-22.5層 弥生中期前半

## 黄銅器

(単位: cm)

番号	種類	部位	計測値	①地成り色調③粘土	その他の特徴	備考
79	環形銅器	底部片	口一底(5.7)高(2.4)	①難化磁。縄文期硬質③砂粒を含む		47D-16.3層

## 陶磁器

(単位: cm)

番号	種類	部位	計測値	①地成り色調③粘土	その他の特徴	備考
80	青磁	口縁部片	口一底一高一	①堅中。灰③凝灰③細砂		47I-16 鹿島窯系15c。
81	陶器	口縁部片	口(11.4)底一高(1.5)	①堅中。灰白③凝灰③細砂	内外面に透明度の高い釉がかかる。	47F-17.1層 瀬戸、美濃16c・大宮
82	陶器	底部片	口一底一高一	①堅中。淡黄③灰白③細砂	底部に赤切り痕らしきものが見られる。重ね焼き痕らしきものが認められる。内外面に芝野釉がかかり滑らかで光沢がある。内面鉄起。	47I-14 瀬戸、美濃17c・廣

第5章 西久保I遺跡

石器				(単位: cm, g)
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
83	ステイパー	長4.4幅4.6厚1.1重26	一部欠損。両面に加工痕が見受けられるが表面に特に集中する。	46U-3
84	加工痕のある石器	長5.6幅6.1厚1.3重41	定形。表面に加工痕が見受けられる箇所と思われる。	47H-21, 4層
85	使用痕のある石器	長4.2幅3.9厚0.8重10	一部欠損。表面に使用痕。用途か?	47I-21, 4層
86	石核	長1.7幅3.0厚1.2重5.94	表面と裏面に小型割片を剥離した痕跡が集中する。	46区表探
87	磨石	長(2.9)幅(6.7)厚(3.1)重87	破片。両面に磨面が見受けられる。	36区表探
88	磨石	長14.25幅8.45厚3.90重739	定形。両面に磨面が見受けられ表面には凹み穴も見受けられる。	46M-1
89	磨石	長17.8幅10.5厚5.5重1550	定形。表面に磨面、右側面に凹面が見受けられる。上面及び右側面を中心に敲打痕は集中する。	46T-5
90	磨石	長10.9幅7.8厚5.25重710	定形。表面に磨面が、上面及び下面に敲打痕が見受けられる。	46Y-10
91	白石	長18.00幅14.50厚5.90重2047	定形。両面、中央部に若干の凹み穴が見受けられる。	46T-5
92	打製石斧	長13.2幅6.3厚2.4重161	定形。胎形に近い形状。側面の潰れや、方部の欠損が見られない。未製品か?	47H-19
93	打製石斧	長幅厚重222	基部欠損。胎もしくは分銅形に近い形状と思われる。方部先端は磨鈍する。	表探
94	不明	長(10.6)幅6.6厚3.35重396	磨製石斧からの転用と考えられるが用途不明。各面に磨面が見受けられる。また側面の一部に敲打痕が見られる。	46区表探 弥生期?

金属類				(単位: cm, g)
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
95	小刀	長一幅一厚0.2重3.0	破片。片方と思われる。	表探 鉄製
96	鋸	長2.7幅2.8厚2.0重11.0	輪造し。短刀等の銛先につく鋸	57区 銅主材
97	鉄片	長2.9幅3.15厚0.5重25.0		46X-7
98	鉄部	長7.0幅一厚4.5重6.0	破片。用途不明。銼鉄。	47区表探
99	鋸	長(6.1)幅0.9厚0.7重5.0	破片	47区表探
100	角釘	長2.9幅0.45厚0.4重1.0	頸部欠損	47I-25
101	釘?	長(2.5)幅0.5厚0.45重1.0		表探

銭貨						(単位: cm, g)	
番号	種類	残存	銭径	内径	厚さ	重さ	備考
102	熊掌元宝	定形	22.75-23.10	20.10-20.35	1.25-1.30	2	47D-16
103	永樂通宝	定形	24.65-24.70	20.40-20.90	1.20-1.25	2.49	47J-17
104	文久元宝	定形	27.10-27.20	19.55-20.40	1.00-1.15	4.14	浅淵11本 47D-16

## 第5節 小結

本書では、平成10・12年度に行われた本調査を中心に報告を行った。調査の結果、長野原町の分布調査で示されている遺跡範囲は広がる可能性が高いことが判明した。本遺跡は、ハットダム建設の進展に際し、今後も調査面積が拡大していく事が確実である。本遺跡の性格などを位置づけた考察及びまとめ

については、すべての調査が終了した時点で行われるべきであろう。

今回は小結として、本報告書に掲載された調査区及び、長野原町の遺跡分布調査票に示されている遺跡範囲、及び今後調査が行われるであろう、工事予定範囲を示す。調査の過程を表す資料として活用していただきたい。





第96圖 Y D3-02西久保1遺跡

S=1/1000 0 25 50m



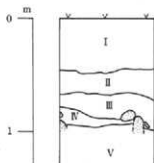
## 第6章 山根Ⅲ遺跡

### 第1節 遺跡の立地

遺跡は吾妻川右岸の中段段丘上に位置する。標高は、およそ590mである。本遺跡は北に向かってやや舌状に飛び出した段丘の先端にある。北向き傾斜の地形で、西側は深沢、北側は吾妻川に削られ、断崖となっている。その先は吾妻川の急崖となっている。本遺跡は中段段丘の平坦面の西端部に存在する。この平坦面は横壁地区の中で最も大きい。この平坦面の東端には横壁勝沼遺跡、中央には横壁中村遺跡が存在する。本遺跡の南側には長野原町の遺跡分布調査報告書に記載されている山根Ⅲ遺跡が存在する。山根Ⅲ遺跡の遺跡範囲の拡張が行われる予定のため、本遺跡もこの遺跡範囲に含まれることとなる。調査区周辺は耕作地として現在も利用されている。

### 第2節 基本層序

東西に細長く伸びる調査区は西側部分と東側部分で層序が大きく異なる。地山までの土層は西側部分で厚く、東に進むに従って薄くなる。調査前は端部を除いて調査区のほとんどは耕作地として利用されていた。表土であるⅠ層のほとんどは耕作土である。調査区の東側では耕作土の下層がすぐに地山という様相となり、遺構の検出が困難な状況である。そのため、遺構の確認は調査区西側が中心となる。遺構確認面は第Ⅲ層上面で、最終確認面が第Ⅳ層となる。遺物は、第Ⅱ層～第Ⅲ層において検出される。



第97図 山根Ⅲ遺跡基本土層

- 第Ⅰ層 黒褐色土。黄褐色軽石、白色軽石を少量含む。
- 第Ⅱ層 黒色土。黄褐色軽石を微量に含む。
- 第Ⅲ層 黒褐色土。黄褐色土のブロックを含む。黄褐色軽石を含む。
- 第Ⅳ層 黄褐色土。漸移層。黄褐色軽石を多く含む。
- 第Ⅴ層 黄褐色土。地山。礫を多く含む。

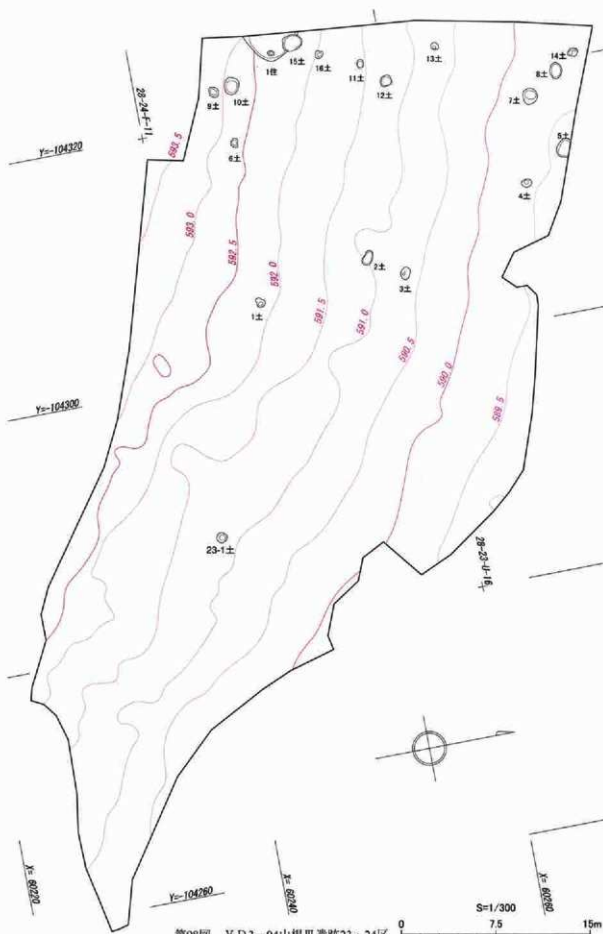
### 第3節 遺跡の概要

検出された遺構は、住居跡1軒、土坑17基である。遺構の分布は、深沢に削られた断崖際である、24区の西側に集中している。

住居跡は調査区の西端に西半分がかかった形で検出された。出土遺物は小破片の縄文土器が中心である。遺物から縄文時代中期に比定されるものと考えられる。

検出された土坑は、掘り込みが浅く形が不明瞭なものが多い。その中で、調査区の南西部、住居の東に隣接して検出された24-10号土坑は掘り込みも深く、形も明瞭である。覆土中の遺物から、遺構の時期は、縄文時代中期のものと考えられる。この土坑を含め、遺物が検出された土坑は4基である。いずれの遺構も、縄文時代に比定されるものである。

遺物包含層は西側で厚く、東側で薄い。西側でも、特に北西部、吾妻川寄りの包含層中から多くの遺物が検出されている。出土遺物は縄文時代中期の土器片及び打製石斧を中心とした石器などである。本報告書に掲載された他遺跡と比較すると、規模に較べ打製石斧の出土量が多い。そのため、本遺跡出土の打製石斧については、形態分類を行って傾向を見ることとした。分類については、付録1石器組成表の最後に記載したので参照していただきたい。



第98图 YD3-04山根Ⅲ遺跡23・24区

## 第4節 検出された遺構と遺物

## (1) 住居

## 24-1号住居

位置 24G-13 PL 40

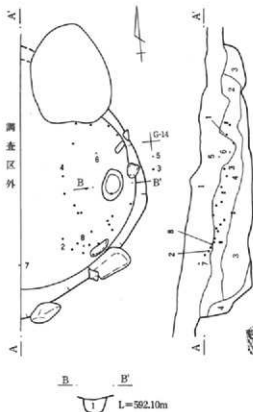
形態 調査区界にあることと、24-15号土坑との重複により形態は不明瞭である。一部に残る壁の形状から、円形の平面形状を呈すると思われる。概ね半分弱程度が検出されていると考えられる。

規模 確認長軸4.60m 確認短軸1.96m

確認面積5.65㎡

主軸方位 不明

内部施設 柱穴を1基検出。住居東端の壁際に位置



## 24-1住

- 1 黒褐色土 (灰土) 縞まりのない土。  
 2 黒黄褐色土 塊瓦。  
 3 黒黄褐色土 黄色土が混じる。軽石を含む。  
 4 黄褐色土 黒褐色土を含む。

0 1:60 2m

する。長軸50cm短軸22cmの楕円形で、深さは24cm程である。柱痕は確認できない。

確認最大壁高及び壁の状況 82cm。但し調査区界の西壁断面での確認である。

床面の状況 若干の凹凸があるものの概ね平坦である。床面直上にわずかに焼土が見られる。しまりは弱い。

炉 調査範囲からの検出なし。

埋壜 調査範囲内からの検出なし。

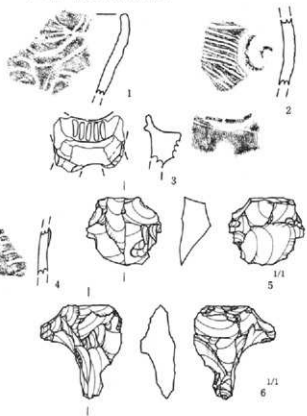
重複 24-15号土坑より古い。

埋没状態 黒褐色土で埋没し、レンズ状に堆積している。地山の黄色土が若干混入する。

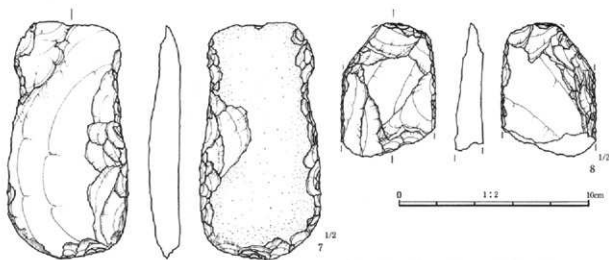
出土遺物 検出されたのは土器23点、石器5点である。土器は縄文時代中期後半の曾利式土器が中心である。1は曾利Ⅳ式土器、2-4は曾利Ⅱ式土器である。石器のうち7・8は打製石斧である。

(遺物観察表127頁)

その他 縄文時代中期後半



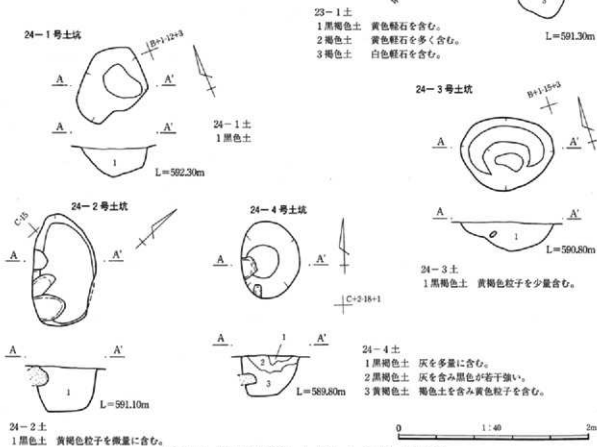
第99図 山根Ⅲ遺跡24-1号住居(1)



第100図 山根Ⅲ遺跡24-1号住居 (2)

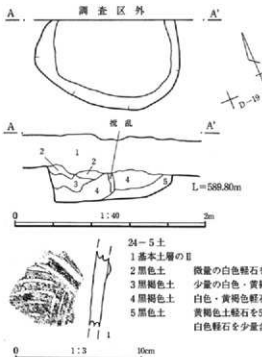
(2) 土坑

23区から1基、24区から16基、合計17基の土坑が検出されている。表土が浅かった為、これらの土坑は小規模で掘り込みも浅く、時期が確認できるものが非常に少ない。遺物が検出されているものを中心に主な土坑について概略を記載する。



第101図 山根Ⅲ遺跡23-1・24-1・2・3・4号土坑

24-5号土坑



24-5土

- 1 基本土層のII  
 2 黒色土 微量の白色軽石を含む。  
 3 黒褐色土 少量の白色・黄褐色軽石を含む。  
 4 黒褐色土 白色・黄褐色軽石を含む。  
 5 黒色土 黄褐色土軽石を50%含む。  
 白色軽石を少量含む。



第102図 山根Ⅲ遺跡24-5・7号土坑

24-5号土坑

位置 24D-19 PL 41

北半が調査区外になるが、隅丸方形の平面形状を呈すると思われる。

底面はほぼ平坦である。西側の壁は鋭角に、東側の壁はなだらかに立ち上がる。埋没土は黒褐色土主体でレンズ状に堆積する。出土遺物は覆土中から縄文土器2点が検出されている。1は曾利Ⅳ式土器である。(遺物観察表127頁)

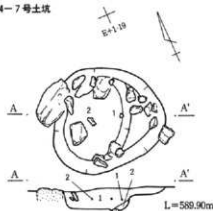
24-7号土坑

位置 24E-18 PL 41

ほぼ円形の平面形状を呈する。

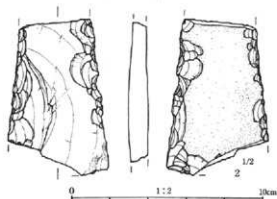
底面はほぼ平坦で、逆台形の断面形状を呈している。埋没土は黒褐色土主体である。出土遺物は縄文土器が5点、石器が1点である。1は曾利Ⅳ式土器である。2は打製石斧である。(遺物観察表128頁)

24-7号土坑



24-7土

- 1 黒褐色土 灰褐色土を混入する。白色粒子、黄褐色粒子を少量含む。  
 2 黄褐色土 黄褐色土との混土。黄褐色粒子を少量含む。



24-10号土坑

位置 24F-12 PL 42

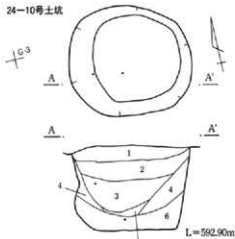
円形の平面形状を呈する。

本遺跡の遺構の中でもっとも残存状態がよい。円形の平面形状を呈する。

断面は逆台形の形状を呈する。壁面の一部に、袋状の掘り込みが見受けられる。埋没土は黒褐色土と褐色土で、レンズ状に堆積している。出土遺物は縄文土器3点である。1は覆土中より出土した曾利Ⅳ式土器である。これらの土器は下層の褐色土中から出土しており、遺構の時期も該期にあたると思われる。(遺物観察表128頁)

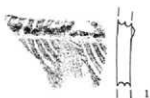
第6章 山根Ⅲ遺跡

24-10号土坑

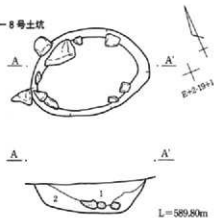


24-10土

- 1 黒褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを含む。ロームも少量含む。
- 2 黒褐色土 ロームが少量混入。炭化物を極少量含む。
- 3 褐色土 ロームブロック、オレンジ白の粒子を含む。
- 4 黄褐色土 褐色土を含む。
- 5 褐色土 ロームが少量混入する。
- 6 褐色土 混入物なし土層1片出土。



24-8号土坑



24-8土

- 1 黒褐色土 灰褐色土を含む。白色粒子、黄褐色粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 黒褐色土を含む。黄褐色粒子を少量含む。

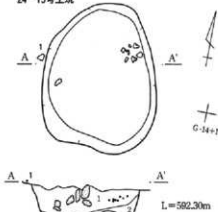
24-15号土坑

位置 24G-14 PL 42

不整形の平面形状を呈する。

底面は西に向かって緩やかに傾斜する。断面はほぼ逆台形の形状を呈する。埋没土は黒褐色土で土坑中央付近に礫が集中する様子が見られる。出土遺物は縄文土器9点である。いずれも覆土中からの出土で、土坑の北東部に集中している。1の土器は曾利Ⅳ式土器である。(遺物観察表128頁)

24-15号土坑

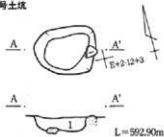


24-15土

- 1 黒褐色土 ロームを含む。黄褐色粒子を微量含む。
- 2 黄褐色土 黄褐色土を50%含む。



24-6号土坑



24-6土

- 1 黒褐色土 黄褐色軽石を微量に含む。



第103図 山根Ⅲ遺跡24-6・8・10・15号土坑



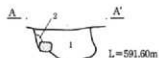
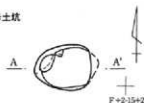
第4節 検出された遺構と遺物

24-9号土坑



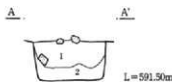
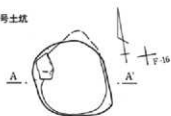
24-9土  
1 黒褐色土 黄褐色ロームブロックを含む。  
黄褐色粒子を少量含む。

24-11号土坑



24-11土  
1 黒褐色土 ロームを疎らに含む。黄色い粒子を若干含む。  
2 黄褐色土 黒褐色土を少量含む。

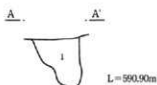
24-12号土坑



24-12土  
1 黒褐色土 ロームを含む。  
2 黒褐色土

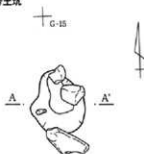


24-13号土坑



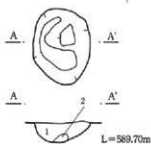
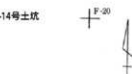
24-13土  
1 黒褐色土 黒色土を混入する。黄褐色粒子を微量に含む。

24-16号土坑

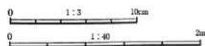


24-16土  
1 黒褐色土

24-14号土坑

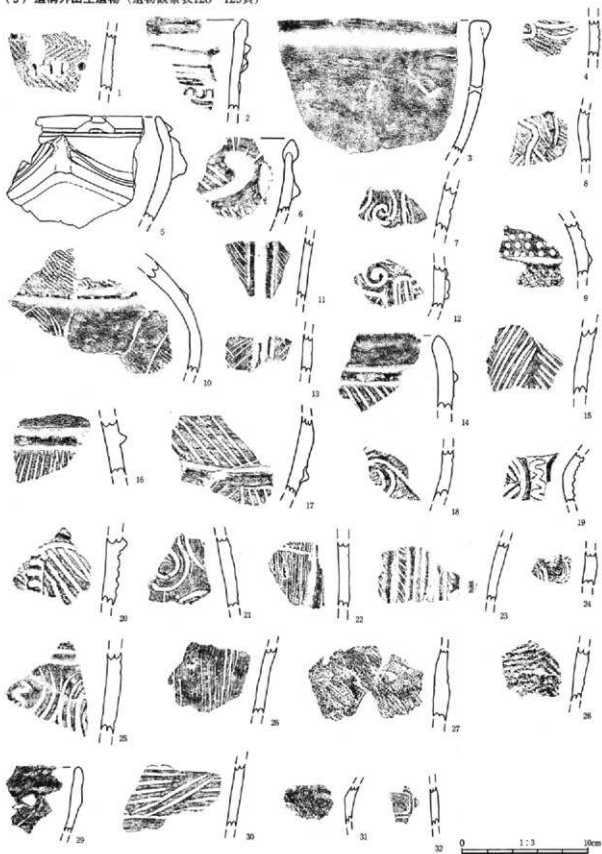


24-14土  
1 黒褐色土 黄褐色粒子、白色粒子を少量含む。  
2 黄褐色ローム 黒褐色土を含む。黄褐色粒子、白色粒子を含む。



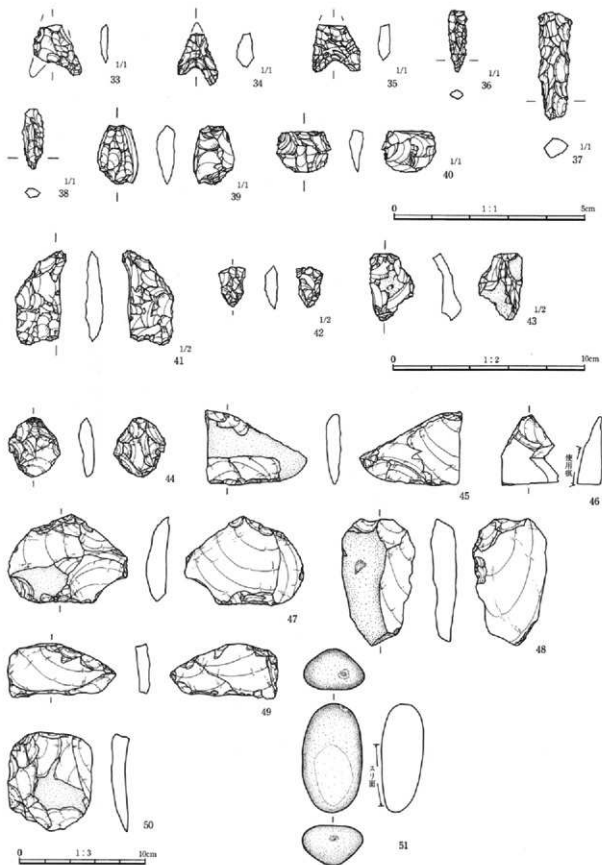
第104図 山根田遺跡24-9・11・12・13・14・16号土坑

(3) 遺構外出土遺物 (遺物観察表128・129頁)



第105図 山根遺跡遺構外出土遺物 (1)

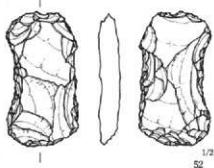
第4節 検出された遺構と遺物



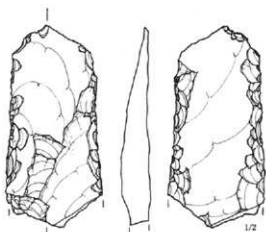
第106図 山根Ⅲ遺跡遺構外出土遺物 (2)

第6章 山根田遺跡

打製石斧Ⅰ類 (類型の詳細は295頁参照)

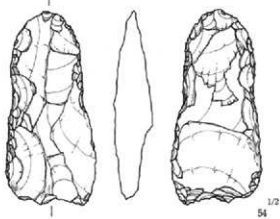


1/2  
52

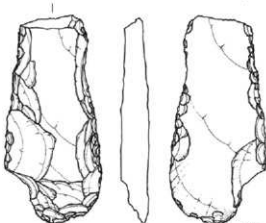


1/2  
53

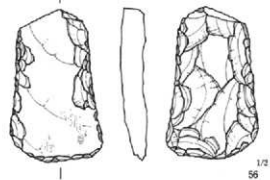
打製石斧Ⅱ類



1/2  
54

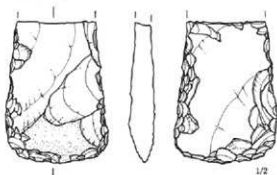


1/2  
55



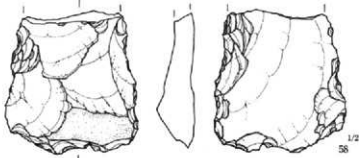
1/2  
56

打製石斧Ⅳ類

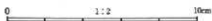


1/2  
57

打製石斧Ⅴ類

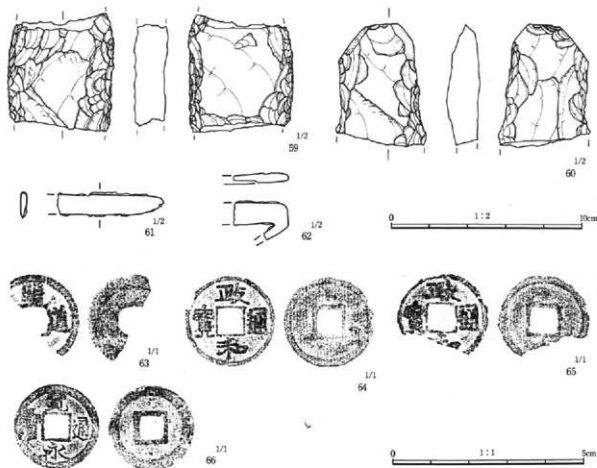


1/2  
58



第107図 山根田遺跡遺構外出土遺物 (3)

## 打製石斧Ⅳ類



第108図 山根Ⅲ遺跡遺構外出土遺物(4)

第9表 山根Ⅲ遺跡遺物観察表

24-1号住居		土器			
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁部片	①良好②橙赤砂粒を含む	口縁に並行沈線で通気文を施す。	縄文 管轄Ⅳ式
2	深鉢	胴部片	①良好②明赤砂粒を含む	平行隆帯で渦巻文を施す。空白を沈線で充填。二次的に被熱。	縄文 管轄Ⅳ式
3	深鉢	口縁部把手	①良好②にぶい赤粉③砂粒を含む	輪状把手の空白に扇状沈線を施す。	縄文 管轄Ⅳ式
4	深鉢	胴部片	①良好②明黄緑③砂粒を含む	絶行する斜付隆線と風状沈線。	縄文 管轄Ⅳ式?

石器		（単位：cm, g）		
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
5	加工痕のある石器	長1.85幅1.95厚0.75重2.34	右側に調整痕が見受けられる。	
6	加工痕のある石器	長2.5幅2.15厚0.95重2.95	上部に調整痕が見受けられる。	
7	打製石斧	長12.6幅6.4厚1.7重195	完形。上半部に柄れを持つ。柄根部と刃部が摩耗する。	
8	打製石斧	長7.1幅4.8厚1.5重68	刃部のみ残存。形態不明。	

24-5号土坑		土器			
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	①良好②明赤粉③白色緑石を含む	平行隆帯で渦巻文を施す。空白を矢羽状の沈線で充填する。二次的に被熱。	縄文 管轄Ⅳ式

第6章 山根川遺跡

24-7号土坑 土器					
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁部片	①良好②にぶい黄褐色③白色軽石を含む砂粒が多い	平行隆帯で染褐色を施し、空白を矢羽状の沈線で充満する。	縄文 資料B1式

石器 (単位: cm, g)					
番号	種類	時期	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
2	打製石斧		長6.2幅5.4厚1.1重65	基部と刃部を欠損する。直線的な側面を持つ。形態不明。	

24-10号土坑 土器					
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	隆帯区画文、弧状沈線の充満施文。	縄文 資料B1式

24-12号土坑 土器					
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	①やや不良②明赤褐色③白色軽石を含む	2本の隆帯による区画文、並行沈線の充満施文。	縄文 資料B1式

24-15号土坑 土器					
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁部片	①良好②にぶい黄褐色③白色軽石を含む	口縁部に斜沈線を施す。	縄文 資料B1式

遺構外出土遺物 土器					
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	船末羽状縄文を施文にボタナ状の貼付文を施す。	24F-13 縄文 漆織く式
2	深鉢	口縁部片	①良好②褐色③砂粒を含む	円筒状の深鉢。口縁部に染褐色文、頸部に交互斜文による断歯文を施す。二次的に被熱。	24F-12 縄文 加曾利E2式
3	浅鉢	口縁部片	①良好②明赤褐色③白色軽石を含む	補修孔有。表面に黒色塗料の痕跡が残る。口縁折り返し。	24A-14 縄文 加曾利E2式
4	深鉢	胴部片	①良好②明赤褐色③砂粒を含む	縄文L8を施文に、2本の隆帯で文様を施す。	24F-16 縄文 加曾利E2式
5	深鉢	口縁部片	①良好②灰褐色③砂粒を含む	口縁部に隆帯で染褐色文を施す。	23W-3.9 縄文 加曾利E2式
6	深鉢	口縁部片	①良好②にぶい褐色③砂粒を含む	口縁部に隆帯で染褐色文と横凹区画文を施し、区画内に斜沈線を充満する。	23Y-17 縄文 加曾利E3式
7	深鉢	胴部片	①良好②明黄褐色③砂粒を含む	沈線で染褐色文や区画文を施す。	24B-16 縄文 加曾利E3式
8	深鉢	胴部片	①良好②灰褐色③砂粒を含む	縄文R1を施文に、沈線で模様を施す。二次的に被熱。	24B-16 縄文 加曾利E3式
9	深鉢	破片	①良好②にぶい黄褐色③白色軽石を含む	口縁部に円形刺突文を充満する。	23X-9 縄文 加曾利E4式
10	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	隆帯と横沈線による区画内文を縄文で充満する。	24A-17 縄文 加曾利E4式
11	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	隆帯による懸垂文間を斜沈線で充満する。	23X-16 縄文 加曾利E4式
12	深鉢	胴部片	①良好②明赤褐色③砂粒を含む	染褐色を伴う隆帯区画文。	24A-15 縄文 資料B1式
13	深鉢	胴部片	①良好②明赤褐色③砂粒を含む	2本単位の隆帯懸垂文間に矢羽状沈線を施す。	24A-14 縄文 資料B1式
14	深鉢	口縁部片	①良好②明赤褐色③砂粒を含む	口縁部隆帯区画内を斜沈線で充満する。	23W-10 縄文 資料B1式
15	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③雲母片を少量含む	縦位の矢羽状沈線を施す。	23X-9 縄文 資料B1式
16	深鉢	胴部片	①良好②褐色③砂粒を含む	隆帯、並行沈線。	23V-9 縄文 資料B1式
17	深鉢	口縁部	①良好②にぶい赤褐色③砂粒を含む	隆帯区画文内に、斜沈線を充満する。	表採 縄文 資料B1式
18	深鉢	胴部片	①良好②明黄褐色③砂粒を含む	隆帯による染褐色の空白部を縄文L8で充満する。	24E-18 縄文 資料B1式
19	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	隆帯による区画内に矢羽状の沈線を施す。	23Y-15 縄文 資料B1式
20	深鉢	胴部片	①良好②明黄褐色③砂粒を含む	刻み目が付く隆帯区画内を斜沈線で充満する。	24D-17 縄文 資料B1式
21	深鉢	胴部片	①良好②明黄褐色③砂粒を含む	低い隆帯で染褐色文を施す。	23W-8 縄文 資料B1式
22	深鉢	胴部片	①良好②褐色③砂粒を含む	懸垂無文期間を縦位のハゲ目状集合沈線で充満する。二次的に被熱。	24G-12 縄文 資料B1式
23	深鉢	胴部片	①良好②褐色③砂粒を含む	太い沈線懸垂文間を斜位の沈線で充満する。	24C-16 縄文中期
24	深鉢	胴部片	①良好②明赤褐色③砂粒を含む	ハゲ目状施文片で、曲線的な文様を施す。	23V-9 縄文中期
25	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	3本単位の沈線による曲線的な文様と並行沈線を施す。	24C-17 縄文中期
26	深鉢	胴部片	①良好②赤褐色③砂粒を含む	縦位のハゲ目状沈線を施す。内面に炭化物付着。二次的に被熱。	23X-9 縄文中期
27	深鉢	胴部片	①やや不良②暗褐色③繊維を含む	単筋縄文L1を施す。	23W-11 縄文中期
28	深鉢	胴部片	①良好②褐色③繊維を含む	単筋縄文L1を施す。	23W-12 縄文中期
29	深鉢	口縁部片	①良好②明赤褐色③砂粒を含む	口縁内面に浅い凹線がめぐる。指頭状隆帯をほどこした隆帯がめぐり、以下に斜沈線を施す。	23W-17 縄文 加曾利B1式
30	深鉢	胴部片	①良好②褐色③砂粒を含む	並行沈線による区画内を横位沈線で充満する。	23X-16 縄文 加曾利B1式

## 第4節 検出された遺構と遺物

番号	種類	部位	①焼成土色調を呈し ②良好な赤褐色を呈し ③白色軽石を含む	彫形・文様の特徴	備考
31	漆鉢	胴部片	①良好な赤褐色を呈し ②白色軽石を含む	胴部くびれの下部に斜位の細沈線を施す。	表採 縄文 加曾利B3式
32	甕?	胴部片?	①良好な赤褐色を呈し ②白色軽石を含む	二重沈線による方形区画の一部か。区画内部には 縄文が施される。	23V-12 弥生中期

## 石器

(単位: cm, g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
33	石鏃	長1.34幅1.05厚0.2重0.35	右辺し部のみ残存。返しは棒状。無茎で基部は深い弧状を呈する。	23X-15
34	石鏃	長1.35幅1.1厚0.45重0.39	ほぼ完成。無茎で基部は深い弧状。左右の返しが不揃い。未製品か?	24C-17
35	石鏃	長1.25幅1.25厚0.3重0.62	先端部欠損。無茎で基部は深い弧状を呈する。未製品か?	24F-17
36	石鏃	長1.6幅0.5厚0.25重0.18	先端部のみ残存。全面に調整痕が残る。	24D-17
37	石鏃	長3.35幅0.9厚0.5重0.74	先端部のみ残存。やや大振り。	24区表採
38	石鏃?	長1.6幅0.55厚0.25重0.31	未製品か?	24区表採
39	楔形石器	長1.55幅1.1厚0.45重0.99	両側調整。上部に潰れが見られる。	24A-17
40	楔形石器	長1.1幅1.45厚0.4重0.61	両側調整。	24F-17
41	加工痕のある石器	長2.5幅1.35厚0.45重1.76	右側欠損。縦長割片を素材とする。全面に細かい調整痕が残る。	24A-15
42	加工痕のある石器	長1.05幅0.7厚0.35重0.29	左側欠損。縦長割片を素材とする。側面に細かい調整痕が見られる。	24区表採
43	石核	長3.5幅2.3厚1.0重11.7	全面に小形割片を剥離した痕跡が残る。	24A-15
44	楔形石器	長1.6幅4.03厚1.15重20	完成。両側調整。上下の端左右に斜縁直有り。	表採
45	スレイバー	長5.9幅8.0厚1.15重66	完成。横長割片を素材とする。	24C-16
46	加工痕のある石器	長5.6幅4.0厚1.05重48	破片か? 表面に磨面、加工痕が見受けられる。	24区1号トレンチ
47	加工痕のある石器	長7.0幅9.4厚1.8重106	完成。両面に加工痕が見受けられる。	表採
48	加工痕のある石器	長10.0幅5.8厚2.0重117	完成。縦長割片を素材とする。表面に加工痕が集中する。	24B-18
49	割片	長1.0幅8.1厚1.2重49	完成。横長割片。	24D-18
50	割片	長7.9幅6.6厚1.4重74	一部欠損? 表面に残るのは加工痕か?	表採
51	磨石	長8.7幅4.7厚3.2重195	完成。表面に磨面が見受けられ上面、下面に集中する磨打痕が見受けられる。	23V-16
52	打製石斧	長7.1幅3.8厚1.2重47	完成。短楕形に近い形状。左側が鋭く湾曲する。刃部は摩耗する。	表採
53	打製石斧	長10.7幅5.1厚1.1重92	刃部を欠損。短楕形。側面に磨面は見られない。	24C-17
54	打製石斧	長10.2幅4.8厚2.0重99	刃部欠損。短楕形に近い形状。側面中央が僅かに括れ。摩耗する。	23V-12
55	打製石斧	長11.0幅5.1厚1.5重101	刃部と基部の一部を欠損。短楕形に近い形状。摩耗があまり見られない。	24C-16
56	打製石斧	長8.1幅4.0厚1.4重66	ほぼ完成。短楕形に近い形状。刃部及び右側が磨耗する。	24A-15
57	打製石斧	長7.7幅7.0厚2.0重129	刃部のみ残存。刃部左側がやや磨耗する。	表採
58	打製石斧	長7.5幅5.4厚1.4重85	基部を欠損。形態不明。刃部に磨面が見られる。	24D-18
59	打製石斧	長6.2幅5.5厚1.8重96	基部と刃部を欠損。やや肉厚で側面に少く磨面する。	24C-18
60	打製石斧	長6.5幅4.8厚1.8重69	基部のみ残存。側面下部に括れが見られる。括れ部は磨耗する。	24A-15

## 金属器

(単位: cm, g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
61	小刀	長(5.5)幅1.3厚0.45重5	先端破片。本家形状不明。片刃。	24A-17 鉄製
62	火打金	長(2.9)幅1.2厚0.5重4	端部破片。種は端部が厚く残る。	24A-14

## 銭貨

(単位: cm, g)

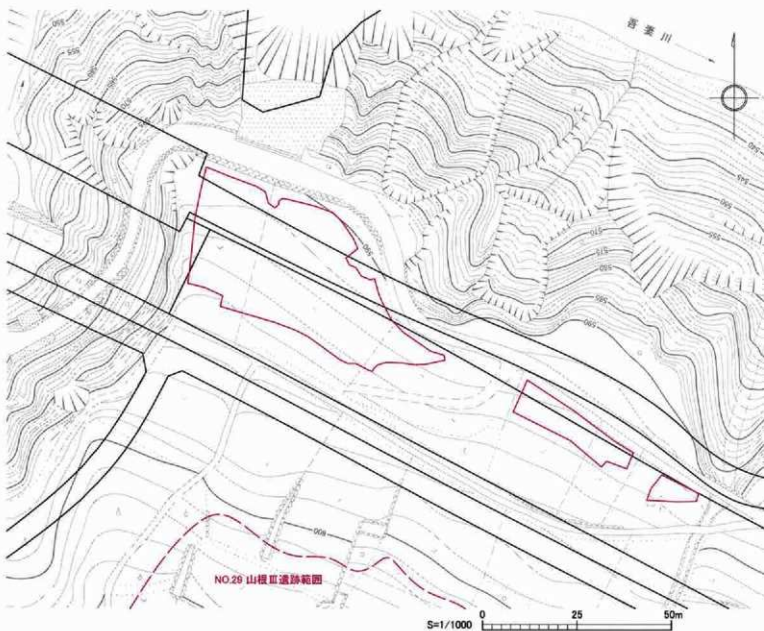
番号	種類	残存	銭径	内径	厚さ	重さ	備考
63	開口通	1/3	不明	不明	0.75~0.80	0.71	23T-11
64	政和通宝	完成	24.30~24.35	21.60~21.80	1.10~1.15	2.87	23X-17
65	政和通宝	2/3	24.3	21.4	1.00~1.20	2.26	23X-17
66	重永通宝	完成	22.85~22.90	19.20~19.35	0.90~0.95	2.08	24A-15

## 第5節 小結

本書では、平成10年度に行われた本調査を中心に報告を行った。新発見となる本遺跡からは、縄文時代の遺構が検出されている。そして、それらの遺構は隣接地へと広がっていく様相を見せている。本遺跡は、ハツ場ダム建設の進展に際し、今後も調査面積が拡大していく事が確実である。本遺跡の性格な

どを位置づけた考察及びまとめについては、すべての調査が終了した時点で行われるべきであろう。

今回は小結として、本報告書に掲載された調査区及び、長野原町の遺跡分布調査票に示されている遺跡範囲、及び今後調査が行われるであろう、工事予定範囲を示す。調査の過程を表す資料として活用していただきたい。



第109図 Y D3-04山根Ⅲ遺跡



## 第7章 下田遺跡

### 第1節 遺跡の立地

本遺跡は吾妻川左岸の中位段丘上に位置する。標高は約560mである。長野原町の吾妻川流域の中位段丘上には、蛇行する水流に削られ、川に向かって舌状に飛び出した台地が数カ所存在する。吾妻川沿遺跡の平坦面が狭隘な中で、これらの台地上の平坦面は比較的幅広いものとなっている。本遺跡はこのような舌状台地の、北西部に存在する。調査区の北側は、最上位段丘と中位段丘を隔てる断崖となっている。台地上は天明3（1783）年、浅間山の噴火に伴い泥流が発生した際の被害を受けている。この泥流の際の堆積物は、調査地点で現在でも約1.5mの厚さで堆積している。この舌状台地上には長野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている下原遺跡（下田遺跡）が存在し、遺跡範囲は未確定ではあるが、本遺跡もその一部に含まれる。また、台地の北東部を、試掘調査（第11章第3節）している。当地は現在、集落・耕作地として利用されている。

### 第2節 基本層序

遺構は近世の住居跡と畑跡である。遺構は第Ⅱ層の泥流層直下より検出されている。第Ⅲ層の浅間A軽石（以下As-A）は、畑跡では畝間を中心に地点的に堆積している様子が見受けられる。

第Ⅰ層 天明3（1783）年、浅間山の噴火に伴い発生した泥流堆積物層。

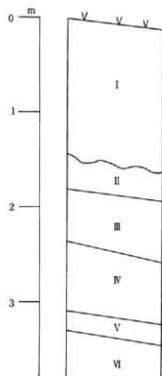
第Ⅱ層 黒褐色土。小礫混じる。畑耕土。

第Ⅲ層 黒褐色土。小礫や多く混じる。

第Ⅳ層 黒色土。小礫多く混じる。

第Ⅴ層 黄色土。小礫混じる。

第Ⅵ層 黄色砂質土。



第110図 下田遺跡基本土層

### 第3節 遺跡の概要

検出された遺構は近世の住居跡1軒と畑跡2枚である。遺構は泥流堆積物に覆われている。この泥流堆積物と遺構面との間にはAs-Aが堆積している。44-1号住居跡からは、囲炉裏が2基、竈が1基検出されている。これらの周囲は固く締まっており、客土と思われる土が敷き詰められた土間となっている。この土間の周囲にはAs-Aの堆積が見られない。このことから、As-A降下時には上層が存在していたものと思われる。

45-1・2号畑は、段々畑のような様相を呈している。1号畑は2号畑より1段高い位置に存在する。両者を隔てる段差の下側には、石列や溝が見受けられる。2号畑と住居はほぼ同一の面に存在する。畝は住居西側の軒先約1.5mの場所から広がっており、45-1号畑に比べると範囲は非常に狭い。住居脇に狭い畑を持つ景観を看取することができる。

## 第4節 検出された遺構と遺物

### (1) 住居

#### 44-1号住居

位置 44Y-2 PL 43・44

**形態** 今回検出されたのは、建物の土間の部分である。北側は調査範囲外となるため、また、東側は擾乱のため確認することができない。しかし、土間の南側に段差が存在する。南東隅にある溝が、土間の東側に向かっている。土間の西側は土間の縁辺に沿って(第112図 青ライン)、直線上にAs-Aが堆積しない。調査区の北横断面で2号囲炉裏が確認できる。以上のことから、確認された土間を南端とし、調査範囲外の北側にザシキが存在する建物であろうと考えられる。北にさらに延びると考えられることから、南北に棟を持つ長方形の平面形状を呈する建物ではないかと考えられる。

**規模** 確認範囲は、東西7.76m×南北6.30mである。確認された長さでは東西の方が長い、内部施設の様子から、建物は南北に長軸を持つであろうと思われる。

**主軸方位** N-10°-E

**内部施設** 建物内部より検出された土坑のうち、柱穴と考えられるものは22本である。掘立柱建物と考えられる。土間の南側に石列が見られるが、石列中に等間隔の柱穴が見られることから、掘立柱の建物であろうと考えられる。建物の形態と柱の配置から、桁柱のものと思われるものはP7～P12の6本で建物の周囲を巡る。各柱穴は1.4m～1.6m程の間隔で並ぶ。また、P1～P4の4本は桁柱から60cm程内側に桁柱と平行して並ぶ。各柱穴の間隔は、2m程である。この4本の柱穴のさらに内側に、P14～P22の9本の柱穴が並ぶ。この9本の柱穴は、他の柱穴の並びと様相を違えており、柱穴を結んだ線は他の柱穴の並びと直交する。各柱穴間は、20cmほどである。土間の中には、上面が平らな礫が数個存在しているが、住居との関連は不明である。床板を支える東柱の痕跡は調査範囲内からは検出されていない。

ない。

**床面の状況** 確認された建物の範囲内は、全面が土を貼り、つき固めた土間となっている。貼られた土は黒褐色土が主体であるが、所々に黄褐色土が用いられている。黄褐色土が顕著に使われているのは、囲炉裏の周りと土間の縁辺である。また、床面に部分的に焼土が見られるが、これは土間の補修の際等に混入したのではないかと推測される。

**屋外施設** P8の位置から南方、屋外に向かって、90cm程の幅で黄褐色土が貼られている。出入り口のタタキにあたると思われる。このタタキの上には、2つ程の飛び石が見られる。また、このタタキの東側には溝状の落ち込みが存在する。溝状の落ち込みが住居の縁辺と考えるが、屋内から屋外に掘られた溝である可能性も考えられる。

**囲炉裏** 2基の囲炉裏が検出されている。

1号囲炉裏は竈の南側、西側に存在する。1辺約120cm程の方形に粘土を貼って構築されている。燃焼部は直径85cm程の円形である。燃焼部の外縁に沿って溝が巡っている。この溝が構造物の跡だと考えると、竈跡である可能性も考えられる。燃焼部の断面は、焼土層と灰層が互層となっており、少なくとも1回は囲炉裏の補修もしくは作り替えを行ったことを示している。

2号囲炉裏は1号竈の北東側に位置し、調査区北壁に断面のみ確認できる。竈からの距離は70cm程である。2号囲炉裏の使用面の直上はつき固められた貼り床に覆われている。そのため、作り替えにより廃棄された囲炉裏の痕跡であろうと考えられる。

**竈** 燃焼部は長軸40cm短軸30cm程の楕円形の平面形状を呈する。周囲に構築材と思われる礫が集中していることから、石積み周りを粘土で覆って竈壁が構築されていたと考えられる。断面を見ると燃焼部底面の焼土層は灰層と別の焼土層に覆われている。また、上面の焼土層は西側に傾斜している。これらのことから、上面の焼土層は、焼土化した竈東壁が西側に崩れて堆積したものであろうと考えられる。竈の西壁部分には礫が多く残り、構築時の様子

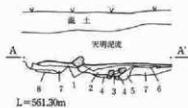


第111図 Y D4-06F田遺跡



を残している。燃焼部の西側の礎中央には円形に焼土化した部分が見られ、掛け口ではないかと考えられる。また、竈東壁と考えられる部分の東側に焼土や炭化物があまり見られないことや、掛け口の下部の床面上に炭化物層が広がることから、焚き口は西側にあったと考えられる。

重複なし

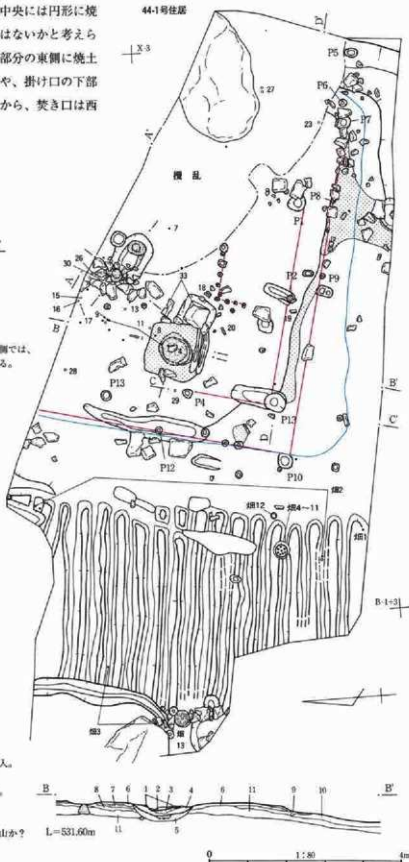


44-1住 A-A'

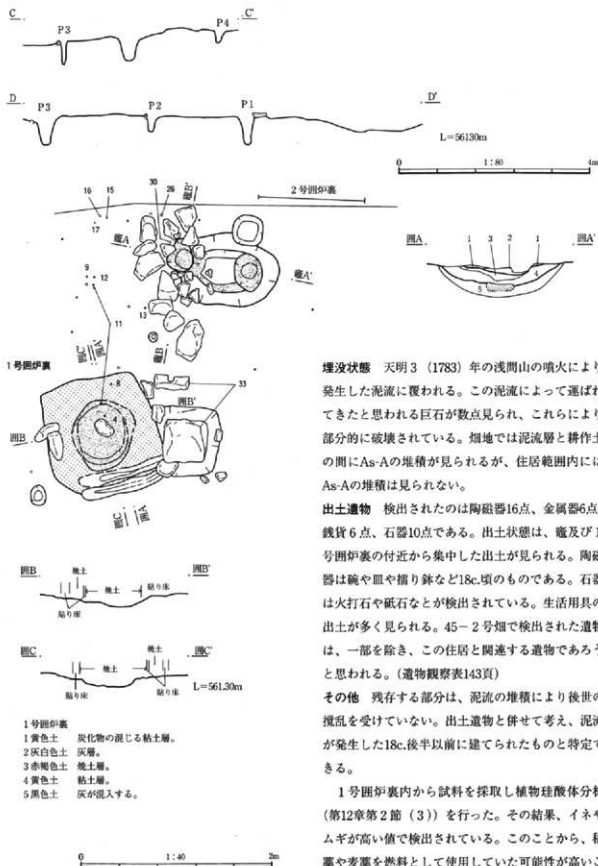
- 1 黒色土 粘床。固く締まる。土層左側では、炭化物粒を含みやや褐色がかかる。
- 2 黄褐色土 黄色土と暗褐色土の混土。焼土粒を含む。
- 3 灰色土 灰層。
- 4 赤褐色土 黄色粘土が焼土化した層。
- 5 暗褐色土 黄色粘土粒、焼土粒を多く含む。
- 6 暗褐色土 粘床。固く締まる。
- 7 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒多く含む。
- 8 黒色土 炭化物層

44-1住 B-B'

- 1 黄色土 炭化物の混じる粘土層。
- 2 灰白色土 灰層。
- 3 赤褐色土 焼土層。
- 4 黄色土 粘土層。
- 5 黒色土 灰が混入する。
- 6 黒褐色土 粘床。固く締まる。炭化物混入。
- 7 茶褐色土 粘床。固く締まる。
- 8 黒褐色土 ややしまり固い。炭化物混入。
- 9 黒褐色土 黄色粘土混入。
- 10 黒褐色土 砂混入。
- 11 黒褐色土 小礫混じり。締まりない。地山か？



第112図 下田遺跡44-1号住居 (1)



第113図 下田遺跡44-1号住居 (2)

**埋没状態** 天明3 (1783) 年の浅間山の噴火により発生した泥流に覆われる。この泥流によって運ばれてきたと思われる巨石が数点見られ、これらにより部分的に破壊されている。畑地では泥流層と耕作土の間にAs-Aの堆積が見られるが、住居範囲内にはAs-Aの堆積は見られない。

**出土遺物** 検出されたのは陶磁器16点、金属器6点、銭貨6点、石器10点である。出土状態は、竈及び1号囲炉裏の付近から集中した出土が見られる。陶磁器は碗や皿や摺り鉢など18c頃のものである。石器は火打石や砥石などが検出されている。生活用具の出土が多く見られる。45-2号畑で検出された遺物は、一部を除き、この住居と関連する遺物であろうと思われる。(遺物観察表143頁)

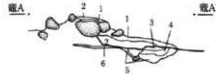
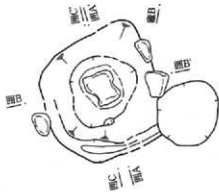
**その他** 残存する部分は、泥流の堆積により後世の攪乱を受けていない。出土遺物と併せて考え、泥流が発生した18c後半以前に建てられたものと特定できる。

1号囲炉裏内から試料を採取し植物珪酸体分析(第12章第2節(3))を行った。その結果、イネやムギが高い値で検出されている。このことから、稲藁や麦藁を燃料として使用していた可能性が高いことが考えられる。

掘り方

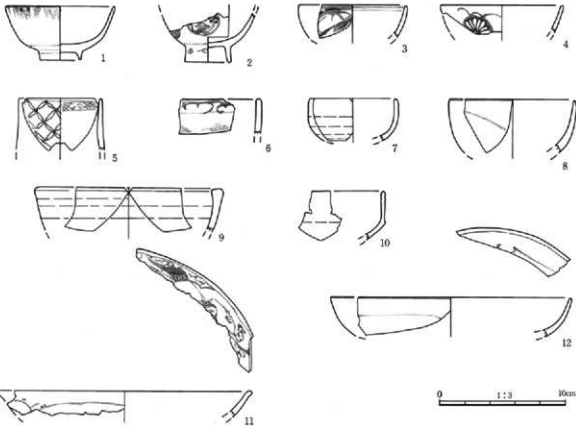
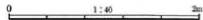


1号回炉裏

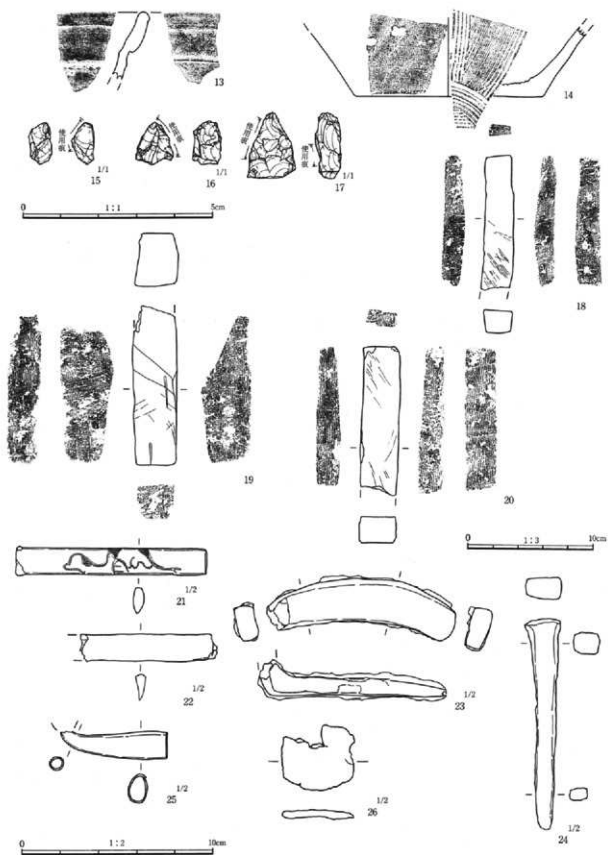


- 1 赤褐色土 焼土層。灰が混入する。  
 2 白色土 灰層。炭化物混じる。  
 3 赤褐色土 焼土層。  
 4 黒色土 被熱し、締まる。  
 5 黒色土 灰が混入する。  
 6 黒色土 炭化物層。

L=561.30m

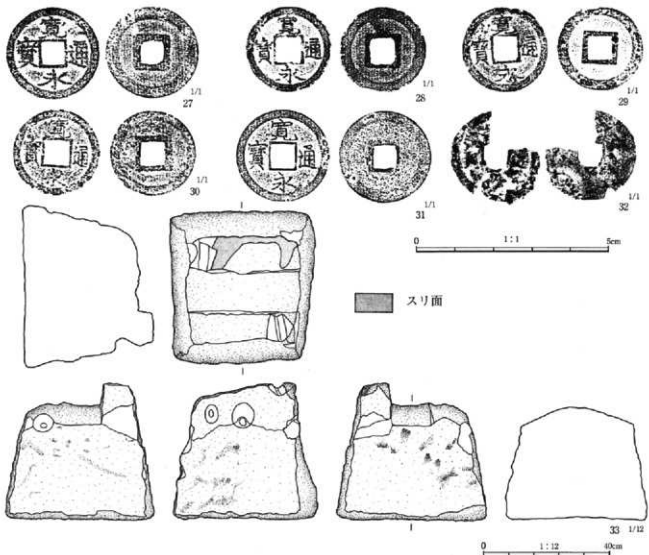


第114図 下田遺跡44-1号住居 (3)



第115图 下田遺跡44-1号住居 (4)





第116図 下田遺跡44-1号住居 (5)

(2) 畑

①As-A直下の畑跡

位置 45区 PL 43・45・46

地形と環境 調査区の西半より45-1畑と調査区中央より45-2畑の2枚の畑跡が検出されている。耕作面は緩やかに南に向かって傾斜している。

45-1号畑は最高所561.80m、最低所559.10mで比高差2.70mとなっている。45-2号畑は最高所561.38m、最低所560.84mで比高差0.54mとなっている。植物珪酸体分析(第12章第2節(3))では、当時の周囲は開かれた環境であったということが示されている。

埋没状況 畑跡の耕作面は、厚さ約1.5mの泥流堆積物に覆われている。これにより、当時の状況が状態よく残っている。泥流堆積物と耕作土の間にはAs-Aが堆積している。As-Aはサクを中心に堆積している。遺構内に見られる巨石は泥流によって運ばれてきたものであろうと推測される。

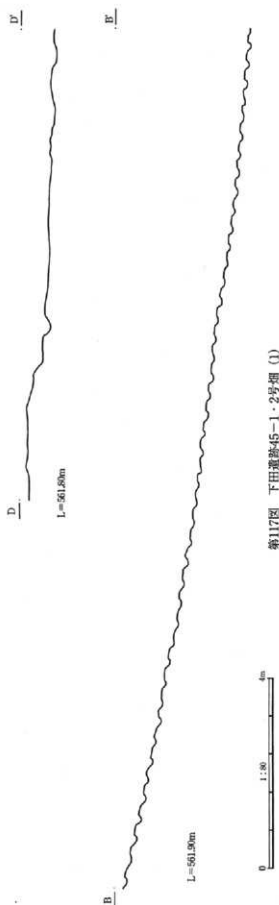
形態 調査区中央付近から東西に分かれる2枚の畑を検出した。確認できたのはそれぞれの畑の一部分であるため、全体の詳しい形状は不明である。2枚の畑の間には段差があり、下部には段差に沿って南北に延びる石列が築かれている。また、この石列に沿って浅い溝が存在している。

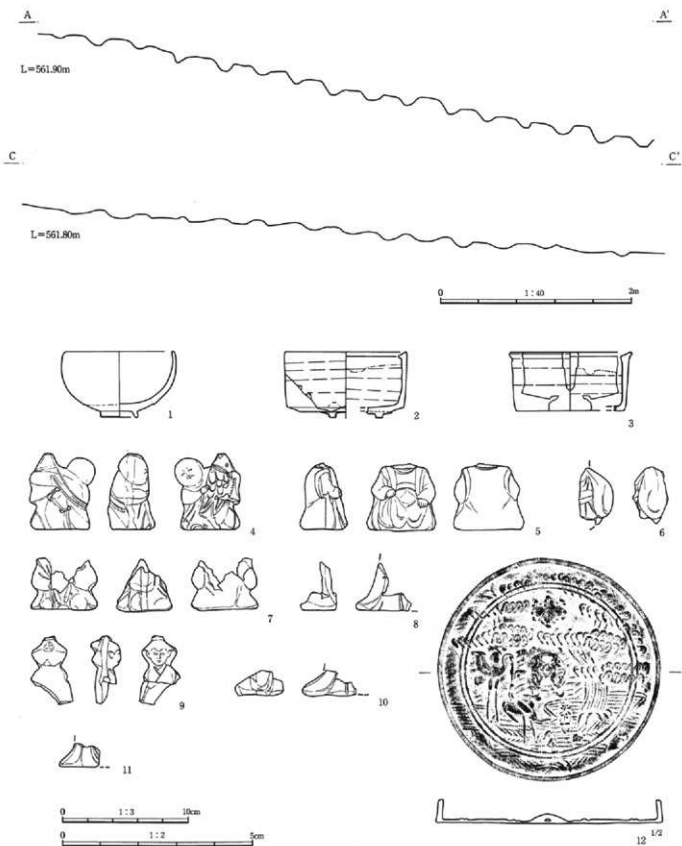
2つの畑の畝の方向は共通しており等高線に沿うように、ほぼ東西に走向する。段差の上部、調査区西側にある45-1畑は、畝幅47cm、畝高4cmである。畝は、調査区外に向かってまだ続いていく様子が見受けられる。段差の下部東側にある45-2畑の畝は住居の軒から約1.5m離れたところから始まり、畑境の石列及び溝の部分で止まっている。畝幅42cm、畝高6cmである。この畑の東西の長さは3.7m~4.2m程である。南北の長さは調査区外に掛かり不明であるが、1枚あたりの面積は1号畑と比べ、非常に狭くなるであろうと考えられる。

作物 泥流堆積物直下の畑の耕作土を試料とし、前出の植物珪酸体分析をおこなった。その結果からは、イネとムギの栽培の可能性が示されている。しかし、これらの作物については、有機肥料等として使われていた可能性も否定できないと思われる。栽培作物の特定については今後の調査結果を持って再び検討せねばならないであろう。

出土遺物 44-1号畑からは、遺物の出土はない。44-2畑からは、土人形が8点、陶磁器が2点、金属器が1点、石器が1点検出されている。1~8の土人形は、2畑の南東隅から集中して検出された。検出地点は畝の一部を円柱状に1段高く整地してある。また、畝はこの部分をまたいで東西に伸びている。これらのことから、耕作時にも土人形はこの部分に置かれており、何らかの祭祀的な意味を持つ場所に配置されていたものと考えられる。また、この土人形が見つかった地点のすぐ脇から、12の銅鏡が検出されている。住居とは距離が離れており住居との関連は薄いと考えられる。土人形と同地点が近くの場所に配置され祭祀的な意味を持って利用されていたものと考えられる。13は2畑の西側の地境に、石列の一部として使用されていた石臼である。

(遺物観察表144頁)





第118図 下田遺跡45-1・2号畑 (2)



第119図 下田遺跡45-1・2号畑 (3)

(3) 遺構外出土遺物 (遺物観察表144頁)



第120図 下田遺跡遺構外出土遺物

第10表 下田遺跡遺物観察表

44-1号住居		陶磁器		(単位: cm)			
番号	種類	部位	計測値	①焼成②輪色③胎土	その他の特徴	備考	
1	磁器	碗	1/2残存	口(8.6)底3.2高4.3	①堅平、灰白②明オリーブ灰③緻密	透明度の高い種がかかる。外面口縁に陶面文状の意匠がある。	肥前、波佐見系
2	磁器	碗	底部一体部1/2残存	口一底3.6高一	①堅平、(灰白)②灰白③緻密	外面に染付が施される。高台の切りが深い。	肥前
3	磁器	碗	破片残存	口(8.4)底一高一	①堅平、灰白②灰白③緻密	内外面に染付が認められる。焼成不良。	瀬戸・美濃
4	磁器	碗	口縁破片残存	口(9.6)底一高一	①堅平、灰白②明オリーブ灰③緻密	染付碗。コンニャク印版。	肥前、波佐見系
5	磁器	碗	破片残存	口(6.4)底一高一	①堅平、灰白②灰白③緻密	内外面に染付が認められる。	肥前
6	陶胎	染付碗	口縁破片残存	口一底一高一	①堅平、灰白②オリーブ灰③緻密	内外面に細かい貫入が入る。外面染付。	肥前
7	陶器	碗	口一底部下位破片残存	口(6.8)底一高一	①真、浅灰色②灰白③細かい	ロクロ目が残る。体部下位には胎がかからない。灰胎。やや黄色味がかった透明度が高い。	瀬戸・美濃
8	磁器	碗	口縁破片残存	口(9.8)底一高一	①堅平、灰白②灰白③緻密	外面に染付と貫入が認められる。	肥前、波佐見系
9	陶器	片	口縁破片残存	口(14.6)底一高一	①真、灰白②黄褐色③細かい	胎輪。内外面に胎輪。	瀬戸・美濃
10	磁器	碗	口一底部破片残存	口一底一高一	①堅平、灰白②淡黄③緻密	内外面に細かい貫入が入る。灰胎。透明度が高い。	瀬戸・美濃
11	磁器	皿	口縁破片残存	口一底一高計(22.0)	①堅平、灰白②灰白③緻密	透明釉には細かい貫入が入る。内外面に染付。口縁部輪花。	肥前
12	磁器	皿	口縁破片残存	口(19.0)底一高一	①堅平、灰白②灰白③緻密	内外面に染付が施されている。	肥前、波佐見系
13	陶器	片	口縁破片残存	口一底一高一	①真、黄灰色②細輪③砂を含む	内面に土給が認められる。胎輪。	瀬戸・美濃
14	陶器	底部付近破片残存	口一底(15.0)高一	①真、黄灰色②暗輪③砂を含む	底部に幸切り痕が残る。胎輪。	瀬戸・美濃	

石物		大きさ・重量		形状・特徴等		(単位: cm, g)	
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考			
15	火打石	長3.3幅1.8厚1.6重10	1ヶ所を使用痕が見受けられる。				
16	火打石	長3.4幅3.0厚2.2重25	2ヶ所を使用痕が見受けられる。				
17	火打石	長5.2幅3.8厚2.0重40	2ヶ所を使用痕が見受けられる。表、左上部の使用痕には煤が付着。				
18	砥石	長(10.6)幅1.7厚1.4重72	明確な使用面は1面、側面には僅かな使用の痕跡が見られる。側面及び裏面に筋状の痕跡が残る。				
19	砥石	長(12.6)幅3.5厚4.3重283	2面使用。表、正面以外の4面に筋状の痕跡有り。				
20	砥石	長(11.7)幅2.9厚2.1重129	明確な使用面は1面、側面には僅かな使用痕が見受けられる。表面を除く側面に筋状の痕が残っている。				
33	加工痕のある石器	長48.0幅46.8厚43.2重一	全面に筋跡が残る。整形されている様子が見受けられる。上面には、削られた痕跡が残る。少なくとも3つの破片がこのことから取られていることが分かる。このうちの1つがNo9である。側面には腕状のくぼみが4ヶ所見受けられる。用途は不明である。				

金属器		大きさ・重量		形状・特徴等		(単位: cm, g)	
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考			
21	小柄	長10.1幅1.4厚0.6重12	小刀は柄で折れ茎も残存か。柄は丸となり18c以前。小柄は鎌付が下側金付近で1ヶ所所有。文明は不明で部分的に魚ヶ子型を半月文様につづ、全体的には高野型に浮き出される。文様は歪化化が進み不明ながら草の竜(竜のおとし子)か? 目的位置は未知。	18c以前 無銘 銅主体			
22	小柄	長(7.3)幅1.4厚0.55重28	茎もと柄が大きい。袋内には茎残存量があり江戸時代でも古株。鎌付は下方裏付に1ヶ所。表面には浅い線刻らしき文様が僅かに見える。	17~18c. 無銘 銅主体			
23	柄?	長10.2幅2.5厚1.1重30	定形。				
24	角釘	長(11.1)幅2.0厚1.15重26	定形。				
25	キセル櫛首	長5.7幅1.5厚1.0重12	櫛首。側面がつぶれ大きく歪む合わせ目上。火皿は欠損。				
26	鉄器	長3.45幅3.7厚0.4重10		盤一片			

瓦質		残存		径		厚さ		重さ		(単位: cm, g)	
番号	種類	残存	径	内径	厚さ	重さ	備考				
27	寛永通宝	完形	24.55~24.60	20.45~20.85	1.00~1.05	2.9					
28	寛永通宝	完形	23	18.7	1.05~1.15	2.43					
29	寛永通宝	完形	22.40~22.75	19.05	1.2	2.45					
30	寛永通宝	完形	20.70~22.85	19.05~19.40	1.00~0.90	1.73					
31	寛永通宝	完形	24.65~24.70	20.15~20.35	1.00~1.05	3					
32	〇通宝	2/3	23.8	19.35	1.10~1.15	1.72					

第7章 下田遺跡

45-2号館		陶磁器		(単位: cm)		
番号	種類	部位	計測値	①焼成②褐色③粘土	その他の特徴	備考
1	陶器	ほぼ定形	口8.6底3.8高5.2	①良、灰白②黒褐色③細かい	鉄軸。底部、胎軸されていない部分にロクロ目が残る。	瀬戸・美濃
2	陶器	香口1/3残存	口9.6底6.4高5.2	①良、灰②暗オリーブ③細かい	胎軸。貼り付脚は指痕による押さえで整形。3脚あると思われる。	瀬戸・美濃
3	陶器	香口一底部破片残存	口(9.4)底(8.4)高4.6	①良、灰白②暗オリーブ③細かい	胎軸。透明度が高い。ロクロ目が残る。	瀬戸・美濃
4	土人形	ほぼ定形	厚1-2mm幅5.3高6.0	①還元焰、軟質②微③細砂粒	立像、上部に二次的な被熱痕有り。表裏の型抜きした物を貼り合わせて成形。	
5	土人形	顔部欠損	幅5.4高(5.2)	①還元焰、軟質②微③細砂粒	表面には瓦でいう「キラ」か?形場撒れをよくするための筋が付着する。表裏を型抜きした物を貼り合わせて成形。	
6	土人形	体部片	厚0.2-0.4幅(2.7)高(4.5)	①還元焰、軟質②微③細砂粒	左側に大きな袋をかかっていることから布袋かと思われる。型抜きと思われる。	表面のみ残存
7	土人形	底部	厚2-3mm幅5.2高(4.0)	①還元焰、軟質②微③細砂粒	表裏を型抜きした物を貼り合わせて成形。	
8	土人形	底部片	厚0.2-0.4幅(4.4)高(3.8)	①還元焰、軟質②微③細砂粒	内面底部に指による押痕が残る。底部の作りは粗雑。表裏の型抜き。	
9	土人形	顔部	厚0.3-0.4幅(3.2)高(5.4)	①還元焰、軟質②微③細砂粒	女性を型取ったものか?内面に指圧による指紋が残る。表裏の型抜きしたものを貼り付けて成形。	
10	土人形	底部片	厚0.2-0.4幅(4.2)高(2.0)	①良②微③細かい	内面底部の作りは粗雑。表裏を型抜きしたものを貼り合わせて成形。	
11	土人形	底部片	厚0.2-0.3幅(3.3)高(2.9)	①良②微③細かい	内面に指による押痕が残る。作りは粗雑。型抜き成形。	

金属器		(単位: cm, g)		
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
12	銅鏡	直径11.9内径11.2厚0.2重231	直角式中縁の円鏡。縁の高さは1.0cm。鏡背、ともに状態は良好。縁は亀甲紋。文様は中縁二重淵の内側を中心に双魚、松、桐などが表現されている。月夜野町目遺跡、鍛冶屋敷出土の鏡が本資料と類似する。	

石器		(単位: cm, g)		
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
13	石臼	長30.2幅31.0厚14.6重一	定形。粉挽き臼下臼。6分筒高12-13本	

遺構外出土遺物		土器		(単位: cm, g)		
番号	種類	部位	計測値	①焼成②褐色③粘土	その他の特徴	備考
1	磁器	1/2割残存	口(9.8)底(4.6)高3.2	①還元、灰白②灰白③緻密	内外面に染付。肌頃の色は藍色。内面はややく泥灰中。肥前、波佐見系。19c. 前一中。	

石器		(単位: cm, g)		
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
2	加工のある石鈿	長22.6幅22.8厚19.8重6550	底面は平ら。上面は機軸の四角が作られている。4側面は向かい合う面の加工が同一となる。正面と背面の加工は角が直角で、正方形に近い形状を呈する。左右の面の加工は隅丸方形の形状を呈する。大きさは上面が長軸11.0短軸9.0厚24.0となる。以下同様には正面6.5×6.0×4.8、背面7.1×(5.5)×(3.5)、右側4.5×1.5×3.8、左側5.5×2.2×5.0となる。	出土位置不明

第5節 小結

本書では、平成7年度に行われた本調査の報告を行った。調査の結果、長野原町の分布調査で示されていない新発見の遺跡であることが分かり、遺跡範囲はさらに広がる可能性が高いことが判明した。本遺跡は、ハッダム建設の進展に際し、今後も調査面積が拡大していく事が確実である。本遺跡の性格

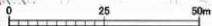
などを位置づけた考察及びまとめについては、すべての調査が終了した時点で行われるべきであろう。

今回は小結として、本報告書に掲載された調査区及び、長野原町の遺跡分布調査票に示されている遺跡範囲、及び今後調査が行われるであろう、工事予定範囲を示す。調査の過程を表す資料として活用していただきたい。



第121図 YD4-06下田遺跡

S=1/1000



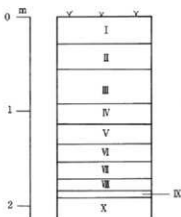
## 第8章 花畑遺跡

### 第1節 遺跡の立地

本遺跡は吾妻川左岸の最上位段丘上に位置する。標高は約650m～680mである。この最上位段丘の平坦面は林地区で最も大きい。平坦面は、南及び南東方向に向かい緩やかに傾斜している。この平坦面の東西には沢が流れ、沢に沿って深い谷地形が形成されている。本遺跡はこの平坦面の北側最奥部、急傾斜地から平坦面へ地形が変換する地点に位置している。調査区の北側背後には山地がせまり、地元で「ハサミ岩」と呼ばれる二つに裂けた大岩塊を見上げる位置にある。東側に進むと沢の谷地形にあたり谷に沿って数基の岩陰が存在する。調査区よりやや下った、平坦面の南側部分は現在、林集落の中心地として集落地や耕作地として利用されている。

### 第2節 基本層序

遺構確認面は第Ⅷ層上面の1面のみとなる。この面から縄文時代～平安時代にかけての遺構が検出されている。深い掘り込みを持つ遺構は、底部がAs-YPk層まで達している。As-YPk層は脆弱であるため、ここに構築された遺構の形状は残存状況が悪いものとなっている。



第122図 花畑遺跡基本土層

- 第Ⅰ層 暗褐色土。礫を若干含む。表土。
- 第Ⅱ層 黒色土。黄色バミスを僅かに含む。
- 第Ⅲ層 黒褐色土。黄色バミスを多く含む。
- 第Ⅳ層 黒色土。黄色バミスを僅かに含む。
- 第Ⅴ層 暗黄褐色土。ローム漸移層。ロームブロックを若干含む。
- 第Ⅵ層 黄褐色土。ローム層。As-YPk若干含む。
- 第Ⅶ層 黄褐色土。ローム層。砂質強い。
- 第Ⅷ層 As-YPkの上部アッシュ互層。
- 第Ⅸ層 黄褐色土。ローム層。
- 第Ⅹ層 As-YPk純堆積層。

### 第3節 遺跡の概要

本遺跡の調査区内は場所により傾斜が大きく異なる。調査区中央の傾斜がやや緩く、この部分を挟んで上下にあたる北西部・南東部の傾斜はややきつい。特に南東部は緩やかな谷地形となっている。検出された遺構は、住居跡3軒、土坑92基、溝3条である。形状から、土坑のうち51基が陥し穴と確認できる。陥し穴の検出は、調査区中央ではまばらであり、北西部と南東部の傾斜の変換点に集中している。特に南東部には埋没谷を取り巻くように19基の陥し穴が集中している。

陥し穴の多くはAs-YPk層まで底部が掘り込まれており、当時の形状を残すものが少ない。その中で、この層まで掘り込まれていない100-23・27・29号土坑の3基の陥し穴からは、掘削時に使用した道具のものと思われる痕跡が確認されている。工具の痕跡は23・29号土坑では底面から、27号土坑は底面と壁面から検出されている。掘削具の形態はその痕跡の形状から、幅約11cmほどのやや丸い刃先を持つものであることが推定できる。刃先の材質は、工具痕の面が常に平らで薄いことから、石ではなく木や金属である可能性が考えられる。27号土坑については、後日の検討もできるように型取りを行っている。土坑内からは出土遺物が少なく、マーカー層も明確でないため時期が判然としない。そのため土坑の時期決定の参考として、3基の陥し穴覆土に含まれる



炭化物の放射性炭素年代測定（第12章第6節（2））を行った。その結果は、1500～1900年前であり、陥し穴の構築年代が、縄文時代以降である可能性を示唆するものであった。

この他に、調査区の南端では平面形状が円形で深さ1m以下と比較的浅い土坑が10基程、直線的に並んだ状態で検出されている。覆土は陥し穴に入っているものと比較してかなりしまりがあり、軽石の混入が目立つ。しかし、これらについても出土遺物は見られず時期や用途は不明である。

3軒検出された住居跡のうち、91-1住、100-1住の2軒からは、墨書土器を含む遺物が検出されている。これらの遺物は、いずれも9世紀後葉に比定されるもので、遺構も該期のものであると思われる。該期の明確な集落は、八ツ場ダム関連の調査においては楡木Ⅱ遺跡で検出されているのみである。その他では、いずれも各遺跡、1ないしは2軒が検出されるにとどまっている。比較的山間の地でこのような形で検出される住居の在り方は注目すべきところである。

なお、北側の調査区の西半からは、縄文時代前期末から中期初頭に属する土器片が出土しているが、遺構は確認されていない。また、旧石器の試掘を数カ所で行っているが遺物は検出されていない。

調査区から若干離れた、東側の谷部に見られる岩陰ではテラス部を中心に確認調査が行われたが、こちらも遺構は検出されなかった。

## 第4節 検出された遺構と遺物

### （1）住居

#### 91-1号住居

位置 91C-25 PL 49・50

形態 南東隅及び南西隅はトレンチにより削平され確認することができない。他の2辺はやや丸みを持って屈曲し、壁を直線的のぼしている。このことから、隅丸方形の平面形を呈すると思われる。

規模 確認長辺4.16m、確認短辺3.52m

確認面積12.75m<sup>2</sup>

主軸方位 N-110°-E

内部施設 周溝が西壁付近の一部で確認できる。深さは8cm程である。住居の北側、やや中央よりの部分より柱穴1基を確認した。貯蔵穴は確認できなかった。

確認最大壁高及び壁の状況 約60cm。南壁は削平され確認できない。わずかに上方に開く。

床面の状況及び床下施設等 わずかに凹凸があるが、ほぼ平らに仕上げられている。貼り床は確認できない。北西隅に3基並んで床下土坑が検出されている。

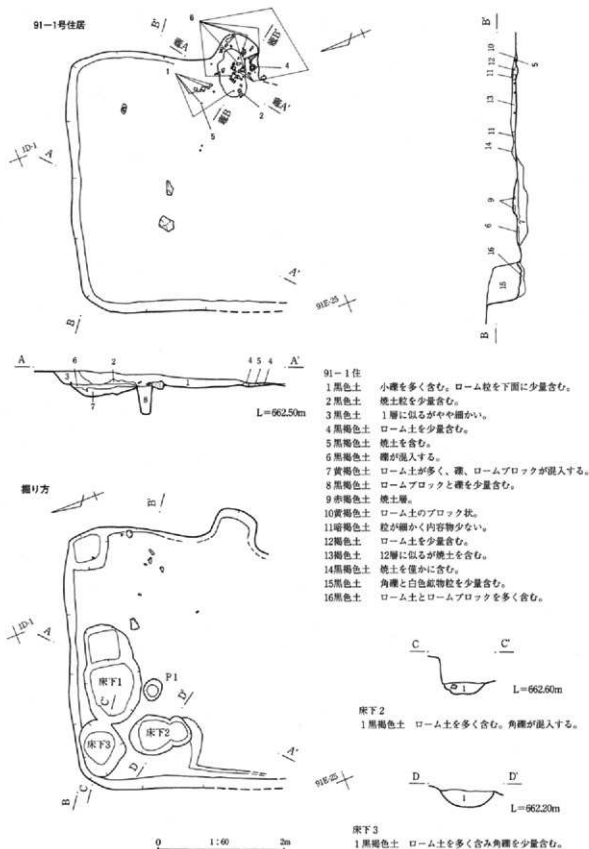
東側の床下土坑1は長軸1.56m、短軸0.88m、深さ0.15m程の大きさで、長楕円形の平面形状を呈している。底面は平坦で壁はなだらかに上方に向かって開く。埋没土は黄褐色土である。

南側の床下土坑2は、長軸0.97m、短軸0.63m、深さ0.16m程の大きさである。円形を二つつけた瓢箪型の平面形状を呈している。底面は平坦でU字形に近い断面形状である。西壁側に中段テラスを持つ。埋没土は、黒褐色土で埋没する。締まりが弱く、ローム土が混入する。

北側の床下土坑3は長軸0.86m、短軸0.70m、深さ27cm程の大きさで、ほぼ円形の平面形を呈している。3つの床下土坑の中でもっとも深い。底面は比較的平坦で、U字形に近い断面形状である。埋没土は床下土坑2と同様である。床下土坑の埋没土はいずれも単一の土層であり、人為的な埋没の可能性が高い。

竈 東壁の南寄りに位置する。試掘トレンチにより上部の大部分が削平されており、確認できたのは、燃焼部の一部のみである。U字状に南東に向かって掘り込んでいると思われる。構造は確認できなかった。確認長0.98m、確認幅0.85mである。

第8章 花畑遺跡



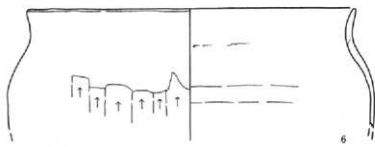
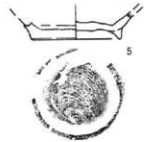
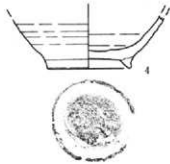
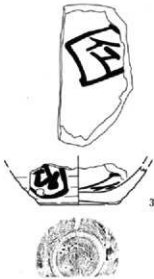
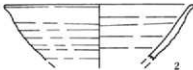
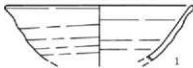
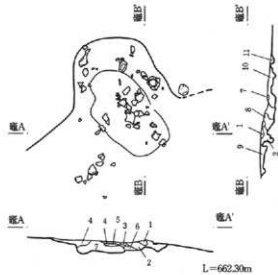
第123図 花畑遺跡91-1号住居 (1)

重複 なし

埋没状態 概ね黒色土で粗没する。黒色土中には $\phi$ 5-10mmの小礫が多く含まれる。竈近くの床面直上には焼土やロームが含まれた褐色土の層が見られる。

出土遺物 検出されたのは、土師器40点、須恵器15点である。出土状態は、竈付近から集中した出土が見られる。3は内外面に墨書「固」がなされた須恵器器埴である。6は北陸・信濃系と思われる土師器甕である。(遺物観察表192頁)

その他 9世紀第4四半期。



- 竈
- 1 焼土ブロック
  - 2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
  - 3 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
  - 4 黒色土 焼土粒、ローム粒を少量含む。
  - 5 ロームブロック
  - 6 暗褐色土 焼土粒をやや多く含む。
  - 7 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を多く含む。
  - 8 暗褐色土 焼土粒をやや多く含む。
  - 9 黒褐色土 ローム粒を非常に多く含む。
  - 10 暗赤褐色土 焼土層、黒色土をほとんど含まず使用面と思われる。
  - 11 黒褐色土 焼土粒を多く含む。



第124図 花畑遺跡91-1号住居 (2)

## 91-2号住居

位置 91F-25 PL50

形態 住居の一部が確認できたのみであり、全体の形状は分からない。北西隅はやや丸みを持って屈曲する。

規模 確認長辺2.2m 確認短辺1.3m

確認面積7.31㎡

主軸方位 不明

内部施設 残存する壁に沿って周溝が確認できる。深さは8cm程である。柱穴及び貯蔵穴は確認できない。

確認最大壁高及び壁の状況 10cm。わずかに上方に向かって開く。

床面の状況及び床下施設等 床面は、わずかに凹凸があるが、ほぼ平らに仕上げられている。貼り床は確認されなかった。床下土坑が2基並んで検出されている。北側の床下土坑1は長軸1.11m、短軸0.1m、深さ0.29mで、ほぼ円形の平面形を呈している。底面は平坦でやや丸みを持って壁が立ち上がり、U字状に近い断面形状である。埋没土はロームブロック

を多く含んだ黒褐色土である。

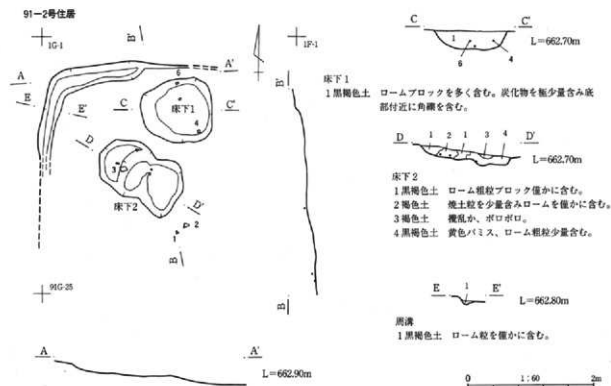
南側の床下土坑2は長軸1.4m短軸0.85mの大きさで、円形を二つ重ねた瓢箪型の平面形を呈している。時期の異なる土坑が重なったものとも考えられるがはっきりしない。深さは0.3m程である。底部は階段状に北西部と南東部の2つに分かれている。南東部は北東部よりも12cm程下がった位置にある。底面は両方とも凹凸はあるが概ね平らである。壁はやや丸みを持って直線的に立ち上がる。埋没土は、黒褐色土と褐色土である。層中にはロームブロックと焼土粒が僅かに含まれる。

葺なし 重複なし

埋没状態 大きく削平されており状況は不明である。床の直上にφ1cm前後の黄色パミスや角礫を含んだ暗褐色土が僅かに確認できる。

出土遺物 床下土坑1より、土師器片が18点出土。9世紀第3四半期のものであると思われる。同一個体のものであるが、小破片であることもあり、接合・実測には至らなかった。

その他 9世紀第3四半期



第125図 花畑遺跡91-2号住居

## 100-1号住居

位置 100I-25 PL 51

形態 傾斜の下側にあたる、南西壁は調査時に削平され確認できない。確認できる北隅と東隅は丸みを持って屈曲し、壁は直線的に伸びている。隅丸方形もしくは方形の平面形状を呈すると考えられる。

規模 長辺3.42m 確認短辺2.26m

主軸方位 N-48°-E

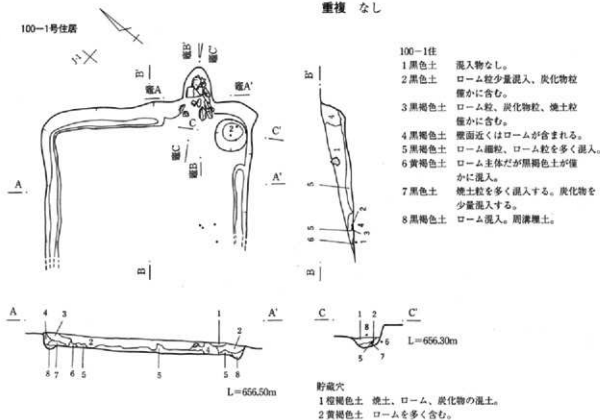
内部施設 竈と貯蔵穴のある部分を除き壁沿いに周溝が確認できる。深さは0.12m程である。貯蔵穴は竈の右手にあたる東部隅に存在する。直径0.52mのほぼ円形の平面形状を呈する。深さは0.16m程である。埋没土の上層は、焼土・炭化物・ロームの混土である。住居内でもこの部分のみ確認できる土層であることから、住居使用時に意図的に埋められていた可能性も考えられる。柱穴は確認されなかった。

確認最大壁高及び壁の状況 40cm。北西壁と南東壁はほぼ直立している。北東壁は丸みを持って立ち上がりわずかに上方に開く。

床面の状況及び床下施設等 床面は、わずかに凹凸があるがほぼ平らに仕上げられている。貼り床は確認されなかった。

竈 北東壁の東端近くを壁外にU字状に掘り込み周りに石をはめ込んで壁とし、燃焼部を作り煙道をとばす。燃焼部の左右には地山に礫を据えた壁が作られている。燃焼部の最奥部には、この壁石を支えとする2枚の天井石が据えられている。これらの礫は、ほとんどが板状の角礫である。燃焼部の中央やや左寄りには支脚石が樹立している。支脚石の高さは11cm程である。煙道は天井石の奥よりわずかに北東に延びる。燃焼部幅0.42m、確認長1.16m程である。埋没土中には構築材に用いられたと思われるロームが混入する。

重複 なし



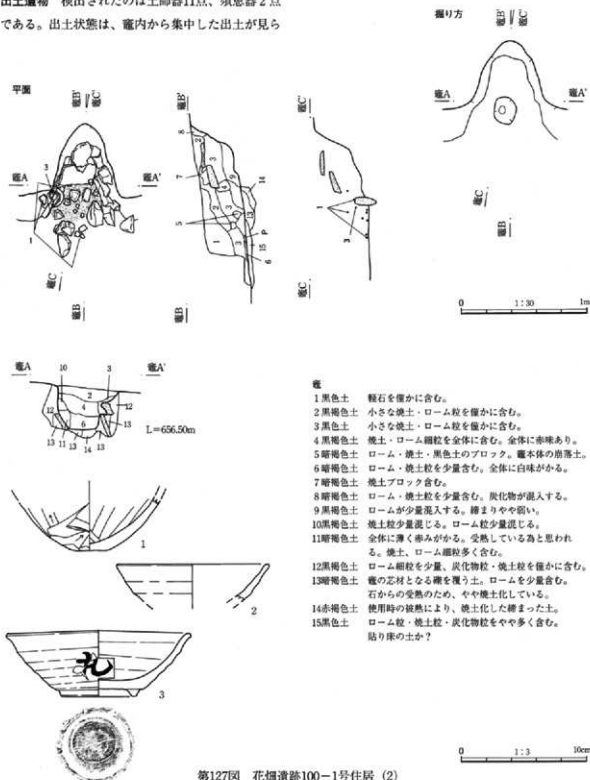
第126図 花畑遺跡100-1号住居 (1)

**埋没状態** 黒色土・黒褐色土で埋没する。床面近くにローム粒が多く含まれ、一部ではブロック状に混入する。また、竈付近の床面直上には、竈の構築材に用いたと思われる板状の角礫が点在している。

**出土遺物** 検出されたのは土師器11点、須恵器2点である。出土状態は、竈内から集中した出土が見ら

れる。3は外側面に「凡」と墨書された須恵器高台付甕である。1は土師器の小型甕の底部片である。(遺物観察表192頁)

その他 9世紀第4四半期



第127図 花畑遺跡100-1号住居 (2)

## (2) 土坑

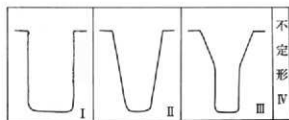
## ①はじめに

本遺跡では合計92基の土坑が検出されている。これらの土坑は、いくつかの空白地域はあるものの調査区の広範囲から検出されている。この中で、遺物が出土しているものは4基のみである。また、土坑の埋没土には、基準となる堆積物が見られない。以上のことから、遺構の構築時期の判断は、非常に困難になっている。土坑の用途が判明しているのは陥し穴53基である。それ以外の土坑の用途については不明である。およそ半数近くの土坑の用途が不明だということである。そこで、土坑の形状を分類することで、時期の特定や用途の考察をする為の資料とすることとした。これらの各土坑の形状類型・時期・計測値・グリッド・重複については、付録4遺構一覧表に示した。参照していただきたい。

## ②土坑形状の類型について

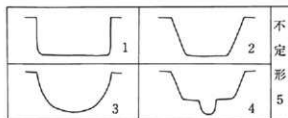
平面形状は土坑の種類にかかわらずA～Eの5類型に分類した。

- A 円形（長軸≦短軸×1.2）を呈するもの。
- B 楕円形（長軸>短軸×1.2）を呈するもの。
- C 隅丸方形を呈するもの。
- D 隅丸長方形を呈するもの。
- E 上記の分類に属さないもの。



第128図 陥し穴断面形状模式図

断面形状は陥し穴については、I～IVの4類型の、それ以外の土坑については1～5の5類型の分類をおこなった。第128・129図に模式図を示したので参照していただきたい。断面形状を観察した際、断面



第129図 土坑断面形状模式図

が袋状に広がっているものが見られる。As-YPk層まで掘り込まれた土坑にこのような形状を示しているものが多い。As-YPk層は、脆弱で崩落しやすい特徴を持っている。そのため、この層に掘り込まれた土坑の壁面は崩落により、構築時とは違った形状を呈している可能性が高いものと考えられる。そこで、断面形状を考えるにあたり、As-YPk層の崩落により断面が変化している可能性が高いと見受けられた場合、その部分が残っていたものと仮定し、断面形状の類別を行うこととした。

その結果に基づき、上記の平面形状と断面形状を組み合わせると、陥し穴は20通り、それ以外の土坑については25通りの類型が存在することになる。しかし、実際にはすべての類型が確認されているわけではない。

陥し穴で確認できたのは10類型で、A I、A III、A IV、B IV、C I、C II、C III、D IV、E I、E III、E IV類型は確認されていない。検出されたものの平面形状は、楕円形や隅丸長方形を呈するものが大半を占めている。

同様に、その他の土坑で確認できたのは、14類型で、A 5、B 1、C 1、C 2、C 4、D 1、D 4、D 5、E 1、E 3、E 4類型は確認されていない。検出されたものの平面形状は、円形を呈するものが大半を占めている。

各土坑の類型別の割合等を比較したデータは本章第5節に示したので参照していただきたい。以下に、それぞれの分類の代表的なものや特徴的なものを中心に、陥し穴、土坑の順に内容を記載する。

③縮し穴

1-2号土坑

位置 1C-19 PL 52

隅丸長方形の平面形状を呈し、D I 類型に分類される。上面規模と底面規模はほぼ同じである。底部の平面形状も隅丸長方形で、底面の中央はほぼ平坦であるが、南北壁際が若干深く掘り込まれた形状を呈する。短軸断面で見ると、壁は上方でやや開きながら、底部からほぼ垂直に立ち上がる様子が見受けられる。埋没土は、黒色土主体でレンズ状に堆積している。土層下位には壁の崩落土と考えられるロームブロックが多く混入する。

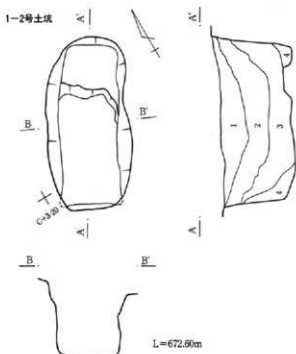
時期不明。

1-6号土坑

位置 1A-14 PL 52

楕円形の平面形状を呈し、B II 類型に分類される土坑の中で、もっとも長軸と短軸の差が少ない。上面規模と底面規模の大きさは著しく異なる。底部の平面形状は不整形で、底面の中央はさらに一段深く掘り下げられている。上部に狭小なテラスを持つ。埋没土は黒色土、黒褐色土が主体で、ほぼレンズ状に堆積する。

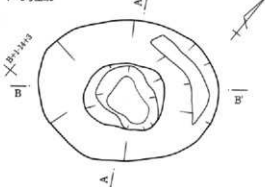
時期不明。



1-2土

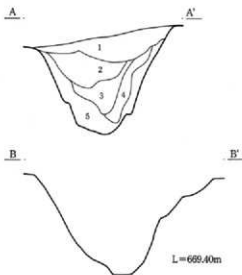
- 1 黒色土 極微量のローム小粒子が混入する。
- 2 黒色土 少量のローム小ブロックが混入する。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 4 黄褐色土

1-6号土坑



1-6土

- 1 黒色土 黒味強く混入物少ない。
- 2 黒褐色土 黄色軽石が多く混入。
- 3 黒褐色土 2と似るが黄色軽石の混入が少ない。
- 4 黄褐色土 締まり良くローム含む。若干の軽石混入。
- 5 黄褐色土 地山ロームの崩落土多く含む締まり良い。



第130図 花畑遺跡1-2・6号土坑



## 10-4号土坑

位置 10X-24 PL 52

楕円形の平面形状を呈し、BⅢ類型に分類される。上面規模に較べ、底面規模が小さい。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面は碗状を呈する。短軸断面は、底部からほぼ垂直に立ち上がった壁面が地上から僅かな位置で大きく横に広がる形状を呈する。埋没土は、黒褐色土や暗褐色土が主体で中位より上は、互層となるが、下部はレンズ状に堆積している。全体にAs-YPkが微量に混入する。

時期不明。

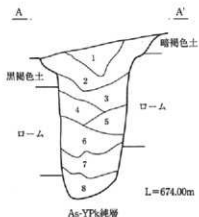
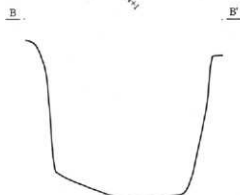
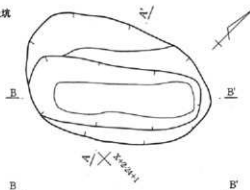
## 10-5号土坑

位置 10Y-25 PL 52

隅丸長方形の平面形状を呈し、DⅢ類型に分類される。上面規模に較べ、底面規模が小さい。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面は、底部からほぼ垂直に立ち上がった壁面が地上から僅かな位置で大きく横に広がる形状を呈する。埋没土は、黒褐色土や暗褐色土主体でレンズ状に堆積する。底面付近には壁の崩落土と考えられるAs-YPkが多く混入する。

出土遺物は縄文土器片3点である。いずれも小破片のため、図化することができなかった。陥し穴という遺構の性格から、遺構の構築時の遺物の可能性は少ないが、縄文期以前に構築された可能性を示す資料になると思われる。

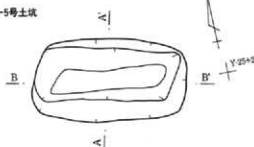
## 10-4号土坑



## 10-4土

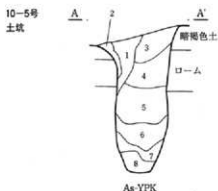
- 1 黄褐色土 ローム塊の層状堆積。黄色バミスを少量含む。
- 2 黒褐色土 灰化物、黄色バミスを少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- 4 黒褐色土 黄色バミスを微量に含む。
- 5 暗褐色土 大型のローム塊を含む。
- 6 黒褐色土 黄色バミスを微量に含む。
- 7 暗褐色土 黄色バミスを塊状に混在する。ローム塊を少量含む。
- 8 暗褐色土 黄色バミスを多く含む。

## 10-5号土坑

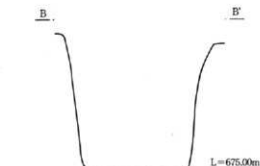


第131図 花畑遺跡10-4・5号土坑

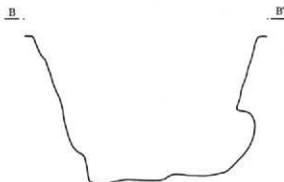
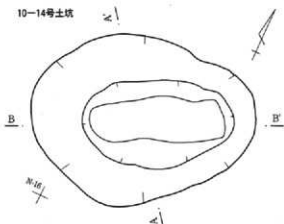
第8章 花畑遺跡



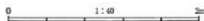
- 10-5土  
1 暗褐色土 大粒の黄色バミス、ローム粒を含む。  
2 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。  
3 黒褐色土 少量の黄色バミスを含む。炭化物も散見する。  
4 黒褐色土 ローム粒、黄色バミスを微量に含む。



- 5 黒褐色土 包含物微量。  
6 暗褐色土 小型のローム塊を少量含む。  
7 黄褐色土 黄色バミスを塊状に主体とする黒色土混入。  
8 暗褐色土 黄色バミスを多く含む。



- 10-14土  
1 黒色土 若干黄色バミスと炭を含む。  
2 黄褐色土 黄色バミス、ロームを多く含む。  
3 黒褐色土 黒色土中に黄色バミスが混入。  
4 黒色土  
5 黄褐色土 ロームを主体とする。  
6 黄褐色土 ロームブロックを多量に混入。  
7 黄褐色土 ロームブロック、堆山黄色バミスを互層に含む。



第132図 花畑遺跡10-5・14号土坑

10-14号土坑

位置 10M-16 PL 53

ほぼ楕円形の平面形状を呈し、BⅢ類型に分類される。上面規模に較べ、底面規模が非常に小さい。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面で見ると、壁は底部から25cm程の位置までは鋭角に、そこから上方へは緩やかに広がりながら立ち上がる。埋没土は、黒色土や黄褐色土が主体でレンズ状に堆積している。

時期不明。

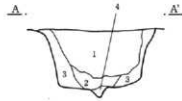
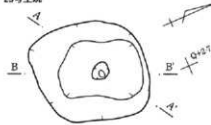
10-25号土坑

位置 10Q-6 PL 54

隅丸方形の平面形状を呈し、CⅣ類型に分類される。本遺跡の中で、この類型に分類されるのは、この土坑だけである。上面規模と比べ、底面規模はやや小さい。底部の平面形状は隅丸長方形である。底面はほぼ平坦であるが、中央に直径20cm、深さ20cm程の円形の掘り込みが1ヶ所確認できる。断面形状は、中央の掘り込みを除けば断面Ⅱ類型に分類されるものと同様であろうと思われる。埋没土は、黒色土主体で、底部及び側面にロームブロックが多く混入している。

時期不明。

10-25号土坑



10-25土

- 1 黒色土 極少量のローム粒を含む。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックが多く混入。
- 4 暗褐色土 ローム主体。

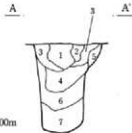
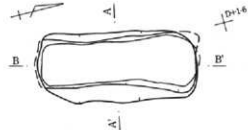
10-28号土坑

位置 10O-5 PL 55

隅丸長方形の平面形状を呈し、DⅠ類型に分類される。上面規模とはほぼ同じ底面規模である。底部の平面形状も隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面で見ると、壁面は底部からほぼ垂直に立ち上がるが、西壁部分のみ確認面から30cmほどの位置から広がって立ち上がる。埋没土は、黒色土や黒褐色土主体で、レンズ状に堆積している。土層下位、底面付近には、壁の崩落土と考えられるロームブロックが混入する。

時期不明。

10-28号土坑



L=660.00m

10-28土

- 1 黒色土 黄色バミス、炭化物を多く含む。
- 2 黒色土 黄色バミスを多く含む。
- 3 黒色土 少量の黄色バミス及び炭化物を含む。

- 4 黒褐色土 黄色バミスを含む。
- 5 黄褐色土 地山ロームを主体とする。
- 6 黒褐色土 黄色バミス、ローム小ブロックを若干含む。
- 7 黒褐色土 ロームブロックをやや多く含む。

0 1:40 2m

第133図 花畑遺跡10-25・28号土坑

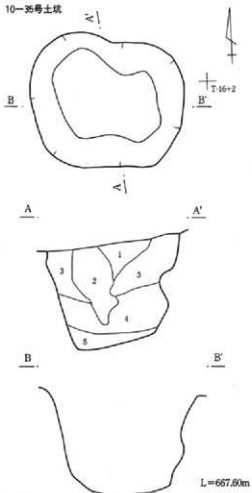
10-35号土坑

位置 10T-16 PL 55

不定形の平面形状を呈し、EⅡ類型に分類される。上面規模に較べ、底面規模は小さい。底部の平面形状は上面の平面形状と類似した不定形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面で見ると、壁面は上方にやや開きながら立ち上がっている。埋没土は、黒色土や黒褐色土主体で攪乱らしき2層を除き、ほぼレンズ状に堆積する。最下層は壁の崩落により堆積したと考えられるAs-YPk主体である。

時期不明。

10-35号土坑



10-35土

- 1 黒褐色土 ロームブロック軽石を含む。若干の炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック軽石を多く含む。若干の炭化物を含む。
- 3 黒色土 ローム軽石を殆ど含まない。
- 4 黒色土 若干の黄色パミス、ロームブロックを含む。
- 5 黄褐色土 地山、黄色パミスを多く混入する。

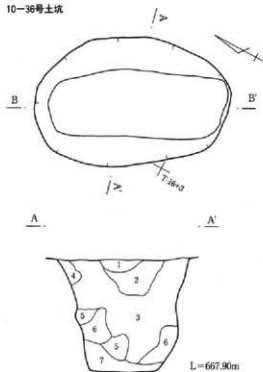
10-36号土坑

位置 10S-16 PL 55

楕円形の平面形状を呈し、BⅡ類型に分類される。上面規模と底面規模の差は少なく、上面が短軸方向に少々広がっている。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。埋没土は黒色土と黒褐色土で、ほぼレンズ状に堆積する。壁面付近には壁の崩落土と考えられるロームがブロック状に混入する。

時期不明。

10-36号土坑



10-36土

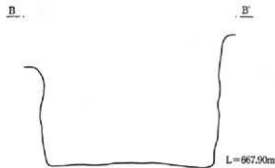
- 1 黒色土 少量の黄色パミス、炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック、黄色パミスが混入。
- 3 黒色土 若干のロームブロック、黄色パミスを含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 5 黄褐色土 ロームブロック、黄色パミスを多く含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロック。
- 7 黄褐色土 黄色パミスを主体とする。



第134図 花畑遺跡10-35・36号土坑

第4節 検出された遺構と遺物

10-36号土坑



10-39号土坑

位置 10S-20 PL 56

隅丸長方形の平面形状を呈し、DⅡ類型に分類される。上面規模より若干小さい底面規模である。底部の平面形状も隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面で見ると、壁面は上方に向かってやや開きながら直線的に立ち上がる。埋没土は、黒色土主体で、レンズ状に堆積する。

時期不明。

10-40号土坑

位置 10T-21 PL 56

隅丸長方形の平面形状を呈し、DⅢ類型に分類される。上面規模に比べ、底面規模は小さい。底部の平面形状も隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面で見ると、底部から垂直気味に立ち上がった壁面は、上方に向かい横に広がり、Y字形に近い形状を呈する。埋没土は黒色土主体で、ほぼレンズ状に堆積する。

出土遺物は、縄文土器片2点である。いずれも小破片のため、図化することができなかった。陥し穴という遺構の性格から、遺構の構築時の遺物の可能性は少ないが、縄文期以前に構築された可能性を示す資料になると思われる。

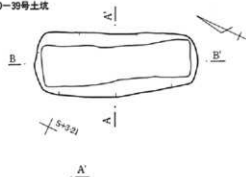
10-40土

- 1 黒色土 黄色パミス少量含む。ローム粒を僅かに含む。
- 2 黒色土 黄色パミスは殆ど含まない。
- 3 黒色土 黄色パミス、ローム粒を含む。
- 4 黒色土 ローム粒、ローム塊が入る。

0 1:40 2m L=669.50m

第135図 花畑遺跡10-36・39・40号土坑

10-39号土坑

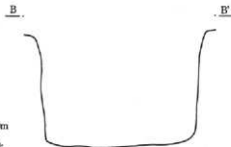
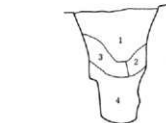
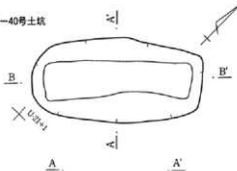


10-39土

- 1 黒色土 微僅かな炭化物を混入。
- 2 黒色土 少量のローム粒が見られる。
- 3 黒色土 ローム粒の混入が多い。

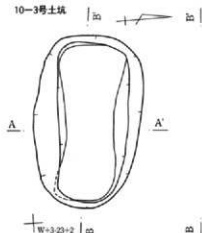


10-40号土坑

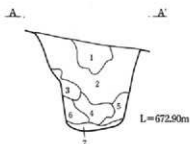


第8章 花畑遺跡

10-3号土坑

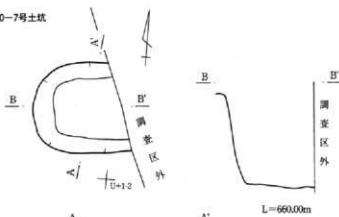


- 10-3土  
 1 暗黄褐色土 黄色バミスをやや多く含む。ローム粒子を多く含む。  
 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む。黄色バミスをやや多く含む。  
 3 暗黄褐色土 ローム粒を非常に多く含む。黄色バミスを少量含む。  
 4 黒褐色土 ロームブロック、黄色バミスを少量含む。  
 5 暗黄褐色土 ローム粒を非常に多く含む。黄色バミスを少量含む。  
 6 ロームブロック 明暗落土。  
 7 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。



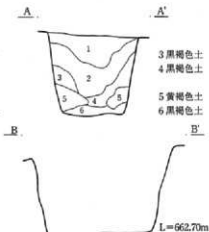
- 10-7土  
 1 黒褐色土 黄褐色粒子を含む。  
 2 黒褐色土 少量の黄褐色粒子、黄色バミスを含む。  
 3 暗褐色土 黄褐色ロームブロック ロームと黒褐色土が混ざる。  
 4 黒褐色土 微量の黄褐色粒子、黄色バミスを含む。  
 5 黒褐色土 黄褐色粒子を大量に含む。  
 6 黄褐色土 黄色バミスを微量に含む。  
 7 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒子を多く含む。  
 8 黒褐色土 黄褐色粒子（ローム？）を大量に含む。

10-7号土坑



- 10-8土  
 1 黒褐色土 黄褐色粒子を少量含む。また炭化物も少量含む。  
 2 黒褐色土 黄褐色粒子を少量含む。黄色バミス、炭化物を僅かに含む。  
 3 黒褐色土 暗褐色土が混入。黄褐色粒子を少量含む。  
 4 黒褐色土 少量のロームブロックが混じる。黄褐色粒子、黄色バミスを少量含む。  
 5 黄褐色土 黒褐色土混入。黄褐色粒子（ローム）を多く含む。  
 6 黒褐色土 黄褐色粒子を多く含む。

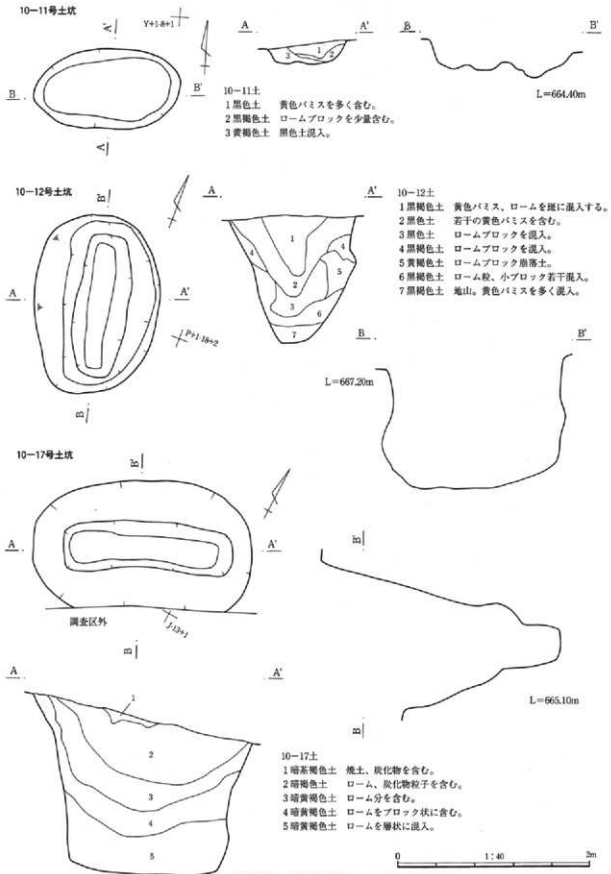
10-8号土坑



0 1:40 2m

第136図 花畑遺跡10-3・7・8号土坑

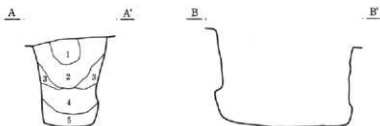
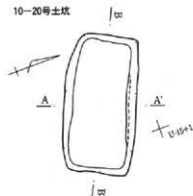
第4節 検出された遺構と遺物



第137図 花畑遺跡10-11・12・17号土坑

第8章 花畑遺跡

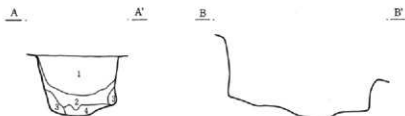
10-20号土坑



10-20土

- 1 黒色土 黄色バミスを含む。
- 2 黒色土 極少量の黄色バミスを含む。
- 3 黒色土 若干のロームブロックを含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 5 黒褐色土 黄色バミスを多く含む。

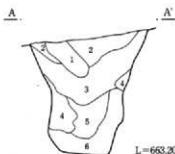
10-22号土坑



10-22土

- 1 黒色土 若干の炭化物を含む。
- 2 黒色土 ローム小ブロックを混入。
- 3 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 4 明黄褐色土 ローム主体。

10-23号土坑



10-23土

- 1 黒褐色土 黄色バミスを多く含む。
- 2 黒色土 少量の黄色バミス、炭化物を含む。
- 3 黒色土 炭化物が少なく若干のロームを含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを塊状に含む。
- 5 黒色土 ロームブロックを含む。
- 6 黄褐色土 ローム粒、小ブロックを含む。

L=663.20m

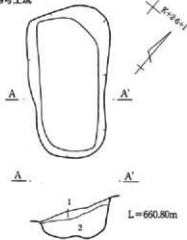
0 1:40 2m

第138図 花畑遺跡10-20・22・23号土坑



第4節 検出された遺構と遺物

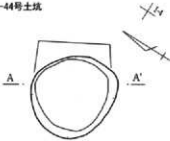
10-29号土坑



10-29土

- 1 黒色土 黄色バミス、炭化物を僅かに含む。  
2 黒褐色土 黄色バミスを多く含む。炭化物、ローム粒を僅かに含む。

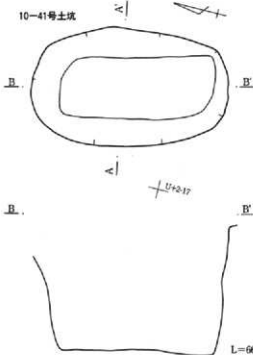
10-44号土坑



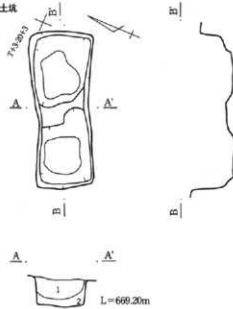
10-44土

- 1 黄褐色土 黄色バミスを疎らに混入。  
2 黄褐色土 ロームを多く含む。黄色バミスの混入少ない。

10-41号土坑



10-38号土坑



10-38土

- 1 黒色土 極少量のローム粒を含む。  
2 黒色土 少量のロームブロック、黄色バミスを含む。

10-41土

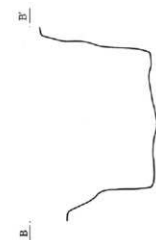
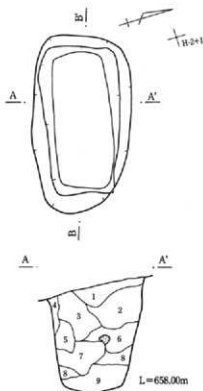
- 1 黒色土 極少量の黄色バミス及び炭化物を混入。  
2 黒色土 黄色バミス、ローム粒がやや多く、炭化物が少ない。  
3 黒褐色土 ロームブロックと黒色土の混入。  
4 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。  
5 黄褐色土 ロームブロック、黄色バミスを多く含む。

0 1:40 2m

第139図 花畑遺跡10-29・38・41・44号土坑

第8章 花畑遺跡

10-45号土坑



10-45土

- 1 暗褐色土 黄色バミス、ローム粒、炭化物粒を僅かに含む。
- 2 黒褐色土 黄色バミスをやや多く含む。ブロック状、粒状のロームを多く含む。炭化物を少量含む。
- 3 黒色土 黄色バミスを少量含む。炭化物粒を僅かに含む。
- 4 黄褐色土 ローム主体で有るが、黒褐色土が僅かに混じる。
- 5 暗褐色土 ロームが均等に混入する。
- 6 黒褐色土 ロームを少量含む。
- 7 黒褐色土 ロームが細粒状で混入。
- 8 黒褐色土 ロームブロックを混入する。
- 9 黒褐色土 ローム粒が僅かに見られる。

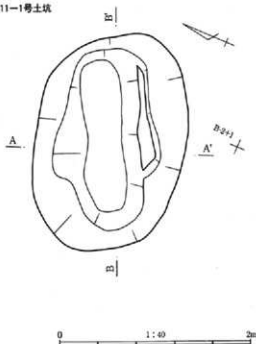
11-1号土坑

位置 11A-2 PL 57

楕円形の平面形状を呈し、BⅢ類型に分類される。上面規模に較べ、底面規模は非常に小さい。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面は碗状を呈する。短軸断面は、底面からほぼ垂直に立ち上がった壁面が、底面より65cm程のところで一且横に広がり、幅20cm程のテラスを持ち、再び垂直に立ち上がるという形状を呈する。埋没土は、テラスの上層は互層となっており、下部はレンズ状に堆積している。

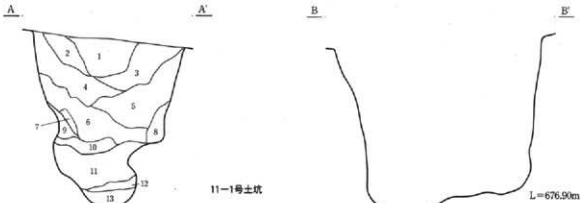
出土遺物は、縄文時代前期諸磯a式期の土器片2点である。出土状態は、覆土中からの出土である。陥し穴という遺構の性格から、遺構の構築時の遺物の可能性は少ないが、縄文期以前に陥し穴が構築された可能性を示す資料になると思われる。(遺物観察表192頁)

11-1号土坑



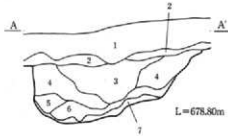
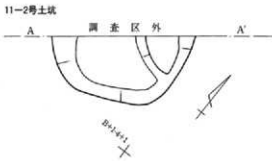
第140図 花畑遺跡10-45・11-1号土坑

第4節 検出された遺構と遺物

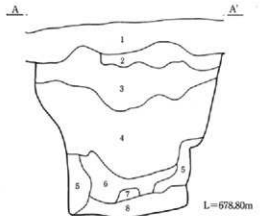
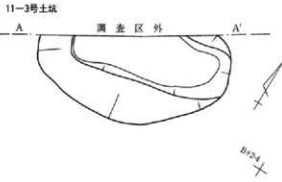


- 11-1土
- 1褐色土 炭化物を多く含む。
  - 2黒褐色土 微量の黄色バミスを含む。炭化物を少量含む。
  - 3黒褐色土 大粒の黄色バミスを含む。
  - 4黒褐色土 微量の黄色バミス、ローム粒を含む。
  - 5黒褐色土 少量の黄色バミス、ローム粒を含む。
  - 6黒褐色土 大粒の黄色バミスを微量に含む。

- 7黄褐色土 ローム塊からなる。
- 8暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 9暗褐色土 ローム塊、ローム粒を多く含む。
- 10黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- 11黒褐色土 ローム塊を多く含む。
- 12暗褐色土 大型のローム塊を少量含む。
- 13黒褐色土 黄色バミスを塊状に含む。



- 11-2土
- 1黒色土 表土。根(クマ笹)が多い。
  - 2黒色土 締まり乏しい。
  - 3暗褐色土 大型の黄色バミスを多く含む。
  - 4黒褐色土 ローム塊も見られる。
  - 5暗褐色土 大粒の黄色バミスを多く含む。
  - 6褐色土 黄色バミスを少量含む。
  - 7黒色土 ローム塊を塊状に混在、黄色バミス大粒。
  - 8黄褐色土 ローム塊を主体とする。



- 11-3土
- 1黒褐色土 表土。
  - 2黒褐色土 ローム塊を筋状に含む。
  - 3黒褐色土 暗褐色土塊を少量に含む。
  - 4黒褐色土 黄色バミスを微量に含む。
  - 5黒褐色土 小型ローム塊を多く含む。
  - 6暗褐色土 ローム粒を少量含む。
  - 7黒色土 ローム塊を含む。
  - 8黒褐色土 ローム粒を多く含む。

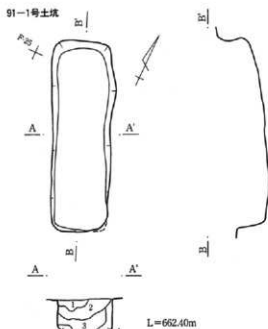
第141図 花畑遺跡11-1・2・3号土坑

91-1号土坑

位置 91E-24 PL 57

隅丸長方形の平面形状を呈し、DⅠ類型に分類される。上面規模とほぼ同じ底面規模である。底部の平面形状も隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。他の陥し穴と較べ深度が浅く、上部が大きく削られてしまっていると考えられる。短軸断面で見ると、壁面は底部から垂直に立ち上がっている。埋没土は、黒色土主体で、レンズ状に堆積している。底面壁際には、壁の崩落土と思われるロームブロックが少量混入する。

時期不明。



91-1土

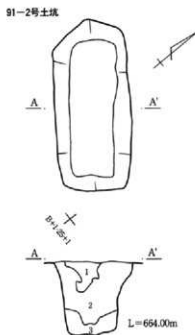
- 1 黒色土 黄色バミスを僅かに含む。
- 2 黒色土 黄色バミスを含まない。
- 3 黒色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。

91-2号土坑

位置 91B-25 PL 58

隅丸長方形の平面形状を呈し、DⅡ類型に分類される。上面規模より若干小さめの底面規模である。底部の平面形状も隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面で見ると、壁面は底部から始めは垂直に、中位からはやや開きながら上方に立ち上がる。この壁面の開きは、西壁よりも東壁の方が大きい。東壁の開きが大きく、西壁は垂直に近い状態で立ち上がる形状を呈していた可能性も考えられる。埋没土は、黒褐色土と黒色土である。僅かにローム粒を含み、ほぼレンズ状に堆積する。

時期不明。



91-2土

- 1 黒褐色土 ローム細粒を僅かに含む。
- 2 黒色土 ローム細粒を僅かに含む。角礫を含む。
- 3 黄褐色土 ローム主体。角礫を含む。



第142図 花畑遺跡91-1・2号土坑

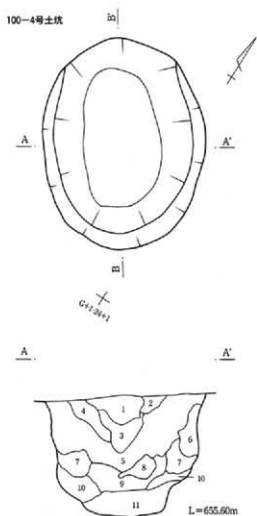
## 100-4号土坑

位置 100G-24 PL 58

楕円形の平面形状を呈し、BⅡ類型に分類される。上面規模と底面規模の差は少なく、遺構の北西部を除く上面がやや外側に広がっている。底部の平面形状も楕円形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面で見ると断面中位にやや袋状に外側に膨らんだ部分が見られる。底面付近に黄色バミスが多く見られるこ

とから、ここはAs-YPk層であろうと考えられ、本来の形状とは異なって、崩落しているものであると考えられる。本来の壁面は、底面から上方に向かって開きながら立ち上がっているものと思われる。埋没土は黒色土主体で、ほぼレンズ状に堆積する。壁の崩落土と考えられるロームブロックと黄色バミスが土層底部に多く混入する。

時期不明。



## 100-4土

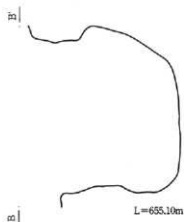
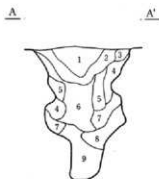
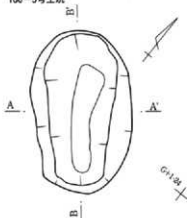
- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。黒色炭化物粒を僅かに含む。
- 2 黒褐色土 黄色バミス、黒色炭化物を僅かに含む。
- 3 暗褐色土 黒色土を多く混入。黄色バミスを僅かに含む。
- 4 黒色土 黄色バミスを僅かに含む。
- 5 黒色土 黄色バミスは殆ど含まない。ローム粒が僅かに見られる。壁近くにはロームが混入する。
- 6 暗褐色土 ローム塊、ローム粒が混入する。
- 7 暗褐色土 ロームが主体で黒色土も混入する。
- 8 黒色土 ローム塊、ローム粒がやや多く混入する。
- 9 黒色土 ローム粒がやや多く混入する。
- 10 黒色土 ブロック状の軽石塊、黄色バミスを多く含む。ローム粒を少量含む。
- 11 黒色土 黄色バミスと黒色土の混土。非常に多くの黄色バミスを含む。

0 1:40 2m

第143図 花畑遺跡100-4号土坑

第8章 花畑遺跡

100-5号土坑



100-5号土坑

位置 100G-23 PL 59

楕円形の平面形状を呈し、BⅡ類型に分類される。上面規模に較べ、底面規模が非常に小さい。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面は、底部からほぼ垂直に立ち上がった壁面が地上から近い位置で横に広がるY字形を呈する。埋没土は、黒色土や黄褐色土が主体である。ほぼレンズ状に堆積するが、壁面付近や底面には壁の崩落土である、ロームブロックやAs-YPkが多く混入する。

時期不明。

100-5土

- 1 黒色土 若干のローム、炭化物を混入。
- 2 黒色土 ロームを少量混入する。
- 3 黄褐色土 ローム主体。
- 4 黄褐色土 ロームブロック。
- 5 暗褐色土 黒色土とロームの混土。
- 6 暗褐色土 若干のロームを含む。
- 7 黄褐色土 ローム、黄色バミスが主体。
- 8 黄褐色土 黄色バミスを多く含む。
- 9 黒褐色土 ロームブロック、黄色バミスの混土。  
黄色バミスは下部に多い。

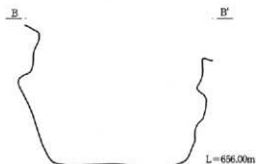
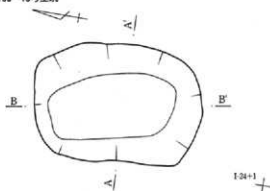
100-13号土坑

位置 100H-24 PL 60

隅丸長方形の平面形状を呈し、DⅡ類型に分類される。上面規模に較べ、底面規模は小さい。底部の平面形状も隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面で見ると、壁面は底面からわずかに上方に向かって開きながら立ち上がる。埋没土は、暗褐色土や黒褐色土が主体で、ほぼレンズ状に堆積する。土坑最下層は壁から崩落したと考えられるAs-YPkが主体の層である。

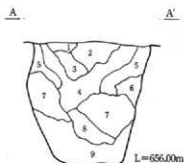
時期不明。

100-13号土坑



第144図 花畑遺跡100-5・13号土坑

100-13号土坑



- 100-13土
- 1暗褐色土 黄色バミスを少量含む。
  - 2暗褐色土 黒色土を混入。
  - 3暗褐色土 黄色バミスを大量に含む。
  - 4黒褐色土 黄色バミスを僅かに含む。暗褐色土ブロックを少量含む。
  - 5黒褐色土 ロームを混入。炭化物粒を僅かに混入。
  - 6黄褐色土 ローム主体だが黒褐色土が混じる。
  - 7黄褐色土 ローム主体。
  - 8暗褐色土 ロームブロックをやや多く混入する。
  - 9黄褐色土 黄色バミス主体。黒色土を僅かに混入する。

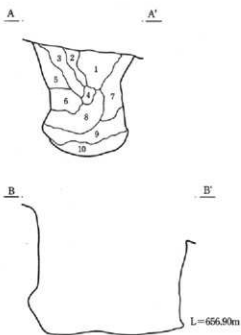
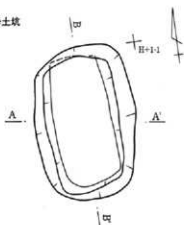
100-14号土坑

位置 100H-25 PL 60

隅丸長方形の平面形状を呈し、DⅢ類型に分類される。上面規模と底面規模はほぼ同じ大きさである。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面は楕状である。短軸断面で見ると、底部から垂直気味に立ち上がった壁面は、確認面から40cm程の位置で横に広がり、Y字形に近い形状を呈する。埋没土は、黒褐色土主体で、ほぼレンズ状に堆積する。土層下部には、壁から崩落したと考えられるAs-YPkが多く混入する。

時期の特定にあたって、土層上位、1層と8層の境より検出された炭化物を試料に放射性炭素年代測定をおこなった(第12章第6節(2))。その結果は、古墳時代に比定されるというものであった。これをもって遺構の時期決定とするには至らないが、100-23・33号土坑の結果と併せて今後の検討資料としたい。

100-14号土坑



- 100-14土
- 1暗褐色土 ロームブロック粒を多く含む。炭化物を少量混入する。
  - 2黒褐色土 ロームを少量含む。黄色バミスを少量含む。
  - 3黒褐色土 ロームを極僅かに含む。
  - 4黒色土 ローム、黄色バミスなし。炭化物を少量含む。
  - 5黒褐色土 黄色バミス殆ど含まない。
  - 6黒褐色土 ローム粒・細粒を多く含む。黄色バミス殆どなし。
  - 7黒褐色土 黄色バミス、ロームブロックを僅かに含む。
  - 8黒褐色土 炭化物粒を僅かに含む。
  - 9黒色土 ロームを不均等に多く含む。
  - 10黒色土 黄色バミスをやや多く含む。

0 1:40 2m

第145図 花畑遺跡100-13・14号土坑

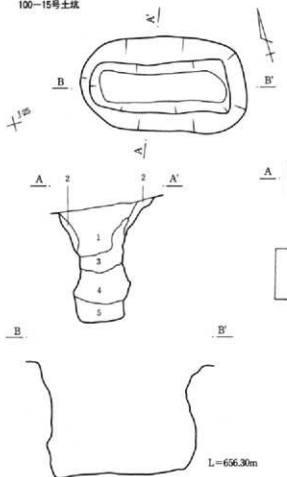
100-15号土坑

位置 100I-24 PL 60

隅丸長方形の平面形状を呈し、DⅢ類型に分類される。上面規模に較べ、底面規模は非常に小さい。底部の平面形状も隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面で見ると、底部から垂直に立ち上がった壁面は、確認面から48cm程の位置で横に広がり、Y字形状を呈する。埋没土は黒褐色土主体で、レンズ状に堆積している。底部には、壁から崩落したと考えられるAs-YPkやロームが多く混入する。

時期不明。

100-15号土坑



100-15土

- 1 黒色土 ロームブロック、黄色バミス、炭化物を混入。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土 1と近似するが、ロームをやや多く混入。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロック、黄色バミスを多く含む。

100-20号土坑

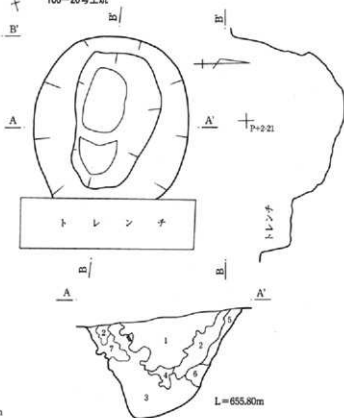
位置 100P-20 PL 61

ほぼ円形の平面形状を呈する。AⅡ類型に分類される陥し穴は、本土坑と10-44号土坑の2基のみである。上面規模に較べ、非常に狭い底面規模となる。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面は2段になっており10cm程の段差を持つ。埋没土は黄色バミスが混入する黒色土と黒褐色土で、レンズ状に堆積している。

調査時に、この土坑を掘った際の廃土が100-33号土坑の覆土となっている様子が見られた事から、同土坑より新しい時期に構築されたと考えられる。

時期不明。

100-20号土坑



100-20土

- 1 黒褐色土 黄色バミス、ローム粒粒、炭化物を僅かに含む。
- 2 黒色土 黄色バミスを僅かに含む。
- 3 黒褐色土 ローム土、黄色バミスを多く含む。
- 4 褐色土 黄色バミスを多く含む。
- 5 黒色土 ローム土を少量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒粒、黄色バミスを少量含む。
- 7 黒褐色土 ローム土、ローム粒粒を多く含む。

第146図 花畑遺跡100-15・20号土坑



100-23号土坑

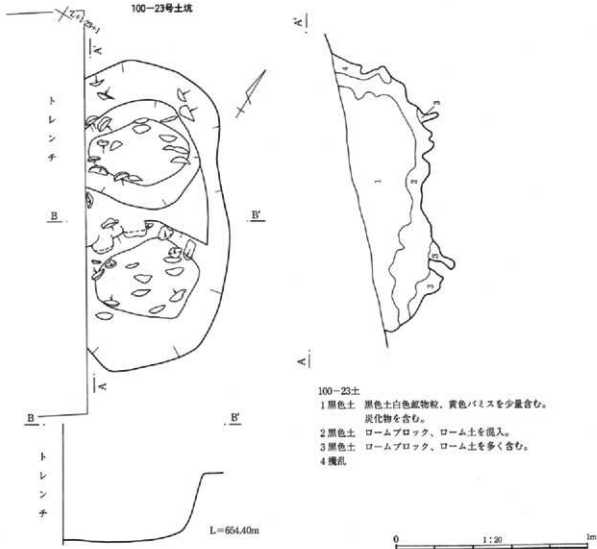
位置 100K-22 PL 62

詳細な土層を確認するため西側にトレンチを設定し調査を行った。ほぼ楕円形の平面形状を呈すると思われる。BⅡ類型に分類される。他の陥し穴と比べ深度が浅く、上部が大きく削られてしまっていると考えられる。

上面規模と底面規模の差は少なく、底部の平面形状もほぼ楕円形を呈する。底面を長軸断面で見ると中央のやや高い、緩いW型の形状を呈す。一部に逆茂木のものらしい痕跡が見られる。埋没土は、黒色土で、レンズ状に堆積する。底部にはロームブロックが混入する。

土坑底面からは、土坑掘削に用いた道具のものとと思われる工具痕が検出されている。底面のほぼ全面、39ヶ所の工具痕が確認できる。中央のやや高くなった位置から北西壁と南東壁の方向に刃先が進入している。工具痕の幅は8~12cmである。工具痕は他にも、100-27・29号土坑から検出されている。

時期の特定にあたって、覆土中から検出された炭化物に放射性炭素年代測定をおこなった(第12章第6節(2))。覆土中位と下位から検出された試料を各1点ずつ分析した結果、いずれも古墳時代に比定される結果を示した。これをもって遺構の時期決定とするには至らないが、100-14・33号土坑の結果と併せて今後の検討資料としたい。



第147図 花畑遺跡100-23号土坑

100-27号土坑

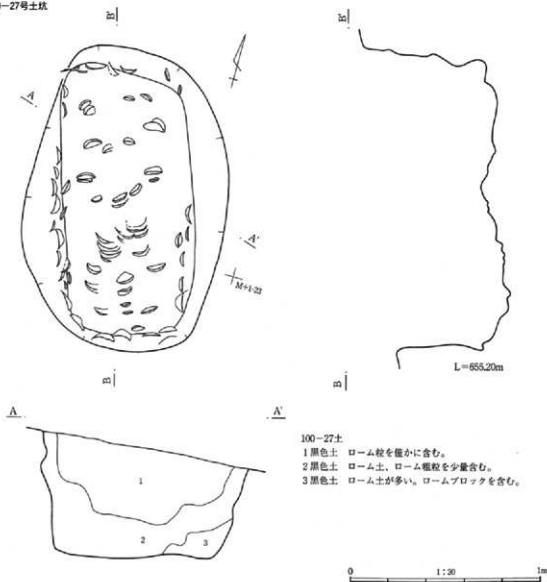
位置 100M-22 PL 62・63・71

ほぼ楕円形の平面形状を呈する。本遺跡の中で、B I 類型に分類されるものはこの土坑のみである。しかし、他の陥し穴と較べ深度が浅く、遺構上面は大きく削られてしまっていると考えられる。

上面規模とほぼ同じ底面規模である。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面は長軸断面で見ると中央がやや高い、緩いW型の形状を呈す。埋没土は、ロームの混入する締まりの弱い黒色土でレンズ状に堆積している。

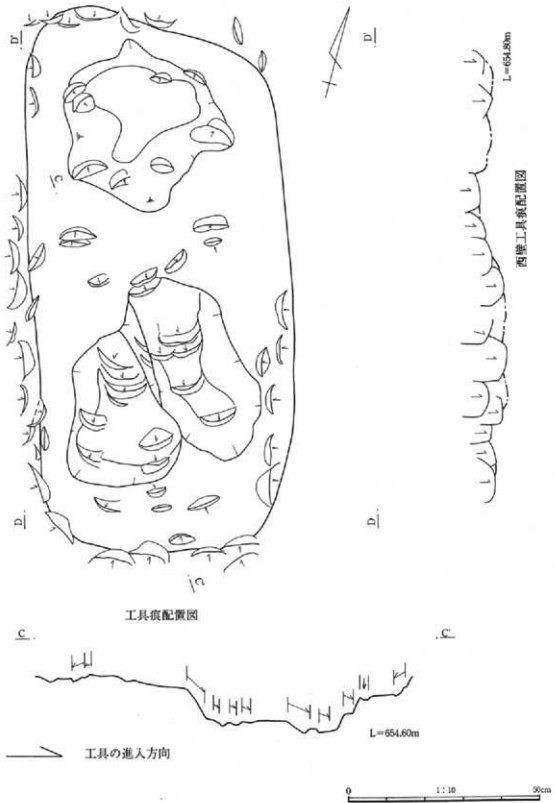
土坑内部からは、土坑掘削に用いた道具のものと思われる工具痕が検出されている。壁面に36ヶ所、底面に36ヶ所の工具痕が確認できる。壁面では上から下に向かい刃先が進入している。底面の工具痕は、中央のやや高くなった位置から南壁と北壁の方向に刃先が進入している。工具痕の幅は6~12cmである。また、痕跡から計った刃先の進入角については197・198頁の第170図と第13表に詳しいので参照していただきたい。工具痕は他にも、100-23・29号土坑から検出されている。本土坑は100-26土坑と重複し、こちらの方が新しい。時期不明。

100-27号土坑



第148図 花畑遺跡100-27号土坑 (1)

100-27号土坑



第149図 花畑遺跡100-27号土坑 (2)

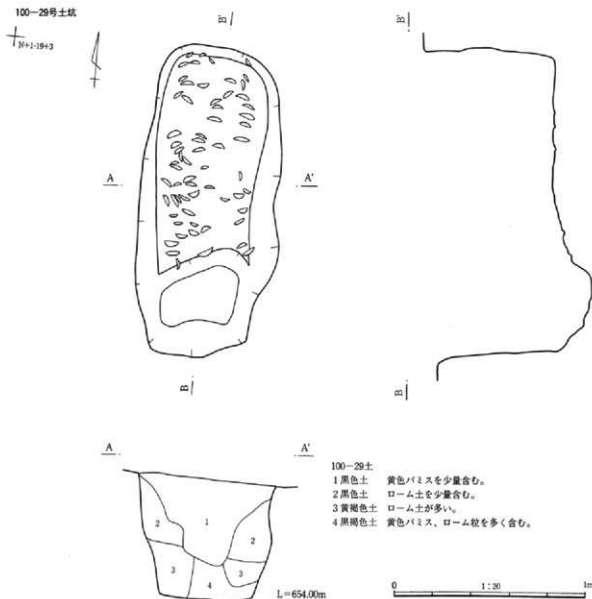
100-29号土坑

位置 100M-19 PL 64

隅丸長方形の平面形状を呈し、D I 類型に分類される。上面規模より若干小さい底面規模である。底部の平面形状も隅丸長方形である。底面は2段になっており、南壁際のみ10cm程低く掘られている。短軸断面で見ると、壁面は底面から極僅かに上方に向かって開きながら立ち上がる。埋没土は、黒色土主体で、土層下位の底面付近には壁の崩落土と考えられるロームが多く混入する。

土坑底面からは、土坑掘削に用いた道具のものと思われる工具痕が検出されている。底面の高い段のほぼ全面、64ヶ所の工具痕が確認できる。中央から長軸の両端の壁に向かって、刃先が進入している様子が見受けられる。工具痕の幅は4~10cmである。工具痕は他にも、100-23・27号土坑から検出されている。

時期不明。



第150図 花畑遺跡100-29号土坑

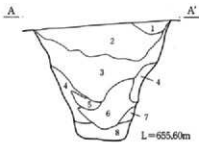
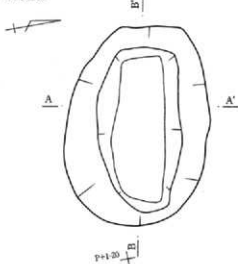
## 100-33号土坑

位置 100P-19 PL 65

楕円形の平面形状を呈し、BⅢ類型に分類される。上面規模に較べ、底面規模は非常に小さい。底部の平面形状は隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。短軸断面は、底面より2/3程上がった位置から大きく横に広がるY字形を呈する。埋没土は黒褐色土主体である。4層以下については自然埋没と考えられる。しかし、1～3層は地山の土層と逆転している様子が見受けられており、近接する100-20号土坑を掘った際の廃土がなされたものと考えられる。

時期の特定にあたって、覆土中から検出された炭化物に放射性炭素年代測定をおこなった（第12章第6節（2））。覆土中位（3層底部）から2点と下位（6層底面）から1点の試料を分析した。その結果、中位の2点は弥生時代と古墳時代という異なった年代に比定された。また、下位の1点は弥生時代に比定された。これをもって遺構の時期決定とするには至らないが、100-14・23号土坑の結果と併せて今後の検討資料とした。

100-33号土坑



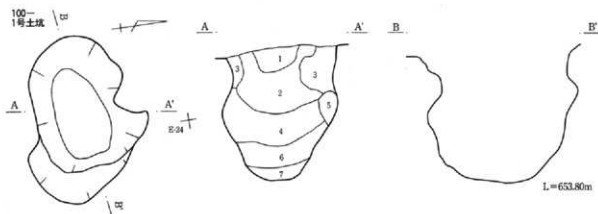
## 100-33土

- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色土                    | ロームブロックを僅かに含む。            |
| 2 ロームブロックを主体とし黒褐色土を僅かに含む。 |                           |
| 3 黒褐色土                    | ロームブロックを少量含む炭化物も少量含む。     |
| 4 ロームブロック                 | 壁崩落土。                     |
| 5 黒褐色土                    | ロームブロックを少量含む。             |
| 6 黒褐色土                    | ロームブロックを少量含む。ローム粒をやや多く含む。 |
| 7 ロームブロックを主体とし黒褐色土を少量含む。  |                           |
| 8 黒褐色土                    | ロームブロック、ローム粒を多く含む。        |

0 1:40 2m

第151図 花畑遺跡100-33号土坑

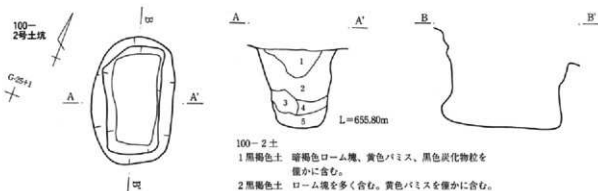
第8章 花畑遺跡



100-1土

- 1 黒褐色土 黄色バミスを少量含む。  
 2 黒褐色土 黄色バミスを含まない。僅かに黒色炭化物が見られる。  
 3 黄褐色土 ローム粒を主体で黄色バミスを少量含む。また黒色土を僅かに混じる。

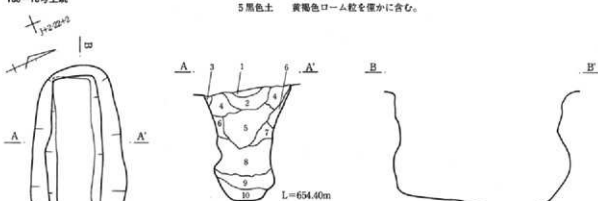
- 4 黒色土 ローム粒を僅かに含む。黄色バミスを含まない。  
 5 黒色土 ロームブロックをやや多く混入する。黄色バミスは殆どない。  
 6 黒色土 黄色バミスを多く含む。  
 7 黒色土 黄色バミスを非常に多く含む。



100-2土

- 1 黒褐色土 暗褐色ローム塊、黄色バミス、黒色炭化物粒を僅かに含む。  
 2 黒褐色土 ローム塊を多く含む。黄色バミスを僅かに含む。  
 3 黒褐色土 黄褐色ローム土を全体に含む。  
 4 黒褐色土 ローム、黄色バミスを含まない。  
 5 黒色土 黄褐色ローム粒を僅かに含む。

100-10号土坑



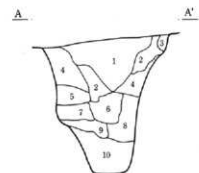
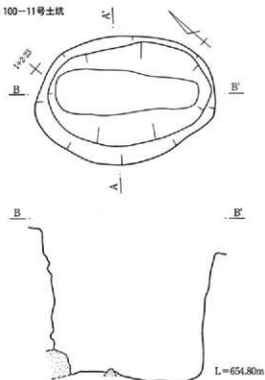
100-10土

- 1 黒褐色土 黄色バミスを少量含む。  
 2 黒色土 黄色バミスは同様に含む。  
 3 暗褐色土 黄色バミスを含まない。  
 4 黒色土 黄色バミスを僅かに含む。  
 5 黒色土 ロームブロックを少量含む。  
 6 黄褐色土 ローム主体で黒色土少量混入する。  
 7 黒色土 ロームをやや多く混入する。  
 8 黒色土 ロームをブロック状にやや多く混入する。  
 9 黒色土 黄色バミスを少量含む。ロームが僅かに混入する。  
 10 黒色土 黄色バミスが多く混入する。

0 1:40 2m

第152図 花畑遺跡100-1・2・10号土坑

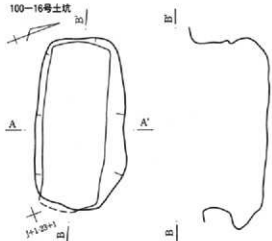
100-11号土坑



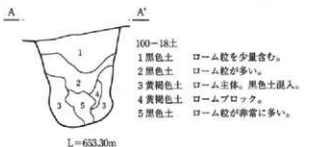
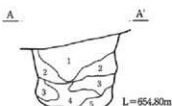
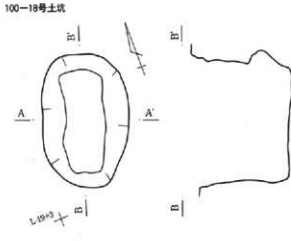
100-11土

- 1 黒褐色土 黄色バミスをやや多く含む。ロームブロックを少量含む。炭化物粒を僅かに含む。
- 2 暗褐色土 ロームを多く混入する。黄色バミスを殆ど含まない。
- 3 黄褐色土 ロームブロック。壁が崩壊したものか。
- 4 黄褐色土 黒色土を少量混入。
- 5 黄褐色土 黒色土を極僅かに混入。
- 6 黒褐色土 黄色バミスを少量含む。ローム粒を少量含む。
- 7 黒色土 As-YPkをやや多く含む。ロームも多く含む。
- 8 黒褐色土 黄色バミスを殆ど含まない。ローム粒をやや多く含む。
- 9 黄褐色土 ローム主体だが黒色土も多く混入。
- 10 黄褐色土 As-YPkに黒色土が混入する。As-YPk主体で脆弱。

100-16号土坑



100-18号土坑

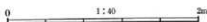


100-16土

- 1 黒色土 炭化物が混入。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土 若干のロームブロックを含む。
- 5 黒色土 若干の黄色バミスが混入。

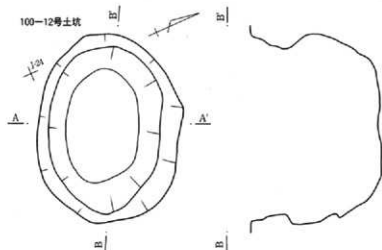
- 100-18土
- 1 黒色土 ローム粒を少量含む。
  - 2 黒色土 ローム粒が多い。
  - 3 黄褐色土 ローム主体。黒色土混入。
  - 4 黄褐色土 ロームブロック。
  - 5 黒色土 ローム粒が非常に多い。

L=653.30m

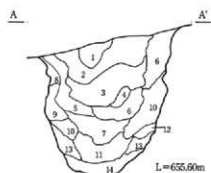


第153図 花畑遺跡100-11・16・18号土坑

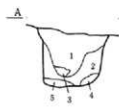
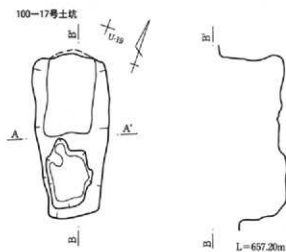
第8章 花畑遺跡



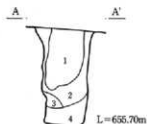
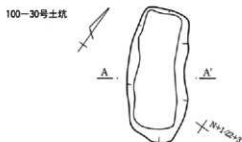
- 100-12土
- 1 暗褐色土 黄色バミスをやや多く含む。
  - 2 暗褐色土 黄色バミスを多く含む。
  - 3 黄褐色土 黄色バミスを非常に多く含む。
- 黒褐色土をブロック状に少量含む。



- 4 黒褐色土 ローム細粒が均等に混入する。
- 5 黒色土 ロームブロック、ローム粒、細粒をやや多く混入する。
- 6 黒褐色土 ローム粒が少量混入。また黄色バミスを僅かに含む。
- 7 黒色土 ローム粒を多めに混入する。
- 8 黒色土 ローム粒を僅かに含む。
- 9 黒褐色土 ロームブロックが混入する。ローム粒を多く混入する。
- 10 黄褐色土 ローム主体。黒色土を少量混入する。
- 11 黒褐色土 ローム粒を少量混入する。又黒色炭化物粒を僅かに混入。
- 12 黒褐色土 黄色バミスを大量に混入。
- 13 黒色土 混ざりものは殆どない。
- 14 黒色土 黄色バミスを多く含む。



- 100-17土
- 1 黒褐色土 黄色バミスを僅かに含む。
  - 2 黒褐色土 ローム土を少量含む。
  - 3 黒褐色土 ローム土と黄色バミスの混土。
  - 4 茶褐色土 ローム土が多い。
  - 5 黒褐色土 ロームを殆ど含まない。

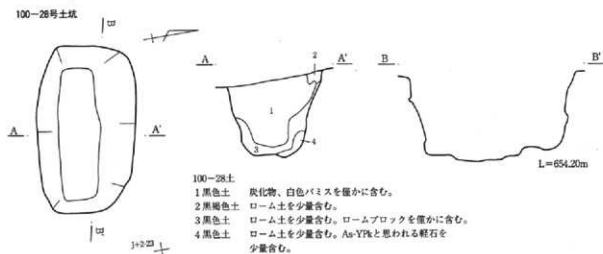
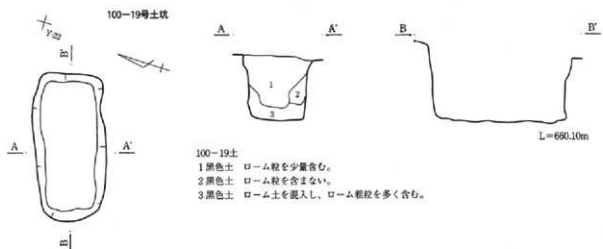


- 100-30土
- 1 黒色土 白色バミスを僅かに含む。
  - 2 黒色土 ローム土を僅かに含む。
  - 3 黒色土 ローム土を僅かに含む。ローム細粒を僅かに含む。
  - 4 黒褐色土 ローム土を少量含む。

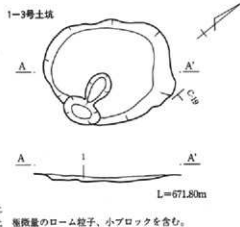
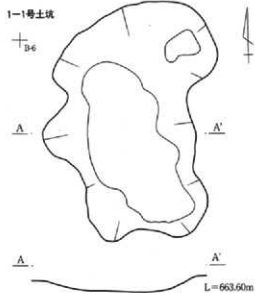


第154図 花畑遺跡100-12・17・30号土坑





④土坑

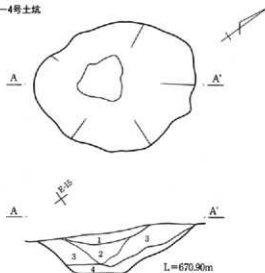


第155図 花畑遺跡1-1・3・100-19・28号土坑

0 1:40 2m

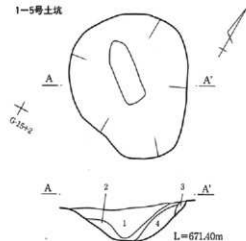
第8章 花畑遺跡

1-4号土坑



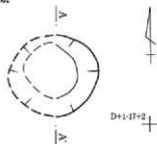
- 1-4土  
 1 黒色土 極少量のローム粒子を含む。  
 2 黒色土 ローム粒子の混入。  
 3 黒褐色土 ローム小ブロック、角礫の混入。  
 4 黄褐色土 ロームブロック、角礫を主体とする。

1-5号土坑



- 1-5土  
 1 黒褐色土 角礫、黄色バミスを多く含む。  
 2 暗褐色土 ローム分多く含み少量の黄色バミスを含む。  
 3 暗褐色土 ローム分多く含み少量の黄色バミスを含む。  
 4 黄褐色土 地山ローム土の再堆積土。

1-7号土坑



- 1-7土  
 1 黒褐色土 黄色バミス、小礫を若干混入。  
 2 黒褐色土 黄色バミス、ローム小ブロックを混入。

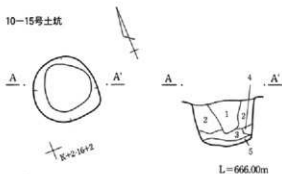
10-15号土坑

位置 10K-16 PL 66

円形の平面形状を呈し、A2類型に分類される。遺跡内の他の土坑と較べ平面規模が小さい。これと同等あるいはこれ以下の規模のものは数基しかない。底面はほぼ平坦である。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は、黒褐色土主体で土層上部に炭化物が少量混入する。

時期不明。

10-15号土坑



- 10-15土  
 1 黒褐色土 若干の炭化物、ロームブロックを含む軟質土。  
 2 黒褐色土 炭化物の混入は少ない。  
 3 黒褐色土 地山ロームブロックを多く含み炭化物の混入は見られない。  
 4 ロームブロック  
 5 淡黄褐色土 地山ロームを主体。



第156図 花畑遺跡1-4・5・7・10-15号土坑

第4節 検出された遺構と遺物

10-31号土坑

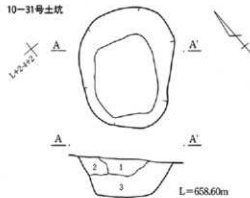
位置 10L-4 PL 67

不定形の平面形状を呈し、E3類型に分類される。

底面はほぼ平坦である。壁面は、底面から上方にやや開きながら立ち上がる。北壁だけは、上方の開きが大きくなる。埋没土は黒色土と黒褐色土で、レンズ状に堆積している。形状から、陥し穴の可能性も考えられる。

時期不明。

10-31号土坑



10-31土

- 1 黒色土 黄色バミスを僅かに含む。
- 2 黒褐色土 黄色バミスをやや多く含む。ロームを混入する。
- 3 黒色土 黄色バミスを少量含む。

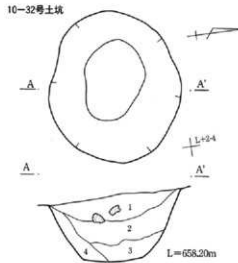
10-32号土坑

位置 10L-3 PL 68

ほぼ円形の平面形状を呈し、A2類型に分類される。底面はほぼ平坦である。壁面は、上方に向かってやや開きながら立ち上がる。埋没土は黒色土主体で、レンズ状に堆積している。

時期不明。

10-32号土坑



10-32土

- 1 黒色土 黄色バミスを僅かに含む。暗褐色土ブロックが僅かに見られる。
- 2 黒色土 黄色バミスが僅かに見られる。
- 3 黒褐色土 黄色バミスを僅かに含む。
- 4 黒色土 混入物殆どなし。

10-34号土坑

位置 10T-16 PL 68

楕円形の平面形状を呈し、B2類型に分類される。底面は多少の凹凸があるもののほぼ平坦である。壁面は僅かに開きながら上方に立ち上がる。西壁には狭小なテラスが存在する。埋没土は、黒色土と黒褐色土で、レンズ状に堆積する。形状から考えると、陥し穴の底部とも考えられる。

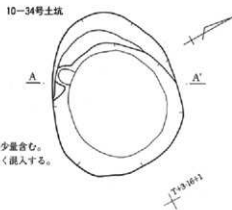
時期不明。



10-34土

- 1 黒色土 ローム粒を僅かに含む。
- 2 黒色土 白色軽石を僅かに含む。
- 3 黒褐色土 ロームは粒状又はブロック状で少量含む。
- 4 黒色土 下層にロームブロックがやや多く混入する。

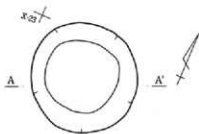
10-34号土坑



第157図 花畑遺跡10-31・32・34号土坑

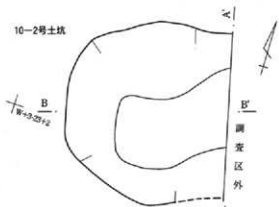
第8章 花畑遺跡

10-1号土坑



10-1土  
1 黒色土 黄色パミスをやや多く含む。

10-2号土坑

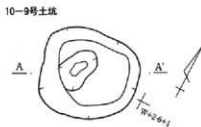
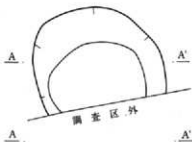


10-2土  
1 暗褐色土 表土。白色粒子、黄色粒子を極少量含む。  
2 暗黄褐色土 黒褐色土のブロックが混入、黄色パミスをやや多く含む。

3 黒褐色土 黄色パミス、ロームブロックを少量含む。  
4 暗褐色土 黄色パミスを多く含む。ロームブロックを極少量含む。  
5 黒褐色土 黄色パミスをやや多く含む。  
6 暗褐色土 黄色パミスをやや多く含む。下層ではロームブロックが多い。  
7 黒褐色土 (黒が主体) 黄褐色パミス、ロームを全体に含むため、やや黄色味がかかる。  
8 暗褐色土 やや砂っぽい、黒色土からロームの漸移層のような色調。



10-10号土坑



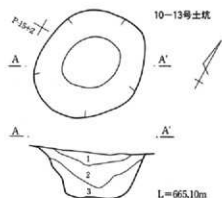
10-9土  
1 黒褐色土 黄色パミスを非常に多く含む。  
2 黒色土 黄色パミスを少量含む。  
3 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

10-10土  
1 黒色土 黄色パミスを多く含む。  
2 暗褐色土 ロームブロック、暗黄褐色土ブロックをやや多く含む。  
3 ロームブロックに少量暗褐色土が混じる。

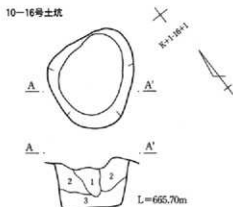


第158図 花畑遺跡10-1・2・9・10号土坑

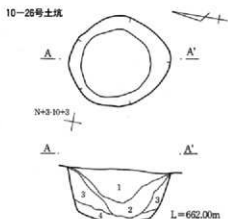
第4節 検出された遺構と遺物



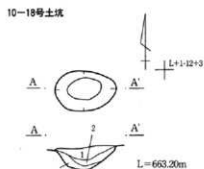
- 10-13土  
 1 黒色土 少量のローム粒子が混入。  
 2 黒色土 ローム粒子を多く混入。  
 3 黒褐色土 黄色バミスを多く含む。



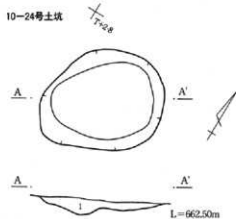
- 10-16土  
 1 黒褐色土 若干の炭化物、ロームブロックを含む軟質土。  
 2 黒褐色土 炭化物の混入は少ない。  
 3 黒褐色土 地山ロームブロックを多く含む炭化物の混入は見られない。



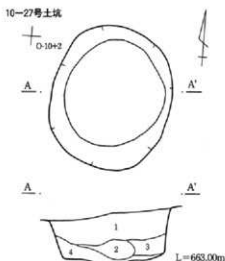
- 10-26土  
 1 黒色土 混入物が少ない。  
 2 黒色土 少量のローム小粒を含む。  
 3 黒褐色土 ロームを混入。  
 4 黒褐色土 地山、暗褐色ロームを含む。



- 10-18土  
 1 黒色土 少量の炭化物を含む。  
 2 黒色土  
 3 黒褐色土 地山のローム（褐色）を若干混入。



- 10-24土  
 1 黒色土 ローム粒子、ローム小ブロックが若干混入する。



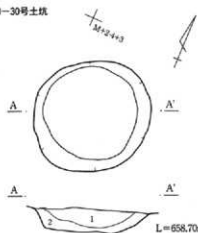
- 10-27土  
 1 黒褐色土 少量のローム粒子を含む。  
 2 黒褐色土 ロームを主体とする。  
 3 黒褐色土 ロームブロックを僅かに含む。  
 4 暗褐色土 地山ロームを多く含む。

第159図 花畑遺跡10-13・16・18・24・26・27号土坑



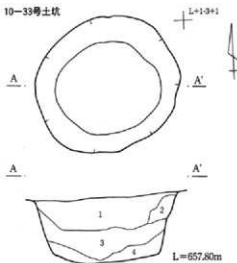
第8章 花畑遺跡

10-30号土坑



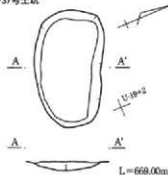
- 10-30土  
 1 黒色土 黄色バミスを多く含む。ローム粒を少量含む。  
 2 黒褐色土 黄色バミスを多く含む。ローム粒を少量含む。

10-33号土坑



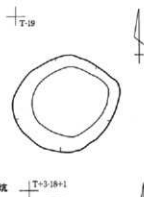
- 10-33土  
 1 黒色土 黄色バミス、ローム粒を全体的に含む(少量)。  
 2 黒褐色土 混入物は殆どない。  
 3 黒褐色土 黄色バミスを全体に少量含む。  
 4 黒褐色土 黄色バミスを僅かに含む。

10-37号土坑

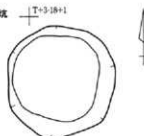


- 10-37土  
 1 黒色土 少量の黄色バミスを混入。

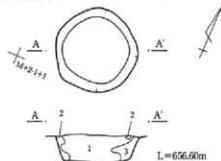
10-42号土坑



10-43号土坑

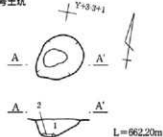


10-46号土坑



- 10-46土  
 1 黒色土 黄色バミスを多く含む。  
 2 黒褐色土 ロームブロック。  
 3 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。

10-47号土坑

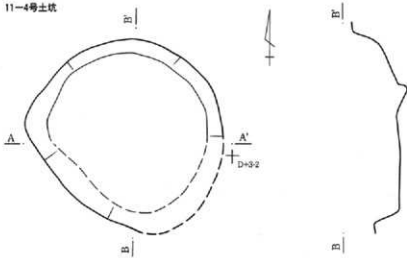


- 10-47土  
 1 黒色土 極少量のローム粒を含む。  
 2 黒褐色土 埴山ロームを含む。



第160図 花畑遺跡10-30・33・37・42・43・46・47号土坑

11-4号土坑

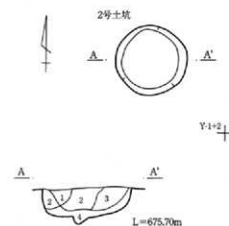


11-4土

- 1 暗黄褐色土 ロームと暗黄色土がほぼ同量に混じる。
- 2 暗黄褐色土 黒色土を若干含む。
- 3 黒色土 黄色バミスを少量含む。炭化物を極少量含む。

L=677.10m

20-1・2号土坑



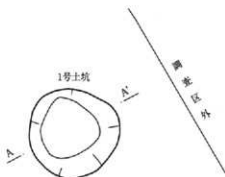
20-1土

- 1 黒色土 軟質層、木の根痕?
- 2 黒褐色土 大粒の黄色バミスを多く含む。
- 3 黒褐色土 黄色バミスを少量含む。
- 4 黒褐色土 微量に黄色バミスを含む。



20-2土

- 1 暗褐色土 微量の黄色バミスを含む。
- 2 褐色土 ローム塊を塊状に含む。



20-1号土坑

位置 20X-2 PL 67

円形の平面形状を呈し、A4類型に分類される。底面の中央部分に小規模の掘り込みが確認できる。底面は、掘り込み部分以外はほぼ平坦である。壁面は、上方に垂直に立ち上がる。埋没土は、黒褐色土主体で、ほぼレンズ状に堆積する。上層にAs-YPkを多く含む。

時期不明。



第161図 花畑遺跡11-4・20-1・2号土坑

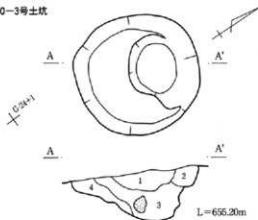
100-3号土坑

位置 100F-24 PL 69

円形の平面形状を呈し、A4類型に分類される。底面の北側部分は、直径60cm、深さ25cm程の円形状に掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。壁面は底面から垂直に立ち上がり、中段にテラスを持って、再び垂直に立ち上がる。埋没土は暗褐色土主体で、レンズ状に堆積している。層位により含有量は異なるが、As-YPkとロームが全体に含まれる。

時期不明。

100-3号土坑



100-3土

- 1 黒色土 As-YPkをやや多く含む。ロームを混入。
- 2 暗褐色土 黒色土とロームの混土でローム主体。As-YPk少量含む。
- 3 暗褐色土 黒色土とロームの混土で黒土の割合が多い。黄色バミスを少量含む。
- 4 黄褐色土 ロームを主体で黒色土を僅かに含む。黄色バミスを僅かに含む。

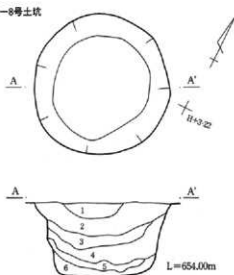
100-8号土坑

位置 100I-22 PL 70

円形の平面形状を呈し、A2類型に分類される。底面はほぼ平坦である。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面付近で横に開く。これらの形状から、陥し穴の可能性も考えられる。埋没土は黒色土や黒褐色土や暗褐色土で、レンズ状に堆積している。土坑底部には黄色バミスが混入する。

時期不明。

100-8号土坑



100-8土

- 1 黒色土 ローム、黄色バミスを若干混入。
- 2 暗褐色土 ローム分、黄色バミスを含む。
- 3 黄褐色土 ローム、黄色バミスを多く含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック、黄色バミスを含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 6 黒色土 黄色バミスを含む。

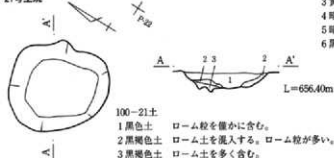
100-21号土坑

位置 100P-21 PL 71

隅丸方形の平面形状を呈し、C3類型に分類される。底面及び壁面には小規模の凹凸が多数存在する。壁面は底面から上方にやや開きながら立ち上がる。埋没土は黒色土と黒褐色土で、レンズ状に堆積する。

時期不明。

100-21号土坑



100-21土

- 1 黒色土 ローム粒を僅かに含む。
- 2 黒褐色土 ローム土を混入する。ローム粒が多い。
- 3 黒褐色土 ローム土を多く含む。

0 1:40 2m

第162図 花畑遺跡100-3・8・21号土坑



100-22号土坑

位置 100M-21 PL 71

楕円形の平面形状を呈し、B4類型に分類される。底面の北側部分は、直径50cm、深さ15cm程の円形形状に掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。壁面は底面から垂直に立ち上がり、中段にテラスを持って、再び垂直に立ち上がる。南東のテラス部は他より広く作られている。掘込土は、黒褐色土や茶褐色土主体で、テラス部の壁面には壁の崩落土と考えられるロームが堆積している。

時期不明。

100-32号土坑

位置 100M-23 PL 72

円形の平面形状を呈し、A2類型に分類される。底面はほぼ平坦である。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、南西部分のみY字状にやや広がる。これらの形状から、陥し穴の可能性も考えられる。掘込土は、黒色土や黒褐色土が主体である。

100-31号土坑と重複し、こちらの方が古い。

時期不明。

100-31土

1 黒褐色土 黄色バミスを少量含む。

100-32土

1 黒色土 前後黄色バミス、ローム粒を僅かに含む。

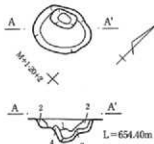
2 黒褐色土 白色バミスを僅かに含む。

3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。

4 黄褐色土 黒色土が少量混入する。

5 黒褐色土 As-YFkを少量含む。

100-24号土坑



100-24土

1 黒褐色土 ローム粗粒、黄色バミスを少量含む。

2 黒褐色土 ローム土を少量混入する。

3 黒褐色土 ローム土を多く含む。

4 黄褐色土 ローム土主体。

100-22号土坑



100-22土

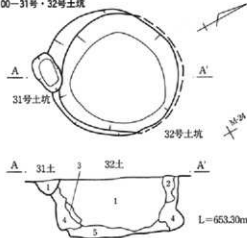
1 黒褐色土 ローム粗粒、白色バミスを少量含む。

2 黒褐色土 ローム土を少量含む。ローム粗粒を僅かに含む。

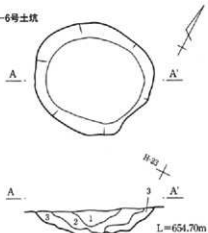
3 茶褐色土 ローム土を含む。ローム粗粒、白色バミスを少量含む。

4 黄褐色土 ローム土を多く含む。

100-31号・32号土坑



100-6号土坑



100-6土

1 黒色土 ローム粒、黄色バミスを僅かに含む。

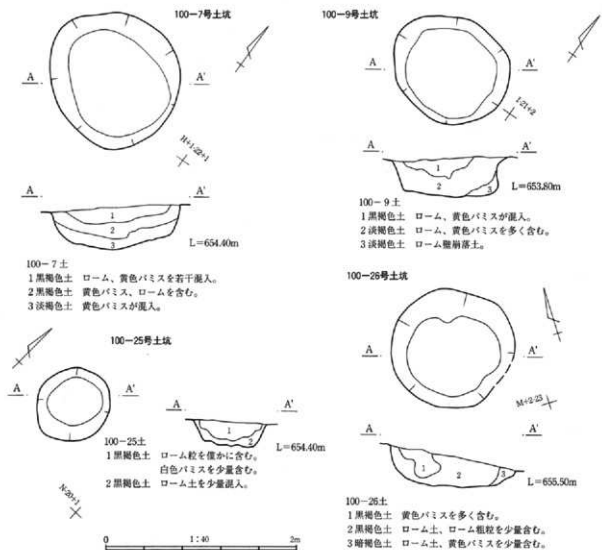
2 黒褐色土 黄色バミス、ローム粒、黒色炭化物粒を僅かに含む。

3 黒褐色土 黄色バミスは含まないがロームがやや多く混じる。

第163図 花畑遺跡100-6・22・24・31・32号土坑

0 1:40 2m

第8章 花畑遺跡



第164図 花畑遺跡100-7・9・25・26号土坑

(3) 溝

1-1号溝 PL 72

1E-14~1C-12に位置する。北西から南東の方角にはほぼ直線的に、等高線に直交するように走向する。規模は長さ13.5m、幅60cm、深度10~20cm程である。

他遺構との重複関係は、2号溝と重複もしくは合流し、新旧関係は重複の場合2号溝より古い。断面は、概ね逆台形の形状を呈する。埋設土は黒色土でレンズ状に堆積している様子が見受けられる。

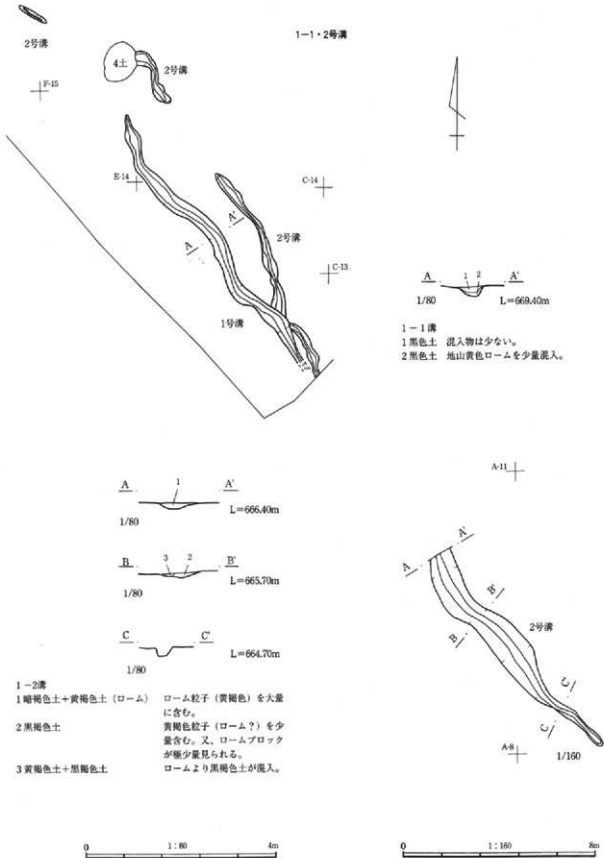
掘り込みは非常に浅く、層位から時期を特定することはできない。また、遺物も出土していないため遺構の時期は不明である。

1-2号溝 PL 72

1F-15~10Y-8グリッドに位置する。2カ所で途切れているが、北西から南東の方角にはほぼ直線的に、等高線に直交するように走向する。規模は長さ39.6m、幅30~80cm、深度10~20cm程である。

他遺構との重複関係は、1号溝と重複もしくは合流し、1-4号土坑と重複する。新旧関係は重複の場合、1号溝より新しい。1-4号土坑との時期差は不明である。断面は、概ね逆台形の形状を呈する。埋設土は黒褐色土で全体にロームが混入している。レンズ状に堆積している様子が見受けられる。

掘り込みは非常に浅く、層位からは時期を特定することはできない。また、遺物も出土していないため遺構の時期は不明である。



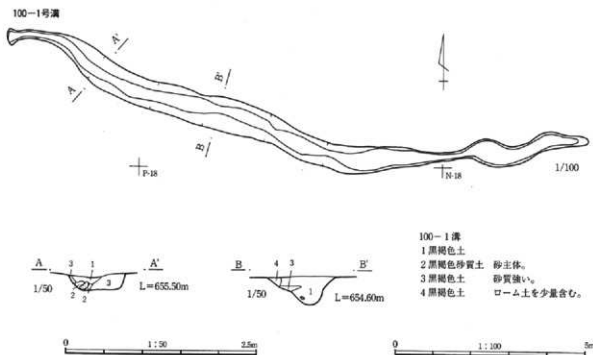
第165図 花畑遺跡1-1・2号溝

100-1号溝 P L 72

100M-18~100P-18グリッドに位置する。西から東の方向にほぼ直線的に、等高線に直交するように走向する。規模は長さ15.8m、幅20~90cm、深度15~30cm程である。

他遺構との重複関係はない。断面は、深い場所が部分的にあるものの、概ね逆台形の形状を呈する。粗没土は黒褐色土で礫や砂が混入する。

掘り込みは浅く、層位から時期を特定することはできない。また、遺物も出土していないため遺構の時期は不明である。



第166図 花畑遺跡100-1号溝

(4) 岩陰 P L 73・74

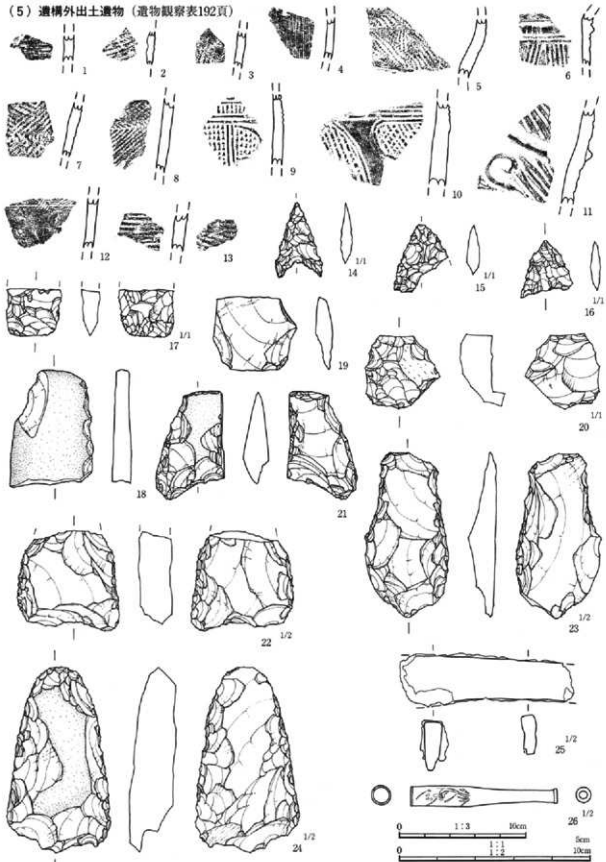
花畑遺跡調査区東側の谷に存在する岩陰に対し、東から1~3号岩陰と命名しトレンチ調査を行った。その結果、岩陰前のテラス部は堆積土が薄くほとんどが表土であることが判明した。期待されていた、遺構及び遺物包含層は認められなかった。

もっとも東側にある1号岩陰のテラス部には、近年まで存在した古峯神社の小祠が祀られていた。その台座跡から寛永通宝1枚が出土したため、遺物として取り上げを行った。出土遺物については、この1点のみである(遺物観察表192頁)。



第167図 花畑遺跡岩陰出土遺物

(5) 遺構外出土遺物 (遺物観察表192頁)



第168図 花畑遺跡遺構外出土遺物

## 第8章 花畑遺跡

第11表 花畑遺跡遺物観察表

91-1号住居		土師器-須恵器		(単位: cm)			
番号	種類	部位	計測値	①焼成②色調③胎土	その他の特徴	備考	
1	須恵器	口一底部中位1/2視	□15.0底一高(4.8)	①還元焼、軟質②粗砂粒	ロクロ整形、回転右回り。		
2	須恵器	口一底部中位1/4視	□15.0底一高(4.4)	①還元焼、やや軟質②灰白③粗砂粒	ロクロ整形、回転左回りか?		
3	須恵器	底部付蓋高台付焼	口一底6.4高3/4残存	(3.2)	①還元焼、やや軟質②灰白③粗砂粒	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。高台ハダレ。内面底部に墨書「厨」、外側面に墨書「厨」有り。	墨書
4	須恵器	胴一底部片高台付焼	口一底6.6高(4.4)	①還元焼、やや軟質②にぶい③粗砂粒	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。高台は貼り付け。		
5	須恵器	底部片高台付焼	口一底7.9高(1.8)	①還元焼、やや軟質②にぶい③粗砂粒	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。高台は貼り付け。		
6	土師器	口一胴部片焼	□126.0底一高(9.5)	①還元焼、軟質②にぶい③粗砂粒	ロクロ整形後、口縁部様ナデ、体部上位縦方向ヘタ回り。	他に破片2点。北隣。借遣系か?	

100-1号住居		土師器-須恵器		(単位: cm)		
番号	種類	部位	計測値	①焼成②色調③胎土	その他の特徴	備考
1	土師器	底部片	口一底2.6高(4.2)	①還元焼、良②にぶい③粗砂粒	外面底部ヘタ削り、内面ヘタナデ。	
2	須恵器	口縁部片	□12.0底一高(3.0)	①還元焼、やや軟質②黄灰③粗砂粒	ロクロ整形。	
3	須恵器	ほぼ完成	□14.5底6.0高5.2	①還元焼、やや軟質②浅黄③粗砂粒	ロクロ整形、回転右回りか? 底部は回転糸切り。高台は貼り付け。外側面に墨書「凡」有り。	

11-1号土坑		土師器		(単位: cm, g)	
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	須恵器	胴部片	①良好②橙③粗砂粒を含む	口縁部にクシ状施文具で、流状と直線を交互に横位施文し、胴部に縄文XLを施す。	縄文 縄線9式

巻物		残片		(単位: cm, g)			
番号	種類	残存	純径	内径	厚さ	重さ	備考
1	寛永通宝	完成	22.55-22.80	20.00-19.69	0.90-0.85	2.07	1岩盤(古基様内部)

通溝外出土遺物		土師器		(単位: cm, g)	
番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③粗砂粒を含む	深鉢。外面に不明瞭な条痕を横位に施す。	10区トレンチ3層 縄文早期後半
2	深鉢	口縁部片	①やや不良②にぶい③粗砂粒を含む。繊維を含む。	組み紐縄文を施す。	100区表土1層 縄文 関山2式
3	深鉢	胴部片	①良好②橙③粗砂粒を含む。繊維を含む。	組み紐縄文を施す。	100区表土1層 縄文 関山2式
4	胴部片	①やや不良②にぶい③粗砂粒を含む	外面にハナ目。内面にいびぬなデを施す。	1G-24 縄文前期	
5	深鉢	胴部片	①やや不良②にぶい③粗砂粒を含む	キャリバー形深鉢。器面にLに縄文を施す。	1G-23 縄文 五領ヶ台式
6	深鉢	口縁部片	①良好②暗赤③粗砂粒を含む	口縁部が大きく開く深鉢。胴部に陰帯がのこる。胴部には集合流線で文様を構成。	20区表土 縄文 五領ヶ台式
7	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③粗砂粒を含む	結束第1種羽状縄文RL・LRを施す。	1号トレンチ 縄文 五領ヶ台式
8	深鉢	胴部片	①良好②暗赤③粗砂粒を含む	深鉢。結束第1種羽状縄文RL・LRを施す。	20区表土 縄文 五領ヶ台式
9	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③赤褐色④粗砂粒を含む	深鉢。平行流線による区画文で文様を構成。区画内は、同一並行流線や斜線文で充満される。	1F-24 縄文 五領ヶ台式
10	深鉢	胴部片	①やや不良②にぶい③粗砂粒を含む。繊維含む。	胴部内凹状。文様は並行流線を多様。区画内を斜線状で充満。	91区表土 縄文 五領ヶ台式
11	深鉢	胴部片	①良好②粗③粗砂粒を含む	陰帯で渦巻文や横位区画文を施し、空白部に斜線文を施す。	1号トレンチ 縄文 菅野II式
12	深鉢	胴部片	①良好②にぶい③粗砂粒を含む	深鉢。北隣区画内に縄文RLを充満する。	10X-20, 3層 縄文 堀之内2式
13	深鉢	胴部片	①良好②粗③粗砂粒を含む	深鉢。内外面に横位の条痕文を施す。	10-12号風刺本 縄文後期後半

石函		(単位: cm, g)		
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
14	石函	長1.20幅1.25厚0.63重0.46	完成。無蓋で基部は鋭角で深い弧状を呈する。	10K-15
15	石函	長1.8幅1.45厚0.31重0.72	石造し欠損。無蓋で基部は深く鋭角な弧状を呈する。未製品。	10M-6
16	石函	長1.55幅1.37厚0.25重0.33	ほぼ完成。無蓋で基部は浅い弧状。先端部周辺に浅い刻りを持つ。	表採

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
17	加工痕のある石器	長1.3幅1.45厚0.5重1.11	上部及び左側欠損。側面に刃部を形成する。	10K-16, 3層
18	加工痕のある石器	長8.7幅6.7厚1.5重119	一部欠損。表面に加工痕が見受けられる。	11A-3, 1層
19	砕片	長5.8幅6.5厚1.3重81	空形。表面に残るのは加工痕か？	試掘
20	加工痕のある石器	長1.95幅2.0厚1.17重4.30	表面に調整痕が集中する。	100区表探
21	加工痕のある石器	長8.6幅5.4厚2.0重98	両面に加工痕が見受けられる。側面には使用によるつぶれが見受けられる。	試掘
22	打製石斧	長5.3幅5.4厚1.8重73	刃部と基部を欠損。形態不明。	10区表探
23	打製石斧	長8.7幅4.4厚1.5重52	ほぼ完形。磨形に近い形状。側面に磨耗が見られる。	1G-25
24	打製石斧	長9.35幅5.5厚2.5重151	刃部欠損。短冊形か？両面で磨耗が見られない。未製品か？	1G-24

金属部				(単位: cm, g)
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
25	蓋?	長(9.1)幅2.8厚1.5重59		10W-23
26	キセル吸い口	長7.7幅1.2厚1.0重11	地金は赤銅か? 磨付は1本。文様は赤銅。花とつぼみのところは銅物象嵌で銅を主材とするが地金と銅の合金。花の上の櫛形文様の文様も同じく銅物象嵌で銅合金。彫り方はやや片切り。	10X-25, 19c, 後半 赤銅?

## 第5節 まとめ

### (1) はじめに

序章の一覧表で示したように、調査は国土交通省八ッ場ダム建設に伴う工事前仮設道路建設と学校用地造成に際しての緊急発掘として行われた。調査面積は10,319㎡である。面積でいえば現在までの長野原地区の調査においては、大規模の部類に属している。当地区において数多くの遺跡が調査されているが、最上位段丘の最奥部という地理的環境での調査はあまり例がない。

本章第3節でも述べたように、本遺跡からは陥し穴を中心とする土坑群が検出されている。このような地理的環境の中に構築された遺構を調査することは、狩猟方法や集落域と狩猟域との関連を捉える上で有効な資料となることはいうまでもないであろう。

陥し穴以外の遺構で目立つのは、3軒の平安時代の堅穴住居跡である。件数からいえば少ないものであり、目立つものではない。また、住居の周囲に同時期と考えられる遺構は確認されていない。このように、少量の住居が単独で検出される例が長野原地区の調査では各地域で見られる。このような住居の検出のされかたは特殊なものであるといわざるを得ず、当時の人々の生活とどのように関連してくるのか今後の調査が目ざされるところである。

出土物については、住居以外の遺構からは、ほとんど検出されておらず、全体の出土量も少ない。以上の状況を踏まえ、本遺跡の遺構の中心となっている陥し穴について調査結果の詳細をまとめてみたい。

### (2) 陥し穴の分布について

各区域で見える形態分類データ及び調査区内における陥し穴の分布状況を第12表及び第169図に示した。陥し穴は、10区と100区から集中して検出されている。実数では10区からの検出が最も多い。しかし、陥し穴が何㎡に対して1基存在するか(各調査区的面積㎡÷陥し穴数)という比率で考えると、1区は1132㎡/1基、10区は188㎡/1基、11区は99㎡/1基、91区は391㎡/1基、100区は84㎡/1基となり、100区の検出状況が最も多い様子が浮かび上がってくる。この状況は、分布図でも明らかである。

掘り鉢状に東西及び北側を山に囲まれた調査区内には、数条の埋没谷が南東に走向している。すべての埋没谷を把握することはできなかったが、およその位置は第169図の通りである。埋没谷は、下位の平坦面へと広がる100区の南東部に向かって走向している。調査区外の南東部は現況では傾斜が緩い地点となっている。

地形と陥し穴の配置を考えてみると、埋没谷が走向する1、10、11区では、数基の陥し穴が等高線に直交するように、谷筋に沿って直線的に配置されて

いる様子がうかがえる。それに対して、埋没谷が集まり、地形の変換点となる100区では配置の様相が異なる。陥し穴は、谷筋を囲むように等高線に沿って環状に配置されている様子がうかがえる。本遺跡で見ると、このような陥し穴の配置は、多摩ニュータウン遺跡群における陥し穴の立地と分布（佐藤1989他）に類似している。

### (3) 形状と分布の関連について

本遺跡では、本章第4節(2)土坑において、陥し穴の平面形状と断面形状を基に形態分類を行っている。分類の詳細については、前出の章に述べてあるのでそちらを参考にしていただきたい。最も多く検出されているのは隅丸長方形の平面形状(D類型)を呈するもので、全体の53%を占めている。続いて

多いのが楕円形の平面形状(B類型)を呈するもので、全体の37.3%を占める。この二つの形状で全体の90%以上を占めており、その他の形状はいずれも4%以下と低い検出率となっている。

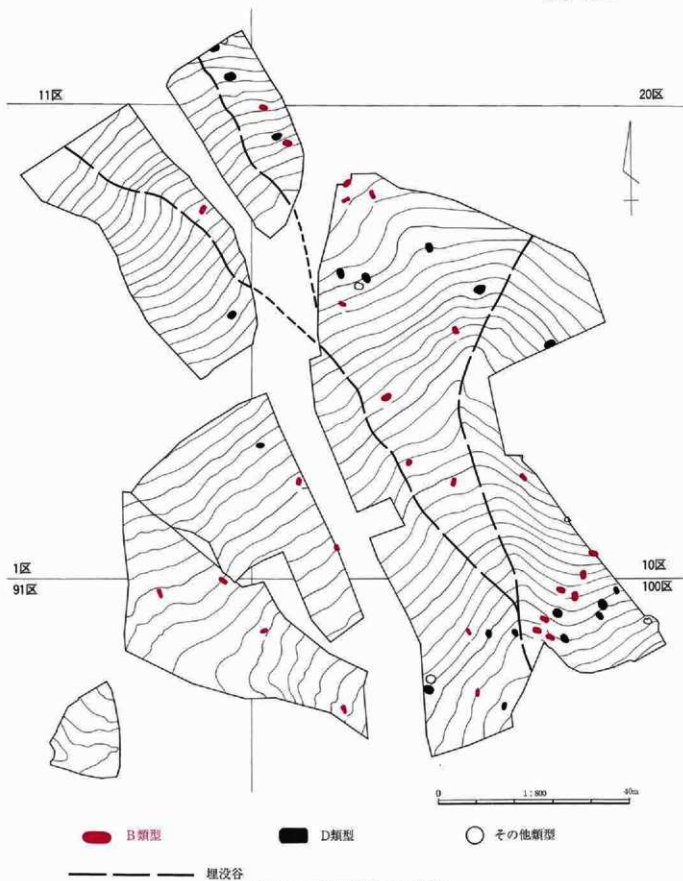
まず最も多い、D類型は100区の陥し穴集中地域に多く存在する。また、そこから北北西方向と西方向に向かっ、直線的に配置されている様子がうかがえる。調査区全体を概観した場合、まんべんなく広がっている様子がうかがえる。

B類型も100区の陥し穴集中地域に最も多く存在する。そして、そこから空白地域を経て北北西方向に直線的に配置されている。調査区全体を概観した場合、調査区南東部と調査区北部の地点に集中して配置されている様子がうかがえる。

第12表 花畑遺跡陥し穴・土坑類型一覧

平面形状	土坑				陥し穴															
	類型	総数	比率	1区	10区	11区	20区	91区	100区	平面形状	類型	総数	比率	1区	10区	11区	20区	91区	100区	
円形	A.1	4	9.8%		3				1	円形	A.1	0								
	A.2	13	31.7%	1	7		1		4		A.2	2	3.9%		1					1
	A.3	5	12.1%		2	1			2		A.3	0								
	A.4	3	7.3%					1	2		A.4	0								
	A.5	0									B.1	1	2.0%							1
楕円形	B.1	0								楕円形	B.2	11	21.6%	1	4					6
	B.2	3	7.3%	2	1						B.3	7	13.7%		3	2				2
	B.3	2	4.9%		1				1		B.4	0								
	B.4	1	2.4%						1		C.1	0								
	B.5	1	2.4%		1						隅丸長方形	C.2	0							
C.1	0								C.3	0									1	
C.2	0								C.4	0										
C.3	1	2.4%							D.1	0										
C.4	0								D.2	1		2.4%		1						
隅丸長方形	C.5	1	2.4%		1					D.3	1	2.4%		1						
	D.1	0								D.4	0									
	D.2	1	2.4%							D.5	0									
	D.3	1	2.4%		1					不明	E.1	0								
	D.4	0									E.2	1	2.4%		1					
D.5	0								E.3		0									
E.1	0								E.4		0									
E.2	1	2.4%		1					E.5		2	4.9%		2						
不明	E.3	0								不明	2	4.9%		2						
	E.4	0								合計	41	100.0%	5	21	1	2	0	2	12	
	E.5	2	4.9%		2					区別比率			12.2%	51.2%	2.4%	4.9%	0.0%	29.3%		
	不明	2	4.9%		2					合計	51	100.0%	2	23	3	0	2	21		
	合計	41	100.0%	5	21	1	2	0	2	12	区別比率		3.9%	45.1%	5.9%	0.0%	3.9%	41.2%		





第169図 花畑遺跡陥し穴分布状況

円形(A類型)・形状不明(B類型)の平面形状を呈するものも、やはり100区の陥し穴集中地域を中心に配置されている。そして、方形の平面形状(C類型)を呈するものは検出されていない。

このような類型と分布の様子を示している。B類型とD類型については、100区の陥し穴集中区においては、同様の配置を見せるものの、埋没谷の谷筋に沿った陥し穴の配置には、上記のような違いを見せている。この違いが、時期差によるものか、目的・用途によるものかは不明である。長野原地区は、周りを山に囲まれた、ある意味閉ざされた空間であるといえる。今後、当地域の調査で発見される陥し穴の形態分類と立地を調べていくことで、これらの遺構の地域性や、性格付けなどが明らかになっていくであろう。

#### (4) 陥し穴の掘削工具痕について

本遺跡では、陥し穴掘削時の工具によるものと考えられる痕跡が、100-23号、100-27号、100-29号土坑の3基の土坑から検出された。土坑の底面および壁面にあたる土層がAs-YPkの上部アッシュ互層であり、この層が非常に硬い層であるため検出可能であった。底面が、この層を掘り抜きAs-YPkの軽石層に達している場合や、あるいはアッシュ互層に達していない場合には掘削工具痕は検出できていない。また覆土が黒色で底面や壁面が黄褐色であり、その色調の差が明瞭であるという好条件に恵まれ、非常に良好な状態で検出することが可能であった。

掘削工具の形態は、その痕跡が底面では土坑中央から長軸方向に斜め上方から進入し、壁面では前周にわたりほぼ垂直に進入していることから、鋤状の形態が想定される。刃先の形態は、痕跡の形状から幅約11cm程のやや丸い刃先を持つものであると推定できる。刃先の材質は、工具痕の面が平滑で刃先の断面形状が薄いことから、石製ではなく木製や金属製の可能性が高い。また本遺跡の場合、土層が非常に堅固なため、木製工具によりこのような土層を掘り進めた場合、材質にもよるであろうが、刷毛目状に木目のあとが残る可能性が考えられる。しかし、

今回検出された工具痕にはそのような例は認められず、すべて平滑な面を呈していた。以上の観察から、今回検出された掘削工具痕は金属製の刃先をもつ鋤状掘削具による可能性が高いと考えられる。100-27号土坑については、後日の検討もできるように型取りを行っている。

#### (5) 陥し穴の構築時期について

陥し穴の所属時期に関しては遺構の性格上極めて手がかりが少なく、各研究者が最も意を払ってきた観点である(佐藤 2000)。陥し穴の時期を知るための手がかりが非常に少ないという状況は、本遺跡でも同様である。

長野原町内では、本遺跡と形態および規模の類似した陥し穴が、向原遺跡、坪井遺跡、滝原Ⅲ遺跡、長野原一本松遺跡等で多数確認されているが、いずれも構築時期は不明である。しかし、出土遺物から縄文時代、特に後期の可能性が考えられてきた。本遺跡の陥し穴についても、覆土内の遺物が極めて少ないことや、他遺構との切り合いが皆無に近いこと等から、調査当初は縄文時代のものであろうと考えていた。

しかし、前述の掘削工具痕が検出され、金属器使用の可能性が生じたため、2基の土坑覆土内に含まれる炭化物の放射性炭素年代測定(AMS法)を実施し、弥生時代あるいは古墳時代に比定される数値が得られた(第12章第6節)。

試料を抽出した土坑は100-23号と100-33号土坑である。100-33号土坑は、100-20号土坑とは南北に並列して検出された土坑である。100-33号土坑の覆土上位には、ロームの二次堆積層が確認され、本土坑が廃棄され完全に埋没する前に、100-20号土坑が構築され、その腐土により埋没した可能性が考えられる土坑である。このことから少なくとも100-33号土坑には、100-20号土坑構築以後の混入はないとみなせるものである。また、100-23号土坑は掘削工具痕の検出された土坑である。分析の結果では、弥生時代あるいは古墳時代に比定される数値が示され、金属器の使用と矛盾する結果ではなか

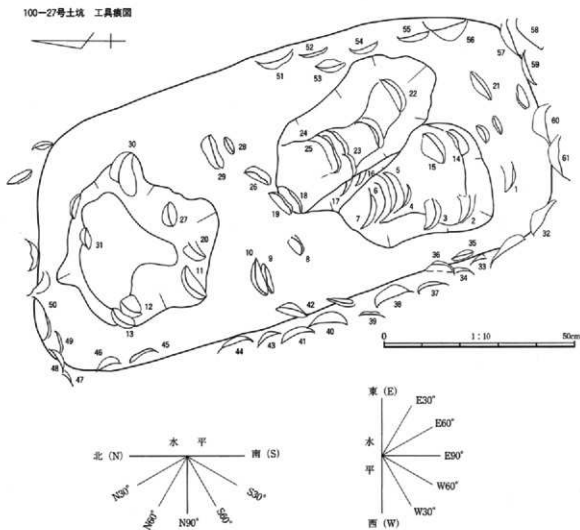
った。

金属製の刃先を持つ掘削工具の痕跡は、東京都や山梨県等の陥し穴においても報告されている。東京都の多摩ニュータウン遺跡群の調査では、土坑底面や壁面にU字型鉄製鋤先状工具痕が確認され、それらの土坑に対して古墳時代中期から平安時代初頭までの編年観が示されている（斉藤 1984）。また山梨県高根町丘の公園第5遺跡では、陥し穴底面から鉄製鋤によると推定される掘削工具痕が検出され、古代以降、特に中世あたりの所産の可能性が報告されている（保坂 1989）。

長野原町では、未報告ではあるが楡木Ⅱ遺跡の調

査において、平安時代の住居の床下から陥し穴が検出されている例もあり、中世までは下らないと思われる。本遺跡における陥し穴は、縄文時代の可能性も完全には否定できないが、金属製鋤先痕の検出や年代測定等から弥生時代から平安時代までのいずれかの数時期に構築されたものと考えておきたい。

また、陥し穴が検出された場合、縄文時代と考えってしまう傾向もあるが、弥生時代以降の可能性もあることもふまえ、出土遺物、遺構の切り合い関係、火山灰を含む覆土の状況等、今後さらにその帰属時期を示す手がかりを探っていく必要があろう。



第170図 花畑遺跡工具痕配置と進入角

## 第8章 花畑遺跡

第13表 花畑遺跡工具痕角測定表

底 面		側 面		背 面		腹 面	
工具痕 No	進入角	工具痕 No	進入角	工具痕 No	進入角	工具痕 No	進入角
1	S-20°	17	S-12°	32	N-84°	47	S-88°
2	S-30°	18	S-10°	33	E-82°	48	S-78°
3	S-40°	19	S-18°	34	S-74°	49	S-78°
4	S-28°	20	N-32°	35	E-76°	50	S-84°
5	S-26°	21	S-68°	36	E-71°	51	W-76°
6	S-34°	22	S-16°	37	E-60°	52	W-78°
7	S-40°	23	S-38°	38	E-80°	53	W-76°
8	S-52°	24	S-16°	39	E-76°	54	W-70°
9	N-50°	25	S-52°	40	E-80°	55	W-80°
10	N-44°	26	S-42°	41	E-82°	56	W-80°
11	N-30°	27	N-32°	42	ES-66°	57	S-78°
12	N-32°	28	N-61°	43	E-72°	58	S-85°
13	N-16°	29	N-54°	44	E-72°	59	N-88°
14	S-36°	30	N-38°	45	E-82°	60	S-88°
15	S-42°	31	N-38°	46	E-72°	61	S-82°
16	S-28°						

## 引用・参考文献

- 佐藤宏之 2000 「北方狩猟民の民族考古学」北海道出版企画センター
- 今村啓爾 1976 「縄文時代の陥し穴と民族誌上の事例の比較」物質文化27
- 佐藤宏之 1989 「多摩ニュータウン遺跡-昭和62年度-」第5分冊 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第10集
- 佐藤宏之 1989 「陥し穴痕と縄文時代の狩猟社会」考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集
- 今村啓爾 1983 「陥し穴（おとし穴）」縄文文化の研究 第2巻生業
- 瀬川司男 1981 「陥し穴状遺構について」財団法人岩手県埋蔵文化財センター紀要Ⅰ
- 田村社一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要Ⅱ
- 保坂康夫 1990 「丘の公園第5遺跡」山梨県文化財センター調査報告書 第56集
- 青藤 進 1984 「多摩ニュータウンNo740遺跡Ⅱ Y (D型) 土坑について」『多摩ニュータウン遺跡-昭和58年度-』第7分冊 p.309-310



第171圖 YD4-05花柳遺跡

S=1/1000 0 25 50m



## 第9章 楡木Ⅲ遺跡

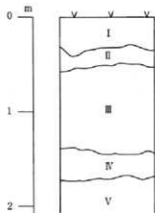
### 第1節 遺跡の立地

遺跡は吾妻川左岸、上位段丘の西端に位置する。標高約580m。北側は急崖となるが、遺跡のある位置からは、南に向かって緩やかな傾斜地となり、中位段丘・下位段丘を経て吾妻川に至っている。遺跡地周辺は、台地状の平坦地形を呈している。調査区はこの平坦地形の西端に位置する。この台地の東側を回り、遺跡の南東部を経て楡木沢が吾妻川に流れ込んでいる。流路は深く削られ、急崖となっている。この沢周辺の平坦地は、現も林地区の集落・耕作地として利用されている。

本遺跡は、長野原町の遺跡分布調査報告書に遺跡地として掲載されていない新発見の遺跡となる。

### 第2節 基本層序

本遺跡からは遺構は検出されていない。しかし、包含層より、弥生時代中期・縄文時代前期の遺物が多数検出されている。弥生時代の遺物は第Ⅱ層からの検出が顕著である。縄文時代前期の遺物については、第Ⅲ層中からの検出が多い。



第172図 楡木Ⅲ遺跡基本土層

- 第Ⅰ層 褐色土。礫を含む。表土。
- 第Ⅱ層 明褐色土。黄橙軽石を多く含む。
- 第Ⅲ層 暗褐色土。黄橙軽石、大型礫を含む。
- 第Ⅳ層 黒褐色土。小礫を多く含む。

第Ⅴ層 暗褐色土。砂のブロックを含む。

### 第3節 検出された遺構と遺物

#### (1) はじめに

今回の調査では遺構は検出されていない。しかし、包含層中からは、土器557点、石器32点、合計589点の、まとまった量の遺物が出土している。調査区の北端と南端に小規模な埋没谷があり、ほとんどの遺物がこの埋没谷の覆土から検出されている。遺物は縄文時代や弥生時代のもものが中心である。土器は縄文時代前期の諸磯c式期のもものが中心で合計385点(諸磯b式期110点、諸磯c式期275点)が検出されている。また、弥生時代の土器は合計95点検出されている。弥生時代の土器は前期初頭のもものが多くを占める。縄文時代前期や弥生時代の遺物は長野原町の調査においては検出例が少ない資料である。そこで、時期の分かる土器を中心に調査区内での出土状況をまとめ、今後、周辺を調査する際に生かすための資料とすることとした。縄文時代と弥生時代の土器の分布状況は第174図の通りである。各グリッドから出土した土器の詳細については第14表を参照していただきたい。出土物については、遺物の中から特徴的なものを任意に選び出し、実測図及び写真を掲載した。

#### (2) 縄文時代の遺物

南の谷は63U・V-13グリッド付近から64B・C-9グリッドに向かって北東から南西に走向している。この谷を埋める黒褐色土は縄文時代前期の遺物の包含層となっている。これらの遺物の出土状況は、埋没谷の上流部と下流部で異なっている。上流部では諸磯c式期の土器片や黒曜石の石匙などの石器が出土している。63U-13・14、V-13・14、W-13グリッドが中心でこの5グリッドだけで合計208点の諸磯c式土器が検出されている。また、下流部では、諸磯b式期の土器片や石器類がまとまって出土している。こちらは64B-9・10、C-9・10グリッドが中心でこの4グリッドだけで合計90点の諸磯b式土器が検出されている。

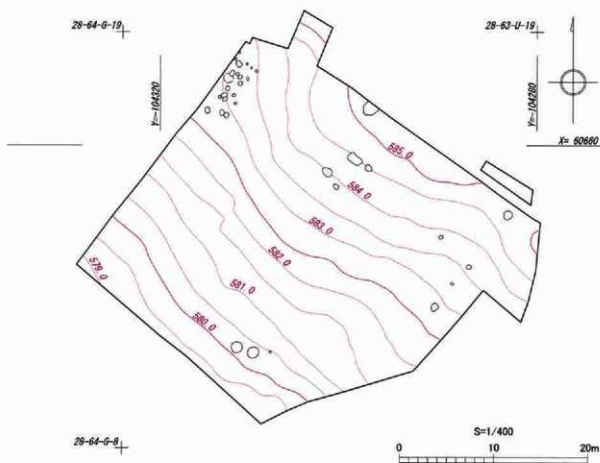
一方、北の谷は、64A・B-18グリッド付近から64D-16グリッド付近に向かって、北東から西に走向している。こちらの谷の埋没土も遺物包含層となっている。出土土器の中心は縄文時代前期の諸磯c式土器である。64D-17グリッド付近を中心に検出されている。また、64C-16・17、D-16グリッドの埋没谷覆土中から縄文時代後期堀之内2式土器が20点検出されている。後期の遺物が少ない中で集中してみられる点に注目すべきところである。

(遺物観察表210・211頁)

### (3) 弥生時代の遺物

前出の北の谷、64D-17グリッドを中心に55点の土器が集中して検出されている。条痕文を施すものが多く、弥生時代前期初頭のものが中心と思われる。南の谷にも若干含まれるが、合計7点と量は非常に少ない。この他に、64区の表土からも30点とまとまった量が検出されている。このことから、弥生時代の遺構が比較的浅い位置にあり、耕作により攪拌されている可能性が考えられる。

(遺物観察表211・212頁)

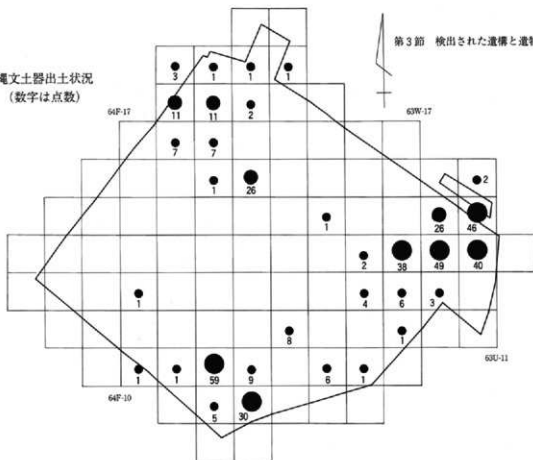


第173図 YD4-06榑木Ⅱ遺跡

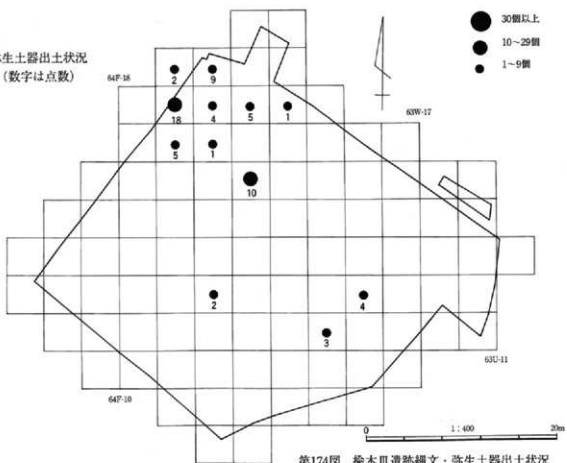


縄文土器出土状況  
(数字は点数)

第3節 検出された遺構と遺物



弥生土器出土状況  
(数字は点数)



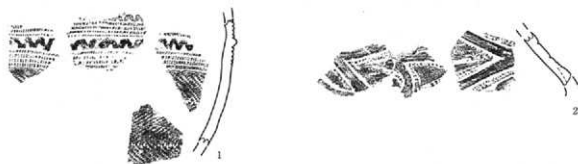
第174図 榎木Ⅲ遺跡縄文・弥生土器出土状況

第14表 榑木田遺跡 土器出土状況一覧

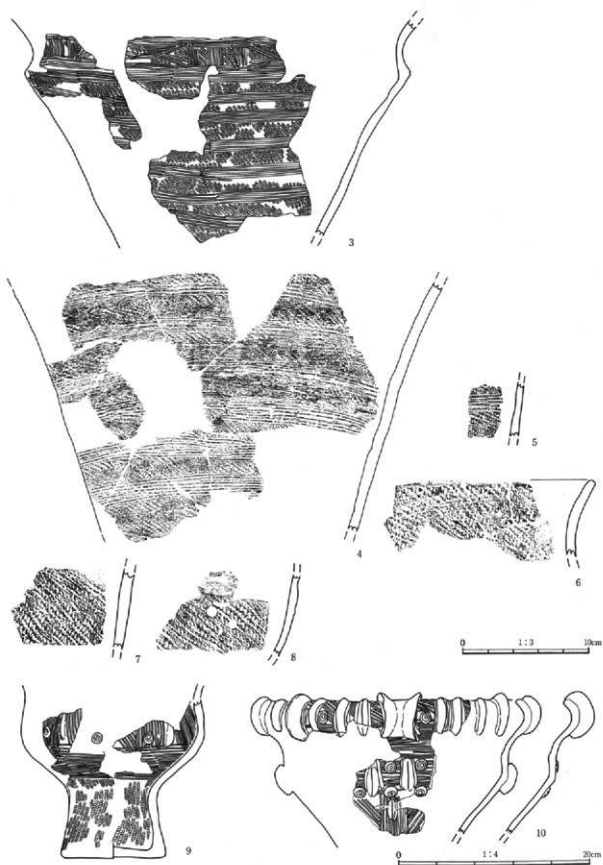
区	グリッド	二ツ木	溝境b	溝境c	前周家	五領+台	加曾利E4	堀之内2	縄文後期	縄文	縄文合計	弥生	平安	土師器	不明	総計
63	U-13		5	35							40					40
63	U-14			46							46					46
63	U-15			2							2					2
63	V-12		1	2							3					3
63	V-13			49							49					49
63	V-14			26							26				1	27
63	W-11			1							1					1
63	W-12			6							6					6
63	W-13			32				4	2		38					38
63	X-10		1								1					1
63	X-12			3				1			4	4	1			9
63	X-13		1	1							2					2
63	Y-10		6								6					6
63	Y-11										0	3				3
63	Y-12										0				1	1
63	Y-14			1							1					1
64	A-11				3						3					3
64	A-17										0	1				1
64	A-18							1			1					1
64	B-9			26		1	1	2			30					30
64	B-10			3			3	1		2	9					9
64	B-15				25				1		26	10				36
64	B-17				1					1	2	5				7
64	B-18									1	1					1
64	C-9			4				1			5				2	7
64	C-10		2	57							59				3	62
64	C-12										0	2				2
64	C-14										0				1	1
64	C-15				1						1			1		2
64	C-16							4	3		7	1			2	10
64	C-17				5			6			11	4			2	17
64	C-18				1						1	9				10
64	D-10		1								1					1
64	D-16							10			10	5				15
64	D-17				9						9	18				27
64	D-18				3						3	2				5
64	E-10			1							1					1
64	E-12							1			1					1
63	表土			1				4			5		2			7
64	表土			2	2						4	30				34
64	表土			3	22						25	1				26
64	試掘			1							1					1
合	計	3	110	275	8	1	4	35	8	2	446	95	3	1	12	557

## (4) 遺構外出土遺物

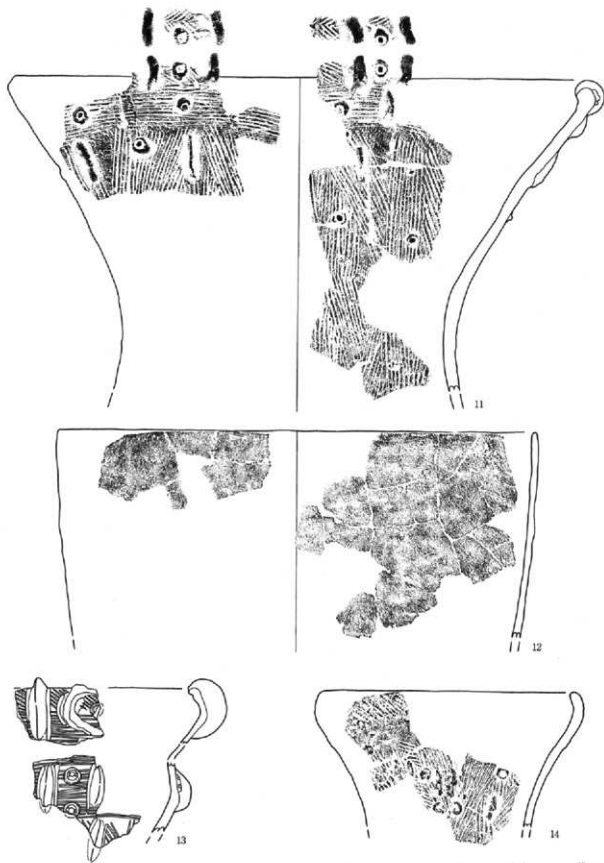
## ① 縄文時代



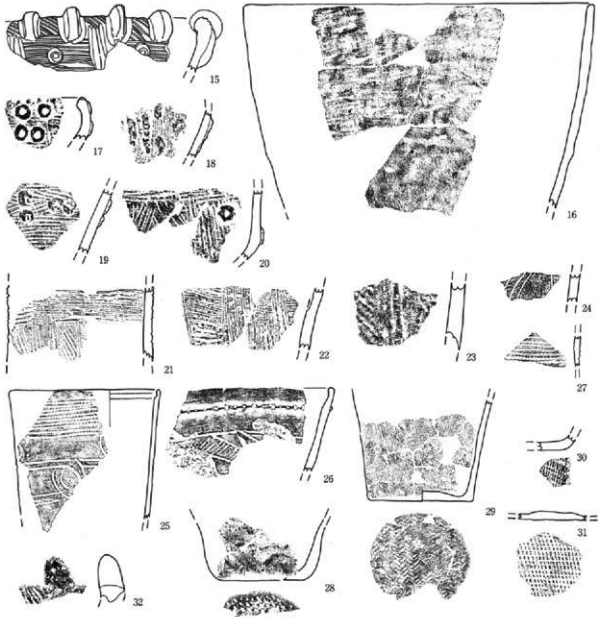
第175図 榑木田遺跡出土遺物 縄文土器 (1)



第176図 楡木Ⅲ遺跡出土遺物 縄文土器(2)

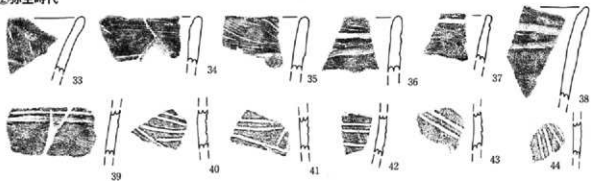


第177図 検木Ⅲ遺跡出土遺物 縄文土器 (3)



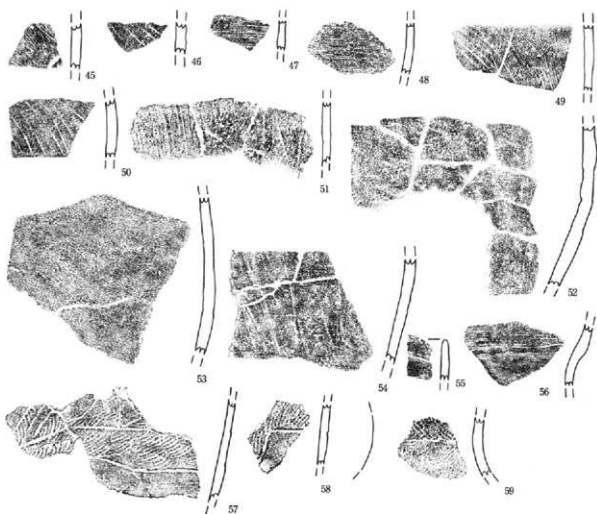
第178図 榎木Ⅲ遺跡出土遺物 縄文土器 (4)

②弥生時代



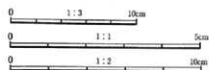
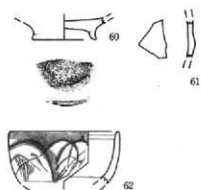
第179図 榎木Ⅲ遺跡出土遺物 弥生土器 (1)



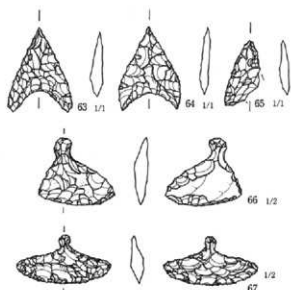


第180図 榆木田遺跡出土遺物 弥生土器 (2)

③須恵器・陶器

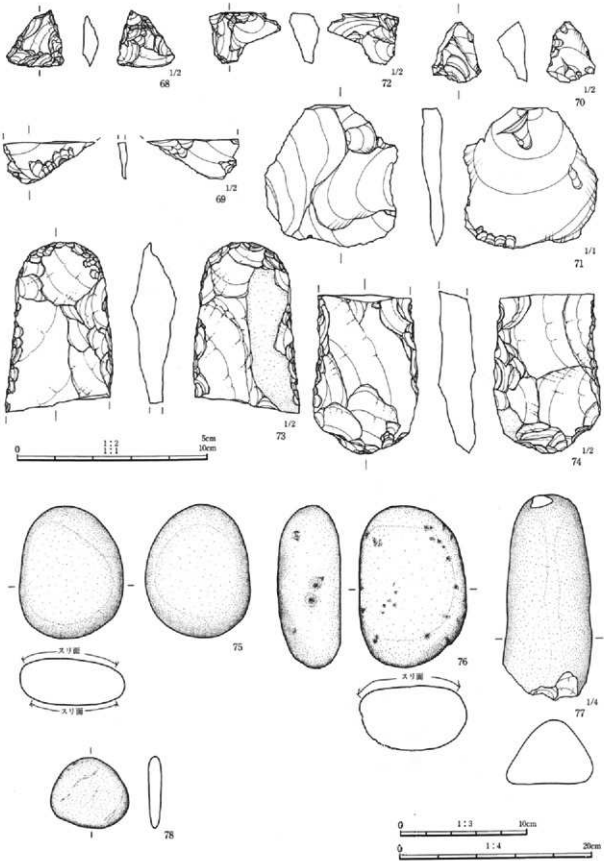


④石器

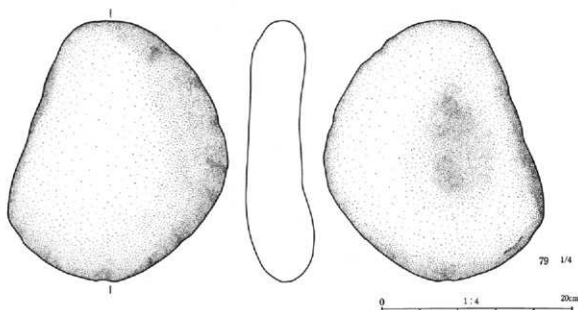


第181図 榆木田遺跡出土遺物 須恵器・陶器・石器 (1)

第3節 検出された遺構と遺物



第182図 榎木Ⅲ遺跡出土遺物 石器 (2)



第183図 榎木田遺跡出土遺物 石器(3)

第15表 榎木田遺跡遺物観察表

①縄文土器		②焼成③色④胎土		⑤形・文様の特徴		備 考	
番号	種類	部位					
1		胴部片	①良好②にぶい胎土砂粒を含む		三角形の印を施した縦帯と、結節状横文を簡略化した刻目を伴う集合沈線を描いて施し、以下に結節状横文を施す。	64区	前期末
2	深鉢	胴部片	①やや不良②赤褐色土を含む		胴がくの字に折れる浅鉢。体部に爪形文入り細み棒の文様を横施。区画内に横文は施されない。	63区	諸磯b式
3	深鉢	胴部片	①良好②胎土砂粒を含む		胴部がくびれる深鉢。胴部に集合沈線の横帯文を施し、胴部に縦線を組み合わせた文様帯を構成。地文は縄文RL。	63区	縄文 諸磯b式
4	深鉢	胴部片	①良好②にぶい胎土砂粒を少量含む		胴部上半が大きく開く深鉢。縄文RLを地文に、集合沈線の横帯文を数帯施す。	64B-9・C-10	縄文 諸磯b式
5	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色胎土砂粒を含む		縄文RLを地文に、集合沈線を横位に施す。	64C-9	縄文 諸磯b式
6	深鉢	胴部片	①良好②胎土砂粒を含む		口縁部が外反する深鉢。外表面に縄文RLを施す。二次的に使用。	64B-10	縄文 諸磯b式
7	深鉢	胴部片	①やや不良②にぶい赤褐色土を少量含む		縄文RLを施す。	64B-9	縄文 諸磯b式
8	鉢	胴部片	①良好②にぶい赤褐色胎土砂粒を含む		増修孔2つ有り、表から一方方向で穿孔されている。縄文RLを施す。	64B-10	縄文 諸磯b式
9	深鉢	胴一皿部片2/3	①良好②明褐色胎土砂粒を含む		胴部下半がすぼまり、円筒状を呈する深鉢。胴部上半に集合沈線で文様を施し、下半には縄文RLを施す。	63区	縄文 諸磯c式
10	深鉢	口縁部片	①やや不良②にぶい胎土砂粒を含む		胴部がくびる字状に折れる深鉢。集合沈線で文様を構成し、口縁と胴部に耳状・ボタン状の貼付文を施す。	63V-13・14	縄文 諸磯c式
11	深鉢	口一胴部片	①良好②にぶい胎土砂粒を含む		口縁が大きく開く深鉢。文様は集合沈線で構成され、口唇部から胴部にかけて耳状・ボタン状の貼付文が施される。地文は縄文RL。	63V-12-13-14・U-14	縄文 諸磯c式
12	深鉢	口一胴部片	①良好②赤褐色胎土砂粒を含む		体部がわずかに内湾しながら開く無文の深鉢。組成土器。	64区	縄文 諸磯c式
13	深鉢	口一胴部片	①良好②にぶい赤褐色土を少量含む		胴部がくびる字状に折れる深鉢。集合沈線で文様を構成し、口縁と胴部に耳状・ボタン状の貼付文を施す。	63U-14・V-14・Y-14	縄文 諸磯c式
14	深鉢	口一胴部片	①良好②胎土砂粒を含む		口縁部が内湾しながら開く深鉢。胴部に無文部をおく。	63V-14・W-12・13	縄文 諸磯c式
15	深鉢	口縁部片	①良好②胎土砂粒を含む		口縁が大きく開く深鉢。文様は集合沈線で構成され、口唇部から胴部にかけて耳状・ボタン状の貼付文が施される。地文は縄文RL。	63U-13・14	縄文 諸磯c式
16	深鉢	口一胴部片	①良好②灰黄褐色胎土砂粒を含む		体部がゆるく内湾しながら開く。無文の深鉢。	64U-13-14	縄文 諸磯c式



## 第3節 検出された遺構と遺物

番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
17	深鉢	口縁部片	①良好②淡黄③砂粒を含む	内湾する口縁部片でボタン状胎付文を2段に施す。口唇部には胎目。	63U-13・14 縄文 土器 c式
18	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	集合沈線による文様の上に、ボタン状・棒状の胎付文を施す。	試掘 縄文 土器 c式
19	深鉢	破片	①良好②暗灰青③網を少量含む	口縁部が内湾しながら開く深鉢。胴部に無文部をおく。	63V-13 縄文 土器 c式
20	深鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	胴部下半がすぼまり、円筒状を呈する深鉢。胴部上半に集合沈線で文様を施し、下半には縄文LRを施す。	63U-13・V-14 縄文 土器 c式
21	鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	集合沈線で文様を構成。棒状・ボタン状の胎付文を伴う。	63U-13・V-13 二次的に被熱 縄文 土器 c式
22	鉢	胴部片	①やや不良②黒褐色③網を少量含む	集合沈線で文様を構成。胎付文はない。	63W-13・黄土-1 縄文 土器 c式
23	深鉢	胴部片	①やや不良②にぶい黄褐色③網を少量含む	断面三角形の隆面で区画された懸帯縄文帯を施す。	64D-10 縄文 加曾判E4式
24	鉢	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	3次の沈線による帯縄文で文様を構成。縄文はLR。	64D-9 縄文 甕之内2式
25	鉢	口-胴部片	①良好②黒褐色③粗砂粒を含む	円筒形の深鉢で、口縁部内面に1本の沈線がめぐり、文様帯は、口唇部に集合沈線。胴部上半に帯縄文で入り、組み文風の文様帯を構成。縄文はLR。	63W-13 縄文 甕之内2式
26	鉢	口-胴上部片	①良好②黒褐色③砂粒を含む	朝顔形の深鉢で、口唇部内面に1本の沈線がめぐり、口縁部に胎目が付く隆面がめぐり、胴部上半に光輝縄文帯で文様帯が構成される。縄文はLR。	64D-16 縄文 甕之内2式
27	甕?	胴部片	①良好②暗③粗砂粒と繊維かな粗砂粒を含む	横位集合沈線に、まばらに縄文LRを施す。内外面に丁寧な磨製を施す。	64区 縄文 加曾判D式
28	深鉢	胴部下段-底部片	①良好②灰黄褐色③網を少量含む	底面に網代痕が付く。	64D-17 縄文後期
29	深鉢	胴-底部片	①やや不良②明赤褐色③網を少量含む	胴部下半は無文で、底面に網代痕が付く。二次的に被熱。	64C-16 縄文後期
30	深鉢	底部片	①良好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	底面に網代痕が付く。	64区 縄文後期
31	深鉢	底部片	①良好②黒褐色③砂粒を含む	網代底。	63W-13 縄文後期
32	把手	把手	①良好②明赤褐色③胎土を含む	口唇部に棒状の突起がつく。	63V-14

## ②養生土器

番号	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
33	甕	口縁部片	①良好②にぶい黄褐色③中砂粒を含む	突起のある口縁。外面下部に横位沈線。内面斜位凹取り。	64区 弥生前期
34	甕	口縁部片	①良好②にぶい黄褐色③中砂粒を含む	突起のある口縁。外面下部に沈線。内面ミガキ。	64区 弥生前期
35	甕	口縁部片	①良好②にぶい黄褐色③粗砂粒を含む	外面は斜位の条痕。内面ナデ。	64区 弥生前期
36	甕	口縁部片	①良好②明黄褐色③中砂粒を含む	外面に太い二重の平行沈線。内面ナデ。	64区 弥生前期-中期前半
37	口縁部片	口縁部片	①やや不良②淡黄③粗砂粒を含む	外面には口縁に沿って一重の沈線が高まる。沈線下部には、条痕がわずかに残る。内面ナデ。	64区 弥生前期
38	口縁部片	口縁部片	①良好②にぶい黄褐色③中砂粒を含む	外面上半に幅太の二重沈線。内面ナデ。波状口縁の一部。36と同一か?	64区 弥生前期
39	破片	破片	①良好②明黄褐色③中砂粒を含む	外面は、条痕が濃く調整不明。上部には二重の平行沈線。内面はミガキ。	(弥生前期)
40	胴上部片	胴上部片	①やや不良②にぶい黄褐色③粗砂粒を含む	外面は斜位のハゲ目をしたあと、二本平行による条痕を施す。内面ナデ。	64区 弥生前期-中期前半
41	胴部片	胴部片	①やや不良②にぶい黄褐色③粗砂粒を含む	外面は三角条痕文の一部か?内面ミガキ。	64区 弥生前期
42	破片	破片	①やや不良②にぶい黄褐色③粗砂粒を含む	外面は三重の平行沈線。内面ミガキ。	64区 弥生
43	胴部片	胴部片	①やや不良②にぶい黄褐色③粗砂粒を含む	外面中に二重の平行沈線。平放竹管か?外面ハゲ目。内面ミガキ。	64区 弥生前期-中期前半
44	胴上部片	胴上部片	①やや不良②暗褐色③粗砂粒と少量の網を含む	外面は三角条痕文の一部か?内面ナデ。	64区 弥生前期-中期前半
45	胴部片	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③中砂粒を含む	外面は斜位の条痕。破片上部に爪形文らしき沈線有り。内面ナデ。	64区 弥生前期
46	胴部片	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③中砂粒を含む	外面は斜位の条痕。内面はナデか?	64区 弥生前期-中期前半
47	胴部片	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③中砂粒を含む	外面はササガ状具による横位の条痕。	64区 弥生前期-中期前半
48	胴部片	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③粗砂粒と少量の網を含む	外面は横位のハゲ目。内面ミガキ。	64区 弥生前期-中期前半
49	胴部片	胴部片	①良好②にぶい黄褐色③中砂粒を含む	外面は斜位の条痕。内面はナデ。	弥生前期
50	胴部片	胴部片	①良好②明黄褐色③中砂粒を含む	外面は斜位の条痕。内面はナデ。	64区 弥生前期-中期前半

## 第9章 楡木遺跡

番号	種類	部位	①地成定色②粘土	器形・文様の特徴	備考
51		胴部片	①やや不良な、ふい粉②粗砂粒と少量の細粒を含む	外面は縦位の細条状。内面はナデか?	64区 弥生前期?
52		胴部片	①良好②粗砂粒を含む	外面は摩耗が激しく、地文・調整等は不明。浅い条痕か?内面はミガキ。	
53	蓋	口一胴部片	①良好②粗砂粒を含む	波状口縁。外面無文。	弥生前期～中期前半
54		胴部片	①良好②明黄褐色③粗砂粒を含む	外面は斜位の条痕。内面ナデ。	弥生前期
55 (集)		口縁部片	①良好②灰黄褐色③粗砂粒と少量の粗砂粒を含む	外面に縦に二重の平行波線。内面ミガキ。	64区 弥生前期～中期前半
56			①良好②明黄褐色③中砂粒を含む	外面上平は、左から右方向の横位の条痕。下平はナデ?内面ナデ?	弥生前期
57 (集)		胴部片	①良好②粗③中砂粒と粗砂粒を少量含む	横位の波線と斜位波線により区画し、内部に縄文LRを光環。交互に磨消す。内面はミガキ。	64区 弥生中期前半末葉
58		胴部片	①良好②暗灰黄③中砂粒と粗砂粒を少量含む	波線による縦条状の区画。区画内には光環縄文を施す。縄文はLR。内面ミガキ。	64区 弥生中期前半末葉
59	壺	胴部片	①良好②ふい粉③中砂粒を含む	外面は全面に結節を施して羽状縄文。内面ナデ。内面には炭化物が多く付着。二次的に被熱。	63区 弥生中期

③須磨焼・磁器			(単位:cm)			
番号	種類	部位	①地成定色②粘土	その他の特徴	備考	
60	高台付 陶	底部片	口一底5.1高(1.7)	①還元焼、軟質②灰白③粗砂粒	ロクロ製形。回転右回り。底部は回転軌取り。高台は貼付。	63区
61	青磁 鏡	破片	口一底一高一	①整平。灰白②緑灰③微細	鉛筆弁文様。	64区 甕原宮系13c, 中一後
62	磁器 染付柄	口一底部片 1/3	口(8.7)底一高(4.2)	①整平。灰白②灰白③微細		64区 肥前。放在見系18c。

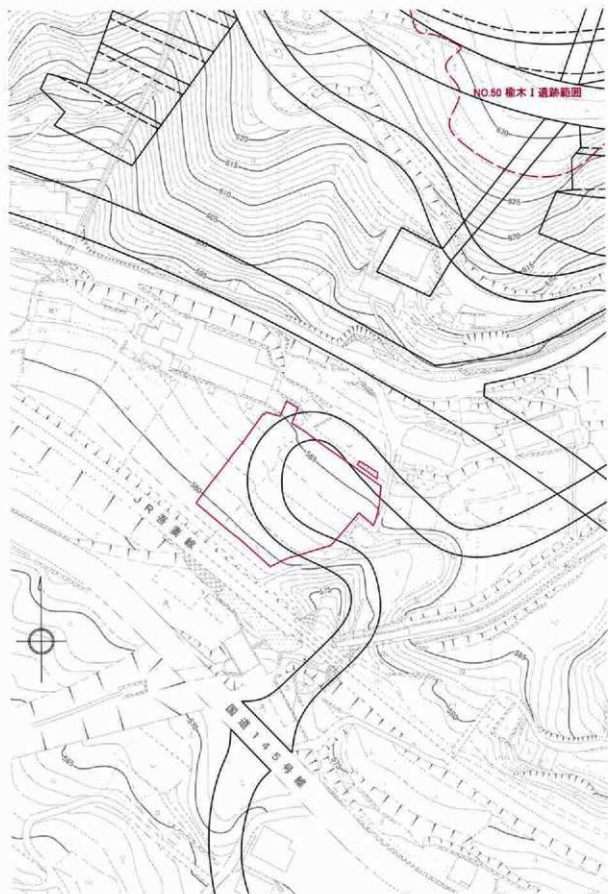
遺構外出土遺物 石器			(単位:cm, g)		
番号	種類	大きさ・重量	①地成定色②粘土	形状・特徴等	備考
63	石鏃	長2.2幅1.7厚0.35重0.69		定形。無茎で基部は深い凹状を呈する。横位の筋を持つ。	64C-10, 3層
64	石鏃	長2.2幅1.6厚0.3重0.64		定形。無茎で基部は深い凹状を呈する。横位は浅く幅曲する。	64C-10, 3層
65	石鏃	長1.7幅0.95厚0.3重0.32		石造しを欠損する。茎及び基部は不明。	64G-14, 3層
66	石鏃	長3.6幅4.0厚0.75重8.9		定形。縦長割片を素材とする。3辺に刃部を形成する。	64B-10, 3層
67	石鏃	長2.6幅5.0厚0.7重6.15		定形。横長割片を素材とする。周囲に刃部を形成する。右上側辺はやや潰れが見られる。	63V-13, 3層
68	スクレイパー	長4.5幅4.5厚1.2重19		定形。両面に加工痕が見受けられる。	64D-10, 3層
69	使用痕のある石器	長1.05幅0.5厚0.25重0.78		横長割片を素材とする。下側面に使用の痕跡が見られる。	64B-13, 3層
70	使用痕のある石器	長1.6幅1.3厚0.75重0.99		縦長割片を素材とする。右側に使用痕が見られる。	63U-14, 3層
71	使用痕のある石器	長3.75幅3.5厚0.6重8.66		やや縦長の割片を素材とする。右側下部に使用の痕跡が見られる。	64B-10, 3層
72	石核	長2.7幅3.8厚1.15重10.97		表面と裏面に小型割片を剥離した痕跡が見受けられる。	64B-10, 3層
73	打製石斧	長9.0幅5.7厚2.35重117		刃部欠損。形状不明。横位の摩耗は左右で位置が異なる。	63V-13, 3層
74	打製石斧	長8.4幅5.6厚1.9重129		基部欠損。短筒形。刃部右側は摩耗が激しい。	63V-11, 3層
75	磨石	長10.4幅6.25厚3.7重422		定形。両面に磨面が見受けられる。縁辺に若干の縦打痕が見受けられる。	63V-13, 3層
76	磨石	長12.8幅6.5厚5.1重809		定形。表面に磨面が見受けられる。側面に凹み穴が見受けられる。	63V-14, 3層
77	加工痕のある石器	長21.8幅9.3厚6.7重1749		上面に縦打痕が見受けられる。	64B-17, 2層
78	礫	長5.1幅4.2厚1.0重56		定形。一部に加工痕らしきものが見受けられる。	試掘
79	白石	長27.5幅23.3厚7.2重6400		表面に凹みが見られる。	64B-12, 3層

## 第4節 小結

本書では、平成10年度に行われた本調査を中心に報告を行った。長野原町の遺跡分布調査で示されていない、新たな遺物の散布地であることが判明した。本遺跡は、八ッ場ダム建設の進展に際し、今後も調査面積が拡大していく事が確実である。本遺跡の性格などを位置づけた考察及びまとめについては、す

べての調査が終了した時点で行われるべきであろう。

今回は小結として、本報告書に掲載された調査区及び、今後調査が行われるであろう、工事予定範囲を示す。調査の過程を表す資料として活用していただきたい。



第184圖 YD4-06榎木Ⅲ遺跡

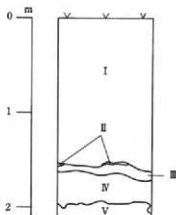
## 第10章 尾坂遺跡

### 第1節 遺跡の立地

遺跡は吾妻川左岸、中段段丘上にある。標高約570m。この段丘面は吾妻川に沿って西から東に向かって細長く延びる。段丘面の東端部分は舌状台地となっており、この部分だけ平坦面が幅広く広がる。遺跡はこの舌状台地の先端に位置する。調査区周辺は、緩やかに南に傾斜している。遺跡の南側は急崖となっており直下に吾妻川が東流している。本調査を行った地区は吾妻川に近いこともあり天明3(1783)年に発生したと思われる泥流堆積物に厚さ約1.5mほど覆われていた。本遺跡は、長野原町の遺跡分布調査報告書に遺跡地として掲載されていない新発見の遺跡となる。本遺跡が位置する段丘面は、舌状台地部を中心に、現在、学校を中心とする集落地として利用されている。

### 第2節 基本層序

遺構は第Ⅱ層直下より検出され、畑跡が中心である。遺構確認面は、この1面のみである。第Ⅰ層の泥流堆積物層は、1.5m程の厚さで堆積しており、さらにその上に表土が存在している。この泥流堆積物層と、近世の旧地表面との間には、As-Aが堆積している。



第185図 尾坂遺跡基本土層

第Ⅰ層 天明3(1783)年、浅間山の噴火に伴い発生した泥流堆積物層。

第Ⅱ層 As-A層。

第Ⅲ層 暗灰黒色土。As-A直下の旧耕作土。やや砂質。

第Ⅳ層 暗褐色土。やや砂質。

第Ⅴ層 黄褐色土。砂質土層。黄色軽石を少量含む。重角礫を少量含む。

### 第3節 検出された遺構と遺物

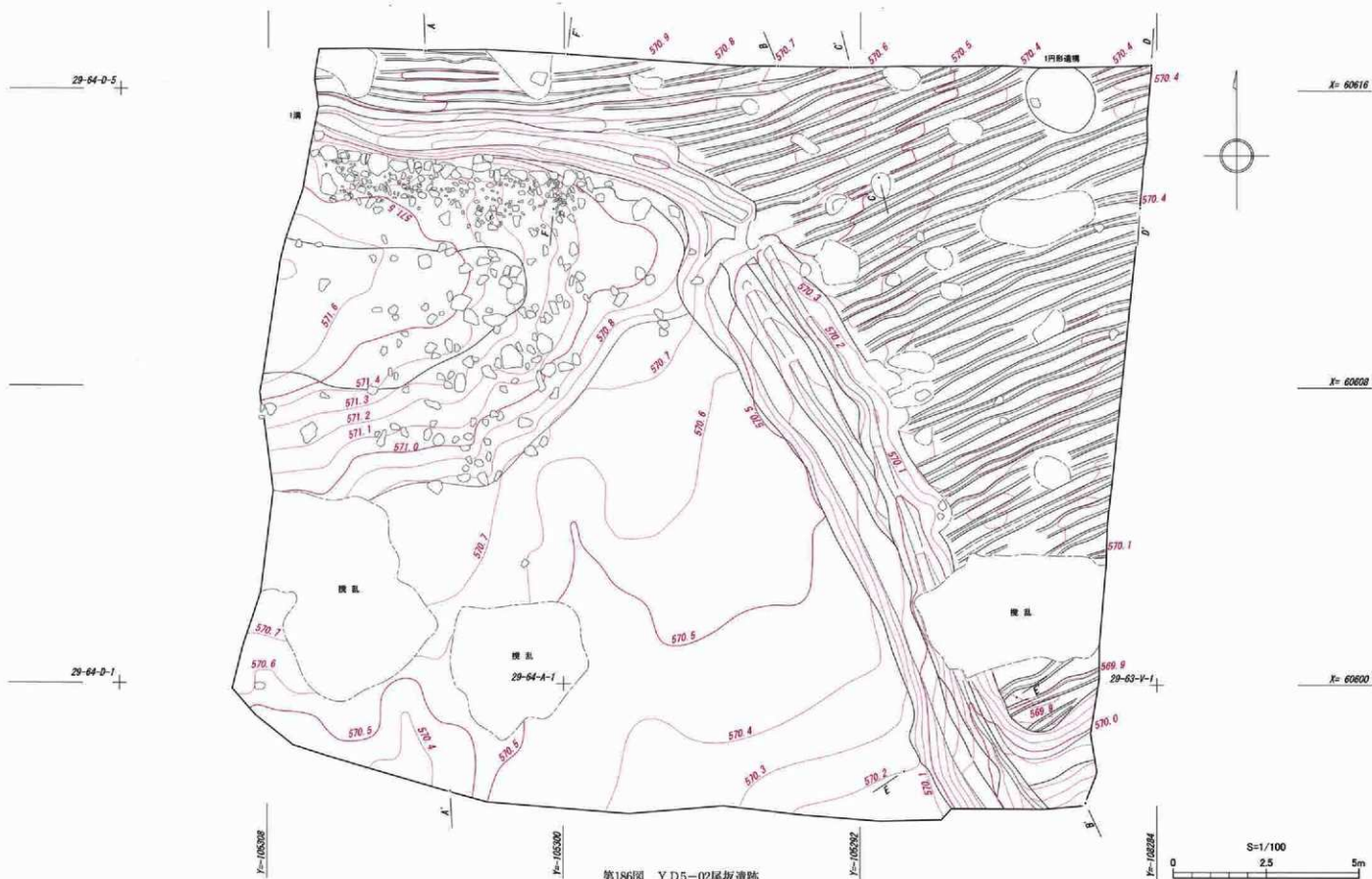
#### (1) As-A直下の畑跡

位置 63・64区 P L 76・77

地形と環境 63、64区にまたがる位置より畑跡が検出された。調査区中央にある溝と石垣により、東西に階段状に区切られている。上面と下面の比高差は0.3mある。下面にある63-1号畑は、最高所571.05m、最低所569.80m、比高差1.25mの緩斜面にある。プラント・オパール分析(第12章第2節(7))や花粉分析(第12章第3節(7))によると、当時この地区は比較的乾燥した環境であったと推定されている。また、畑の西側は東側よりも樹木の育成域に近く、近隣にはクリ、トチノキなどが生育していたという結果が得られている。

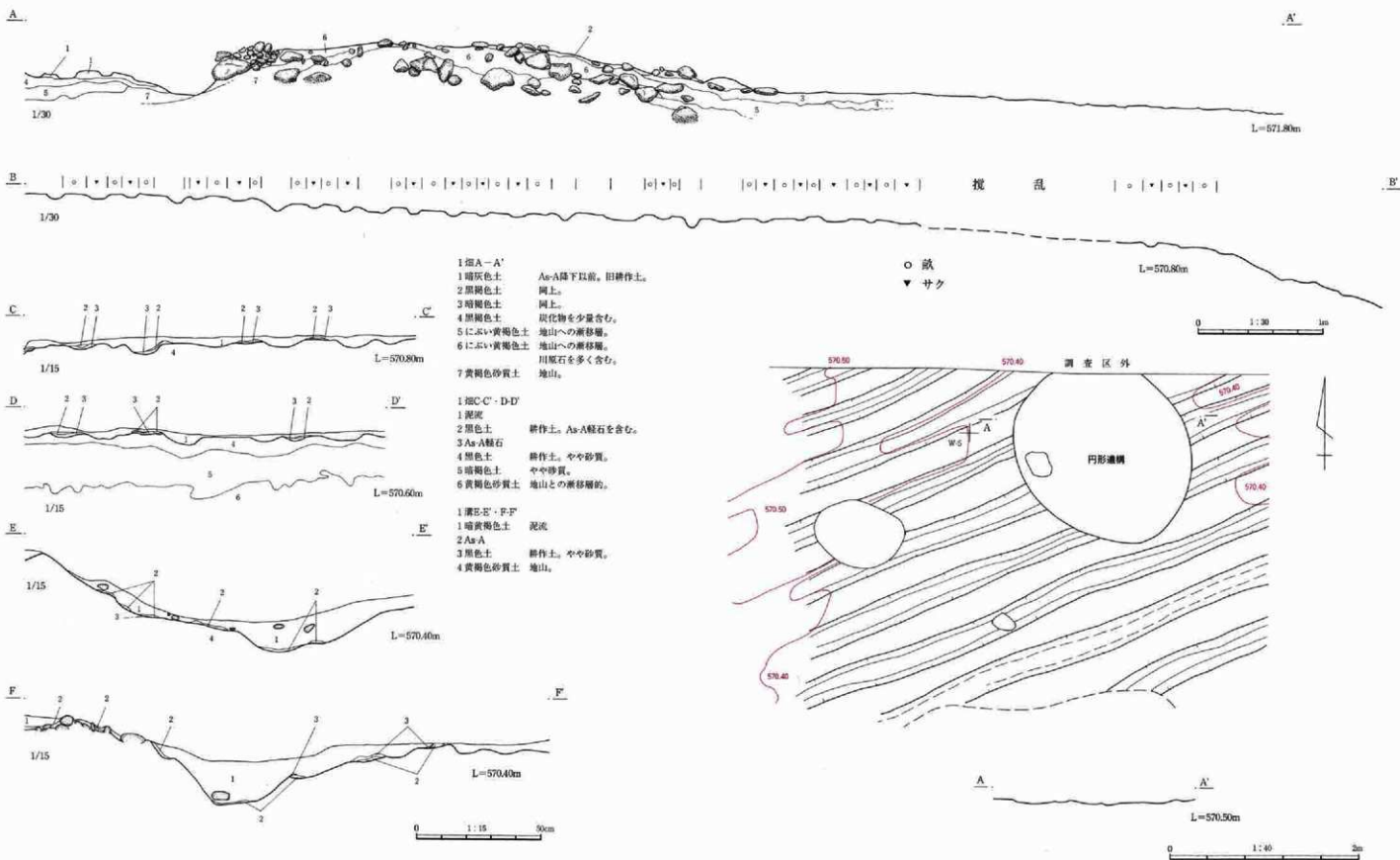
埋没状況 耕作面は、厚さ約1.5mの泥流堆積物に覆われている。この泥流堆積物により、後世の擾乱を受けず、当時の状況がそのまま残る状態となっている。泥流堆積物下には、As-Aの堆積が見られる。本来、耕作面の全面に降下しているはずのAs-Aは畝の頂部にみに確認される。さらに畝の頂部のAs-Aの上には、部分的ではあるが、耕作土が確認できる。このことは、As-A降下後にも耕作を継続していた状況を表すものとして、注目される。

形態 今回検出されたのは1枚の畑跡の一部のみであり、ここから全体の形状を推測することは難しい。畝は溝の縁で止まっていることから、今回検出されたのは、畑の南西隅にあたると思受けられる。畝の状況から考えると、畑はさらに北東方向に向かって、広がっていると思われる。調査区中央に



第186圖 Y D5-02尾板遺跡





第187図 尾坂遺跡63-1号畑





見られる溝と一部に見られる石垣により南西側は、畑面よりも40cmほど高く、段々畑の様相を呈している。畝は等高線に沿うように、ほぼ東西に走向している。調査区のほとんどの部分で直線的に作られているが、北西部では曲線的に伸びる様相を見せている。畝幅55cm、畝高8cmで、ほぼ一定の間隔で整然と畝立てされている。耕作面は泥流被災の際に生じたと思われる小擾乱が目立ち、随所で畝とサクが分断されている。

**作物** 泥流堆積物直下の耕作土より試料を採取し、プラント・オパール分析（第12章第2節（7））や花粉分析（第12章第3節（7））である。花粉分析からはソバの栽培の可能性が指摘されている。また、植物珪酸体分析からは、イネとヒエの栽培の可能性が高い事が示されている。この分析では、ムギ類の栽培の可能性も認められている。資料からはネザサ節型やクマザサ属型のプラント・オパールも多量に検出されている。これらのものは、有機肥料等として利用されていた可能性も考えられる。今回の分析では、試料の2つから回虫卵も検出されており、人糞施肥の可能性も併せて考えられる。

また、南西部段上の平坦面からも、泥流堆積物直下の土を採取し同様の分析を行った。その結果、畝立てがなされていないこの面からも、ソバの栽培の可能性が考えられる結果が示されている。

**円形遺構** 長軸2.06m、短軸1.77mで楕円形に近い形状を呈している。ハッ場ダム関連の調査において、畑跡から検出されるほぼ円形で畝が確認されない平坦面をこのように称しているためその名称をそのまま踏襲した。As-Aは平坦面の全面に堆積しており、畝とサクはこの周縁で途絶えている。この遺構の性格を調べるために、遺構内のAs-A層直下の土を試料とし花粉分析をおこなった。その結果、遺構が滞水していたと考えられることが判明した。また、この地点の試料から回虫卵が検出されている。これらのことから、水分を含んだ肥料などを置いていた場所の可能性も考えられる。

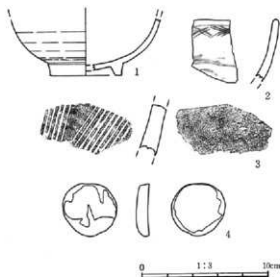
**溝** 63-1畑の北西部を西から東に、調査区中央付

近で向きを変え北西から南東に延びる。幅0.9-3.14m、深さ30-70cmで53-1畑とそれ以南の段差の境に存在する。道あるいは水路の可能性が考えられる。しかし、溝底面の堅さがあまりないこと、底面に土砂の堆積がないことなどから、詳細な性格は不明である。

**石垣** 石垣は1号溝の南側に検出された。長さ7.8m。径約30-70cmほどの川原石が1・2段積み、高さは80cm程となっている。石垣最上段の石の上にAs-Aが堆積しており、降下時と同じような状況で積まれていたと考えられる。地山を掘り込んで構築されている。

**その他** 本調査区よりさらに北側で行った試掘調査において、建物跡と思われる痕跡が認められた。その周辺全体には畑跡と考えられるサクの痕跡が広がっており、今回の調査区から北に向かい生産域が広がっている可能性が高いと考えられる。

**出土遺物** 陶磁器12点、石器2点が出土している。陶磁器は、ほとんどが実測には至らない小破片である。1、2は1号畑より、3、4は1号溝より検出されている。1-3は1江戸期の陶器である。4は焙烙の底部を円盤状に成形したものである。石器は実測に至っていない。（遺物観察表220頁）

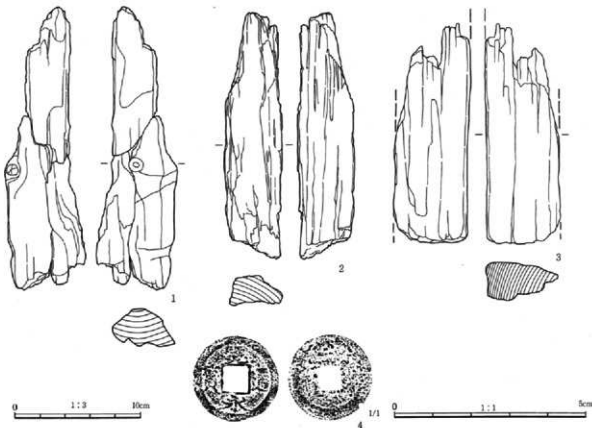


第188図 尾坂遺跡出土遺物

第10章 尾坂遺跡

(2) 遺構外出土遺物

試掘調査時に木製の杭が3点、銭貨1点が検出されている。(遺物観察表220頁)



第189図 尾坂遺跡遺構外出土遺物

第16表 尾坂遺跡遺物観察表

53-1号組		陶器		(単位: cm)		
番号	種類	部位	計測値	①構成②軸色③胎土	その他の特徴	備考
1	陶器 甕	体一底部	口一底(5.7)高1/6残存(4.5)	①堅平, 灰②灰③緻密	外面にロゴロ目が残る。底部に回転糸切り痕が残る。	1溝 江戸 瀬戸・美濃
2	陶器 束付甕	口一体部	口一底一高一1/6残存	①堅平, 灰②灰白③微細	内外面に透明度の高い釉がかかる。透明釉には細かい貫入が入る。	1溝 江戸 肥前 陶胎発付
3	陶器 揉り鉢	体部片	口一底一高一	①良, 淡黄②細③細かい	籍軸。断面上部の割れ口を磨って調整。	1溝 江戸 瀬戸・美濃
4	土製円盤	完形	口一底一高一	①良好②によい黄脚③砂粒を含む	増物の底部を円形に整形。	1溝 江戸

遺構外出土遺物 木器			(単位: cm, g)		
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等		備考
1	加工材(角杭)	長さ22.3幅6.0厚さ3.0	割り材。分割後、面取りした材を杭として利用。一端は欠損。他方劣化しているものの、平らに見受けられる。		アカマツ
2	加工材(角杭)	長さ19.4幅4.5厚さ2.6	割り材。分割後、面取りした材を杭として利用。一端は先端を尖らせる加工を受けている。他方は欠損。		アカマツ
3	加工材(角杭)	長さ17.3幅5.8厚さ3.0	割り材。分割後、面取りした材を杭として利用。一端は欠損。他方劣化しているものの、平らに見受けられる。		アカマツ?

銭貨							(単位: cm, g)	
番号	種類	現存	鏡径	内径	厚さ	重さ	備考	
4	寛永通宝	完形	22.30-23.10	17.90-18.30	1.10-1.25	2.25	泥流中	





## 第11章 試掘調査

## 第1節 三平I遺跡

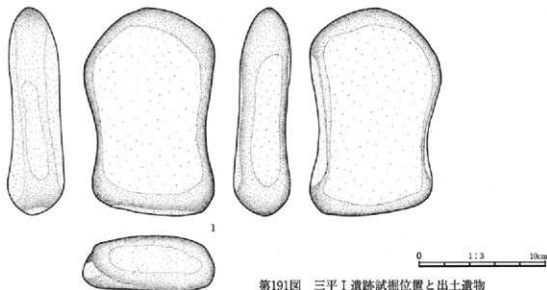
(1) 立地と環境 本遺跡は、吾妻川左岸の最上位段丘上に位置する。この付近の最上位段丘の上方には、いくつかの平坦面がある。本遺跡は、そのような平坦面の一つに存在する。この平坦面には長野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている三平I遺跡があり、本遺跡は、遺跡範囲の北東端に位置する。この位置は急傾斜から平坦面へと変換する地点にあたり、平坦面も狹隘である。調査地点は北側へと緩やかに傾斜する地形となっているが、東側に進むと沢に向かい急崖となっている。ここよりわずかに南側に進むと、平坦面は大きく広がり、集落・耕作地として現在も利用されている。

(2) 調査の概要 試掘に至る経緯及び発掘調査の経過については、序章、第1節・第2節を参照していただきたい。工事用進入路の掘削部分に限り、試掘トレンチを3箇所設定し調査を行った。トレンチの1つから土坑状の落ち込みを確認したため、各トレンチを拡張したが、落ち込みは風倒木と判明した。出土遺物は縄文前期と中期の土器小破片が各1点と



石器が1点である。遺物量が少なく、遺構も検出されなかったため、本調査は不要と判断し、掘削範囲に限り工事立会とした。

(3) 成果 遺構は検出されなかったが、三平I遺跡の遺物の散布地がこの地点まで伸びていることが判明した。



第191図 三平I遺跡試掘位置と出土遺物

第17表 三平I遺跡遺物観察表

遺跡外出土遺物		石跡		(単位: cm, g)	
番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備	考
1	磨石	長16.4幅9.3厚3.9重1081	定形。5面に磨面が見受けられる。砥石か?		表様

## 第2節 二社平遺跡

(1) 立地と環境 本遺跡は、吾妻川左岸の最上位段丘及び中位段丘にまたがって位置する。調査区は3地点に設定した。

最上位段丘の調査区は岩陰下のテラス部分に位置する。岩陰は最上位段丘にある平坦面からわずかに下った急傾斜面に存在する。この岩陰は二社平岩陰として、長野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている。

最上位段丘から中位段丘へと至る傾斜地に2つ目の調査区は存在する。周囲に較べると若干傾斜が緩いが、急傾斜地に分類されるであろう地域である。

この地域の最上位段丘から吾妻川河床に至る急傾斜地には、テラス状の狭小な緩斜面がいくつかある。中位段丘に相当するこのような緩斜面に、3つ目の調査区は位置する。この緩斜面は近年まで水田として利用されていた。

すべての調査区とも周囲は狭隘な林道、急傾斜面で構成されている。中位段丘の調査区、沢を挟んで東側には、この地点と同様な狭小な緩斜面が形成されている。ここには、本報告書第2章に掲載した石畑遺跡が存在する。

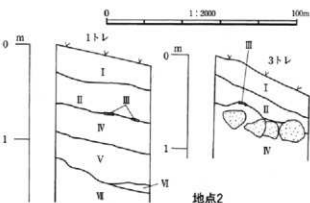
(2) 基本層序 基本土層として掲載したのは、最上位段丘から中位段丘へと至る傾斜地に存在する調査地点2のトレンチのものである。この地点では、天明3(1783)年、浅間山噴火に伴って発生した泥流が堆積したと考えられる層が、20cmほど見られる。泥流堆積物の直下には、As-A軽石もわずかに確認できる。このAs-A軽石の下層は礫を多く含む。

第I層 暗褐色土。表土。やや砂質。第2層の泥流を起源とする。

第II層 暗褐色土。天明3(1783)年、浅間山噴火に伴い発生した泥流の堆積物。砂質強い。

第III層 浅間A軽石(以下As-A)。

第IV層 黒褐色土。やや砂質。礫を多く含む。



第192図 二社平遺跡試掘位置と基本土層

第V層 暗褐色土。砂質土層。礫を非常に多く含む。谷を埋めている。

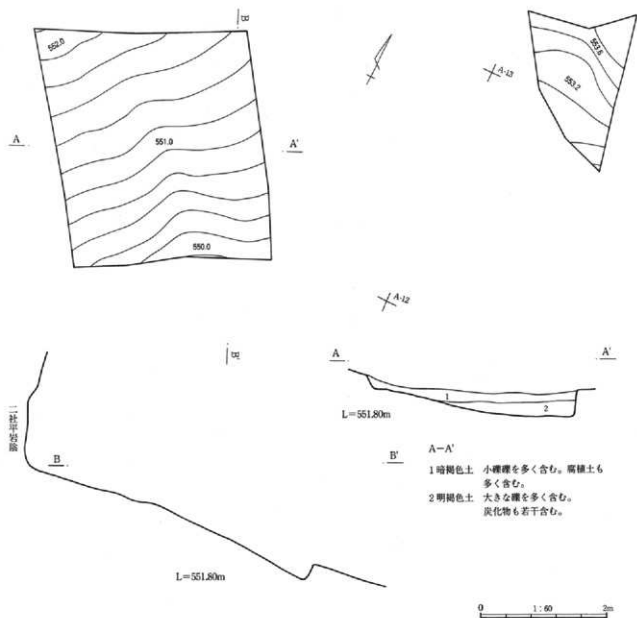
第VI層 砂層。礫を多く含む。

第VII層 黒色土。軽石を少量、礫を多く含む。

(3) 調査の概要 試掘に至る経緯及び発掘調査の経過については、序章、第1節・第2節を参照していただきたい。

平成8年度と10年度の2回にわたりこの地域の試掘調査を行っている。

平成8年度には、地点3の試掘調査を行った。この調査区は、天明3(1783)年、浅間山噴火に伴って発生した泥流の堆積物に覆われている。台地部分においてローム相当層を狭小な範囲で確認したが、



第193図 二社平遺跡試掘トレンチ（地点1）

工事掘削は泥流下に及ばないため、断面観察と写真撮影記録を施した。出土遺物は縄文晩期～弥生期に比定されると思われる土器が13点と石器が1点である。土器片については、実測に耐えるものを9点掲載した。1は弥生後期樽式土器である。表探であるが、該期の遺構が検出された例はなく、遺物の出土も極めてまれである。今後、周辺地域の調査は入念に行わなければならないであろう。

平成10年度には、地点1にあたる岩陰遺跡と地点2の試掘調査を行った。調査地点1の岩陰岩底下に

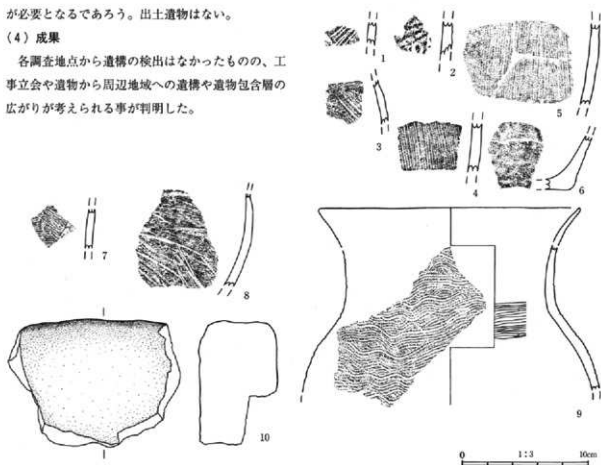
は、2本の試掘トレンチを設定して調査を行った。しかし、表土下10数cmで岩盤が露出し、遺物包含層は確認できなかった。

調査地点2の傾斜地には、3本のトレンチを設定し調査を行った。As-Aの堆積が認められたものの、地点的な堆積であり、下位の遺構の存在は希薄なものと判断し工事用進入路掘削部分に関しては調査不要と判断した。試掘調査地の周囲については、その後の工事立会の中で畑の断面と思われるものが確認されている。今後の工事進展の際には、入念な調査

が必要となるであろう。出土遺物はない。

## (4) 成果

各調査地点から遺構の検出はなかったものの、工事立会や遺物から周辺地域への遺構や遺物包含層の広がりが考えられる事が判明した。



第194図 二社平遺跡遺構外出土遺物

第18表 二社平遺跡遺物観察表

遺構外出土遺物		土器			
番号	種類	部位	①焼成②着色③動土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	副部片	①やや不良②微③砂粒を含む	集合比周で文様を構成。	表土 縄文 陶器C式
2	深鉢	副部片	①やや不良②微③織縞を含む	縄文を施す。	表土 縄文前期由乎
3	破片		①真好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	外面に斜位のハケ目文、内面にミガキを施す。	表土 縄文 加賀野B式
4	深鉢	副部片	①真好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	縦位のハケ目を施す。内面は、丁寧なナデ。二次的に被熱。	表土 縄書条痕 縄文晩期水式の可能性
5	深鉢	副部片	①真好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	縦位のハケ目を施す。内面は、丁寧なナデ。二次的に被熱。	表土 縄書条痕 縄文晩期水式の可能性
6	深鉢	底部片	①真好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	無文。	表土 縄書条痕 縄文晩期水式の可能性
7	破片		①真好②にぶい黄褐色③砂粒を含む	外面にハケ目。内面に丁寧なナデを施す。	表土 弥生前期
8	深鉢	口縁部片	①やや不良②灰青褐色③粗砂粒を含む	外面は斜位の条痕、内面へラ状工具によるミガキ。	表土 弥生中期
9	壺	副部片	①真好②外：黒色土。内：にぶい③細砂粒と細縞を順番に含む	外面は7本の縞指流状文。内面はへラ状工具による横位ミガキ。	表土 弥生後期横式

## 石器

番号	種類	大きさ・重量	(単位: cm, g)	
			形状・特徴等	備考
10	白石	長(13.7)幅(10.1)厚6.3重1186	破片。両面が平らで側面とほぼ直角になっている。整形の為と思われる幾行破がほぼ全面に見受けられる。	表土



### 第3節 下田遺跡

(1) 立地と環境 本遺跡は、吾妻川左岸の中段段丘上に位置する。中段段丘上には、蛇行する水流に削られ、川に向かって舌状に飛び出した台地が数カ所存在する。吾妻川に沿って狹隘な平坦面が続く中で、これらの台地上には平坦面が広く広がっている。本遺跡はこのような舌状台地の、北東部に存在する。台地上は天明3（1783）年、浅間山の噴火に伴う泥流が発生した際の被害を受けている。この泥流の際の堆積物は、現在でも約2.5mの厚さで堆積している。この舌状台地の上部は長野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている下原遺跡（下田遺跡）である。遺跡範囲の北側が、本調査を行った下田遺跡（第7章）である。試掘部分と本調査部分は離れており、遺構の状態も異なるため別に記載した。当地は現在、集落・耕作地として利用されている。

(2) 基本層序 基本土層は、平成9年度に調査を行った、南西調査区のものである。基本土層の位置では確認することができなかったが、泥流直下にはAs-Aが地点的な堆積をしている。

#### I 泥流

II 黒褐色土 鉄分沈殿する。締まった土。

III 暗褐色土 炭化物混入あり。

IV 暗褐色土 微小な黄褐色軽石を多く含む。

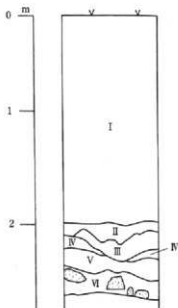
V 褐色土 均質な砂質土。

VI 褐色土 均質な砂質土。大型の円礫を多く含む。

(3) 調査の概要 試掘に至る経緯及び発掘調査の経過については、序章、第1節・第2節を参照していただきたい。

平成6年度と9年度の2回にわたりこの地域の試掘調査を行っている。平成6年度には、台地の北東部分に試掘トレンチを7本設定し調査を行った。その結果、6号トレンチからは泥流堆積物直下より、畑の畝と思われる段状の遺構を検出した。また、7号トレンチからは、2基の陥し穴を検出した。出土遺物はない。

平成9年度には、台地の南西部に試掘トレンチを



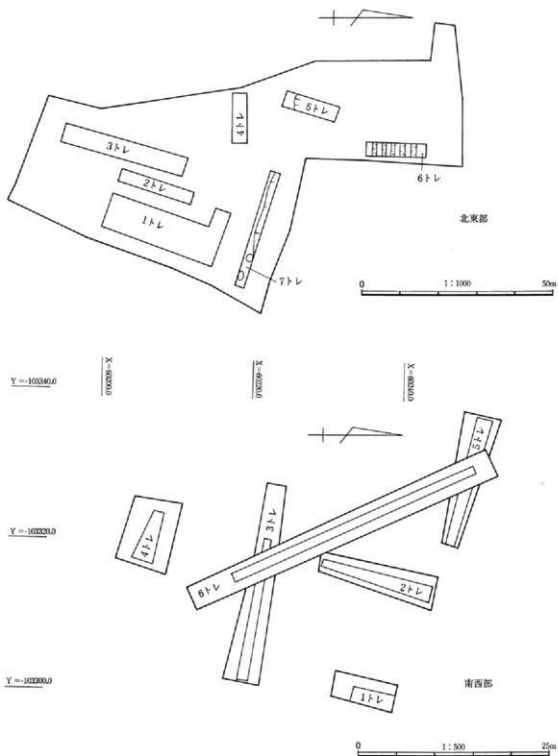
第195図 下田遺跡試掘位置と基本土層

5本設定し調査を行った。その結果、調査区西側のトレンチで泥流堆積物下のAs-A直下より、畑跡を検出した。出土遺物はない。

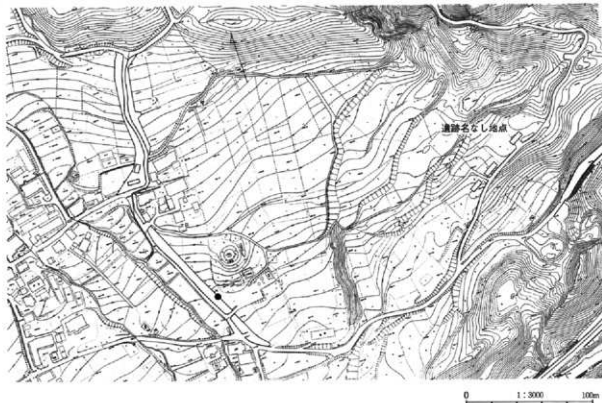
第11章 試掘調査

両地点から遺構が検出されている。しかし、厚い泥流に覆われ工事の掘削深度が及ばないため、本調査は後日とし、写真や土層図の記録のみにとどめた。

(4) 成果 長野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている下原遺跡(下田遺跡)の範囲がさらに拡大することが判明した。



第196図 下田遺跡試掘トレンチ



## 第4節 林の御塚・上原I遺跡

(1) 立地と環境 本遺跡は、吾妻川左岸の最上位段丘に位置する。林地区にある広大な緩斜面の、南東に位置する。試掘地点の北部は長野原町の遺跡分布調査報告書に掲載されている上原I遺跡、南部は林の御塚の遺跡範囲内にあたる。この緩斜面の最上部には、花畑遺跡がある。これらの遺跡以外にも、10の遺跡と3つの文化財がここに集中している。現在でも、当地区の集落の中心として使用されている。

### (2) 基本層序 (林の御塚)

I 表土

II 黒色土 混入物なし。

III 黒色土 細粒子混じる。

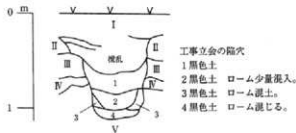
IV ローム漸移層

V ローム層

(3) 調査の概要 試掘に至る経緯及び発掘調査の経過については、序章、第1節・第2節を参照していただきたい。平成7・9・10年度の3回にわたりこの地域の試掘及び立会調査を行った。平成7年度の

林の御塚では、削平断面に陥し穴の痕跡を認めたが、それ以上の削平はないため、遺構の断面土層図と写真記録を行った。平成9年度の上原I遺跡では、試掘及び立会調査を実施した。試掘では遺構なし。立会調査時に陥し穴状の土坑1基を確認した。平成10年度は、試掘調査を実施したが、遺構は検出されなかった。出土遺物は各年度とも1～2点の縄文土器片を検出したのみである。時期が確認できる土器は、縄文時代中期後半～後期前半のものである。

(4) 成果 調査地点においては密度は低いながらも遺構が存在し、狩猟場を中心とした遺跡地であることが確認された。



第197図 林の御塚・上原I遺跡試掘位置と基本土層

## 第12章 自然科学分析

### 第1節 テフラ（火山灰）分析

株式会社 古環境研究所

#### (1) はじめに

群馬県吾妻川流域の後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間火山、草津白根火山、榛名火山など、北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方、中国地方、中部地方など遠方の火山に由来するテフラ（火山降灰物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになってきている。そこで、東宮遺跡、二社平遺跡、川原湯勝沼遺跡の3遺跡においてこの調査分析を実施し、資料の収集を行うことにした。

まず、年代の不明な土層が検出された東宮遺跡では、土層の年代に関する資料を求めるために、地質調査を行って土層の層序について記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行って、示標テフラの層位を求めることになった。同様に、堆積年代が不明な土層が認められた二社平遺跡においても、地質調査により土層の記載を行うとともに、テフラ検出分析を行って示標テフラとの同定を行い、土層の年代を調べることになった。さらに川原湯勝沼遺跡では、地質調査とテフラ検出分析を合わせて行って、土層の層序を記載するとともに、示標テフラの層位を把握して、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。以下に各遺跡ごとの分析結果を示す。

#### (2) 東宮遺跡

##### ① 試料

調査分析の対象となった地点は、深掘トレンチである。

##### ② 土層の層序

深掘トレンチでは、暗褐色土(層厚30cm以上)を不整合で覆う土層を認めることができた。上位の土層は、下位より暗灰色土(層厚27cm)、暗灰色土砂質土(層厚22cm)、亜円礫混じり暗褐色土(層厚11cm、礫の最大径33mm)、亜円礫混じり灰色砂層(層厚4cm、礫の最大径18mm)、暗褐色土(層厚8cm)、炭化物および亜円礫混じり灰褐色土(層厚28cm、礫の最大径31mm)、暗灰褐色土(層厚18cm)、暗灰色土(層厚9cm)、褐色土(層厚0.3cm)、灰色土(層厚1cm)、褐色土(層厚0.5cm)、暗灰色土(層厚1cm)、褐色土(層厚0.8cm)、暗褐色土(層厚1cm)、亜円礫および黒灰色岩片混じり褐色泥流堆積物(層厚52cm、礫および岩片の最大径98mm)、炭化物混じり褐色土(層厚27cm)、暗灰褐色作土(層厚17cm)が認められる(図1)。発掘調査区のうち、北地点では泥流堆積物の直下に黄白色軽石層(層厚1cm、軽石の最大径12mm)が認められる。この軽石は、その層相から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968)に同定される。したがって、その直上の泥流堆積物は、浅間天明泥流堆積物(荒牧, 1968, 早田, 1990)に同定される。

##### ③ テフラ検出分析

##### (ア) 分析試料と分析方法

As-Aの下位の土層中の示標テフラの降灰層準を求めるため、土壌試料11点についてテフラ検出分析を行い、含まれるテフラの特徴から示標テフラの検出同定を試みることにした。テフラ分析の手順は次の通りである。

1) 試料15gを秤量。

2)超音波洗浄装置により泥分を除去。

3)60°Cで恒温乾燥。

4)実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や特徴を把握。

#### (イ) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第20表に示す。多くの試料から軽石粒子が検出された。それらのうち、灰白色の軽石は円磨されており、水流により2次的に運搬され混入したものと考えられる。また白色の軽石のうち、試料9や試料8に認められる軽石には、斑晶として斜方輝石や単斜輝石が認められる。また、とくによく発泡していることから、約1.3~1.4万年前\*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP)の一部の浅間草津黄色軽石(As-YPk,新井,1962,町田・新井,1992)に由来すると考えられる。また試料2に認められた淡褐色軽石(最大径4.8mm)は比較的良好発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B,新井,1979)、または1128(大治3)年に浅間火山から噴出した浅間柏川テフラ(As-Kk,早田,1991,1996)に由来すると考えられる。さらに、試料1に認められた白色軽石(最大径3.1mm)は、比較的良好発泡しており、その斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から、1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A)に由来すると考えられる。尚、試料9,6,4に認められた淡灰色軽石(最大径3.2mm)については、さらに屈折率測定を行うことにした。

#### ④ 屈折率測定

##### (ア) 測定試料と測定方法

淡灰色の軽石が比較的多く検出された試料9に含まれるテフラ粒子について、屈折率測定を行い、示標テフラとの同定を試みた。測定は温度一定型屈折率測定法(新井,1972,1993)による。

##### (イ) 測定結果

屈折率の測定結果を第19表に示す。試料9には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められる。含まれる斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.705-1.710である。このテフラについては、軽石の特徴や斜方輝石の屈折率などから、4世紀中葉\*2に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C,新井,1979)に由来する可能性が考えられる。

#### ⑤ 小結

東宮遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位よりAs-C、As-BまたはAs-Kk起源の軽石、As-A、浅間天明泥流堆積物を検出することができた。

第19表 東宮遺跡屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	火山ガラス (n)	斜方輝石 ( $\gamma$ )
深掘トレンチ	9	opx>cpx		1.705-1.710

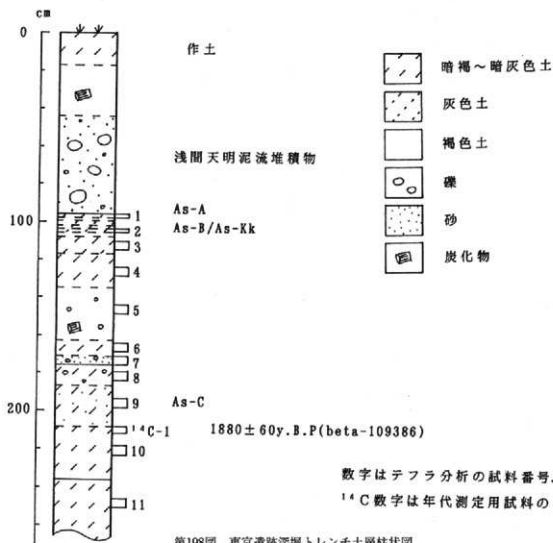
opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, 屈折率の測定は、位相差法(新井, 1972)による。

第20表 東宮遺跡 深堀トレンチにおけるテフラ検出分析結果

試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
1	+	白	3.1
2	+	淡褐	4.8
3	+	灰白	3.1
4	+	淡灰	1.7
5	+	灰白	3.2
6	+	淡灰	3.2
7	-	-	-
8	+	白	1.8
9	++	淡灰, 白	4.3, 3.1
10	-	-	-
11	+	灰	1.3

++++: とくに多い  
 +++: 多い  
 ++: 中程度  
 +: 少ない  
 -: 認められない

最大径の単位は, mm.



## (3) 二社平遺跡

## ①試料

調査分析の対象となった地点は、中段トレンチ1の基本土層断面である。

## ②基本土層断面の土層層序

基本土層断面では、下位より角礫を含む黒色土(層厚23cm, 礫の最大径238mm)、黒色土(層厚12cm)、角礫混じり黒灰色土(層厚17cm, 礫の最大径138mm)、重角礫を多く含む砂混じり黒灰色土(層厚18cm, 礫の最大径38mm)、重角礫混じり暗灰色土(層厚8cm, 礫の最大径61mm)、暗灰褐色砂質土(層厚31cm)、暗灰褐色表土(層厚21cm)の連続が認められた(第199図)。

## ③テフラ検出分析

## (ア) 分析試料と分析方法

基本土層断面より基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの11点についてテフラ検出分析を行い、示標テフラの検出同定を行った。分析の手順は、東宮遺跡における分析方法に準じる。

## (イ) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第21表に示す。試料22および20には、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石(最大径1.2mm)が少量含まれている。また試料14から上位の試料には、比較的よく発泡した淡褐色軽石(最大径3.1mm)が少量ずつ認められる。さらに試料6から上位の試料には、よく発泡した白色軽石(最大径4.0mm)が含まれている。とくに試料6および試料4には、多くの軽石が認められる。以上のことから、少なくとも試料20以下の層序に灰白色、試料14付近に淡褐色、試料6付近に白色の軽石の降灰層があると考えられる。これらの軽石のうち、灰白色軽石については、その特徴からAs-Cに由来すると思われる。

## ④屈折率測定

## (ア) 測定試料と測定方法

試料14および試料6に降灰層があると推定されるテフラと、示標テフラとの同定精度を向上させるために温度一定型屈折率測定により屈折率測定を行った。

## (イ) 測定結果

屈折率測定の結果を第22表に示す。基本土層断面の試料14には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.708-1.710である。この試料に含まれるテフラは、軽石の特徴や斜方輝石の屈折率などから、As-Kkに由来すると思われる。一方、基本土層断面試料6にも、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。火山ガラス(n)と斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、各々1.507-1.511と1.707-1.710である。このテフラは、その特徴からAs-Aに同定される。

## ⑤小結

二社平遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位よりAs-C、As-Kk、As-Aに由来するテフラ粒子を検出できた。

第21表 二社平遺跡におけるテフラ検出分析結果

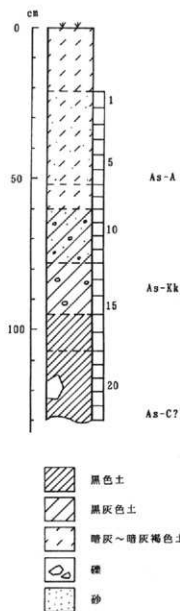
地点	試料	軽石		
		量	色調	最大径
基本土層断面	2	+	白>淡褐	1.7, 3.1
	4	++	白>淡褐	2.1, 3.0
	6	++	白>淡褐	4.0, 2.9
	8	+	淡褐	1.8
	10	+	淡褐	1.7
	12	+	淡褐	2.1
	14	+	淡褐	2.2
	16	-	-	-
	18	-	-	-
	20	+	灰白	1.1
	22	+	灰白	1.2

+++ : とくに多い, ++ : 多い, + : 中程度, - : 少ない,  
- : 認められない。

第22表 二社平遺跡テフラ屈折率測定結果

地点	試料	鉱物	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)
基本土層断面	6	opx>cpx	1.507-1.511	1.707-1.710
基本土層断面	14	opx>cpx	-	1.708-1.710

opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石。黒鉱物の ( ) は量の少ないことを示す。  
屈折率の測定は、温度一定型位相差法 (新井, 1972, 1993) による。



第199図 二社平遺跡標準土層断面の土層柱状図

標準土層断面の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



## (4) 川原湯勝沼遺跡

## ①試料

調査の対象となった地点は、64-1号畑および63-2号畑の2地点である。

## ②土層の層序

## (ア) 64区1号畑

64区1号畑では、下位より暗灰色砂質土（層厚4cm以上）、黄白色軽石層（層厚1cm、軽石の最大径7mm、石質岩片の最大径2mm）、暗灰色土砂質土（層厚3cm）、若干色調の暗い灰褐色砂質泥流堆積物（層厚15cm）の連続が認められた（第200図）。これらのうち、黄白色軽石層に含まれる軽石は、白色で比較的良好に発泡しており、班晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石層は、その特徴からAs-Aに同定される。また、その上位の灰褐色砂質泥流堆積物は、層位や層相から浅間天明泥流堆積物に同定される。発掘調査では、この浅間天明泥流堆積物の直下から畑遺構が検出されている。

## (イ) 63区2号畑

63区2号畑では、下位より灰褐色土（層厚14cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰褐色土（層厚2cm）、黄白色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径6mm、石質岩片の最大径2mm）、灰褐色砂質泥流堆積物（層厚71cm）、表土（層厚12cm）の連続が認められた（第201図）。これらのうち、黄白色軽石層に含まれる軽石は、白色で比較的良好に発泡しており、班晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石層は、その特徴からAs-Aに同定される。また、その上位の灰褐色砂質泥流堆積物は、層位や層相から浅間天明泥流堆積物に同定される。発掘調査では、この浅間天明泥流堆積物の直下から畑遺構が検出されている。

## ③テフラ検出分析

## (ア) 分析試料と分析方法

起源の不明なテフラ層が認められた63区2号畑において、灰色細粒火山灰層を対象にテフラ検出分析を行うことになった。分析の手順は、東宮遺跡における分析方法に準じる。

## (イ) 分析結果

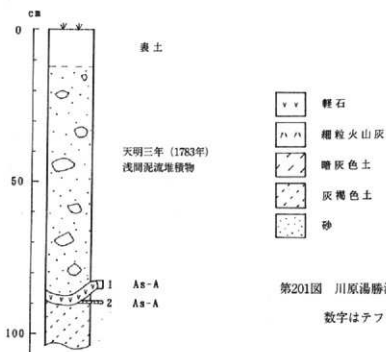
テフラ検出分析の結果、試料中にはスポンジ状によく発泡した白色細粒軽石（最大径1.0mm）が少量認められた。この軽石は、その層位や層相からAs-Aを噴出した浅間火山の噴火活動のうち、比較的初期に噴出したテフラと考えられる。なお、このテフラと噴火最盛期と思われるAs-A主体部の間に土壌が認められたことは、比較的初期のテフラと噴火最盛期のテフラの降灰の間に、耕作あるいは復旧作業の行われたことが考えられる。

## ④小結

川原湯勝沼遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、本遺跡にはAs-Aと浅間天明泥流堆積物が堆積していることが明らかになった。発掘調査で検出された畑は、浅間天明泥流堆積物の直下層位がある。



第200図 川原湯勝沼遺跡64-1号畑の土層柱状図



第201図 川原湯勝沼遺跡63-2号畑の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

文献

- 寛牧重雄 (1968) 浅間火山の地質, 地研専報, no.14, p.1-45.  
 早田 勉 (1990) 群馬県其自然と風土, 群馬県史通史編, 1, p.37-128.  
 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀礫年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, P.1-79.  
 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定-テクロノロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.  
 新井房夫 (1993) 温度一定屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法-研究対象別分析法」, p.138-148.  
 町田洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, p.276.  
 早田勉 (1991) 浅間火山の生い立ち, 佐久考古通信, no.53, p.2-7.  
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の示微テフラ層, 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.  
 新井房夫 (1993) 温度一定屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2-研究対象別分析法」, p.138-149.  
 早田勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史, 和代田町誌, 自然編, p.22-46.

## 第2節 植物珪酸体・プラントオパール分析

株式会社 古環境研究所

### (1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

分析を行ったのは東宮遺跡、石畑遺跡、二社平遺跡、川原湯勝沼遺跡、下田遺跡、尾坂遺跡である。主に、天明3 (1783) 年、浅間山の噴火に伴い発生した泥流の堆積物直下より検出された畑跡から試料を採取し同遺構のイネ科栽培植物の検討を主目的として分析を行った。また、畑跡が検出されていない二社平遺跡では、土地利用変遷の推定を主目的として分析を行った。

### (2) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42kHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキッ) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5}\text{g}$ ) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

### (3) 東宮遺跡・下田遺跡における植物珪酸体分析

#### ①試料

試料は、東宮遺跡の泥流堆積物及びAs-A直下より検出された41-1・2号畑 (試料1~4)、同じく下田遺跡の泥流堆積物及びAs-A直下より検出された45-1・2号畑及び45-1号住居内の1号庵 (試料1~5) の計9点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

#### ②分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、

その結果を第23表および第202・203図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族、ウシクサ族（大型）、Aタイプ（くさび型）、Bタイプ、

ネザザ節型（おもにメダケ属ネザザ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、マダケ属型（マダケ属、ホウライナク属）、タケ亜科（未分類等）

穎の表皮細胞由来：イネ、オオムギ族（ムギ類）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

はめ絵バズル状（ブナ科ブナ属など）、その他

③稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構や畑遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/g程度として検討を行った。

イネは、東宮遺跡および下田遺跡のAs-A直下畑跡から採取されたすべての試料から検出された。このうち、東宮遺跡の試料4では密度が3,000個/gと畑跡としては高い値である。下田遺跡の試料1、2では2,300個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をAs-A層で覆われていることから上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、これらの畑跡ではイネが栽培されていた可能性が高いと考えられる。

イネは、この他にも下田遺跡のAs-A直下層から出土した1号炉内（試料3）から検出された。密度は3,000個/gと高い値である。

④イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属などがある。このうち、分析試料からはオオムギ族とヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

（ア）オオムギ族

オオムギ族（穎の表皮細胞）は、東宮遺跡のAs-A直下畑跡（試料1、2、4）および下田遺跡のAs-A直下畑跡（試料1、4）から検出された。ここで検出されたのはいずれもムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井，1989）である。密度は、東宮遺跡の試料4で2,200個/gと比較的高い値であるが、その他の試料では1,000個/g未満と低い値である。ただし、穎（籾殻）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、これらの畑跡ではムギ類が栽培されていた可能性が高いと考えられる。

オオムギ族は、この他にも下田遺跡の1号炉内（試料3）から検出された。密度は3,800個/gと高い値である。

（イ）ヒエ属型

ヒエ属型は、東宮遺跡のAs-A直下畑跡（試料3、4）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌヒエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを明確に識別するには至っていない（杉山ほか、

1988)。これは、植物分類上でも両者の差異が不明確なためであるが、ここでは畑跡から検出されていることから栽培種に由来するものである可能性が高いと考えられる。密度は、試料4では3,000個/gと高い値である。ヒエ属は葉身中における植物珪酸体の密度が低いことから、植物体量としては過大に評価する必要がある。以上のことから、同畑跡ではヒエが栽培されていた可能性が高いと考えられる。

ヒエ属型は、この他にも下田遺跡の1号炉内(試料3)から検出された。密度は800個/gと低い値である。

#### (ウ) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属型(ヒエなど)やエノコログサ属型(アワなど)に近似したものが含まれている。また、ウシクサ族(大型)の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

### ⑤植物珪酸体分析から推定される植生・環境

#### (ア) 東宮遺跡、As-A直下畑跡(第202図)

イネ科栽培植物以外の分類群では、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族も比較的多く検出された。また、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型なども少量検出された。当時の遺跡周辺は、これらの植物が生育する開かれた環境であったと考えられ、ヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。

#### (イ) 下田遺跡、As-A直下畑跡(第203図)

イネ科栽培植物以外の分類群では、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族も比較的多く検出された。また、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型なども少量検出された。当時の遺跡周辺は、これらの植物が生育する開かれた環境であったと推定される。

#### (ウ) 下田遺跡、As-A直下1号竈(第203図)

畑跡とおおむね同様の結果であるが、樹木(落葉樹)が5,300個/gと比較的多く検出された。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には、他の分類群よりも過大に評価する必要がある。このことから、燃料の一部として落葉樹の葉などが利用されていた可能性が考えられる。なお、前述のように1号炉ではイネ、オオムギ族(穎の表皮細胞)、ヒエ属型が検出されていることから、収穫後の稲藁などが燃料として焼かれていた可能性が考えられる。

### ⑥まとめ

#### (ア) 東宮遺跡

As-A直下畑跡では、イネやムギ類が栽培されていたと考えられ、ヒエ属(ヒエ)が栽培されていた可能性も認められた。

#### (イ) 下田遺跡

As-A直下畑跡では、イネやムギ類が栽培されていたと推定される。As-A直下1号竈では、燃料の一部として落葉樹の葉などが利用されていたと考えられ、収穫後の稲藁なども燃料として焼かれていたと推定される。



第23表 東宮遺跡・下田遺跡の植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	東宮遺跡				下田遺跡					
	As-A直下層				As-A直下層					
	1	2	3	4	1	2	4	5	1号層	
イネ科										
イネ	7	8	7	30	23	23	15	6	30	
イネ精粒(穎の表皮細胞)			7							
オオムギ族(穎の表皮細胞)	7	8		8	8		22		38	
ヒエ属型			7	30					6	
キビ属型	28	15	29	53	38	30	22	5	23	
ヨシ属	7		15	30	15					
ススキ属型	28		73	23	8	45	22		6	
ウシクサ族	249	38	276	242	345	360	281	60	293	
ウシクサ族(大型)				15	15					
Aタイプ(楕形)										
Bタイプ	7	38		8		8				
タケ亜科										
ネザサ属型	7	8	15	23	30	15	22	7	38	
クマガサ属型	21	38	7	38	60	120	74	7	60	
マダケ属型							7		8	
未分類等	55		29	53	218	323	170	38	113	
その他のイネ科										
表皮毛起源	28	15	73	38	30	45	67	13	8	
棒状珪酸体	671	107	661	484	855	900	844	127	765	
葉部起源			7	15		15				
未分類等	637	183	632	605	870	743	822	123	750	
樹木起源										
はめ絵バズル状(ブナ属など)						8				
その他									53	
植物珪酸体総数	1751	457	1839	1695	2513	2633	2368	392	2183	

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ	0.2	0.22	0.21	0.89	0.66	0.66	0.44	0.18	0.88
ヒエ属型			0.61	2.45					0.63
ヨシ属	0.44		0.92	1.91	0.95				
ススキ属型	0.34		0.9	0.28	0.09	0.56	0.28	0.07	
ネザサ属型	0.03	0.04	0.07	0.11	0.14	0.07	0.11	0.03	0.18
クマガサ属型	0.16	0.29	0.05	0.28	0.45	0.9	0.56	0.05	0.45

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出

## (4) 東宮遺跡におけるプラント・オパール分析

## ①試料

調査地点は、東宮遺跡、51-1畑の北側と東側の縁辺に設定した。深堀トレンチと北地点の2地点である。試料は、深堀トレンチでは浅間天明泥流堆積物直下層からAs-Cの下層までの層準から9点、北地点では浅間天明泥流堆積物直下層から1点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

## ②分析結果

水田跡(稲作跡)の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、オオムギ族(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科(おもにネザサ節)の主要な6分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第24表および第204図に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

## ③考察

## (ア) 稲作跡の検討

## 1) 深堀トレンチ(第204図)

浅間天明泥流堆積物直下層(試料1)からAs-Cの下層(試料9)までの層準について分析を行った。その結果、浅間天明泥流堆積物の下層(試料2)、As-Bの下層(試料4)、As-Cの上層(試料5)、As-C直上層(試料6)、As-C混層(試料7)の各層からイネが検出された。このうち、As-C直上層(試料6)では密度が3,000個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が700~2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、1)稲作が行われていた期間が短かったこと、2)洪水などによって耕作土が流出したこと、3)土層の堆積速度が遅かったこと、4)稲葉が耕作地以外に持ち出されていたこと、5)採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられる。

## 2) 北地点(第24表)

As-A直下層(試料1)について分析を行った。その結果、イネが検出された。密度は2,200個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

## (イ) イネ科栽培植物の検討

イネ以外の分類群では、オオムギ族とヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

## 1) オオムギ族

オオムギ族(穎の表皮細胞)は、深堀トレンチの浅間天明泥流堆積物の下層(試料2)、As-Bの下層(試料4)、As-C混層(試料7)から検出された。ここで検出されたのは、ムギ類(コムギやオオムギなど)と見られる形態のもの(杉山・石井, 1989)である。密度は800~2,200個/gと比較的低い値であるが、穎(初殻)は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、これらの層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

## 2) ヒエ属型

ヒエ属型は、深堀トレンチの浅間天明泥流堆積物直下層(試料1,2)、As-B混層(試料3)、As-C直上層(試料6)、As-C直下層(試料8)から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを明確に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。また、密度も700~1,500個/gと低い値であることから、これらの層準でヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・



雑草である可能性も否定できない。

#### (ウ) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、各層準ともヨシ属が優勢となっていることが分かる。以上のことから、As-Cの下層から浅間天明泥流堆積物直下層にかけては、おおむねヨシ属が生育するような湿地的な環境で推移したと推定される。

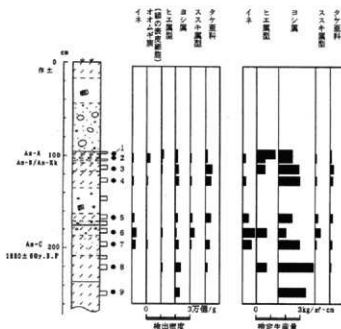
#### ④まとめ

浅間C軽石(As-C,4世紀中葉)直上層からはイネのプラント・オパールが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、As-C混層や浅間A軽石(As-A,1783年)直下層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、浅間天明泥流堆積物の下層やAs-C混層などではムギ類、浅間天明泥流堆積物の下層やAs-Cの上下層などではヒエが栽培されていた可能性も認められた。As-Cの下層から浅間天明泥流堆積物直下層にかけては、おおむねヨシ属が生育するような湿地的な環境で推移したと推定される。

第24表 東宮遺跡におけるプラント・オパール分析結果

分類群\区画	深堀トレンチ								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
検出密度 (単位: ×100個/g)									
イネ		7		8	15	30	23		22
オオムギ類(穂の表皮層型)			22		8		8		
ヒエ属型	15	7	7			8		8	
ヨシ属	15	15	22	23	15	8	23	38	30
ススキ属型		7		8	15	30	8		7
タケ亜科	15	16	45	38	27		30	15	15
推定生産量 (単位: kg/m <sup>2</sup> -cm)									
イネ		0.21		0.22	0.44	0.69	0.67	0.63	0.68
ヒエ属型	1.23	0.61	0.63			0.64		0.63	
ヨシ属	0.92	0.92	1.42	1.44	0.94	0.48	1.44	2.38	1.89
ススキ属型		0.09		0.09	0.19	0.38	0.09		0.09
タケ亜科	0.07	0.07	0.22	0.18	0.18		0.15	0.07	0.07

※肥料の還元量を1.0と仮定して算出。



第204図 東宮遺跡深堀トレンチのプラント・オパール分析結果

### (5) 川原湯勝沼遺跡における植物珪酸体分析

#### ①試料

試料は、H9川原湯勝沼遺跡、浅間天明泥流堆積物直下の64-1号畑、63区平坦部、63-1号畑、63-2号畑と同遺構の円形遺構から採取された計10点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

#### ②分析結果

##### (ア) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第25表および第205図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

##### [イネ科]

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型、シバ属、Aタイプ（くさび型）

穎の表皮細胞由来：オオムギ族（ムギ類）

##### [イネ科-タケ亜科]

機動細胞由来：ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

##### [イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

##### [樹木]

多角形板状（ブナ科コナラ属など）

#### ③考察

##### (ア) イネ科栽培植物の検討

本遺跡の試料からはイネとオオムギ族が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

##### 1) イネ

イネは、分析を行ったすべての試料から検出された。密度は1,000個/g前後と低い値であるが、同遺構は直上を泥流堆積物層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同遺構で稲作が行われていた可能性が考えられる。

##### 2) オオムギ族

オオムギ族（穎の表皮細胞）は、63-2号畑（試料1）と63-1号畑（試料2）から検出された。ここで検出されたのは、ムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井，1989）である。密度は1,000個/g未満と低い値であるが、穎（初穀）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、これらの遺構ではムギ類が栽培されていた可能性が高いと考えられる。

##### 3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

##### (イ) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

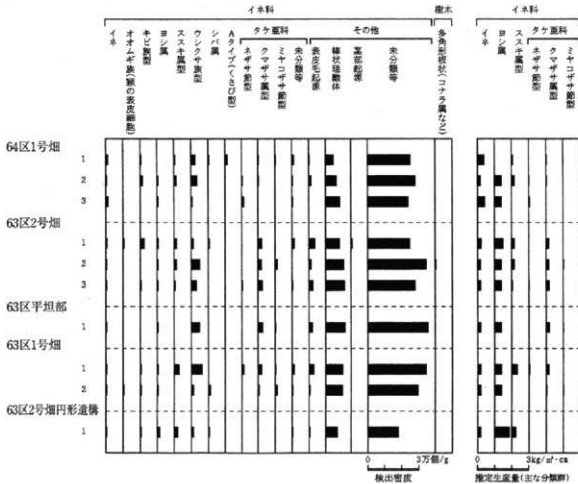
上記以外の分類群では、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型、クマザサ属型などが検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、イネ以外ではヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、当時の調査区周辺は、ヨシ属などが生育する比較的湿潤な堆積環境であり、周辺ではススキ属やチガヤ属なども見られたと推定される。

## ④まとめ

植物珪酸体分析の結果、浅間天明泥流堆積物直下の畑跡では、分析を行ったすべての試料からイネが検出され、同遺構で稲作が行われていた可能性が認められた。また、同遺構の一部ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

当時の調査区周辺は、ヨシ属などが生育する比較的湿潤な堆積環境であり、周辺ではススキ属やチガヤ属なども見られたと推定される。



第205図 川原湯勝沼遺跡植物珪酸体分析結果

第25表 川原湯湧出温泉における植物性炭体分析結果  
焼出密度 (単位:  $\times 100$ 個/g)

分類群 / 試料	64区1号池			63区2号池			63区平坦部		63区1号池		63区2号池
	1	2	3	1	2	3	1	2	1	2	円形遺構
イネ科											
イネ	14	7	15	8	7	7	7	7	7	7	7
オオムギ族(藁の表皮細胞)				8							
キビ族型	7	15	7	23		7	7	7	7	7	7
ヨシ属	7	7	7	8	7	7	7	7	7	7	14
ススキ属型	7	15	7	15	15	7	7	29	21	7	14
ウシクサ族型	27	37	7	15	52	33	51	65	14	14	7
シバ属	7			8							
Aタイプ(くさび型)	14										
タケ亜科											
ネサザ節型	7	7	15	7		7		14			
クマザサ属型	7	7		23	22	27	29	22	7	7	
ミヤコザサ節型	7			7	15		7	7	14	7	
未分類等	14	7	7	15		7		14		7	
その他のイネ科											
表皮毛起源	7	15		38	15	27	22	29	7	7	
輪状柱胞体	48	67	87	83	111	114	117	101	99	70	
基部起源				8							
未分類等	252	283	241	249	347	281	358	346	297	183	
輪木起源											
多角形板状(コナラ属など)					7						
植物性炭体総数	409	469	379	498	598	522	599	649	488	488	337

おもな分類群の推定生産量 (単位:  $\text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$ )

イネ	0.40	0.22	0.43	0.22	0.22	0.20	0.21	0.21	0.21	0.21	0.21
ヨシ属		0.47	0.46	0.48	0.47	0.42	0.46	0.46	0.45	0.45	0.39
ススキ属型	0.08	0.18		0.19	0.18	0.08	0.36	0.36	0.07	0.07	0.26
ネサザ節型		0.04	0.07			0.03					
クマザサ属型	0.05	0.06		0.17	0.17	0.20	0.22	0.16	0.05	0.05	
ミヤコザサ節型	0.02				0.04		0.02	0.02	0.02	0.04	

タケ亜科の比率 (%)

ネサザ節型	39	100	14	27			91	64	56		
クマザサ属型	71	61	86	91	79	86	91	64	56		
ミヤコザサ節型	29		21	9	21		9	9	44		

## (6) 石畑遺跡における植物珪酸体分析

## ①試料

分析試料は、石畑遺跡、泥流堆積物及びAs-A直下の94-1号畑から採取された計6点である。

## ②分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第26表および第206図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

## 〔イネ科〕

イネ、オオムギ族（ムギ類の穎の表皮細胞由来）、ヒエ属型、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、シバ属

## 〔イネ科—タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

## 〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

## 〔樹木〕

その他

## ③考察

## (ア) イネ科栽培植物の検討

本遺跡の試料からは、イネ、オオムギ族、ヒエ属型、ジュズダマ属が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

## 1) イネ

イネは、1号畑の試料1、2、3、6から検出された。密度は600~2,200個/gと比較的低い値であるが、同遺構は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

## 2) オオムギ族

オオムギ族（穎の表皮細胞）は、試料4と試料6から検出された。ここで検出されたのは、ムギ類（コムギやオオムギ）と見られる形態のものである（杉山・石井，1989）。密度は700個/gと低い値であるが、穎（籾殻）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同遺構ではムギ類が栽培されていた可能性が高いと考えられる。

## 3) ヒエ属型

ヒエ属型は、試料2、5、6から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である（杉山ほか，1988）。ただし、ここでは細粒から検出されていることから、栽培種に由来するものである可能性が高いと考えられる。密度は700~1,300個/gと低い値であるが、ヒエ属は葉身中における植物珪酸体の密度が低いことから、植物体量としては過大に評価する必要がある。以上のことから、同遺構ではヒエ属（ヒエが含まれる）が栽培されていた可能性が考えられる。

## 4) ジュズダマ属型

ジュズダマ属型は、試料6から検出された。密度は、1,400個/gと低い値である。ジュズダマ属型には食